奇麗な旦那也。錢を下されたが、其様子仕合にまた逢ぬなどいひ、又はそいつはしわいやつではなかつたか、なんと乗てにきをもたするしかけ、頓而此方には通てをるをも知ず、又己が時志きり。ばんとうぶり。さいなん。くうぢなど云ことばゝ、定てわけこそあるらめ。分て下品の業也。相てにすべからす。

【旅籠や】旅行の人を留め、借のやどりをかしてよわたるよすがとせり。誠ニ一樹の陰の雨宿、一河の流を汲も他生のえにしとかや。知れず知ぬ人をとゞむるもひとかた

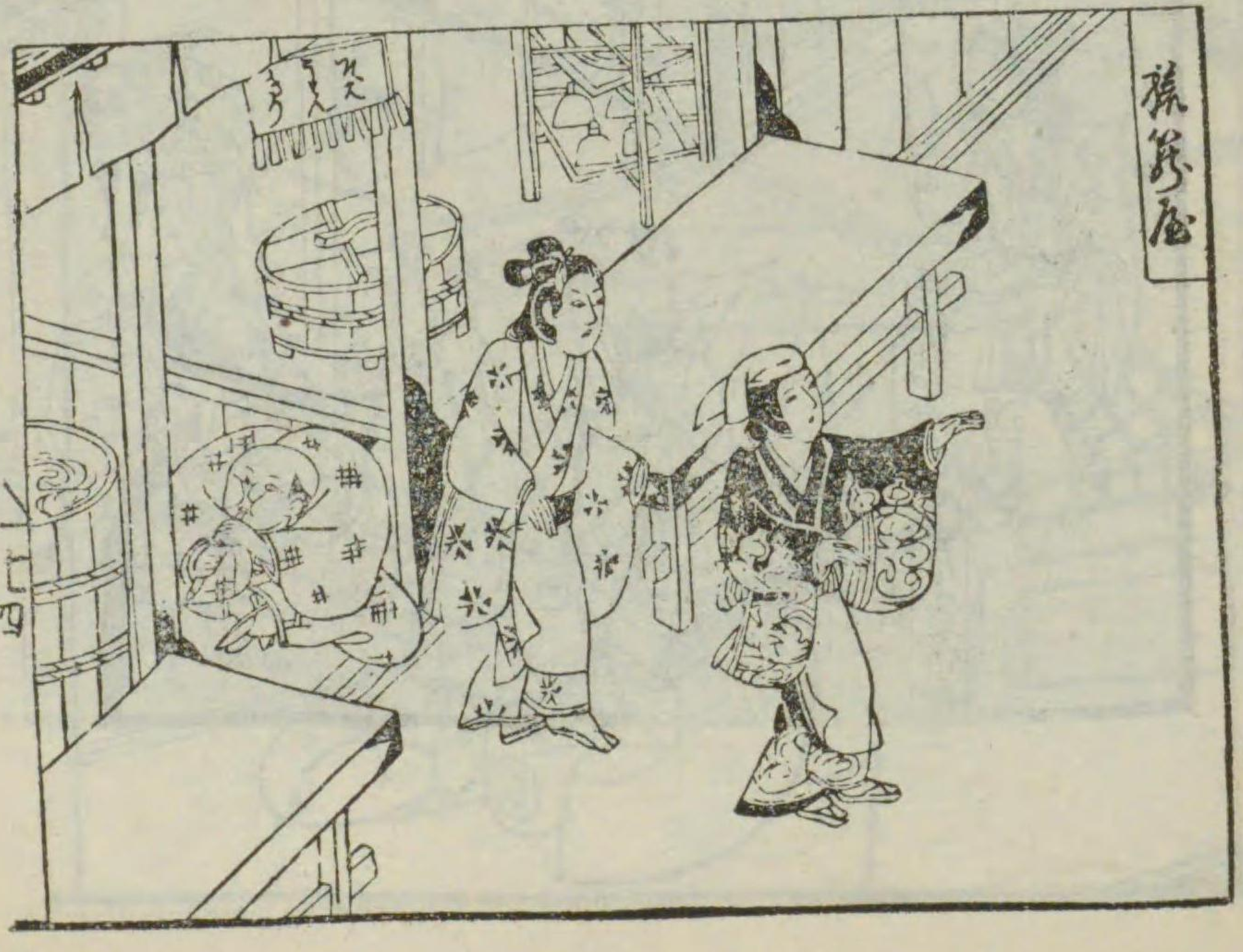
ならぬ事ならまし。心すなほにして愛有を吉とす。さはなくしてはぎとらぬ斗につらく當るは、誠ニ報は遠かるべからず。情もつらきも身にしみてよく思ひしるは旅のならひなれば、情心こそあらまほしけれ。出女の相撲留る時夜に入ては拔群に違たり。扨もあついはつらのかわ。

【おちやない】都の西、常盤といふ所より出るとかや、女のかしらに袋をいたゞき、髮の落をかい、かもじにして賣買、世渡るわさとす。それを「おちやないか」といふて町をあるくなり。晝の八つ時よりいつるなり。よう

すある事にや。

【談義坊賣】こまかなざこをおけに入にないあるき「だんぎほう」とうるなり。是をみやこの幼少成子どももとめ水鉢又は泉水にはなちなぐさみとする也。

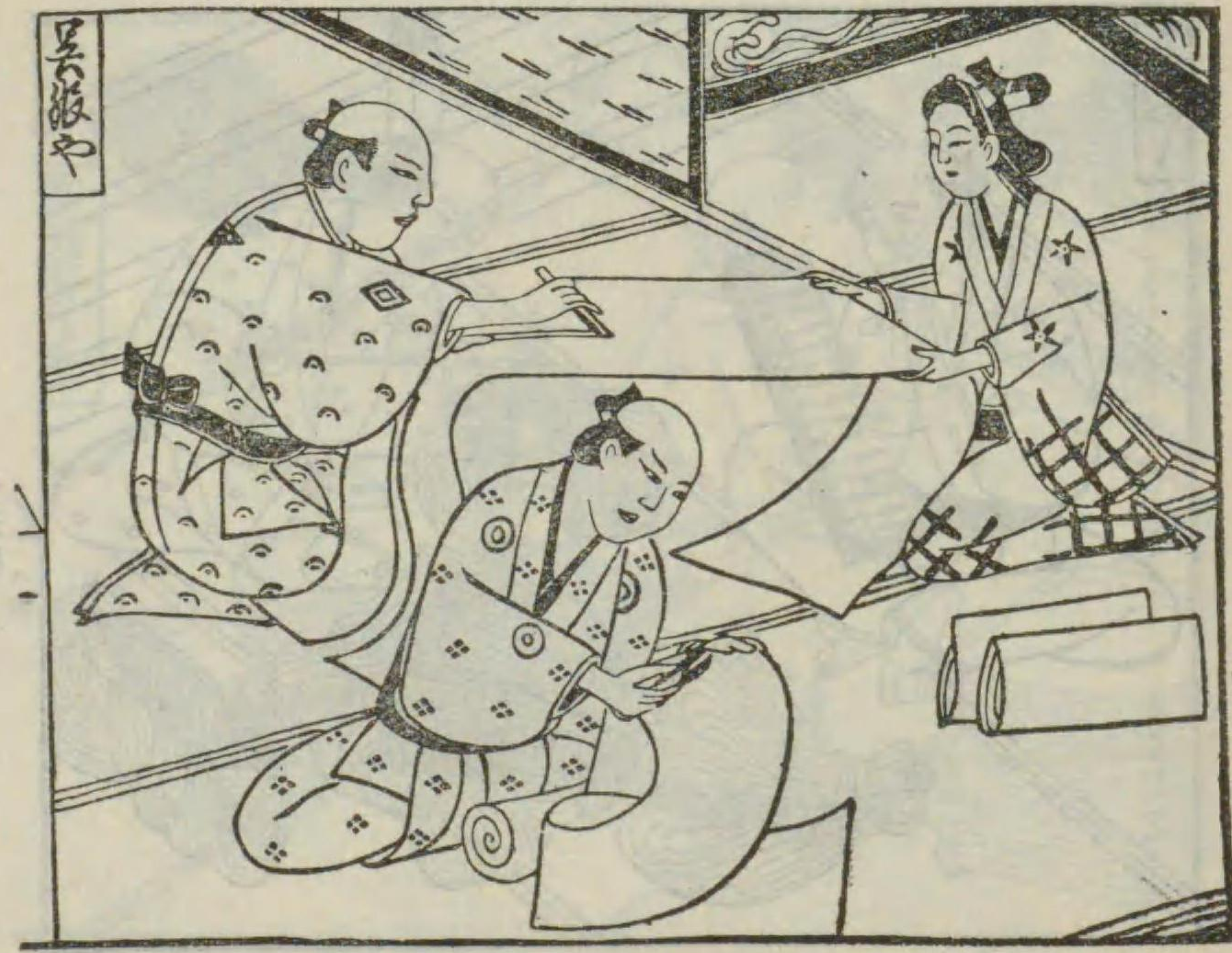
【山椒皮】女のかしらに、かますといふものをいたゞき、「山枡の皮めさぬか」と京の町うるなり。くらまよりいづるを名物とす。



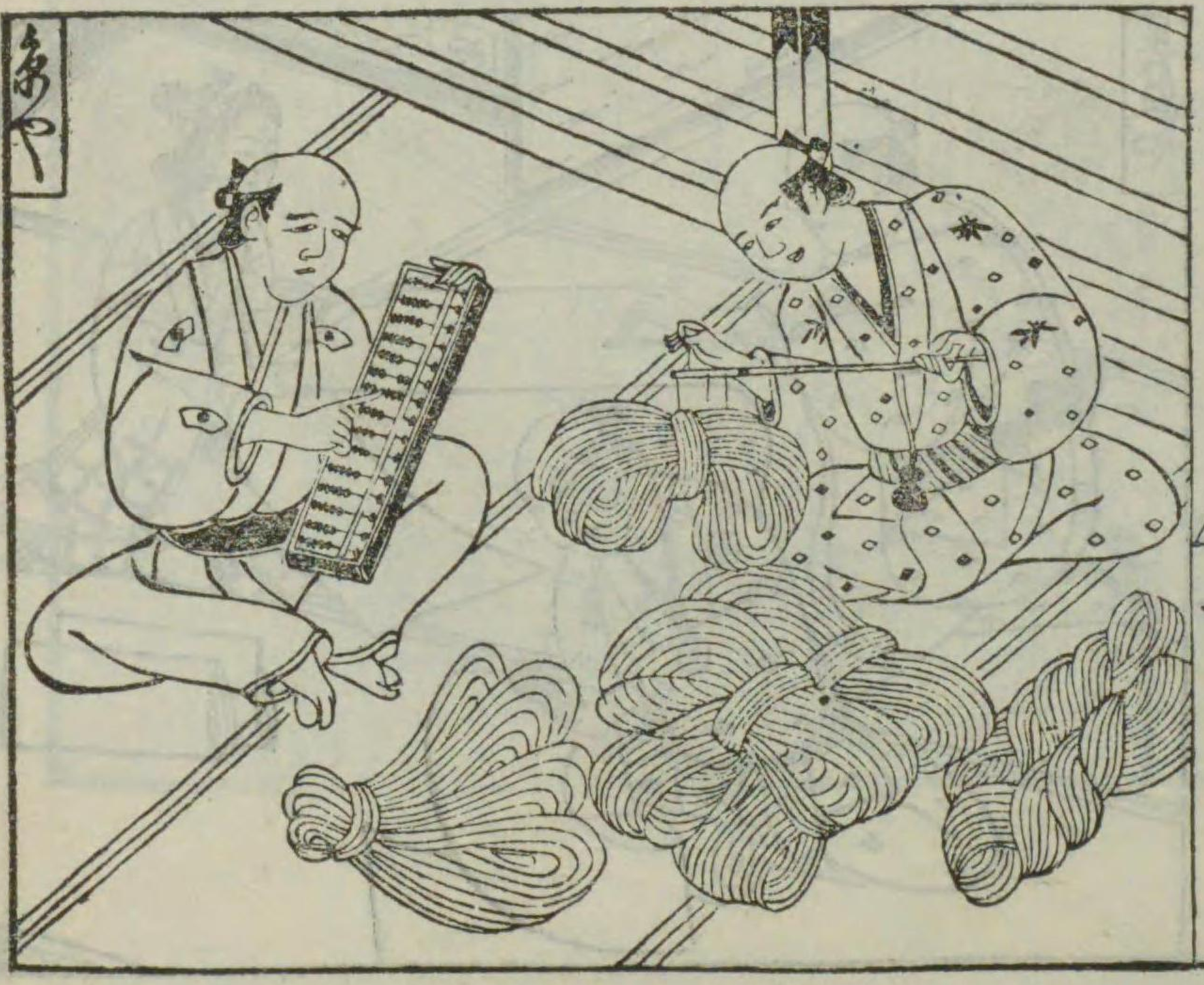
所作入
由來入　人倫訓蒙圖彙　四

商人部　次第不同

【呉服や】應神天皇の御時唐土より呉服、穴織といふ兄弟の女わたりて絹を織れり。此名によそへて上品の着物を呉服とはいふ也。呉服や中立賣西洞院後藤縫助、江戸壹石橋南の角小川通出水上る丁茶や四郎次郎、江戸檜物町上長者町大宮、江戸すきや橋祐德といふ三島や吉兵衞、六角涌油小路、江戸日本橋南一丁め永住といふ龜や庄右衞門、四條坊門西洞院新四郎、江戸日本橋南へ一丁目長者町通上



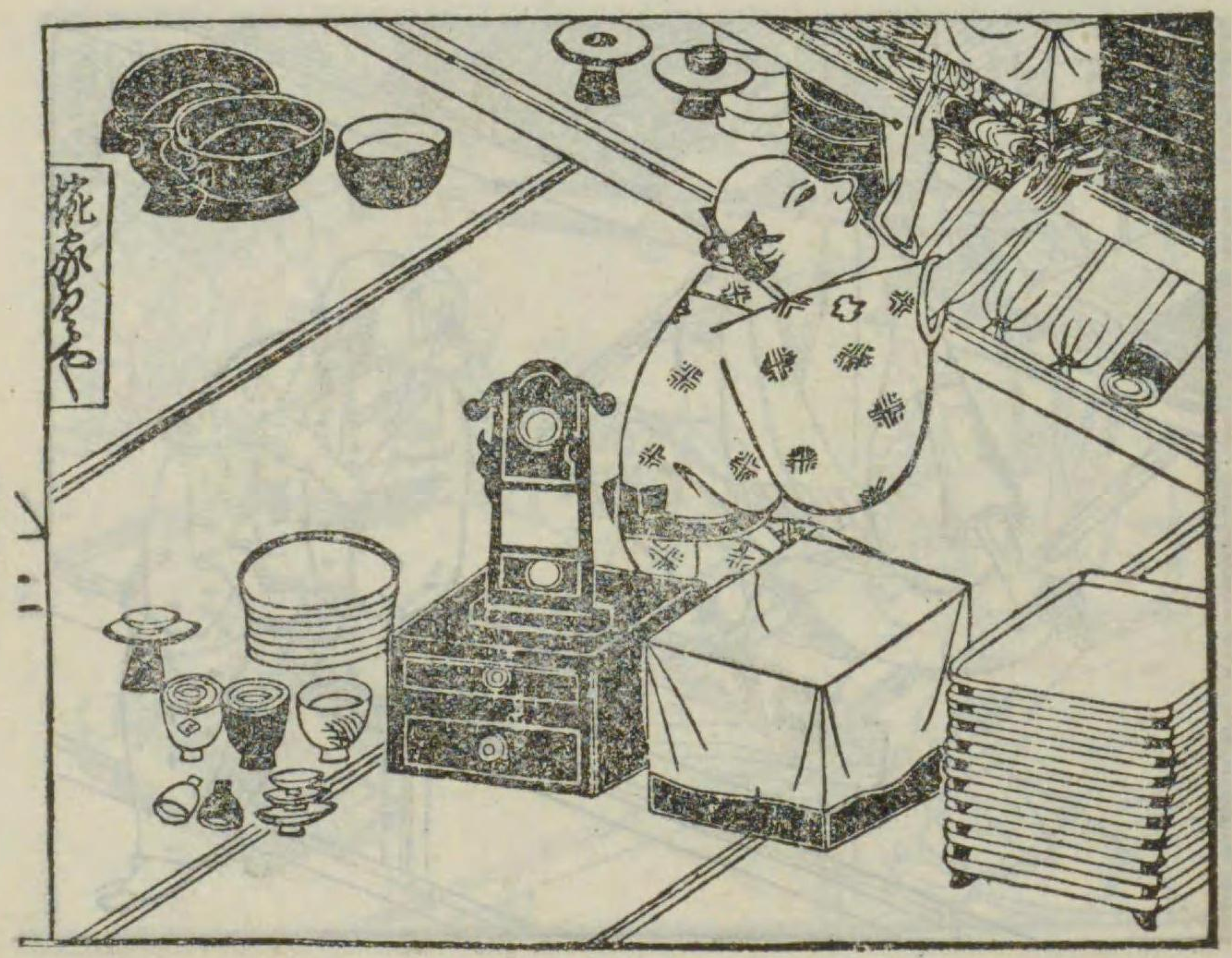
柳彥十良、本石町二丁め甫齋といふ。其外室町を始所々にあり。江戸は本町、石町。大坂は本町、伏見町。



【御錦屋】大和錦とて由緒あるとかや。金一尺、代貳匁五分、東洞院二條下ル町一井五良左衛門。【糸や】唐船着岸の時、長崎にてかいとりて、絹や、組や等江うりわたすなり。所所にあり。

【椀家具や】品々の椀、折敷幷弁當、盆、重箱、提重、張付障子緣、書院床の緣等万塗物これをあきなふ。新町二條の北にあり。

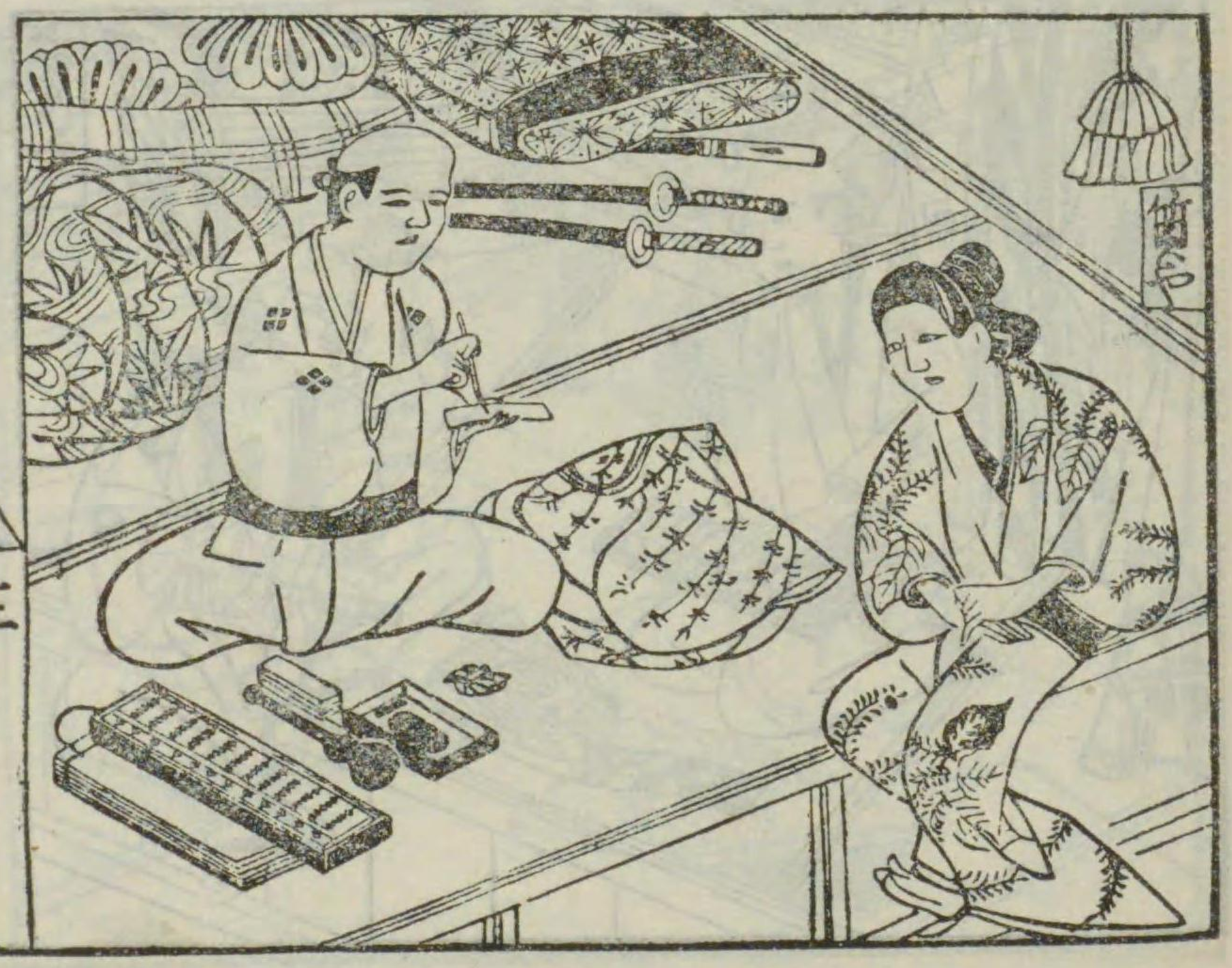
【唐物や】器物、香具、革、紙、薬、墨・筆



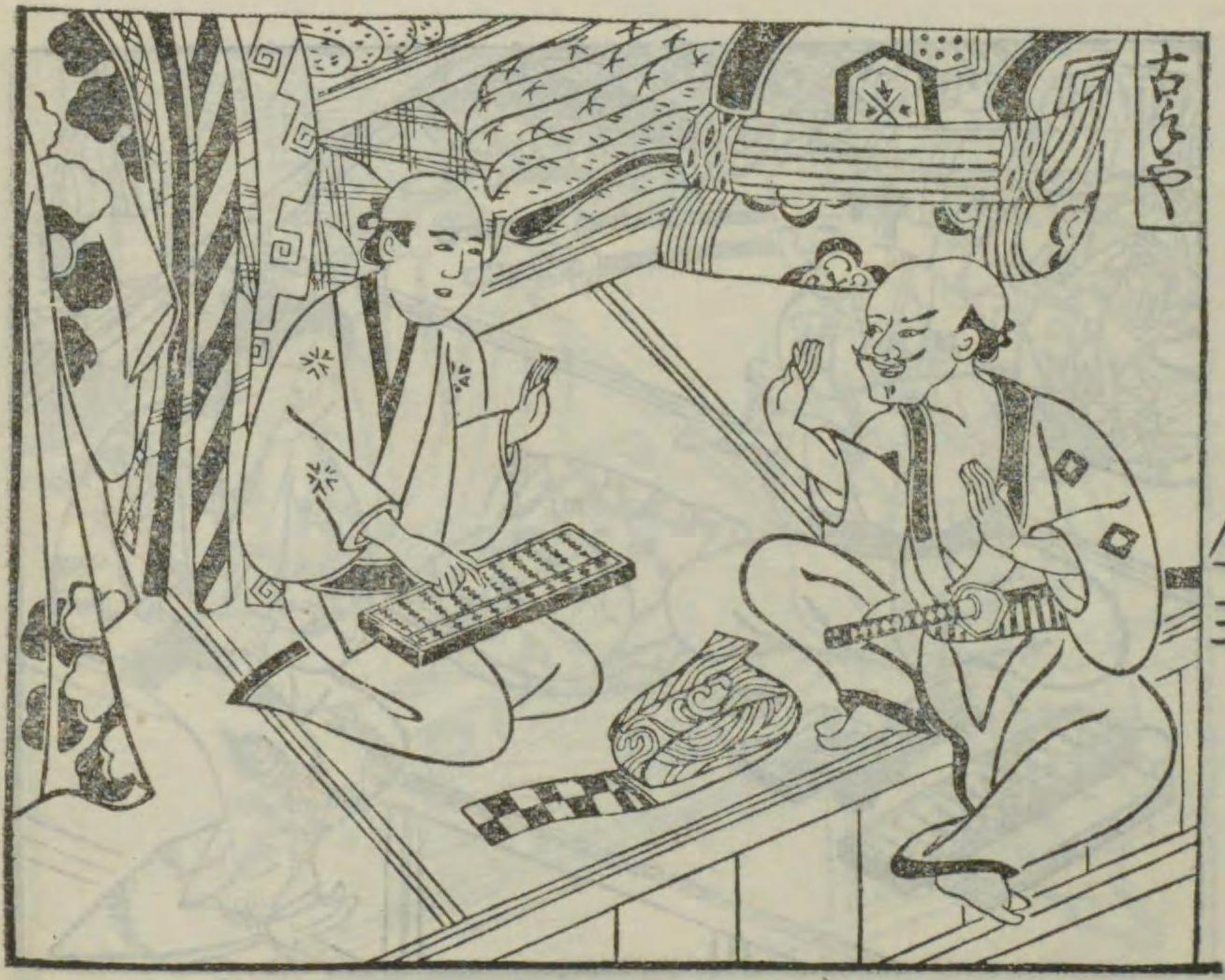
等、万長崎着岸の物をかいとりてこれをあきなふ。所々にあり。【質や】萬目利に應じて金銀をかす。僞眞の評判に及ず、請人を取てこれを證據として札を出す也。大坂の質や數合三百四十五軒有。

【古手屋】絹布、木綿等足袋、帶にいたるまで古着、質の流等をかいあつめてこれをあきなふ。烏丸通二條下ル丁、五條通室町の西所所にあり。

【切屋】絹、卷物、萬裁切を呉服所よりかい集、又は長永をきりても望にしたがひてこれをあきなふ。觸賣にもありき所々に住す。【道

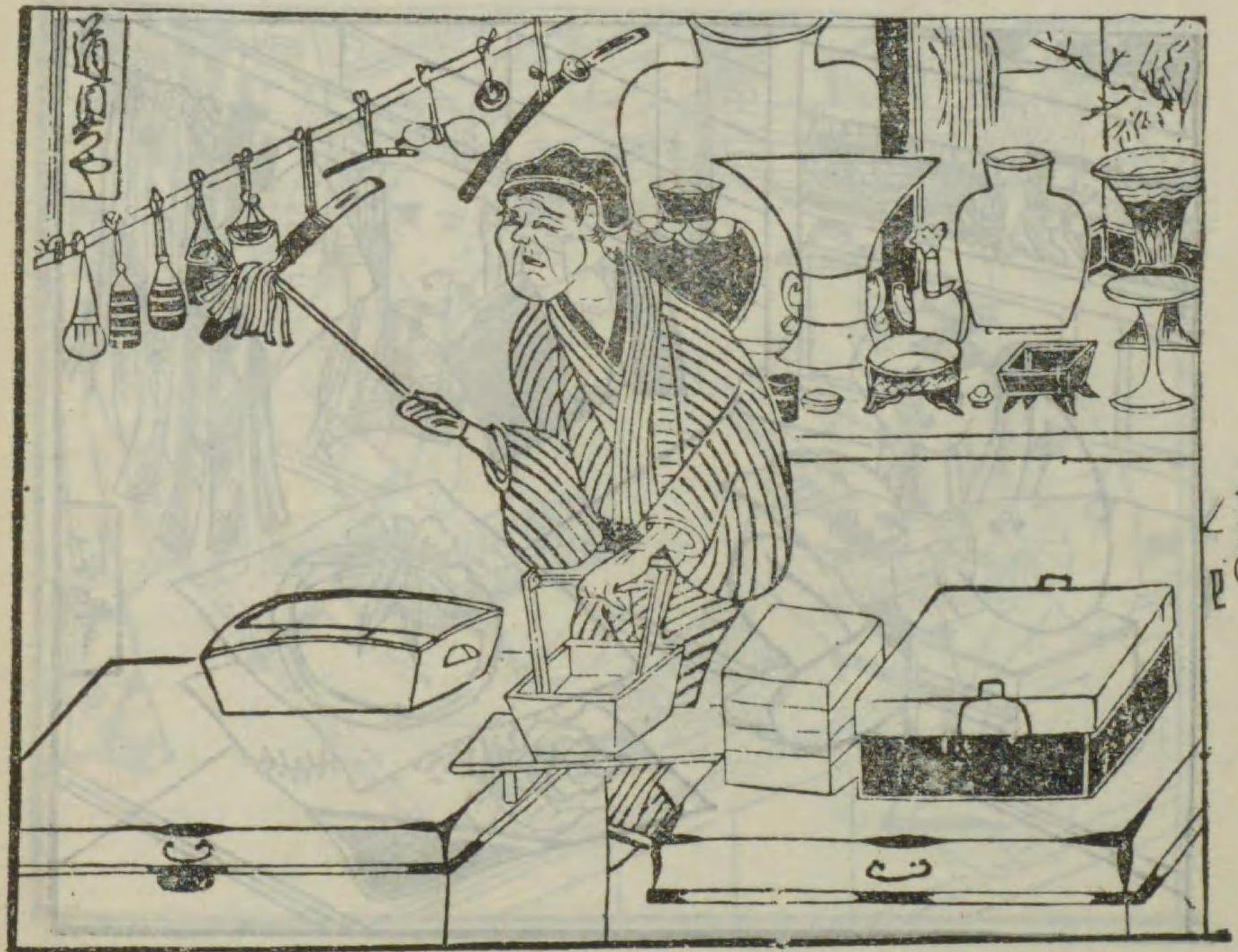


具屋】一切の古道具かいとりてこれを商大見世を道具やと稱じて、小見世を古金棚と稱す。一條の西堀川、四條の下押小路、藪下等にあり。【持遊細物や】童子のもてあそび物一切此所にあり。諸方の細工人おもひ〳〵のあみたてをつくりて此家に持來る。但紙薄板等をもつて造る雜品の物なり。五條橋の西此棚あり。

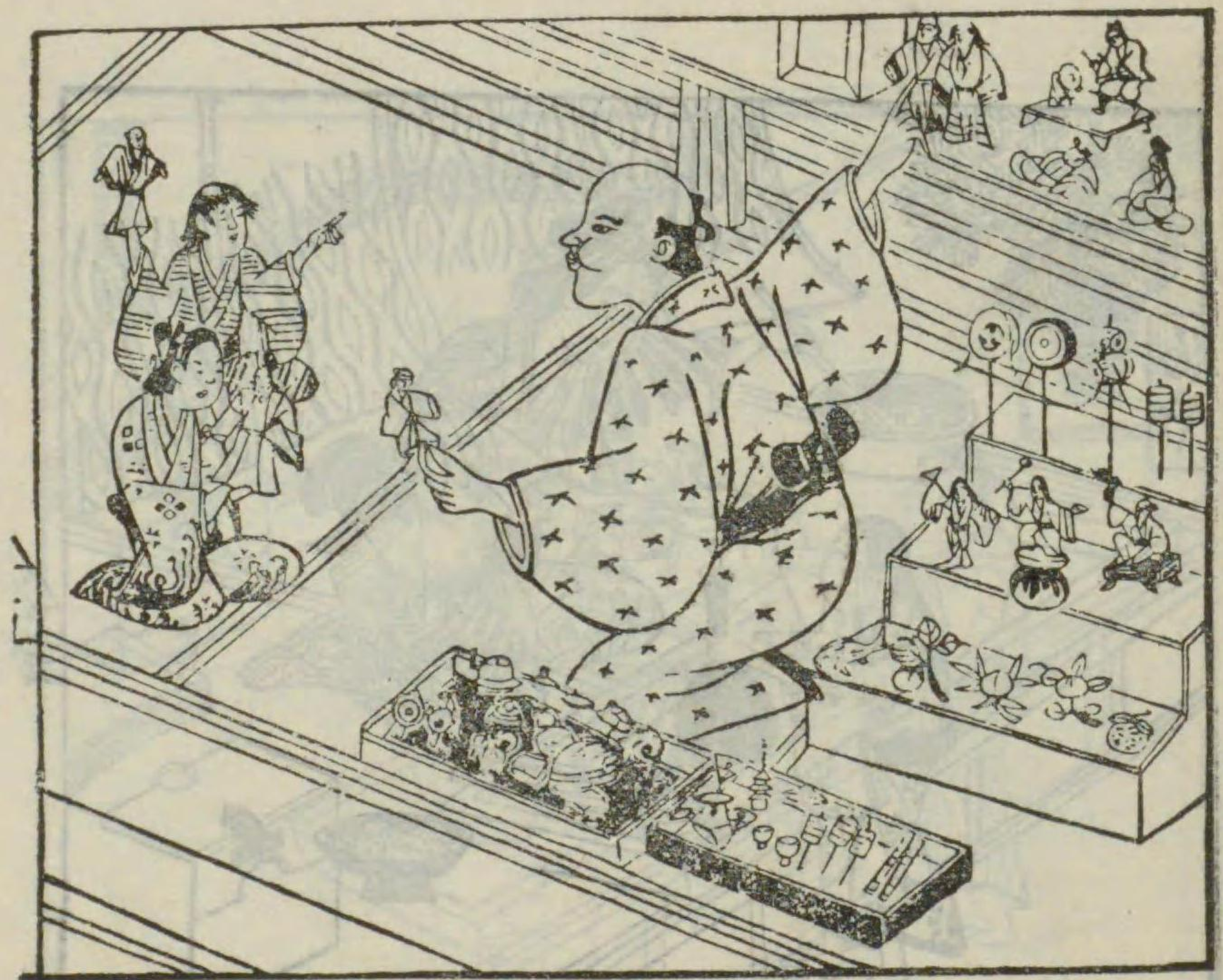


【酒屋】或書に云、酒は天笠の摩阿娑利夫人はじめてこれをつくる。其年癸酉なるがゆへに三水に酉を書也。又云、堯の代に繼子をにくむ母の、飯に毒をいれてあたへけるを、其子これをしりて杉の三本有所へすてけるを、

雨露のしたゝりにてわきてよき味となる、これ酒也。夏禹王の臣下これをつくる。禹王きこしめして痛哉、末代此味にふけつて人をして迷亂すべしとなげき給へり。聖人の一言神のごとしとかや。京、大坂、奈良、伊丹、鴻池等名酒品々にあり。酒造る男を杜氏漉蔟といふなり。【醬油】堺を名物と大坂と兩所に造て諸國にいだすなり。

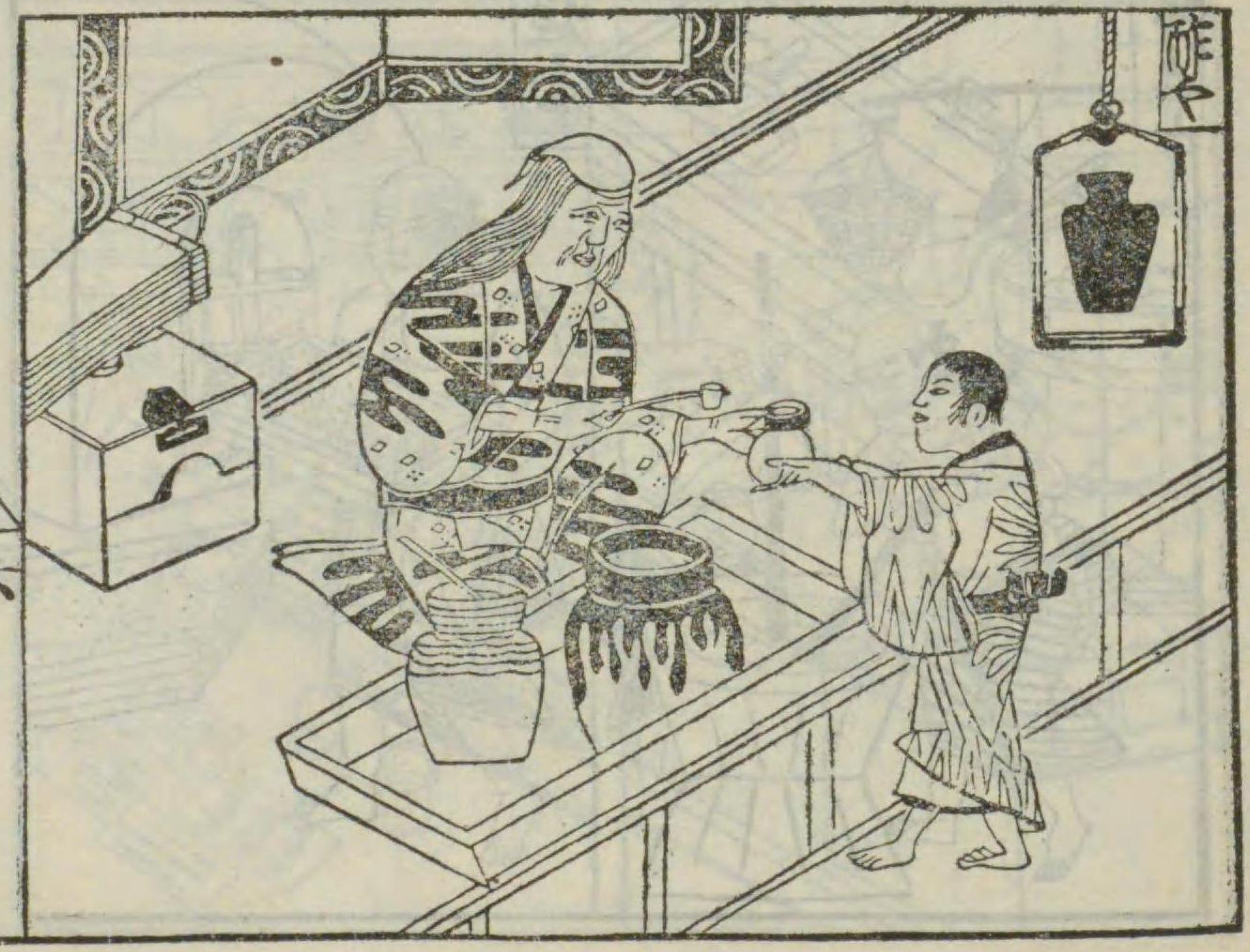


【酢】和泉の酢名に高し。ある書に酢は聖人もこのみ給しとなり。勸善書にも酢食して眼を開かしむとあり。されば老子は西にゆびさして酢を求、釋迦佛は二君子の酢をあいし給

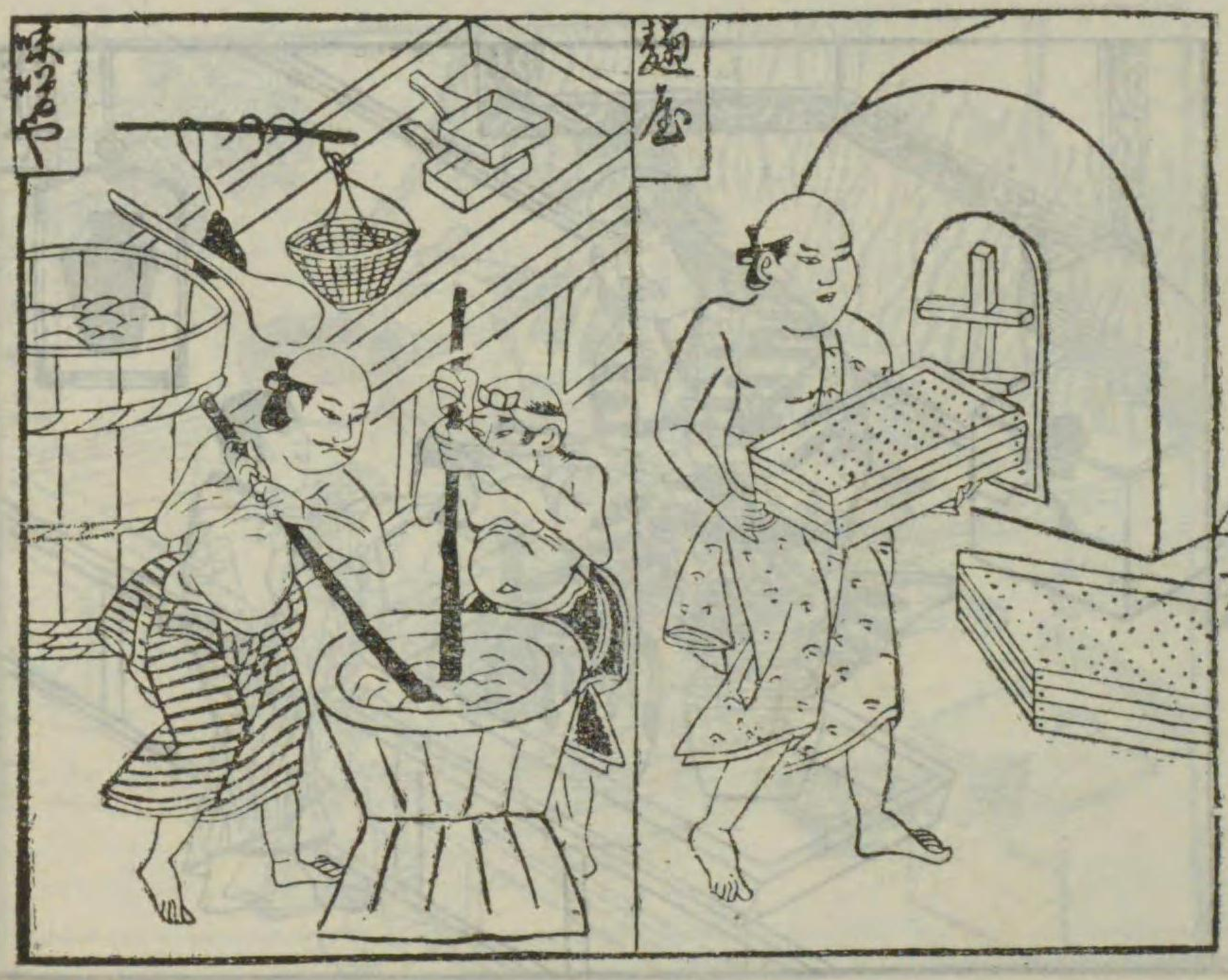


ふをよんで酢吸と號し給ふ。酢坪に右の三像を繪かいて三吸とも酢吸ともいふ。【糀師】味噌や、饅頭や等其外万民これをもちゆ。麹舟薄板あり、これにもり合て室に入てこれを崩す也。其合貳升のさため成ゆへ、はからずしてもこれをかふなる、實に律儀のいたりなり。

【味噌屋】簡板に節掻を出す。調味和する能あつて人身の保養する處一日も離べからざるもの也。【紙屋】諸國より出す、名物品々あり。佛在世にはいまだ紙なくして多羅葉に書給ひしと也。唐土にては竹を割て字をほりつけしとなり。記私といふ者はしめてつくりけると

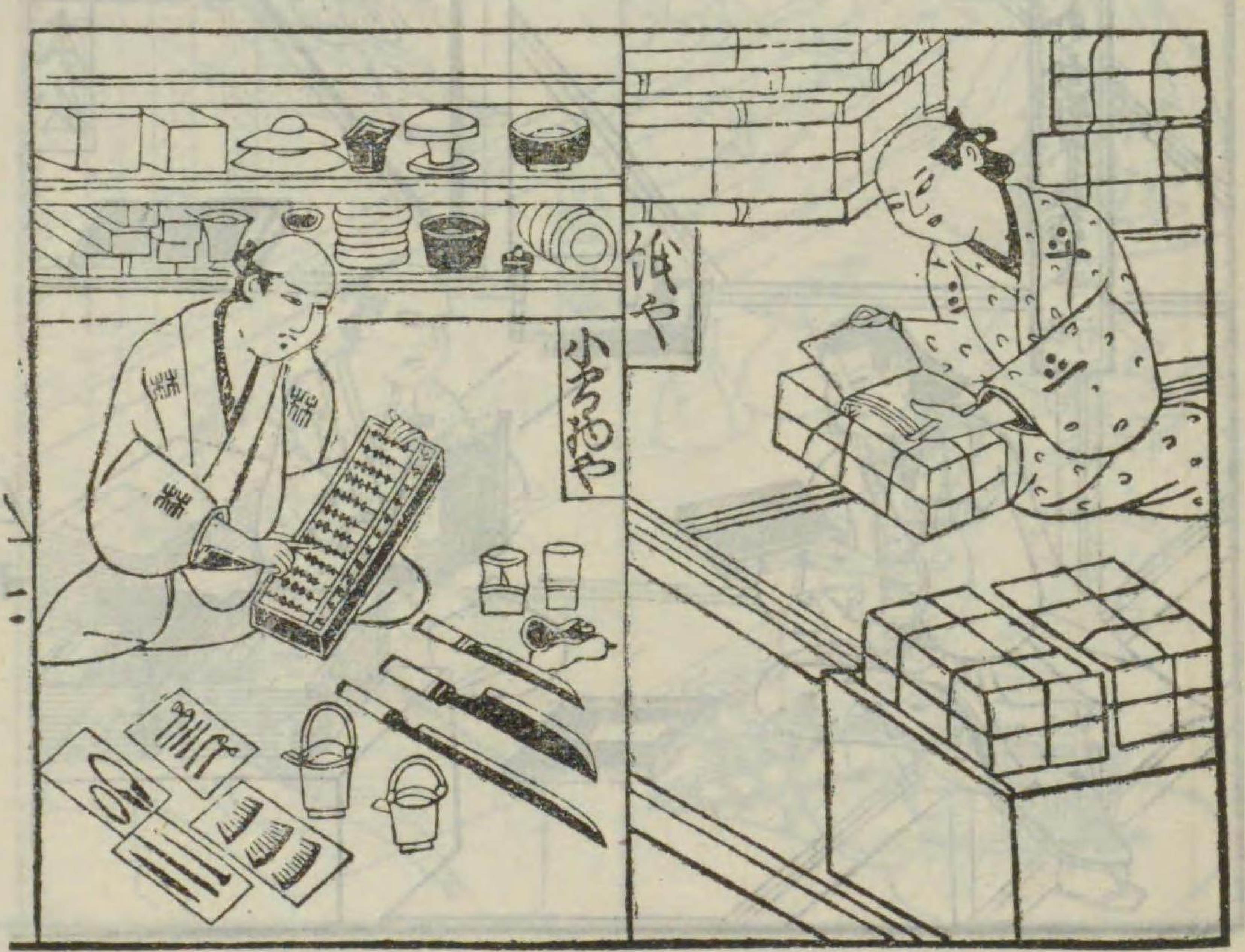


かや。日本にても木に書けるゆへ書札を呼て木札といひしとかや。

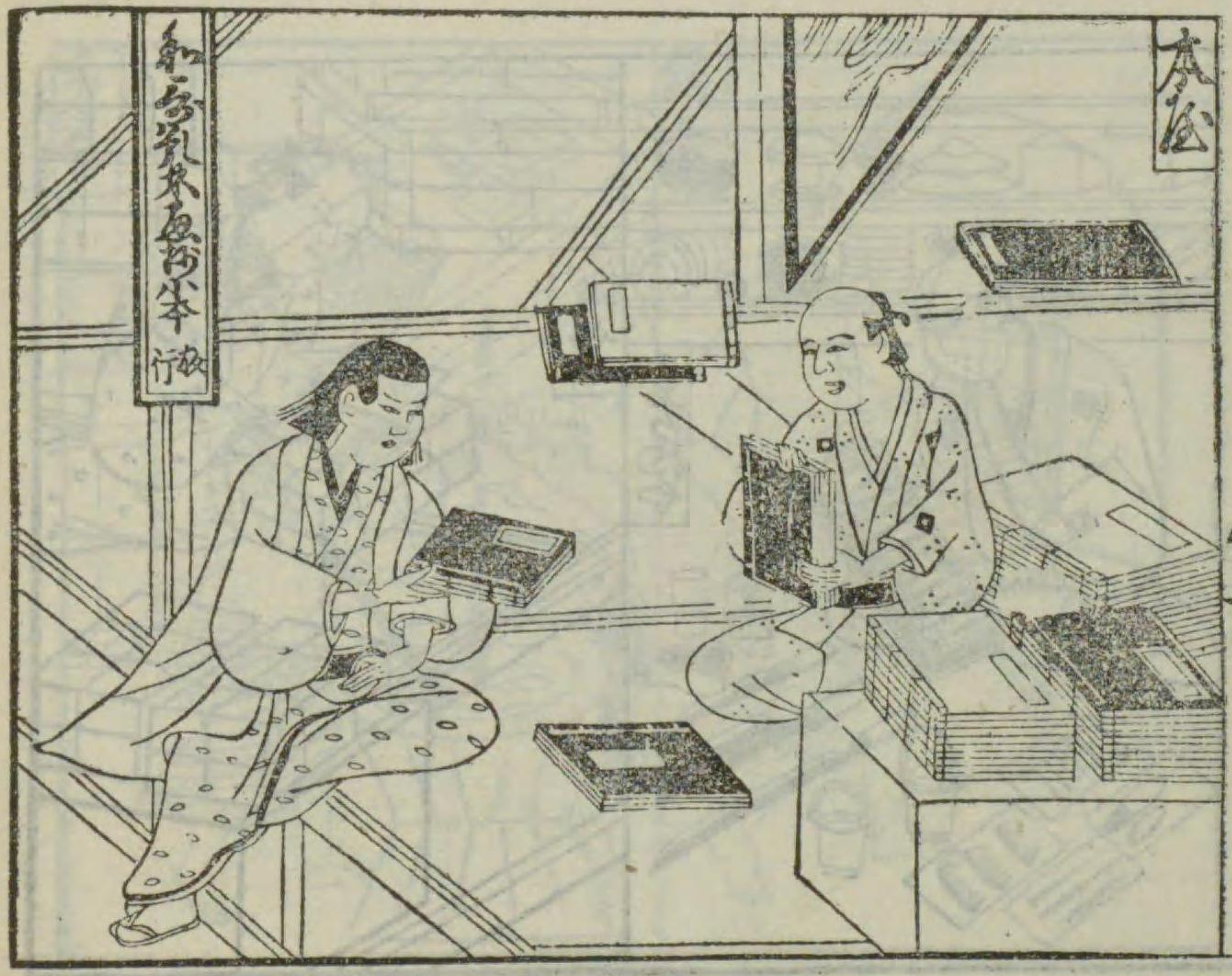


【小間物や】一切の具此所にあり。都鄙におゐて重寶の商人なり。京は京極通、大坂堺筋。

【本屋】上古には銅をもつて板をつくる、唐土の本銅板也とかや。中比木をもつて植字をなす、それもいつしかすたりて今は板にこれを彫也。紙は美濃より出るなり。其外杉原、唐紙、半紙摺本によつてかはれり。一切經の板黄檗にあり。鉄眼法師の寄進なり。其外論釋の中に、藏內、藏外とてあり。藏內といふは經藏にこもる書なり。此分數通あり。今に



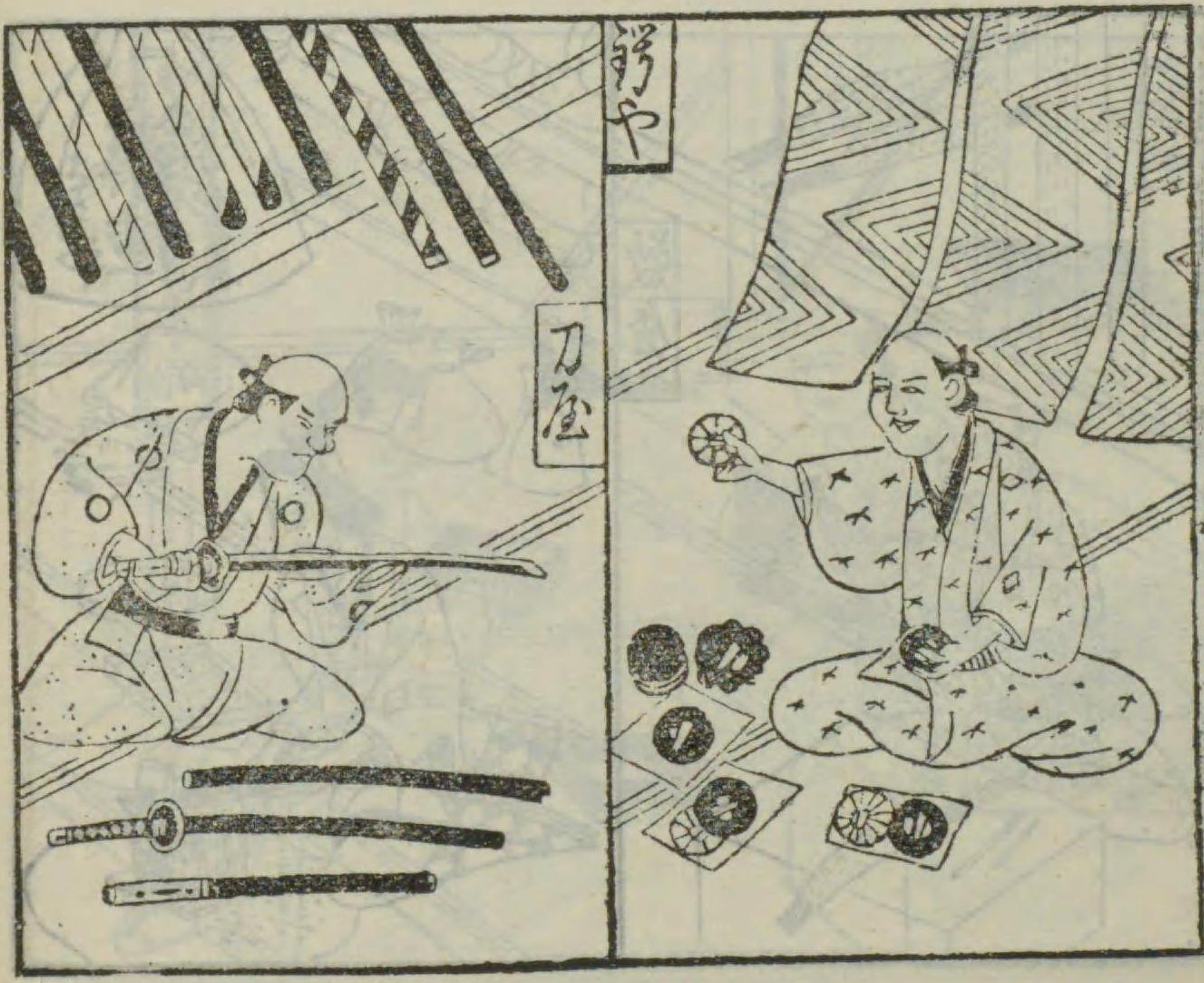
至て年々これを彫彼蔵に納るなり。唐本や外にあり。



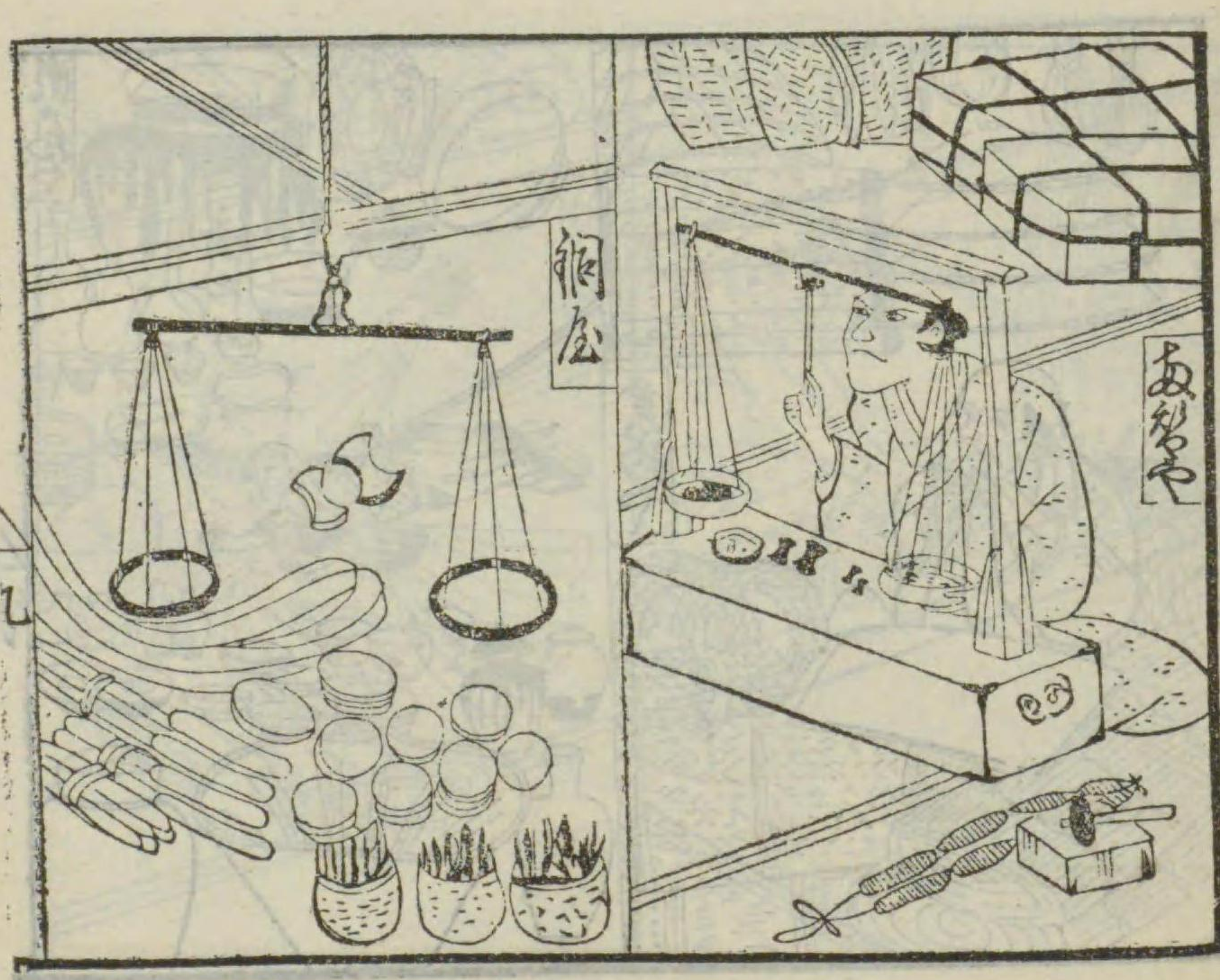
【藥種屋】一切草木鳥獸にいたるまで藥種數をつくして唐土より渡し、其外和國の藥多く貯てこれを商也。藥數の、本草綱目一千八百九十二種あり。神農本經には三百六十五種あり。

【鮫屋】さればさめを武士の調法し給ふは、一戦に向て拳を劔のうちに定む、さめのつぶあらければ一刀より千刀に及といふとも手しりぞかず。むかしは柄に糸を巻といふことなし、中比よりまくなり。異國よりわたす柄

鮫、鞘鮫品々あり。其名はサントメ、チャンハ、なんど目利有事也。京は二條通、江戸は通町、大坂は高麗橋壹丁目にあり。



【鍔屋】鍔の寸法は三寸一分なり。今は定る事なし。めん／＼のすきにまかす。つばの德は軍書に見えたり。寺町二條通、大坂は堺筋、高麗橋一丁めにあり。大小の古鍔をもとめてあきなふ。又は鍔磨に誂てつくらしむ。各々家をたてゝくさらかしを秘蜜する事也。鉄のくさらかし一たんはん一兩、一いわう一兩、一はくろかね一分、一ねすみのふん一兩、水にてとき合、赤つちにつちを合てぬりて火に

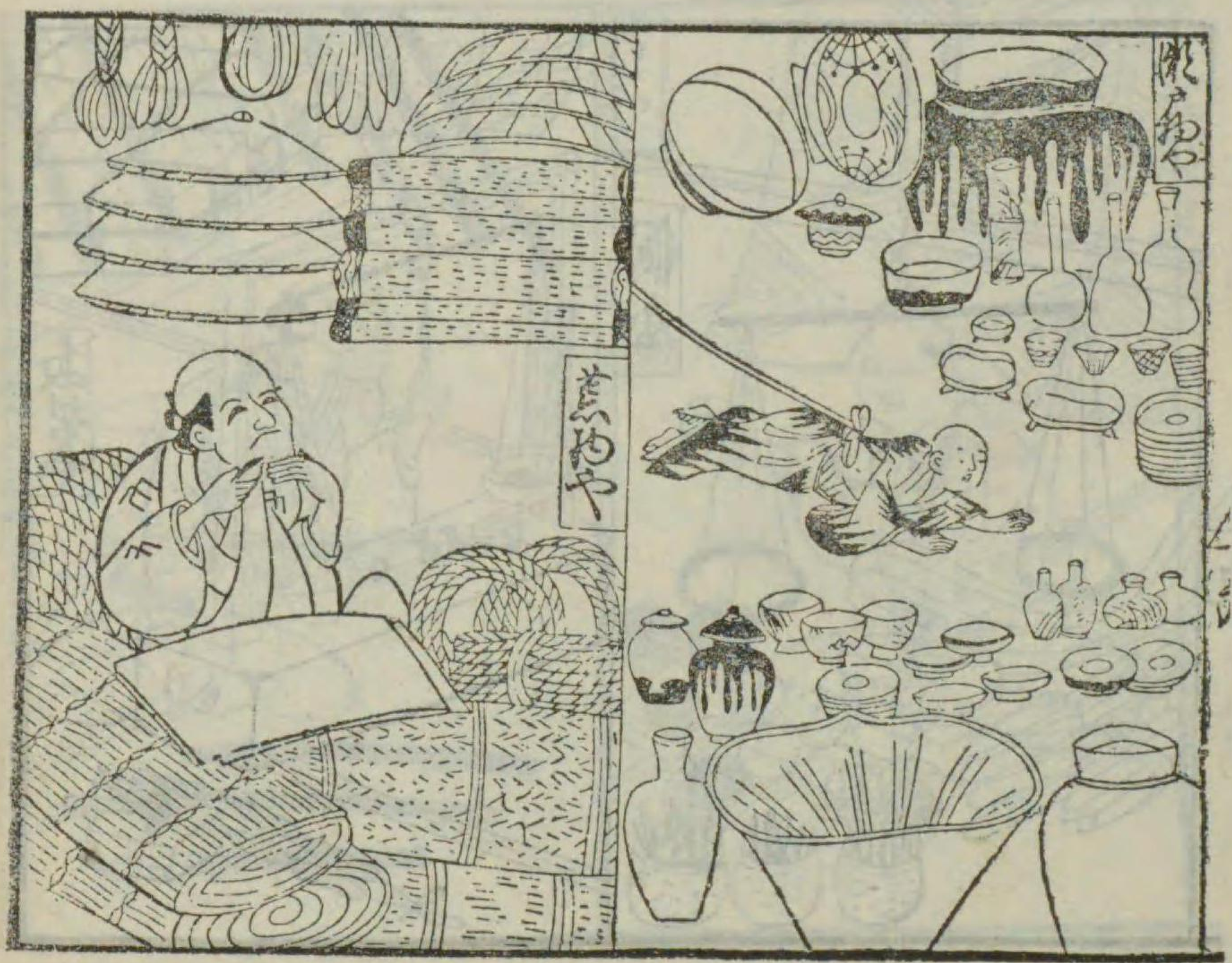


てやき付る也。其後すりおとして油をぬれば黒色になる也。あかゞねは一たんはん一兩、一いわう一兩、一鼠のふん一兩、梅のすにて合ぬる也。鑢磨大佛近邊所々に住す。

【刀屋】奈良をはじめ美濃、其外諸國より打いだす刀、腰指、搉てこれを賣る所は寺町三條の南油小路、二條南其外所々にあり。

【兩替や】金と錢の相場によつて利德を考へ兩替の分によつて渡世す。意正直にして無欲なる商人は世にまれ成べければ分て此商は因果をわきまふべき事也。

【銅屋】銅諸國より出す。眞鍮も同所に商。

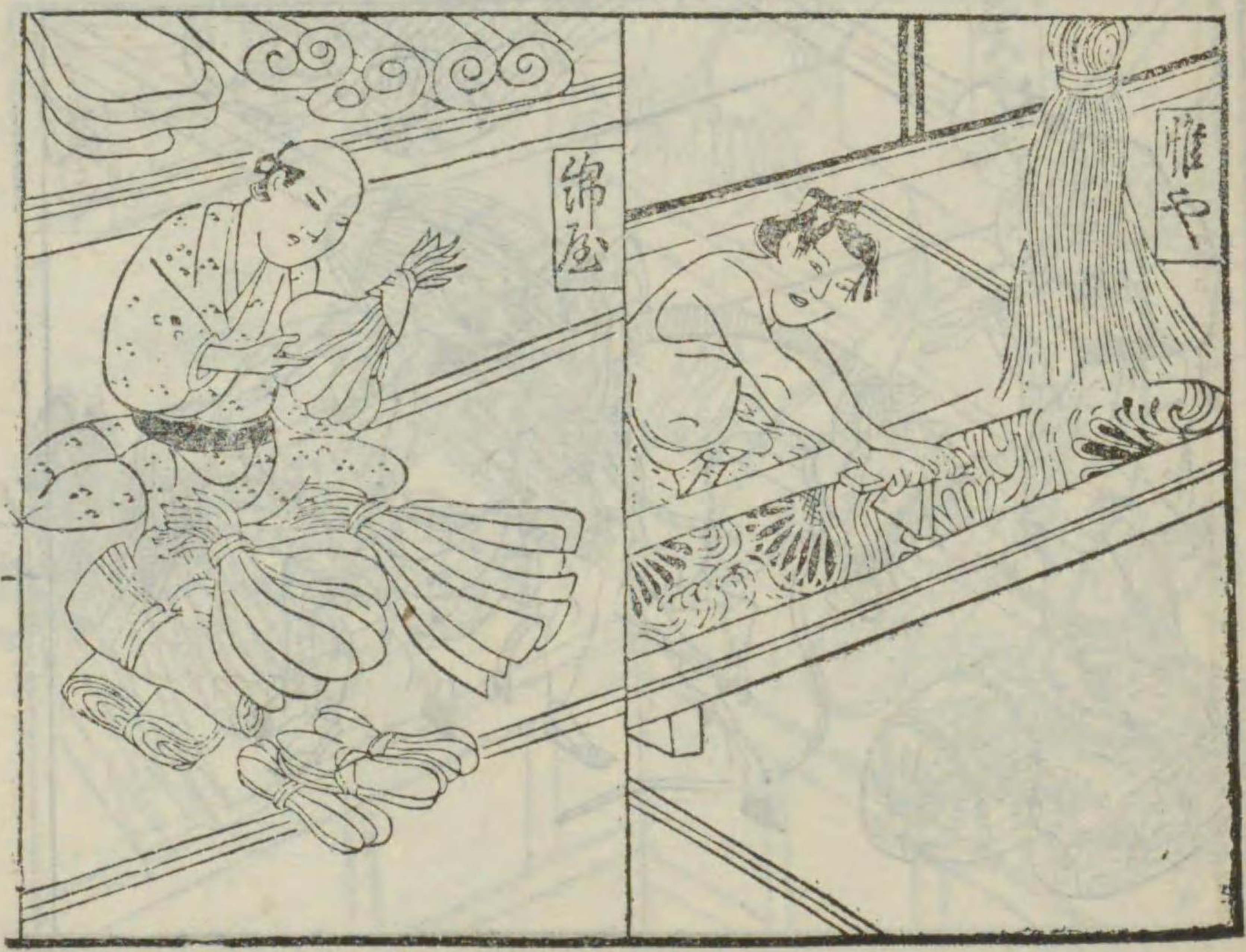


一切の金物師これをつかふなり。錫、鉛とも に賣所もあり。【鉄や】鉄に諸國より出す。備中鉄を名物とす。又は播州よりいだす。哥に眞鐵といふは鐵の事なり。

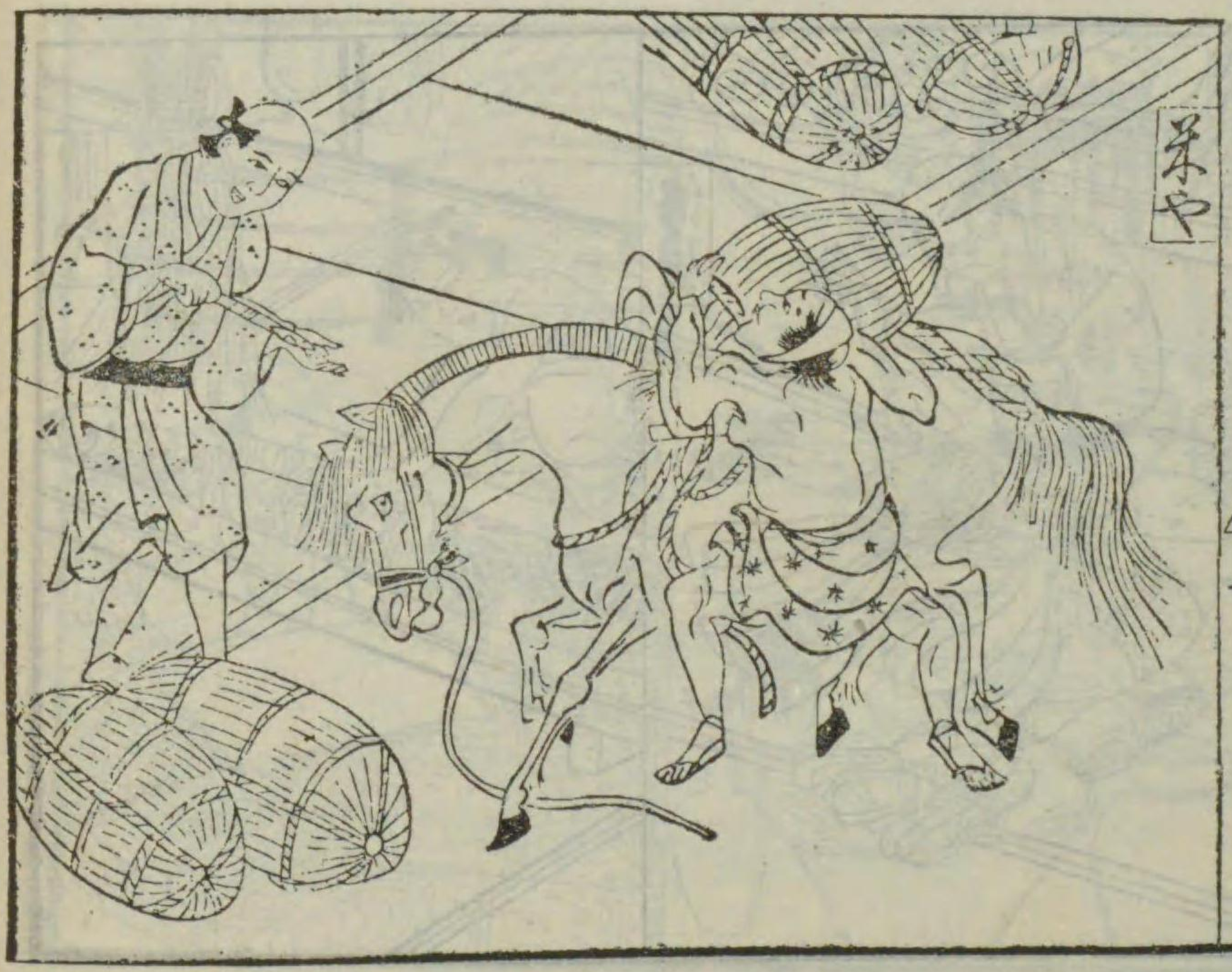
【瀬戸物や】一切の燒器諸國より出す。然共肥前唐津やきを面にあきなふゆへ瀬戸物やといふ也。所々にあり。

【荒物や】旅荷物包の一宿薦、澁紙、繩、細引、乘掛の跡付等これをうり、商人荷物は問屋に來りて是をつゝむ。其外さし木履、塗木履。

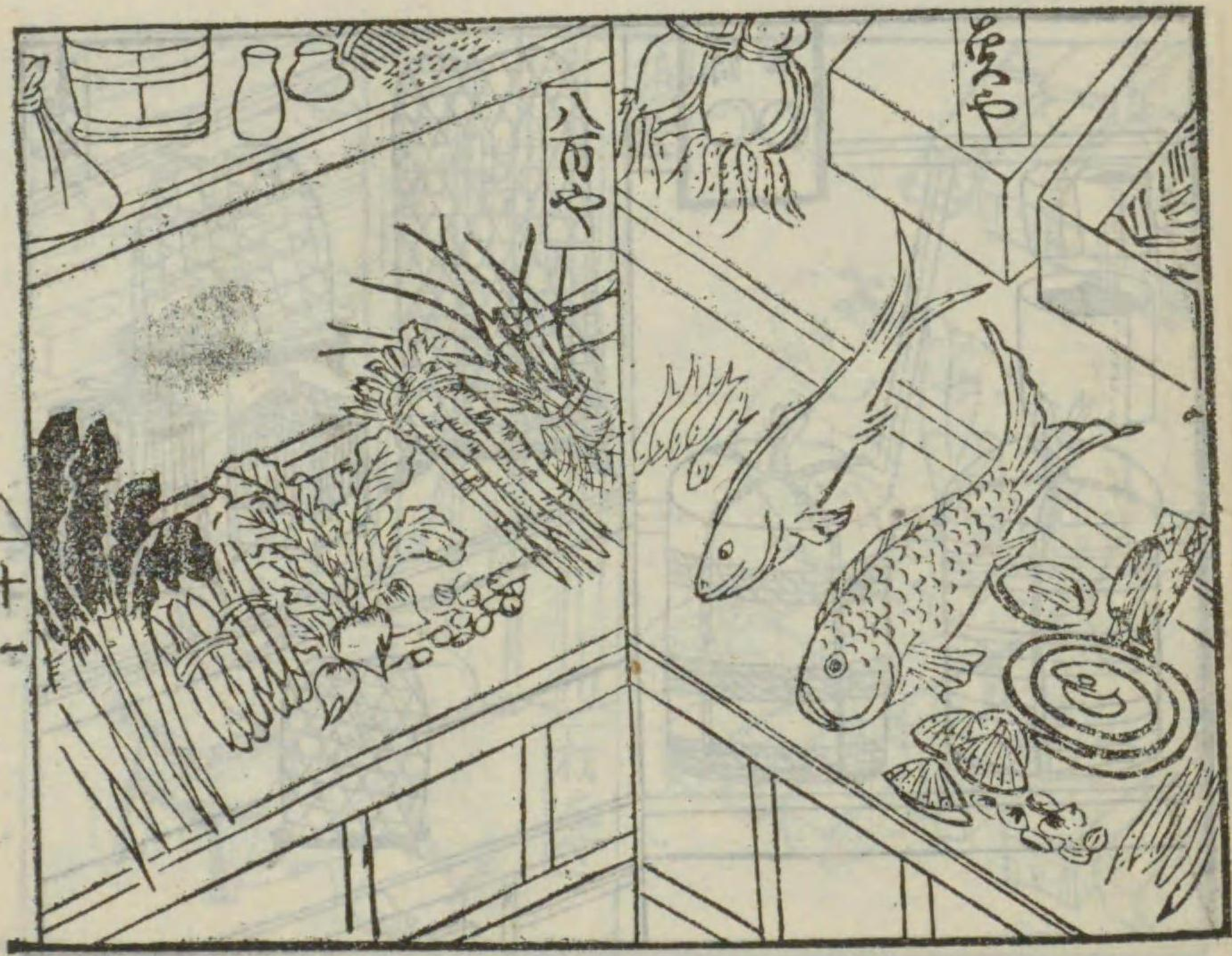
【帷屋】万の模樣を染させてこれをあきな



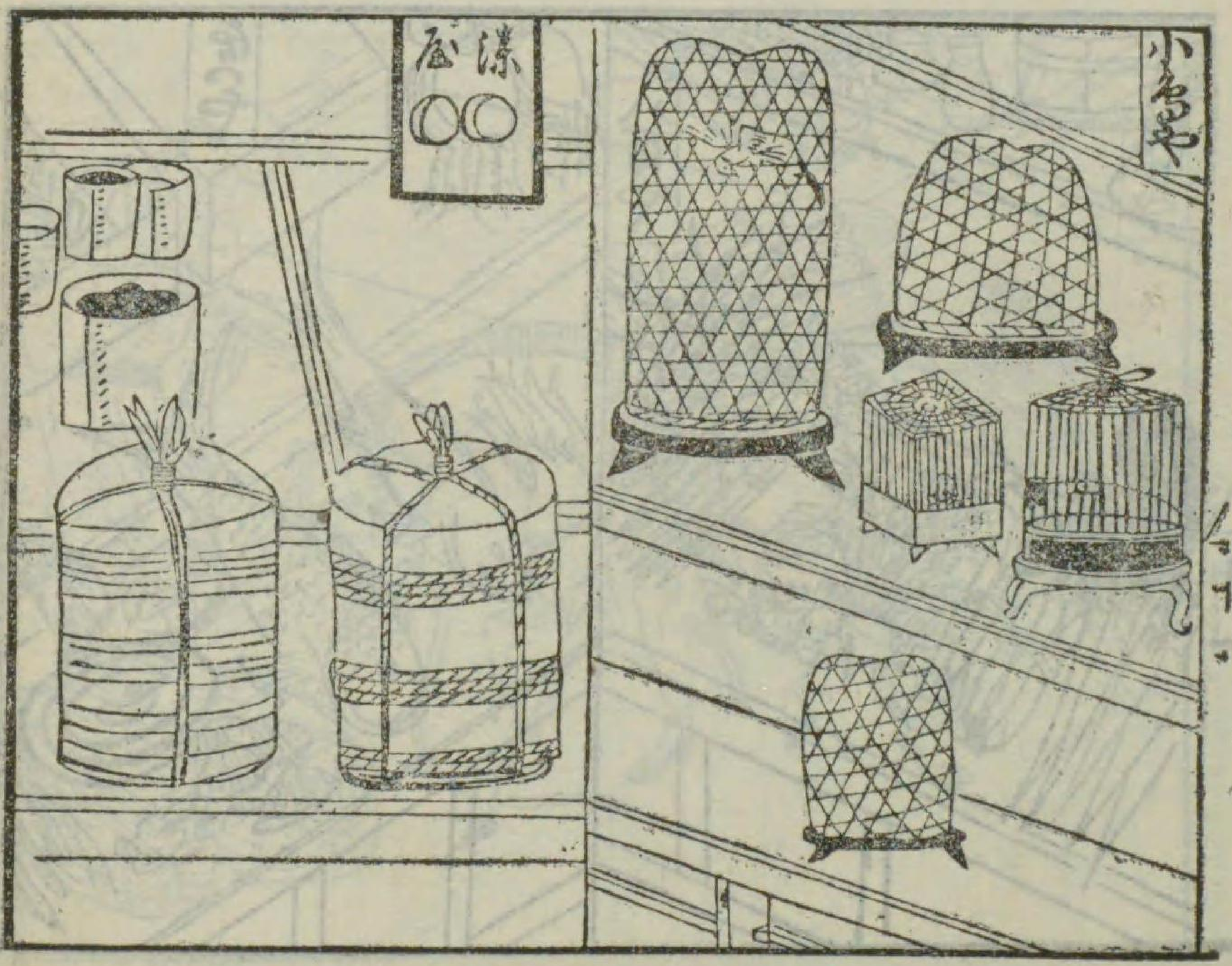
ふ。島は近江の高宮より出す。【綿屋】絹布やに是を商。又は摘綿を商所大方三條通にあり。越前を先として寒國より是を出す。【米屋】米は諸國より大津大坂につくを分散して京につける、加賀をもつて上とす。大豆、小豆一切の五穀大宮通にあり。



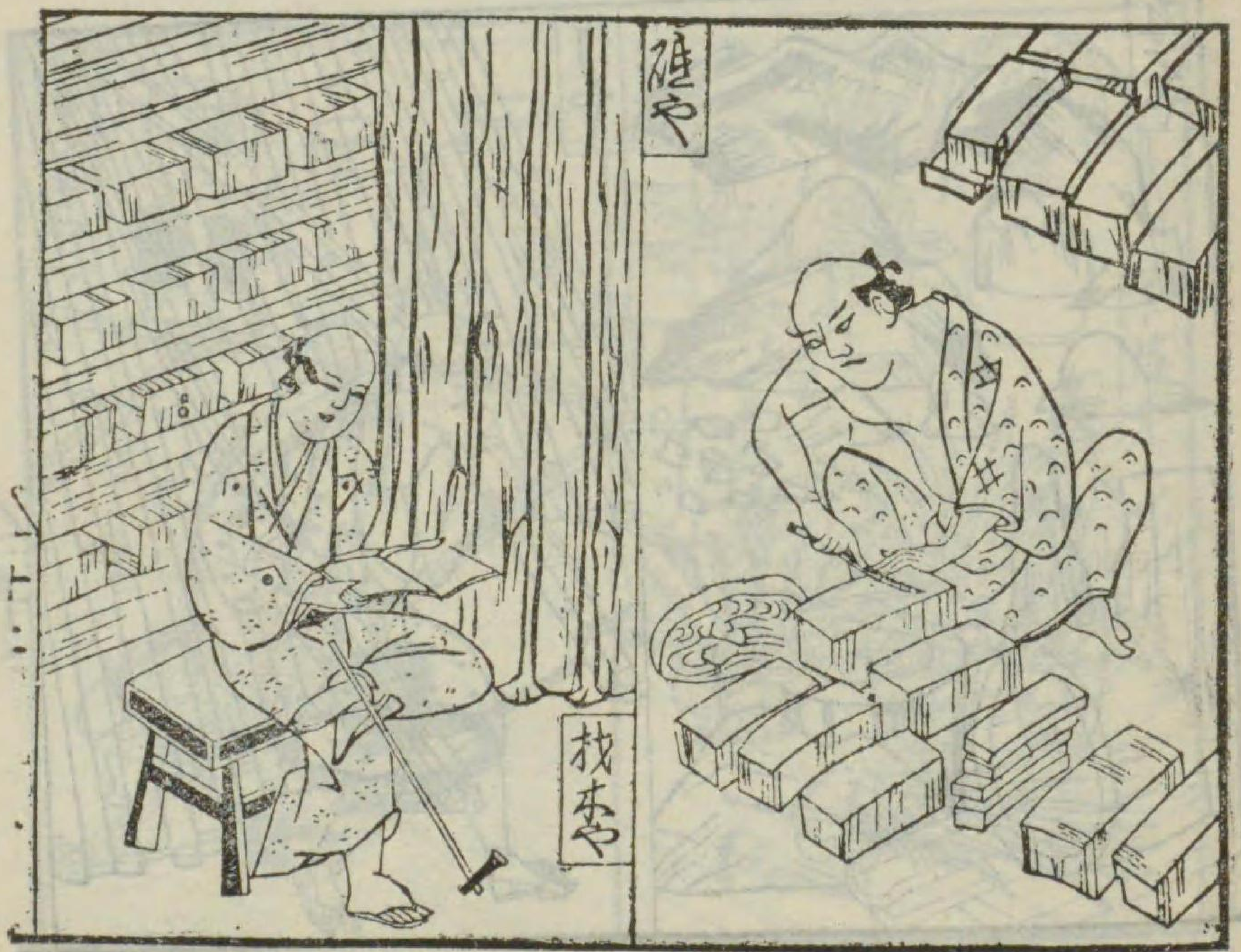
【魚屋】諸國より出る。椹木町の西、武者小路、錦小路等其外所々にあり。鳥鮨等同じく是を商。同所にあり。
【八百屋】一切精進の調菜、乾物、海草、木實、草の根、あらゆるもの也。錦小路を初所所にあり。【小鳥や】諸の飼鳥を商。其外鶯



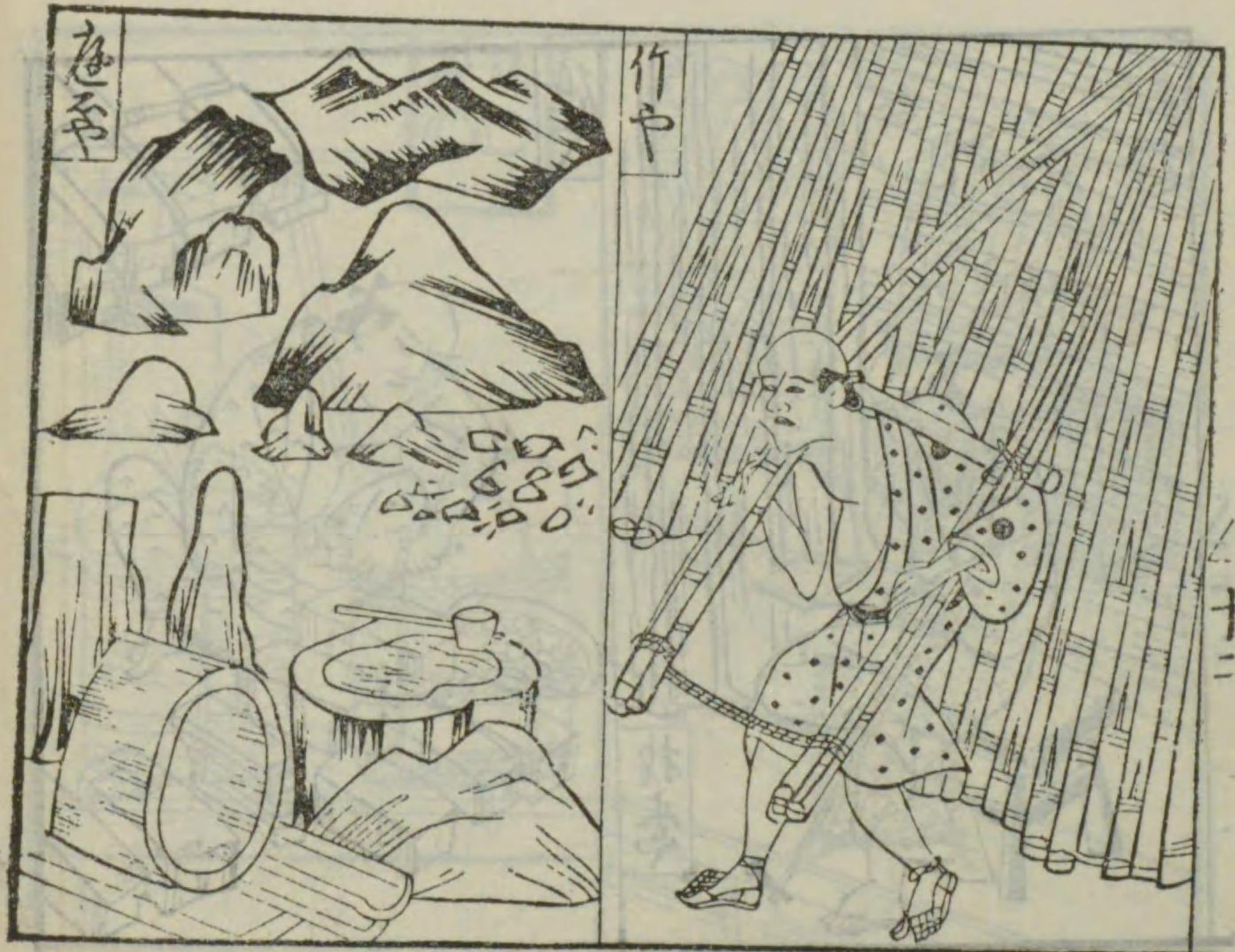
鶉等の鳴鳥を持ば諸方の鳥に音付をする也。【柒屋】諸のこし柒あり、并砥粉をも商、所所にあり。【砥屋】諸國より出る。山城の高雄、鳴瀧砥は剃刀砥の名物也。眼仲禮釼を作り、心のほつする所にしたがわずとてすつる。其子尾毛石にてすらしめしよりとぐとなり。油小路、押小路を始、所々にあり。大坂は横堀にあり。【材木や】堀川通竹屋町より上、其外所々あり。白木や木曾を初、諸國より出る檜これをあきなふ。檜物師、佛師を初、檜をつかふものこれをもとむ。



【竹屋】竹や町通の西、其外所々にあり。諸



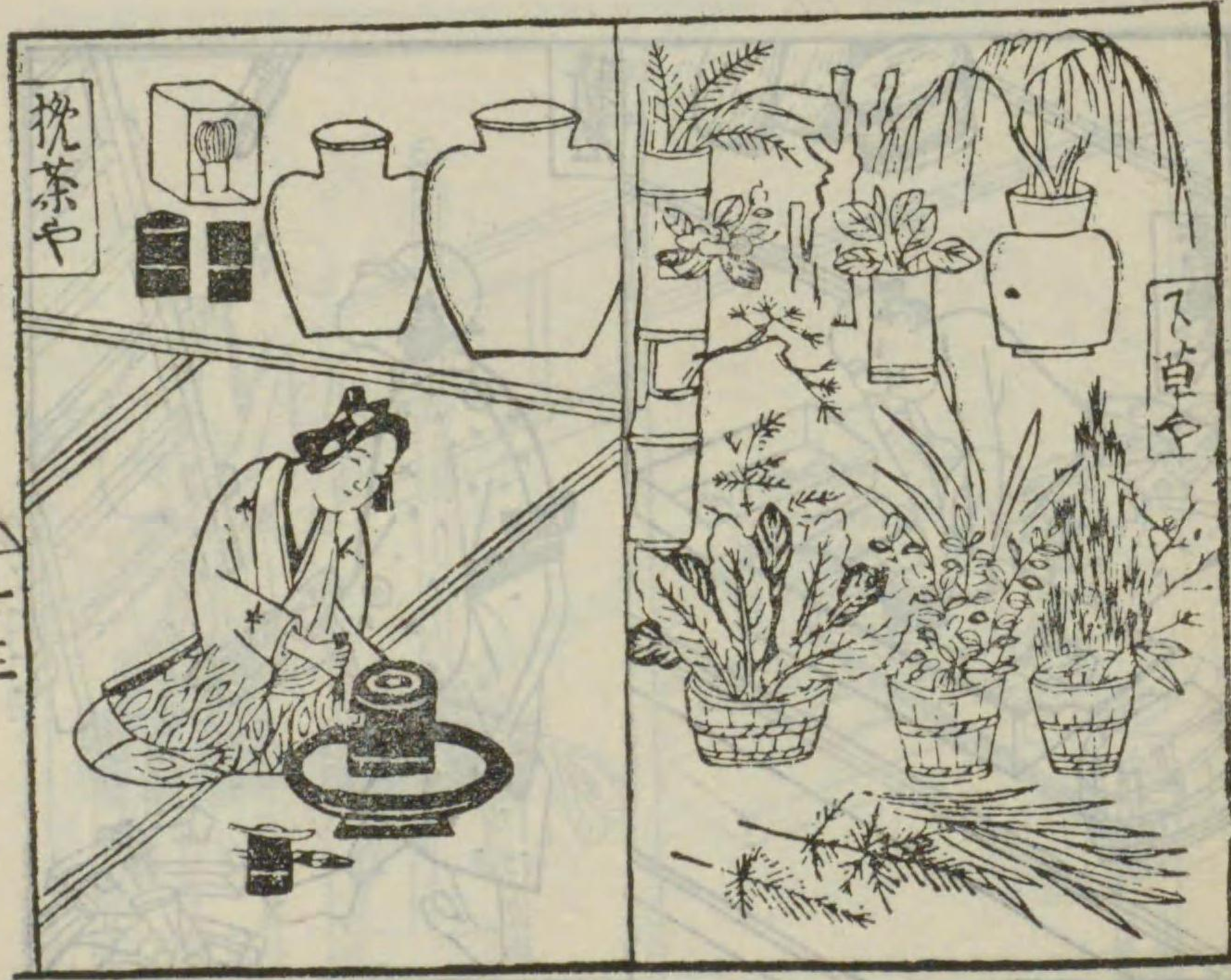
竹扇の骨、團、籠、一切の竹細工人是を求む。弓竹は醍醐を上とす。茶湯道具、竹輪を刳、其外尺八、一節切等所々にあり。



【竹皮屋】草履、笠、雪駄の表、其外菓子を包也。又くゝし屋に是をつかふ。

【庭石や】海山の石、蒔石、石船、井筒、石樋、手水鉢等也。京萬壽寺通、烏丸の西、大坂は横堀にあり。【下草や】立花の一宿これを商所、御池通新町東へ入ル町二人あり。花の本の弟子へ十五日つゝうる也。

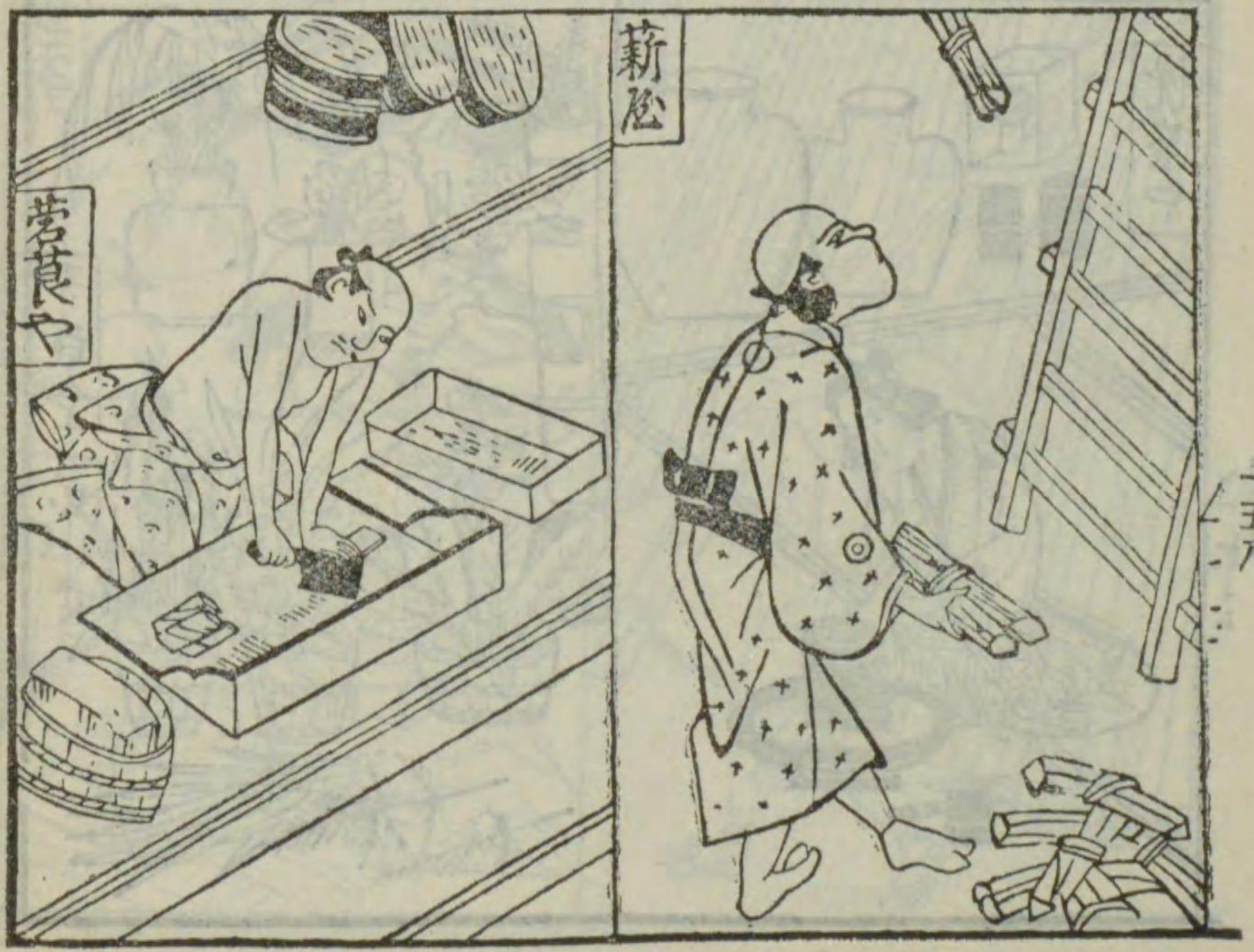
【樒や】花やと號す。抹香同し所にうるなり。



【挽茶や】宇治茶を挽て商ふ所々にあり。【薪や】四國をはじめ所々より上る。諸の薪、炭を商。四條中島上ル丁より二條までに有。其外五條七條所々にあり。賃取あつてこれを賣手の所につける。京にては小上といひ、大坂にては中師といひ、諸國にては日用といふ。

【若莨屋】丹波、吉野、高崎、新田、其外國國のたばこをかい、これをあきなふ。割師所にてかふ。きざみは大津柴屋町よりはじめしとかや。駒臺やあり、庖丁は堺よりいづる黒うち三文字石わりよし、代貳匁なり。

【草履や】中拔、金剛、悲田寺等此所にうる

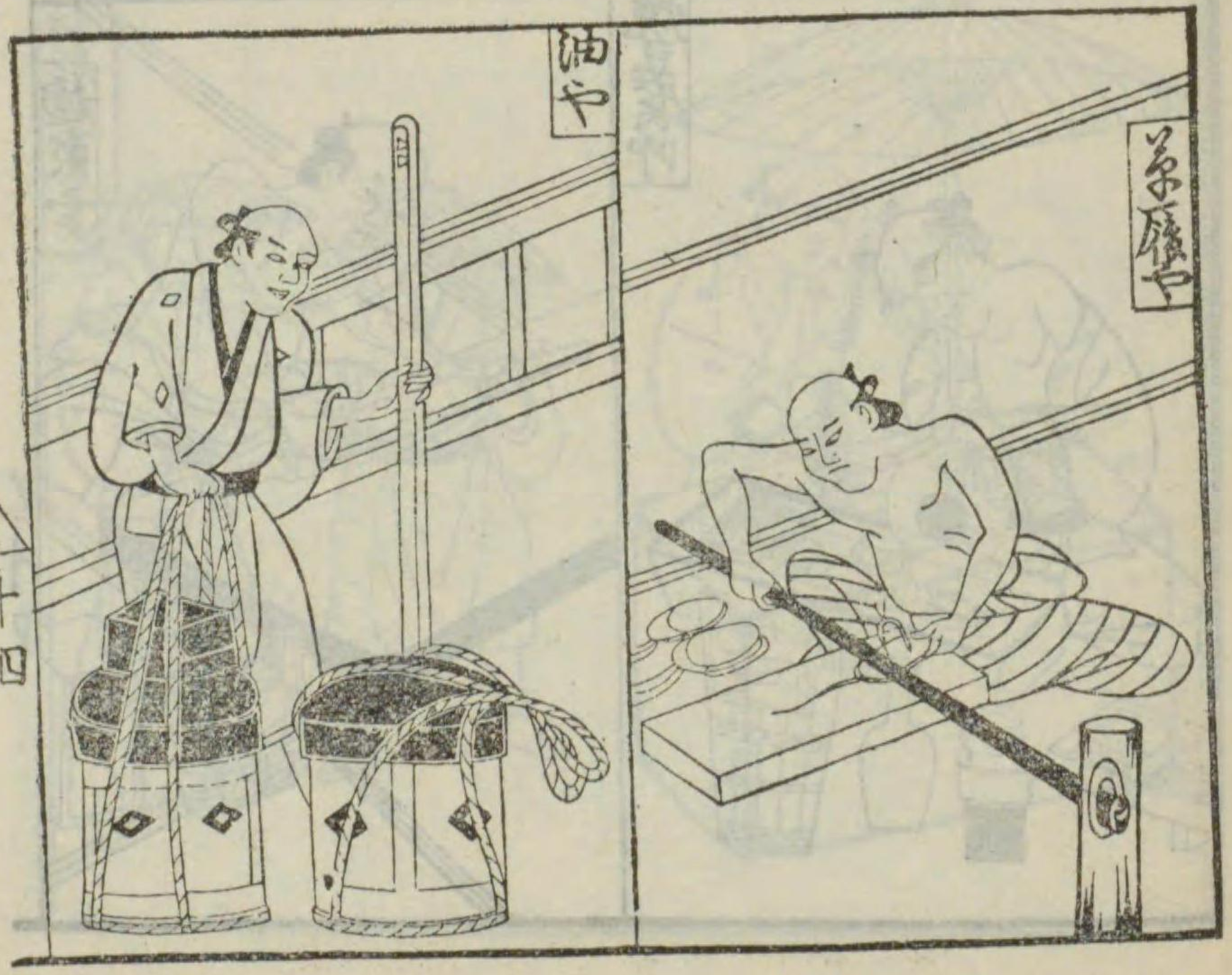


を、鼻緒をたて、品をつくらひて是を商、所所にあり。

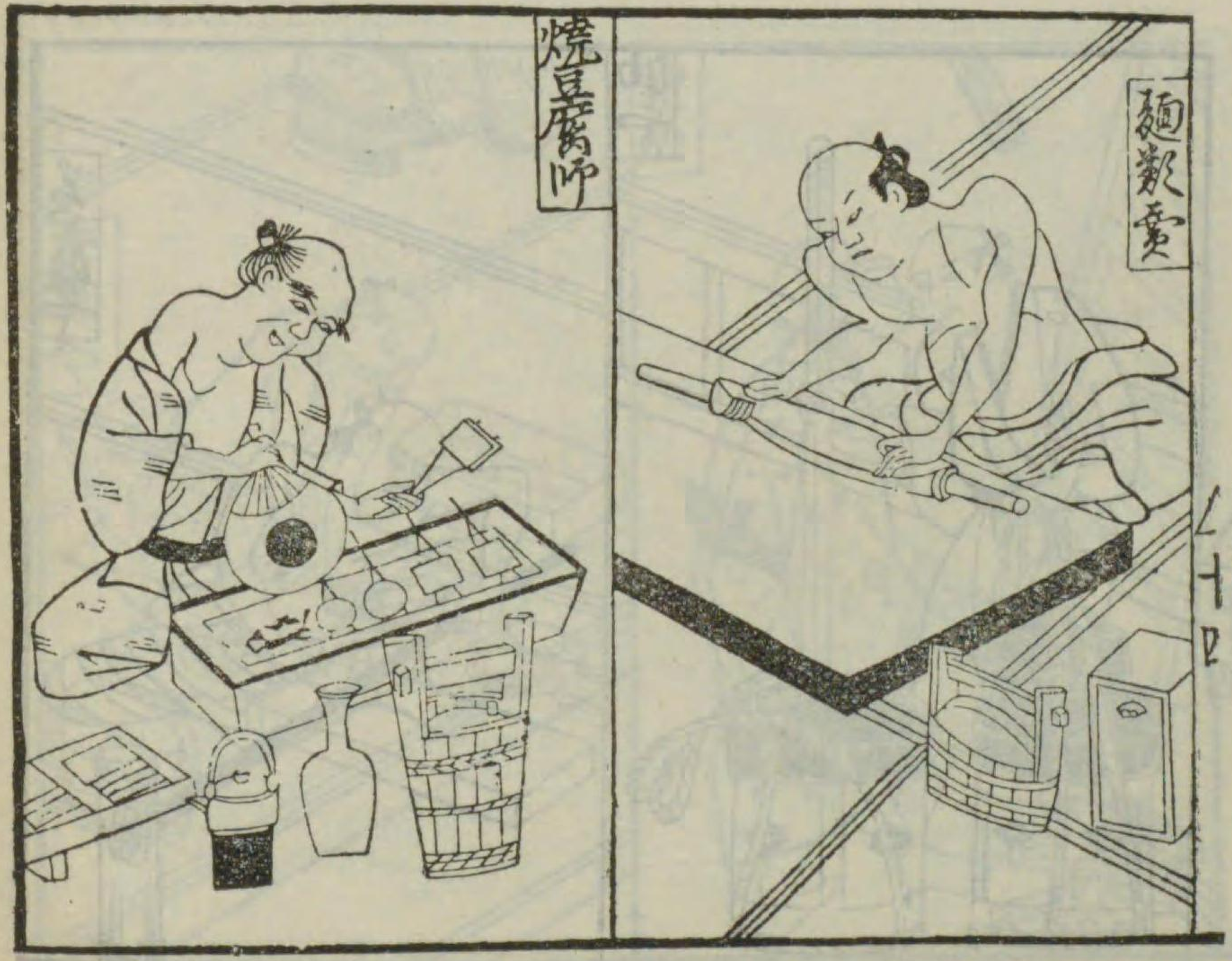
【油屋】大坂長ほり天滿にてしぼり所々へ出す。京むき、江戸むきとてあり。むかしは山崎を名物とす。今はなし。

【麵類賣】饂飩、蕎麥切を一膳切にさだめ、夜に入てになひありく。其外麵類は慳貪と號して一膳の代五分切に是をあきなふ。大佛門前をはじめ所々にあり。又祇園町、四條畷等に飯慳貪やあり、代八分。

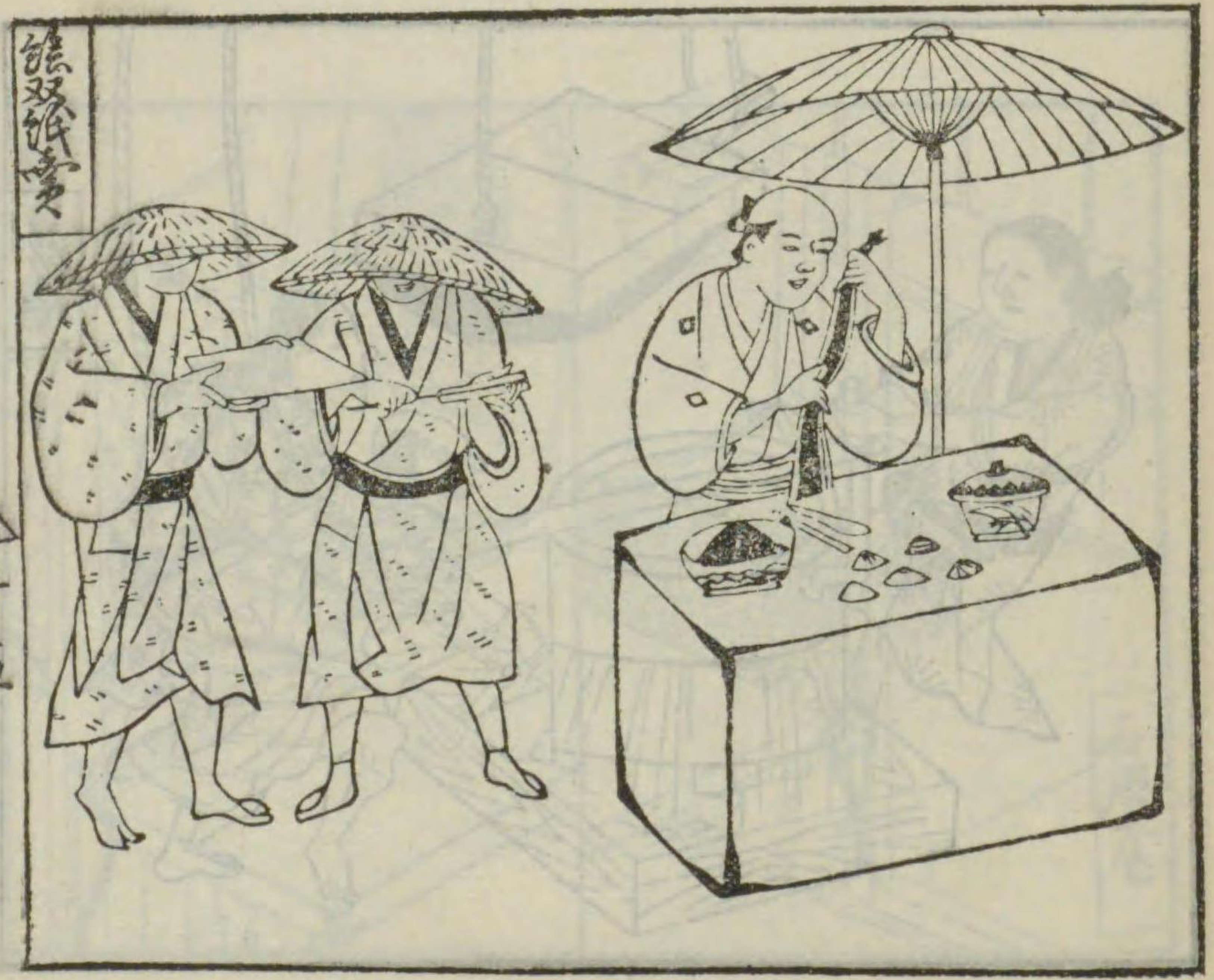
【燒豆腐師】市の町法會の場、祭禮の所万日千日の廻向、所詮人のあつまる所にみせをか



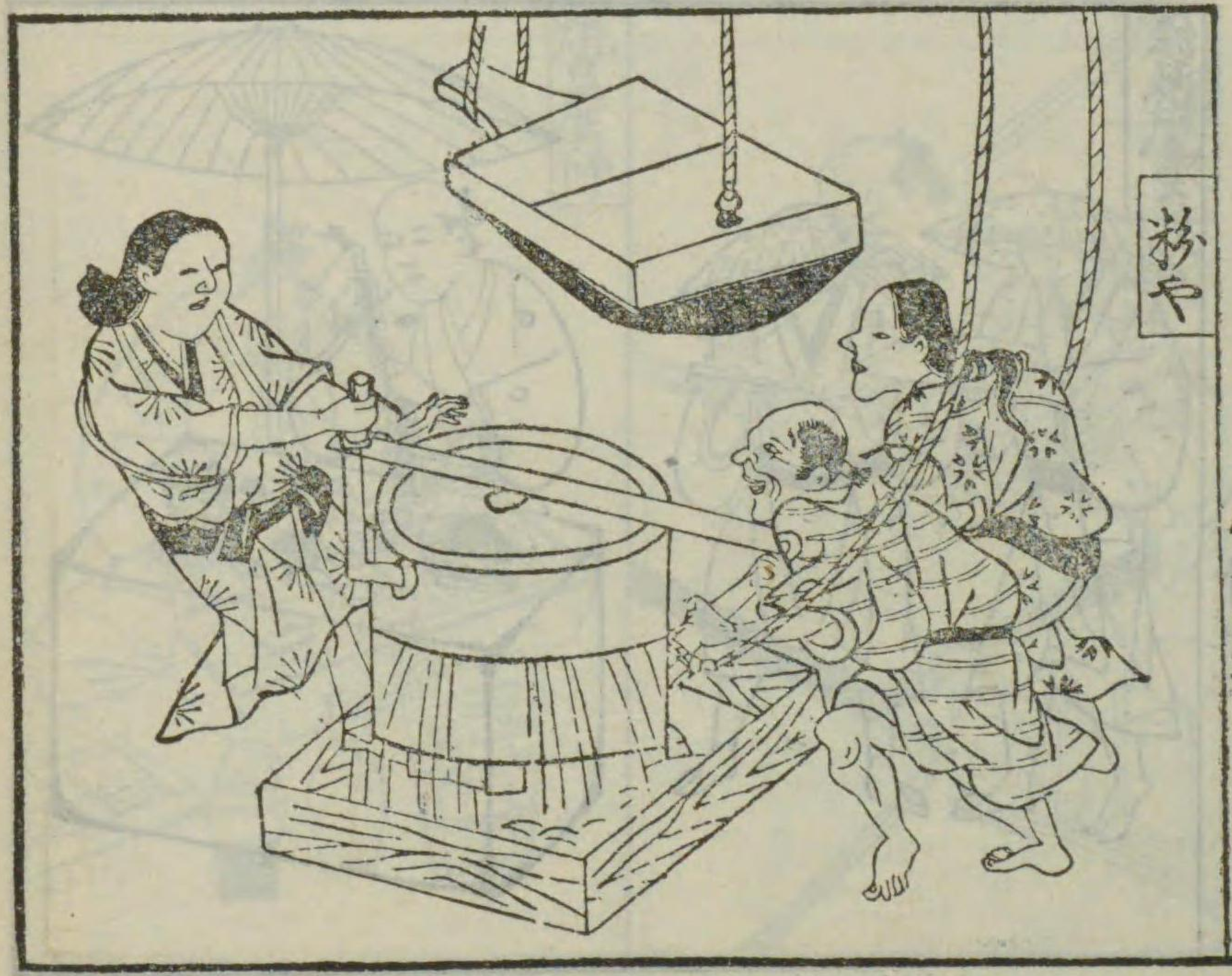
まへすといふ事なし。酒肴は付合なり。幷蕨餅師、麩の燒師、飴うり石花菜うり等一連なり。



【口上商人】万の合藥幷に鬢付のたぐひ、諸方の市、法會の場等に出、弁舌をもてこれをうり、又は神を誓、蛇をみせ繰人形を出し物まねをして人をあつめて是をあきなふ、面の皮一種の商なり。【繪双紙賣】世上にあらゆるかはつたる沙汰、人の身の上の悪事、万人のさし合をかへりみず、小哥つくり、淨瑠璃に節付て、つれぶしにてよみうる也。愚なる男女老若の分なく辰巳のあかりのそゝり者是



をかい取て樂となす。誠に游民のしわざなきに事かゝぬ商人也。【粉や】うどんの粉、蕎麥の粉、是をうる。麵類師、饅頭に是を用ゆ。又大豆の粉、芥子、山椒の粉、米の粉等別ニあり。又附子の粉、女の針うり、是をあきなふなり。

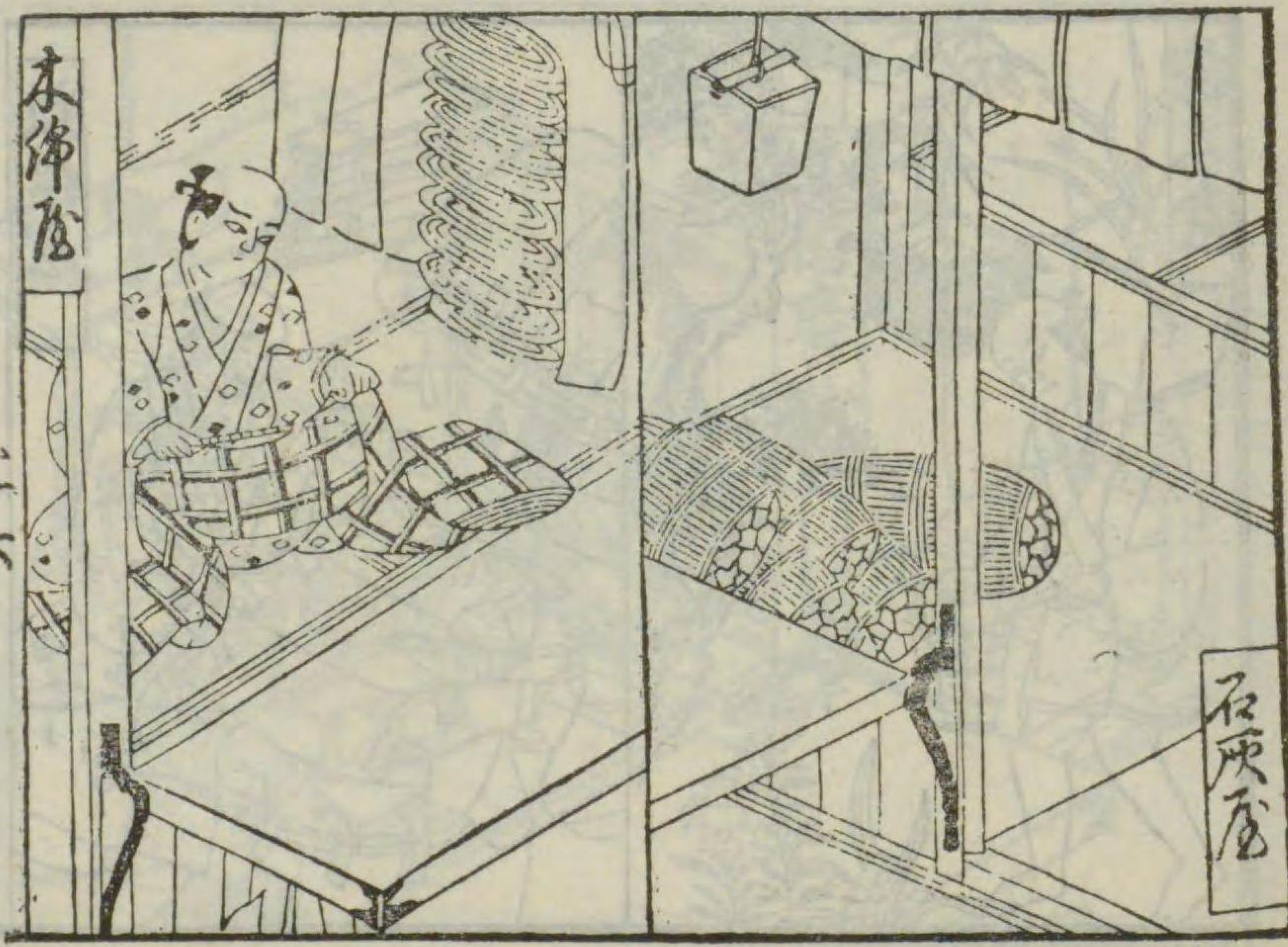


【石灰屋】近江美作より出す。石灰は石を焼。

【臥座】流球表、豐島莚、円座等万の荒物是をあきなふ也。

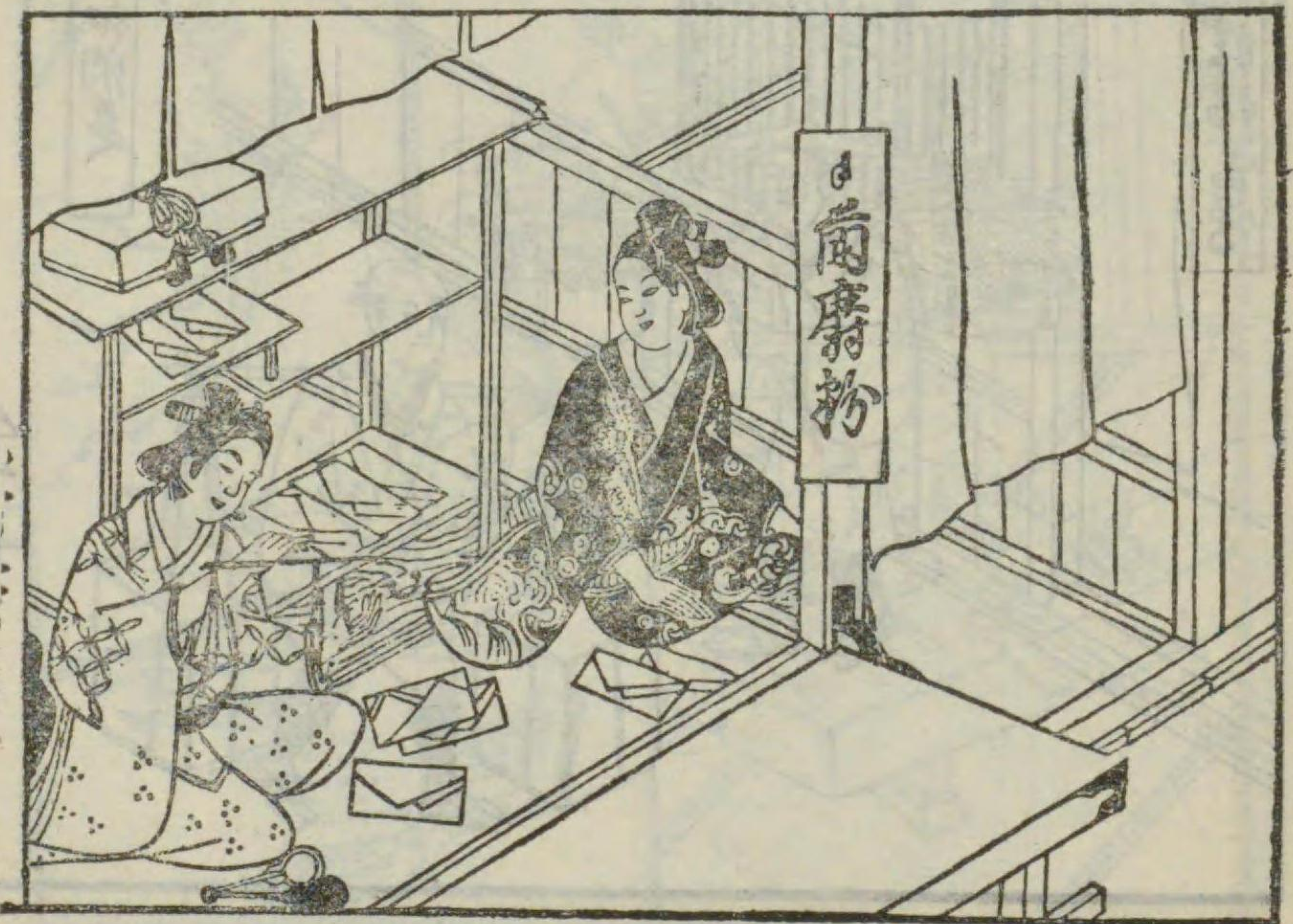
【木綿や】并布、河内より出る。島は紀國其外諸國より出す。布は近江丹波より出す。

【蚊帳や】品々の蚊帳、釣緒等一宿是をあき



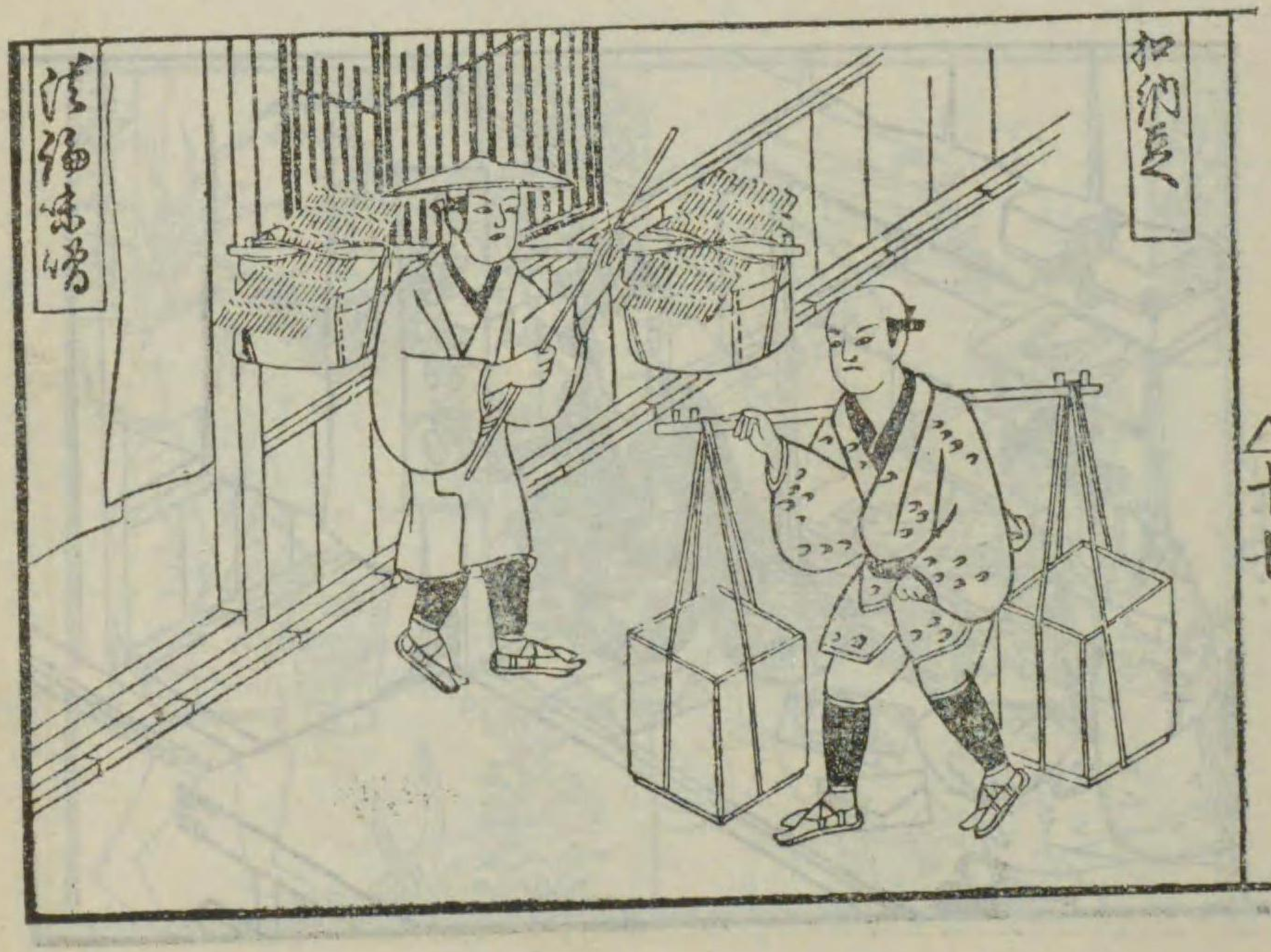
なふ。三條通にあり。【植木や】諸國にもとめて屈曲の風流をなし、石臺木等に植、諸の草花ともに商。北野にあり。大坂は道頓堀、天満天神の前、江戸は下谷、本江、麻布にあり。

【蘭麝粉】つやあらひ粉也。もろこしの季夫人つねにこれを用ひ給ふ、ゆへに顔のつやうつくしく、三千のてうあひ一身にあり、といいしもこのつやあらひこのとくとかや。當世都にもつはらはやり、男女ともにいろつやよくおほへ侍る也。



【扣納豆】薄ひらたく四角にこしらへ、細菜、たうふを添うる也。ねやすく早業の物、九月末二月中うりェ出る。富小路通四條上ル町。

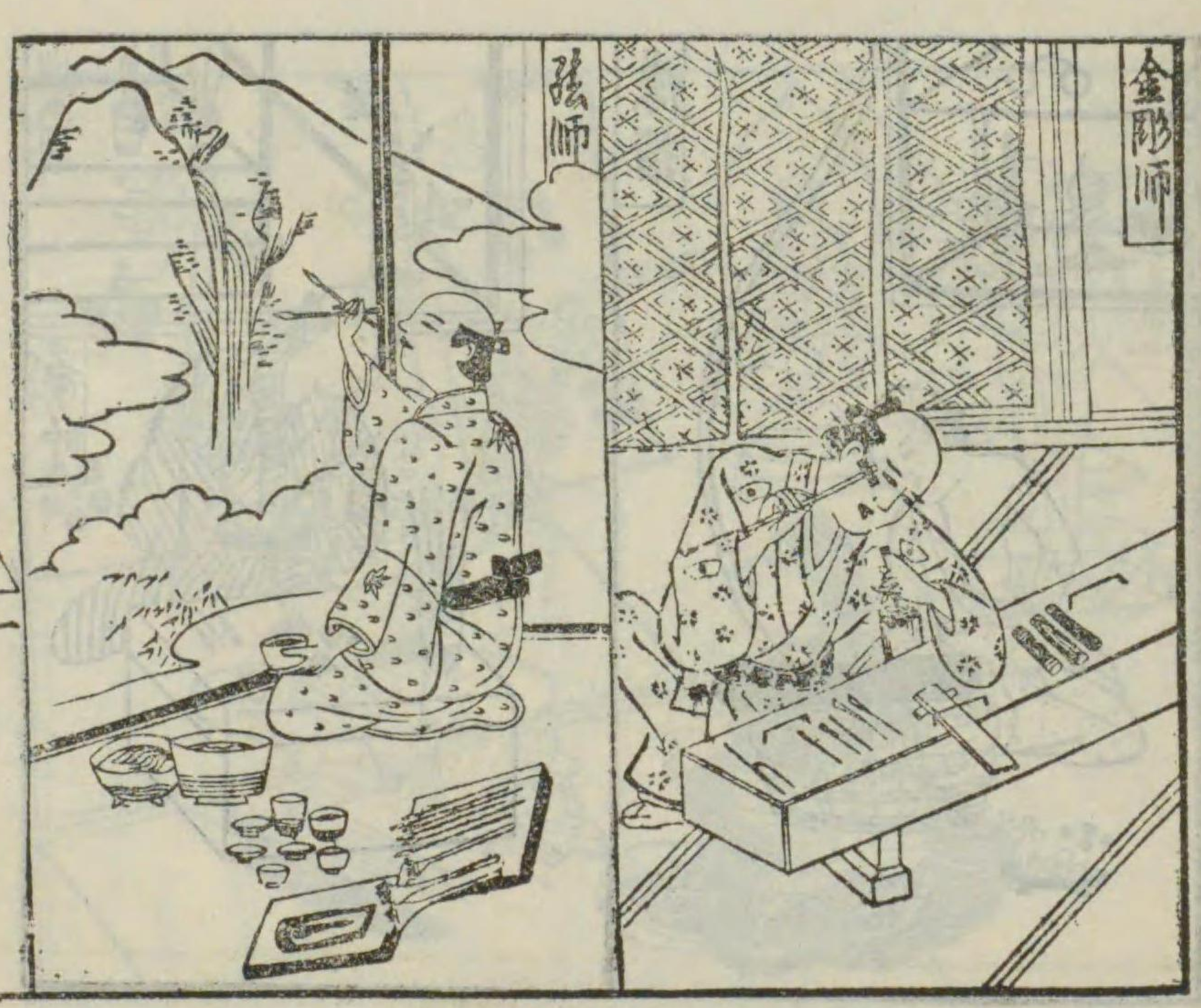
【法論味噌】黒豆にて製するよし、町へ賣にいづる男、柿染のかたびらを上張にきる事、是法論味噌うりの簡板也。曲物に奇麗なるこもをおほひさし荷ない、何方にても下にすぐにおく事なし。一方を高き所へもたせおき人にふみこゑさせぬよし、子なき女此ぼうをこゆれば、かならずくわいにんすといへり。



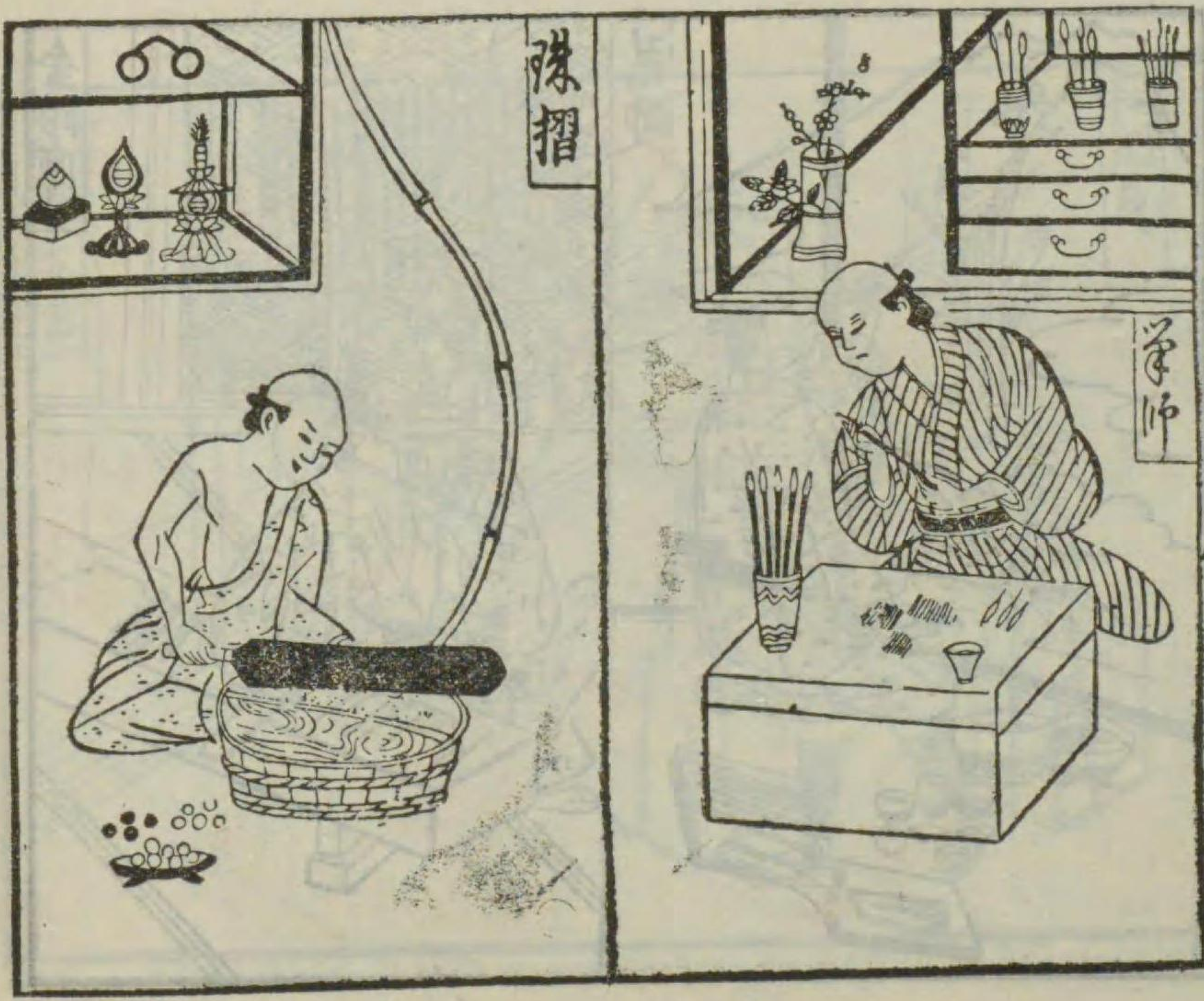
所作入
由來入 人倫訓蒙圖彙 五

細工人部 次第不同

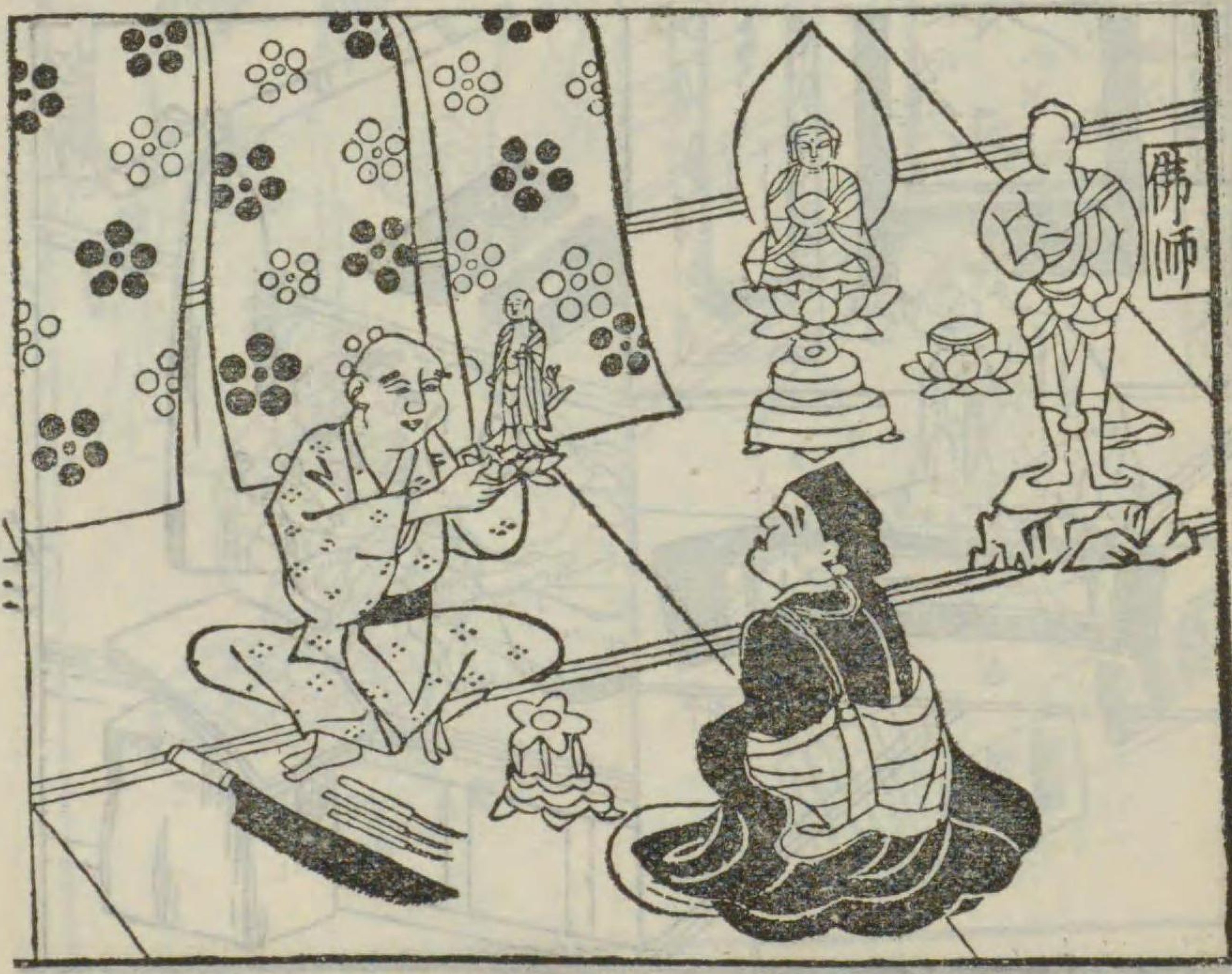
【金彫師】此細工むかしよりあり、中比後小松院の御時に後藤祐乘といふ者名人にして其かくれなし。其比狩野越前守元信といふ名筆の繪師と居所近きゆへしたしく友なへり。よつて祐乘が彫物の下繪を元信にかゝしむ、元信は古法眼是なり。繪といひ、細工といひ、ともに比類なき名手ゆへ、其工いたつて名高し。【繪師】唐土の偃師といふ者秋の月の水中にうつるをみて書初とかや。日本にては仁德



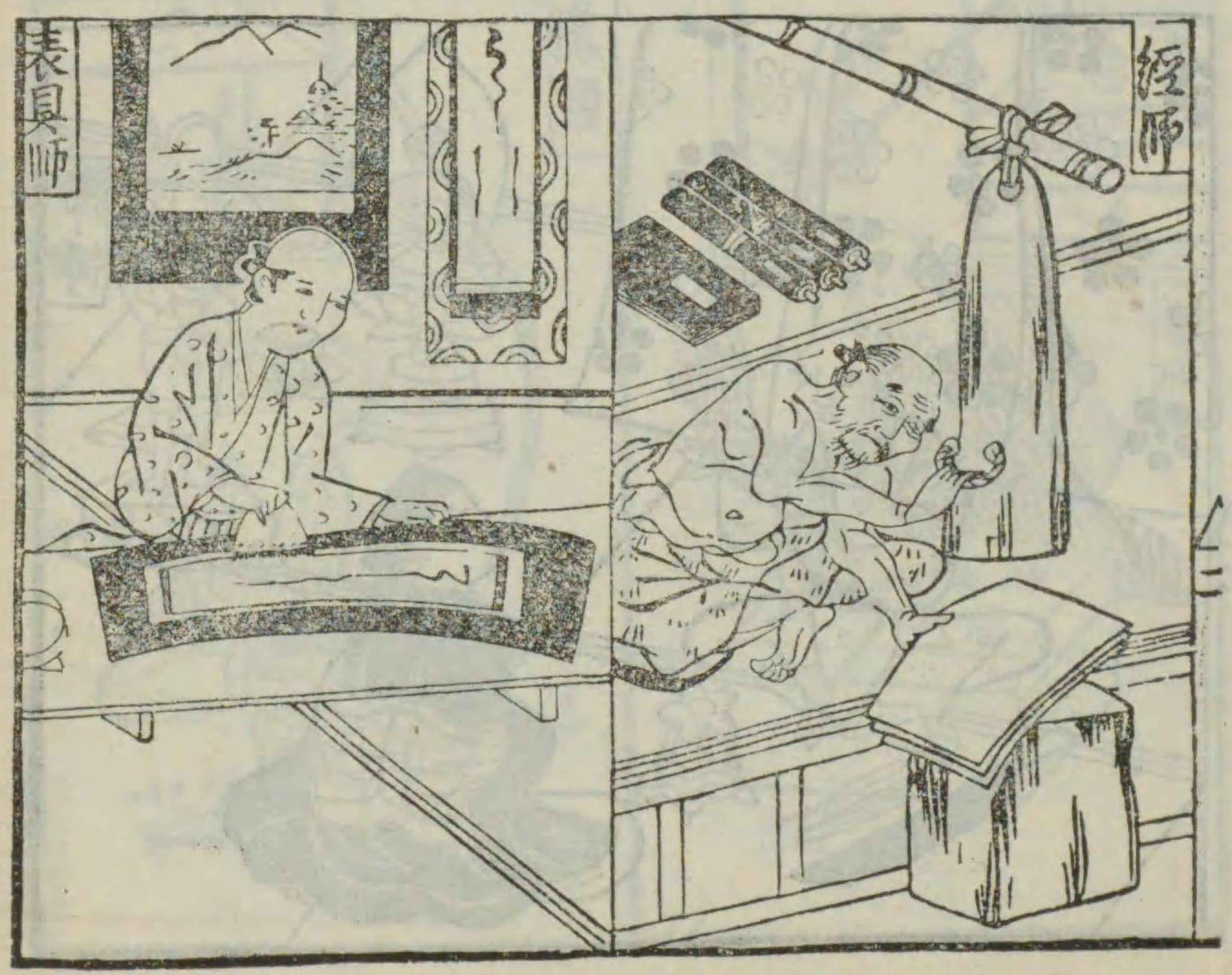
天皇の御宇嘉佐金罡繪師の元祖として千枝常矩など名人也。今都におゐて狩野家并土佐家あり。又は俵屋流、野々村友松、海比其外あまたの流あり。又佛像をえがくを繪所といふなり。佛繪師室町六角通下ル町木村了琢、其外左京德應左助等あり。細金師諸の彩色に有事なれども專佛像のゐに是を用ゆ。金銀の薄を細に割て衣紋をなし、花の筋をわかつ、細金師は繪師にしたかふ也。【筆師】筆は文珠井の指を表するとかや。筆の長四寸二分とかや。筆日本にては丹後野崎の與松といふ者に、切戸の文珠兒と化して敎給ふとかや　諸流にお



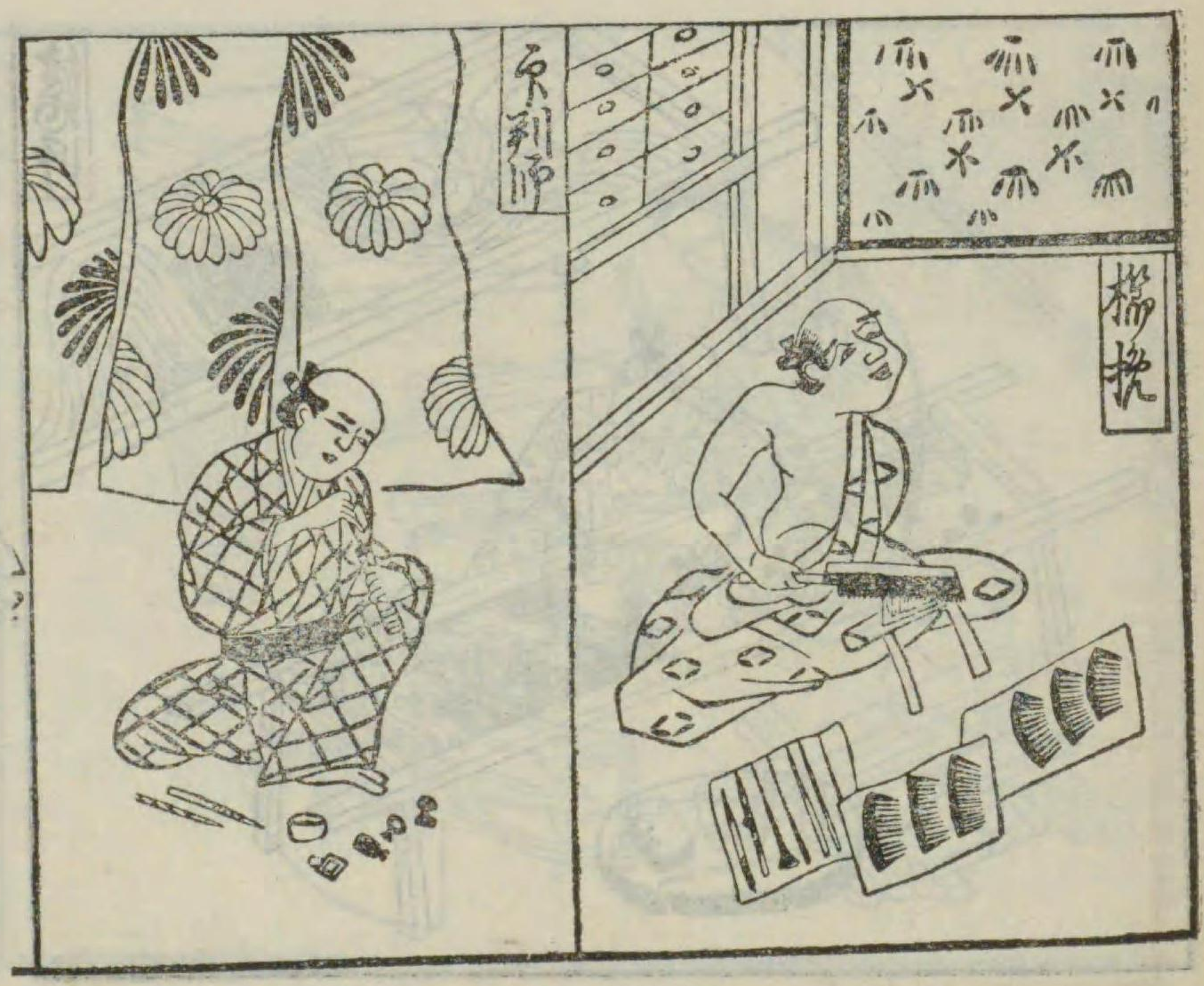
ゐて品々の筆形あり。又繪筆蒔繪筆別に結手あり。京の筆師川原町二條下ル丁、祐以祐二寺町通松原上ル丁、裏辻和泉二條通間町の西小法師等其外所々にあり。筆毛外にうりてあり。江戸福用小法師福永通町にあまたあり。【珠搘】眼鏡、珠數粒、舍利塔皆水晶をもつて造る。其外諸の石緒占、是をつくる。金剛砂に水を洒て鐵の樋にあてゝ是をするなり。傳聞、唐土にはさま〳〵の名珠有、日本にては昌泰年中に陸奥より掘いだせり。京御幸町通四條坊門の下其邊に住す。大坂は伏見町にあり。江戸南傳馬町神明前三島町。【佛師】釋迦



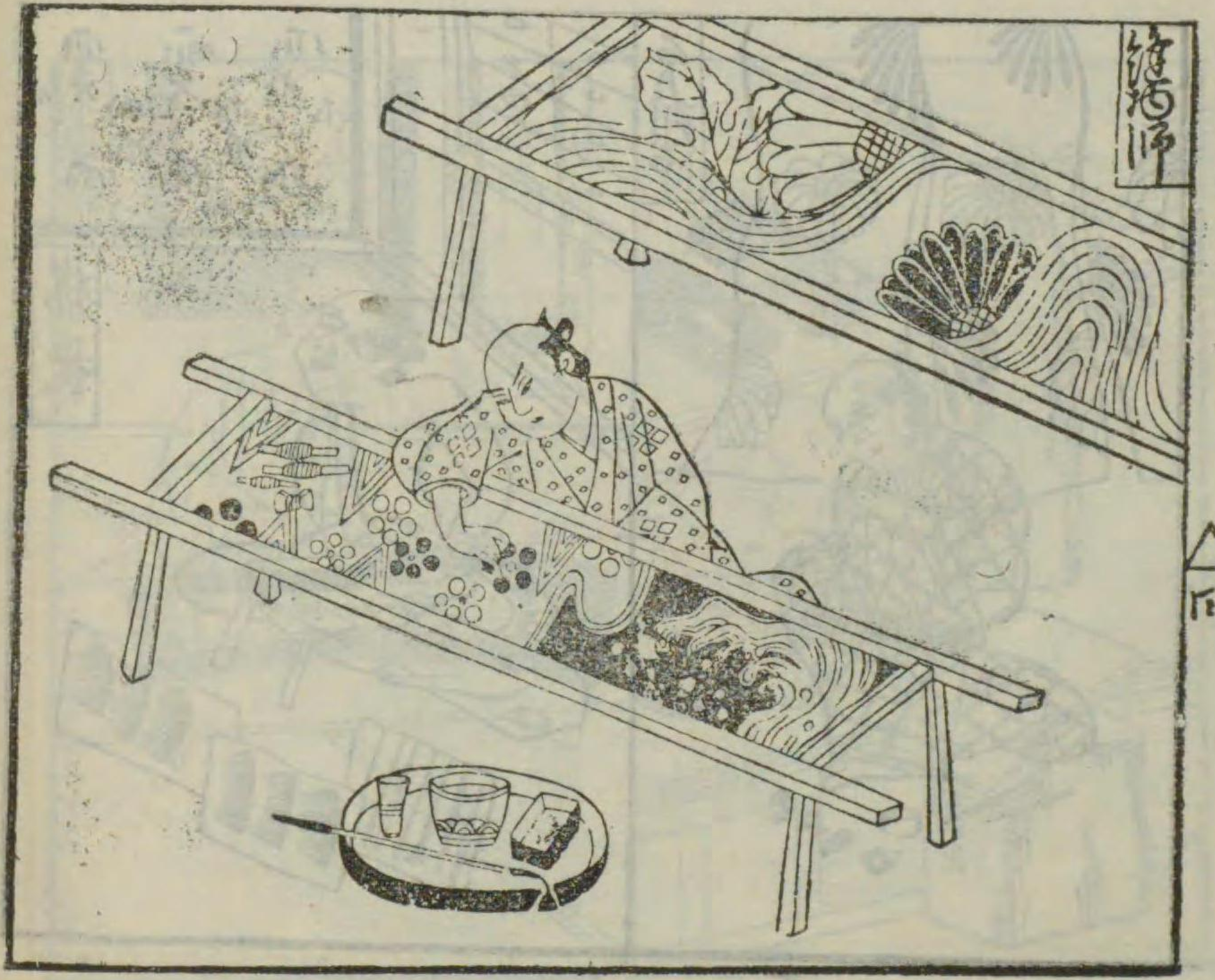
佛御母摩耶夫人功利天に御出生有事をしろしめして、彼天に上り摩耶報恩經をとき給ふ。其御留守のうち佛をみ奉らぬ事をなげき、修達長者毘首羯摩天に佛像を作らしむ。是始也とかや。日本にて聖德太子の御時大唐より鳥佛師と云細工人來り、太子に仕へ奉り作りしを、太子の作と云なり。後一條院の御時定朝江劦坂本大宮に住する故大宮形と號す。安元年中に運慶と云佛師あり、七條形の元祖なり。其子旦慶、弟子康慶、同快慶後安阿彌と云、其時右の四人に四菩薩の官位を下さるゝ、此家筋は四條通かんこぼこの町南側、康慶今の



左京是なり。其外法橋數人有之。【經師】經師、或説に多田滿仲の子美女御前にはじまるとかや。諸の經卷、卷物、色紙、短冊、薄樣、香包、其外色繒の紙、暗經等紙をもつて造る類、一切これを造る。其中の長を大經師と號。禁裏の御細工をなす。此家曆を改板して世上に出す。又院の御用をつとむるを院經師と號す。大經師室町通佛光寺通上ル丁、内匠院經師、車屋町丸太町上ル丁藤藏也。曆は宣明曆を用たり。又貞享年中に改。大統曆を用、唐にても代々曆を改むる事也。元來は黄帝の時に始。唐の一行阿闍梨よりくはしく發明す。



日本へは欽明の御時百濟國よりわたす。泥繪書諸の紙に下繪をなす。此者經師の下細工也。【表具師】唐書に所謂褙匠是なり。屛風張付等ともにこれをなす。諸の色紙、軸、金物、組緒、絹卷物等是をつかふ、其品々商人細工師あり。【櫛挽】神代のむかし稻田姬に其親手摩乳が櫛をもて髮揚して姬を素盞烏に奉りしとかや。然ば始り久しき事也。又妻櫛とは化生のおそるゝ櫛と也。櫛をなぐるは大に忌事とかや。櫛は伊須、黃揚等其外諸の唐木、象牙玳瑁等をもつて造り、蒔繪金具をもつて彩、各下細工人有、唐櫛は唐よりわたす、其外大

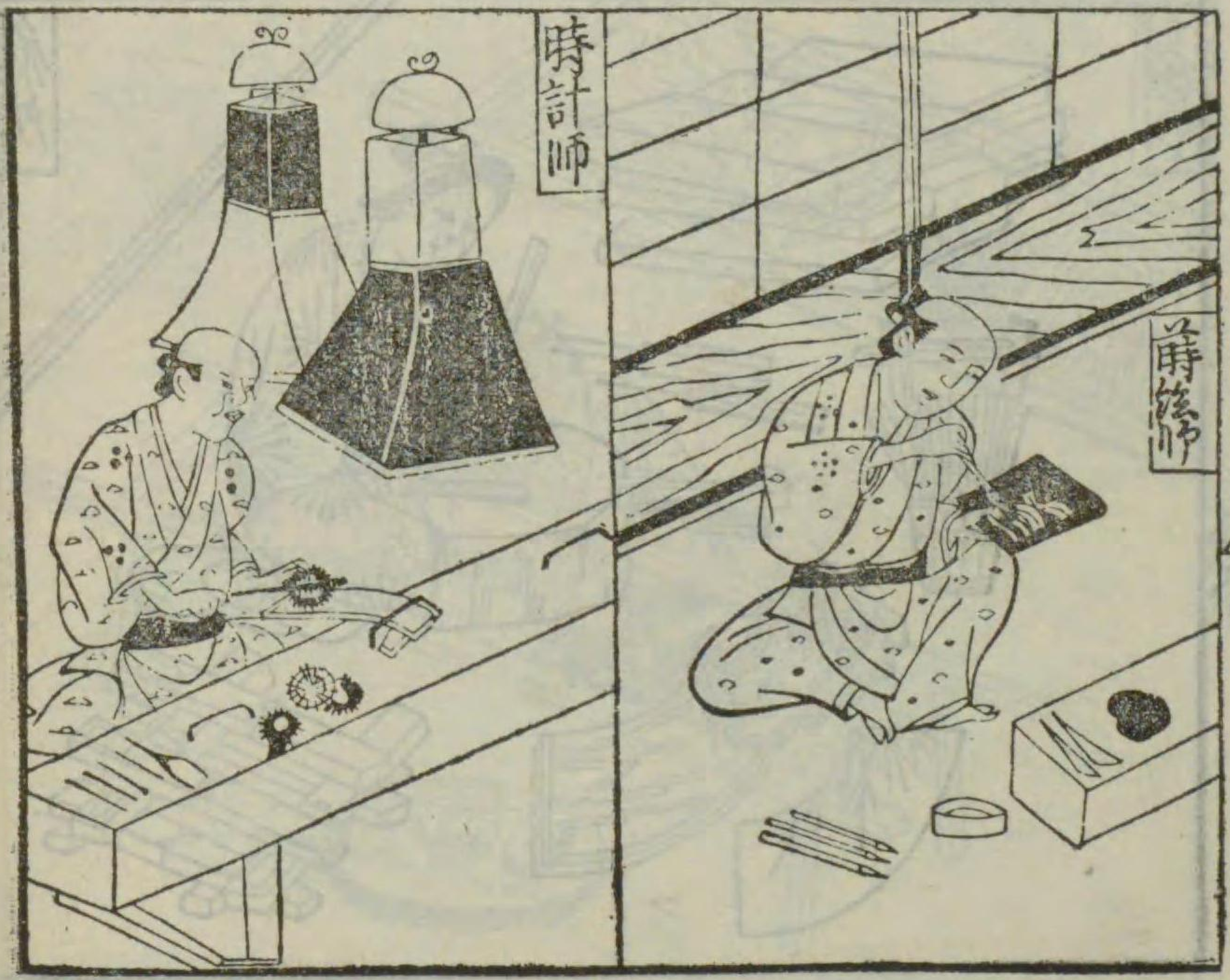


坂長町にて造る。又笄髮是を商也。細工人別にあつて此所ゑうるなり。竹、角、象牙、鯨鰭をもつて造る。京櫛挽寺町通押小路の下舟木長門、其外所々にあり。伊須の木、長門より出。此木を舟木と號す。【印判師】水牛をもつてこれを作る。又繪墨跡の印は石をもつて是を彫、又韻經を考字を反して名乘をあらためてもほるなり。野人小兒これを調法とす。京極通二條上ル丁井上大和、其外所々にあり。大坂は堺筋平野町にあり。江戶京橋四丁目、銀町、乘物町。

【縫物師】諸の衣裝其外織物にさま〴〵の糸

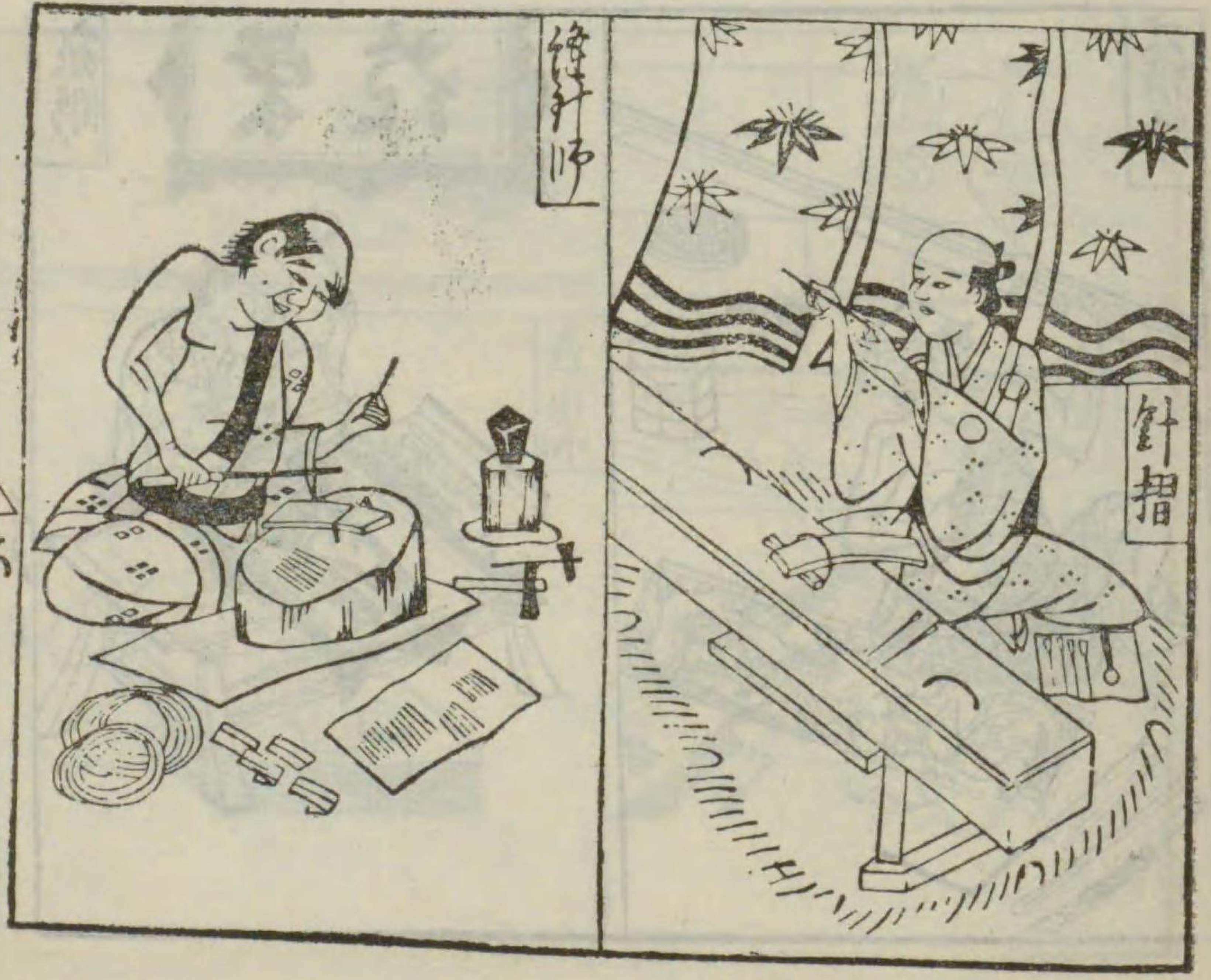
をもて摸様を縫あらはす。縫に色々の名有。暖簾に松をゑがきて印とす。縫箔屋とかく家には紋形のきはばく摺薄等をもするなり。吉備大臣入唐のとき相傳して來れりとかや。縫物師の元祖と仰なり。

【扇折】唐土より始りて其時代さだかならず。古語に月長山に入ぬれば扇を上てこれを敎ゆといふ時は遙の上古と聞えたり。都においてて城殿折是根本なり。城殿今鷹司通の西に住す。疊紙此家に作り名物とす。扇疊紙共に公家より此所にもとめらるゝなり。中頃より五條の御影堂の僧これをなす。女の業なり。

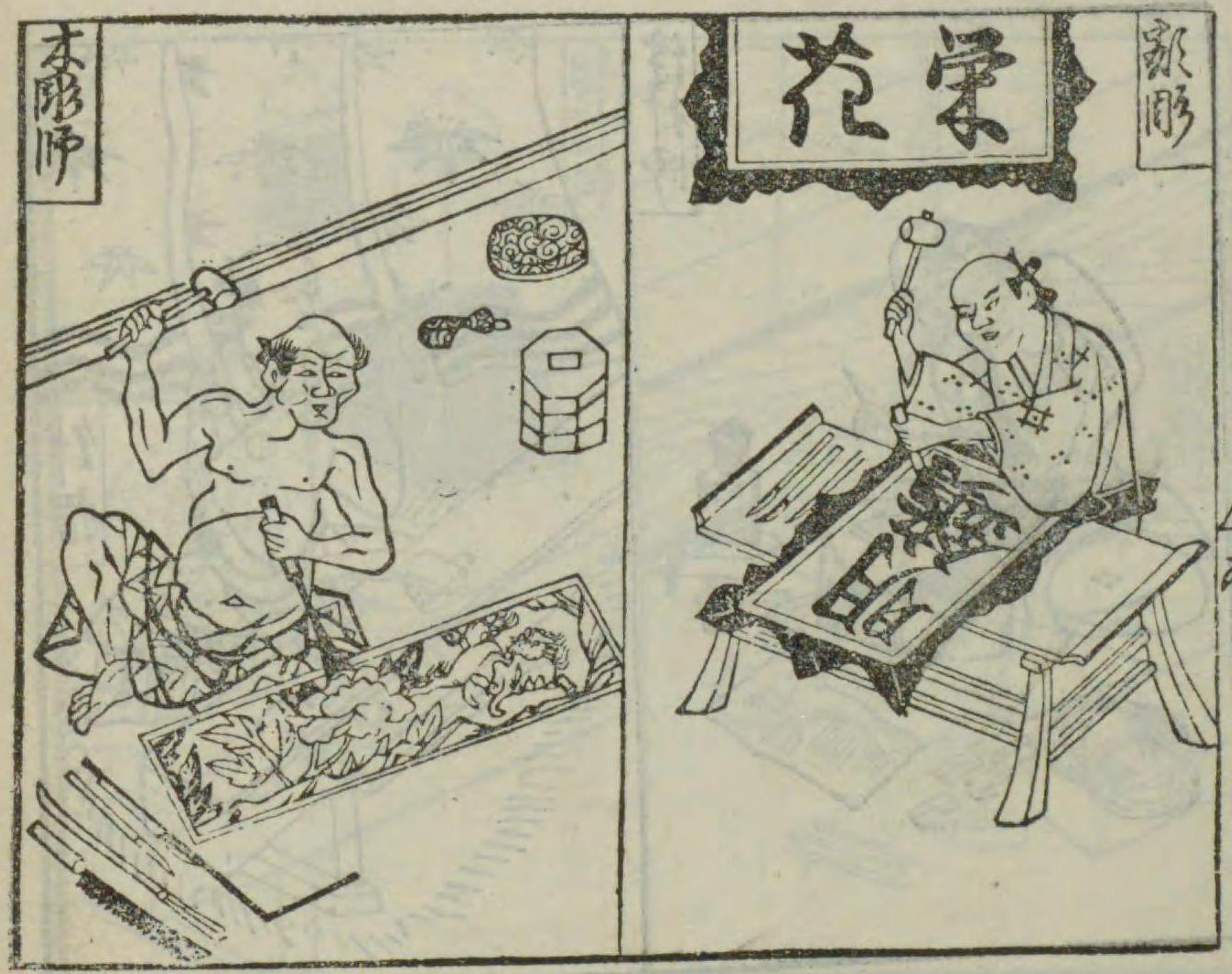


扇あまたの手にわたれり。地紙師、繪師、骨師、要師、箱指等外にあり。末廣、中化等は公家出家これをもつ。舞扇は能大夫狂言師これを持。舞扇師小川通上立賣の下にあり。近世由禪扇とて一風あり。

【蒔繪師】五十嵐、蝶屋、山本、田付、原田等の家あり。中にも五十嵐は東山殿の時名人也。將軍慈照院義政公蒔繪をあひし給ひて、五十嵐にかゝしめ給へり。今にいたつて時代物と稱じ、東山殿御物と號して世上の寳となす。其様比類なきもの也。重箱をはじめ指物の下地師別にあつて是を木地師といふ也。釘



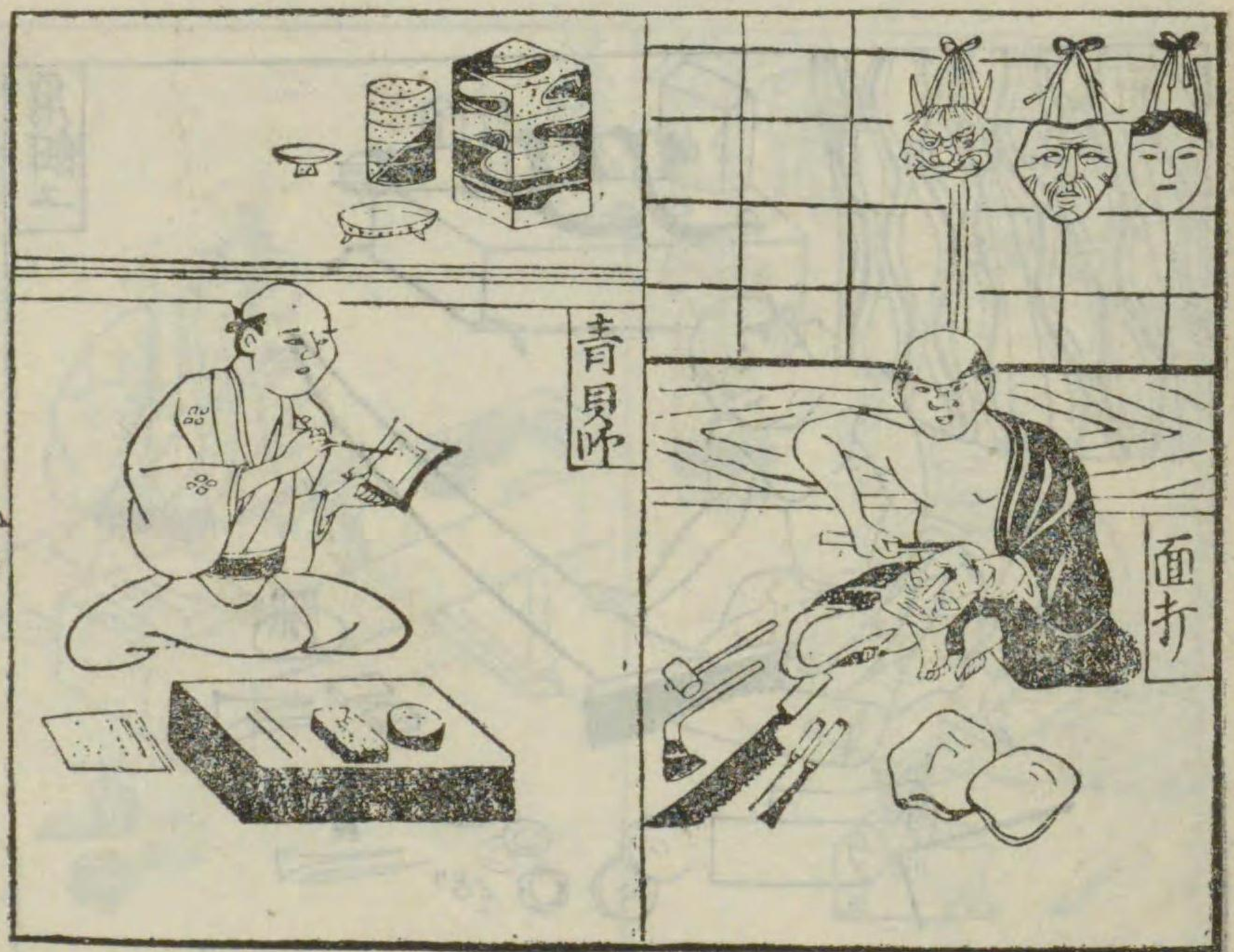
をもちゐず、膠にてこれをつくる也。下繪書外にあり。金銀の粉や同切金師等外にあり。



【時計師】出所いまだ考ず。唐書に所謂時鳴鐘是也。京御幸町八幡丁上ル丁平山武蔵、堀川通中立賣上ル丁元佐、其外所々にあり。江戸弓町理右衞門、鍛冶橋元信、乘物町正次。

【針摺】針立これをもちゆ、諸流あつてかはれり。村田駿河寺町四條下ル丁、奈良彌左衞門寺町四條上ル丁。江戸京橋南へ一丁め南大工町。【縫針師】針鐵師外にあつてこれを造る。都におゐて根本姉小路に住して其名高し。

中世御簾屋といふものあり、今にいたりてこ

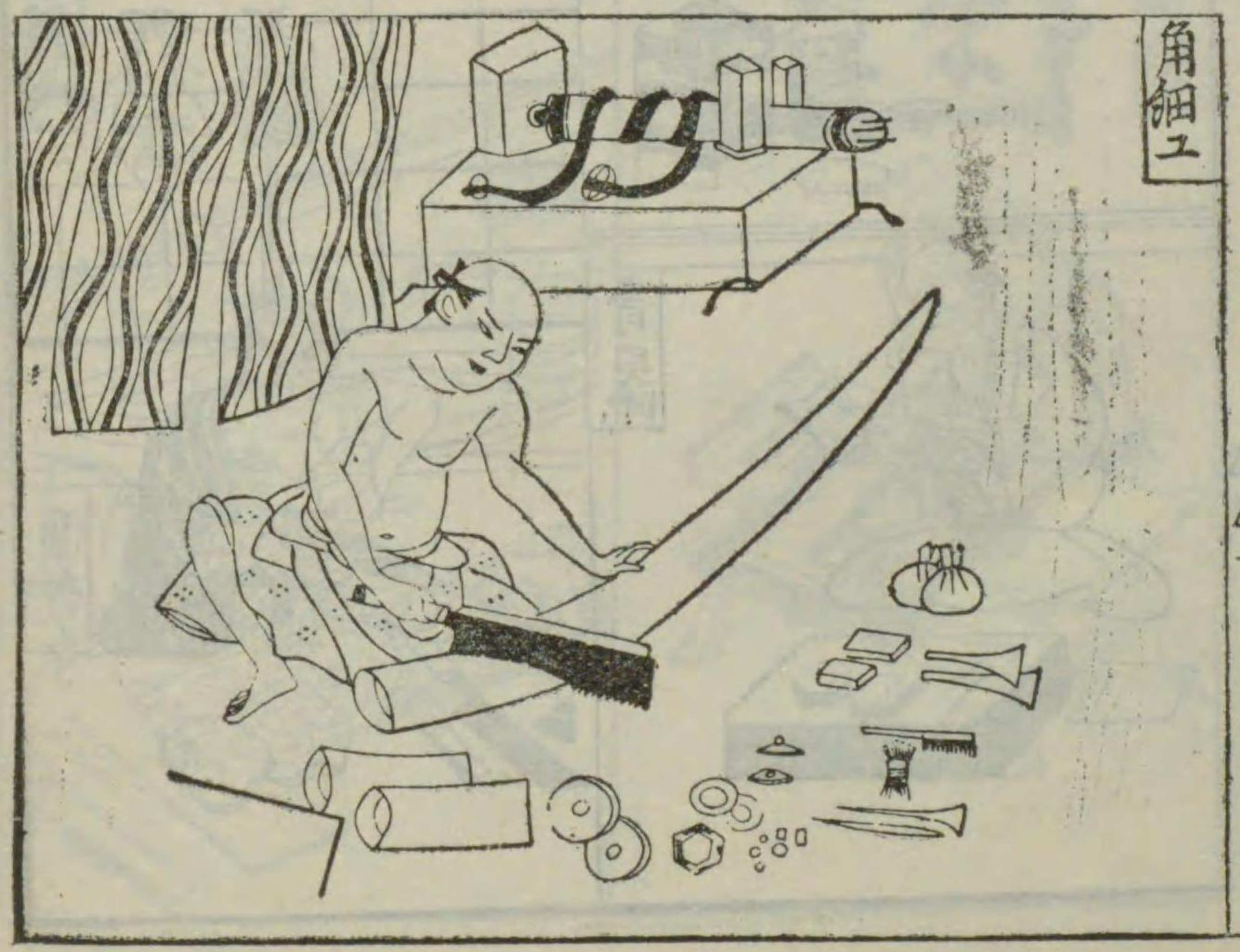


れを名乘る。唐よりわたす針、これを唐針と號す。京針師三條河原町角福井伊與富永伊勢井口大和五條油小路其外大津追分池川、大坂堺筋にあり、江戸京橋四方棚新橋小竹川丁。

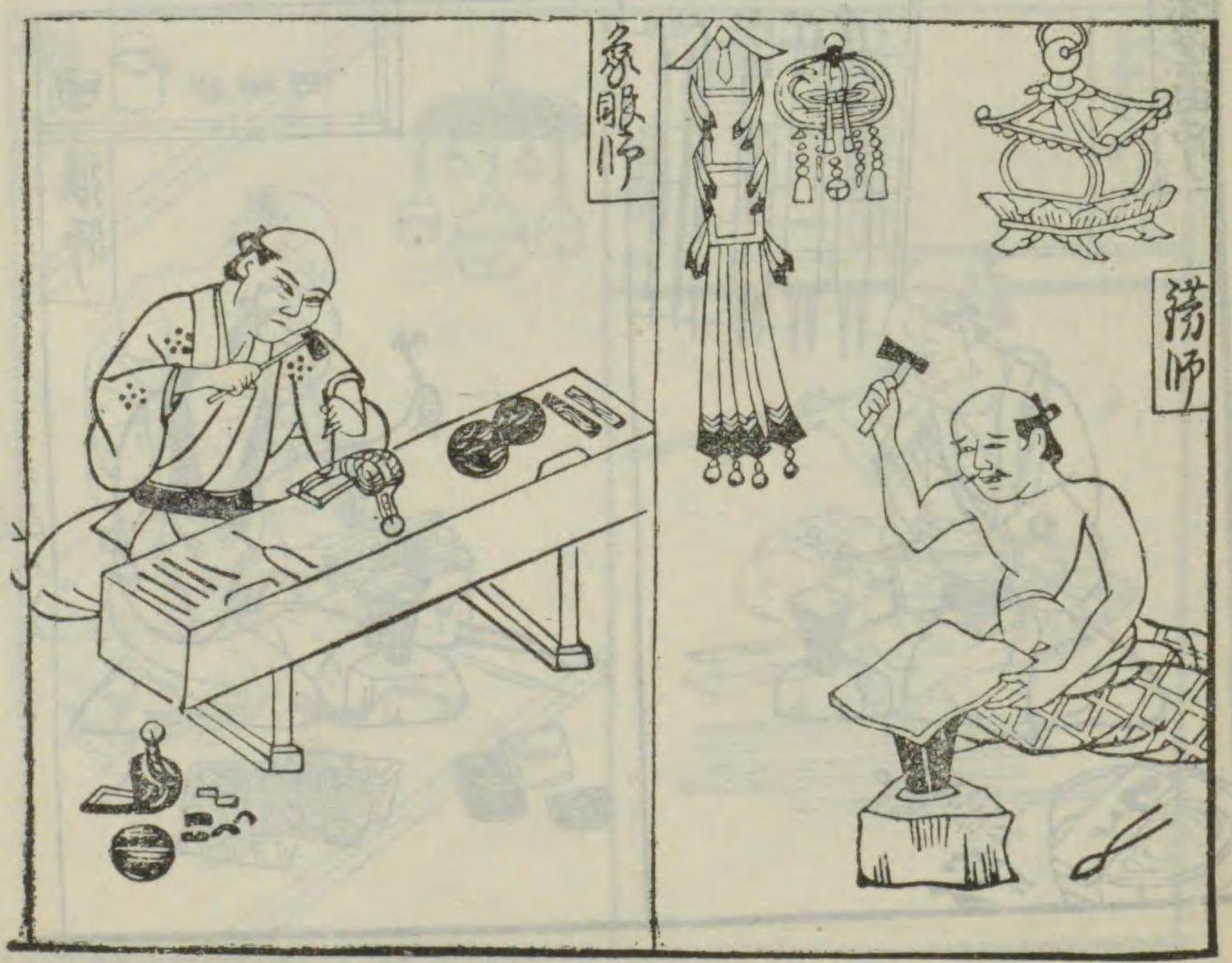
【額彫】たこやくし柳馬場東へ入ル丁勘兵衞。堀川通中立賣下に住す。其外所々にあり。江戸宇田川町、京橋二丁め。

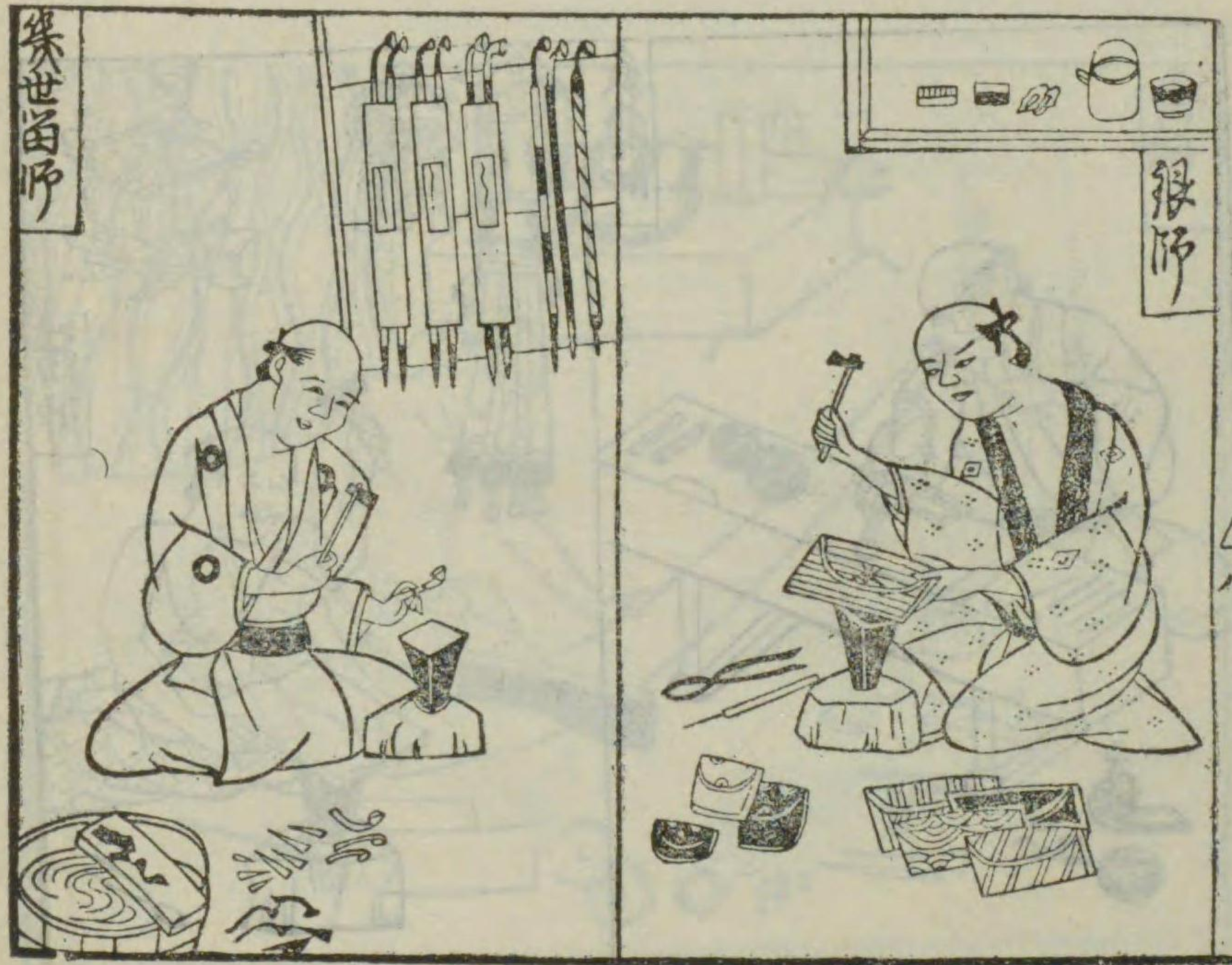
【木彫師】佛塔、厨子其外さま〴〵のかざりに板木の面にこれを彫。上古には飛彈内匠名人なり。天正の比左と號する名人あり。

【面打】樂人能師これをもとむ。上古にはさまざま奇持有しとかや。これを作の面と號し



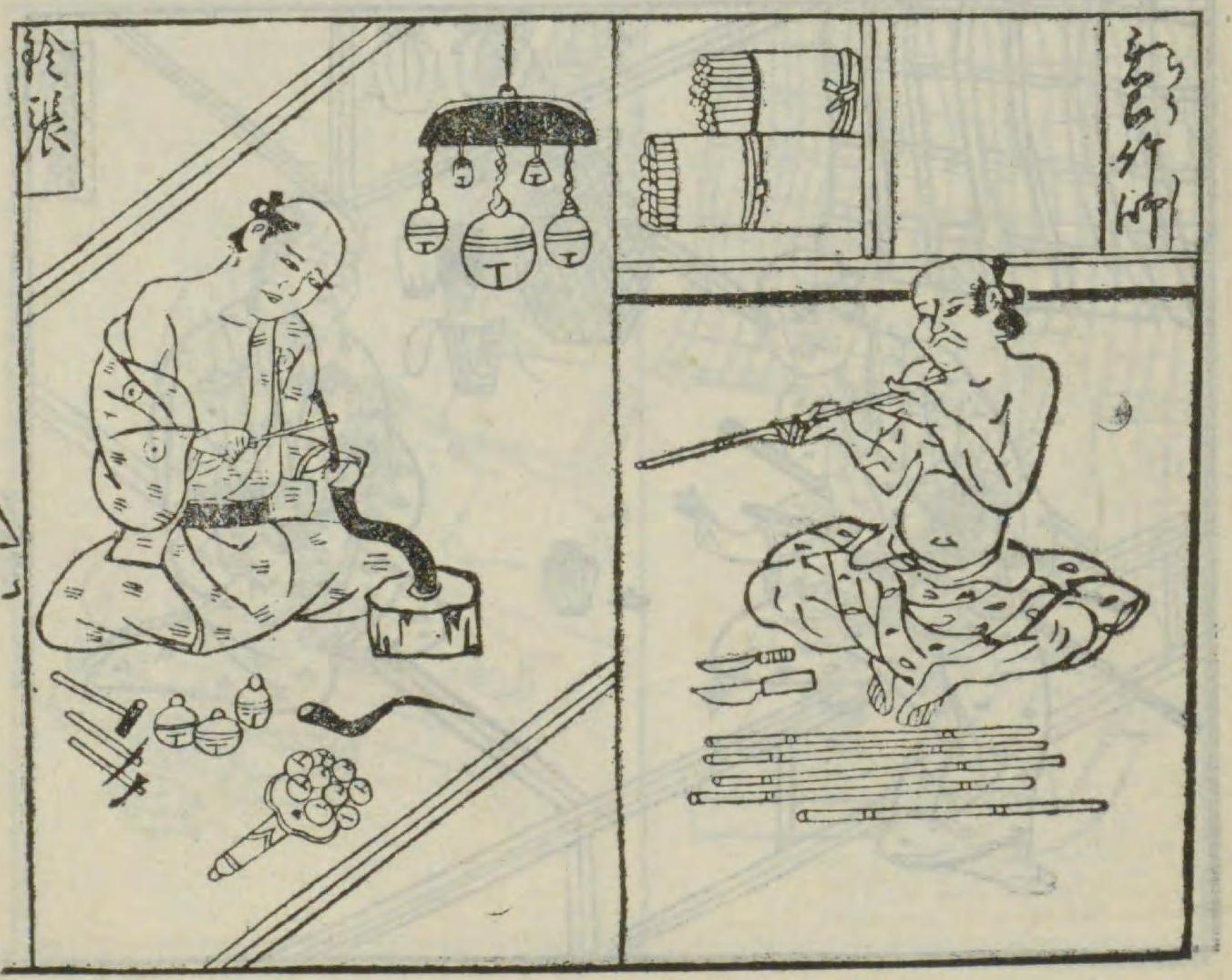
て世上の寶とす。又唐土よりわたせし面世上にあり。京堀川通中立賣下ル丁出目近江、烏丸下立賣上ル丁淸右衞門、同烏丸東へ入丁勘右衞門。江戸尾張町二丁目出目二人、日比谷一丁め出目源助。【靑貝師】靑貝は二條川原町をはじめて其外所々にてこれをするなり。これをかいとりて諸のゑやうをつくり、器につくるなり。塗師外にあつてこれをえて地をぬるなり。所々に住す。【角細工】校槊、櫛拂、掛落、根着、緒占、挽盖、鐵炮の藥入等角象牙をもちゆるたぐひ、これをつくる。寺町通をはじめ所々にあり。





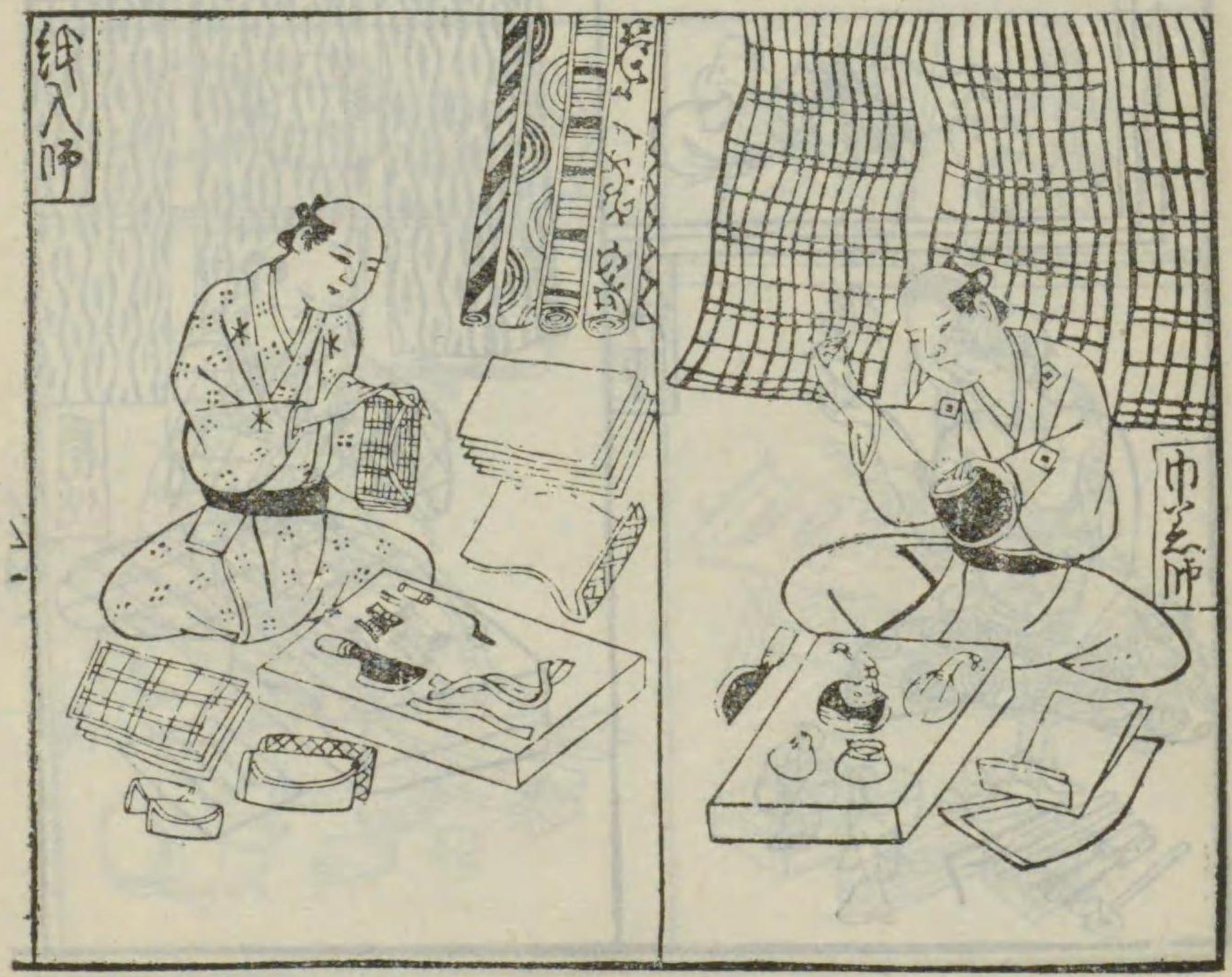
【錺師】一切の佛具幷障子の引手、硯の水入、諸の金物をなし、ゑやうをほるを錺師と號す。【象眼師】鐙、鍔、小柄、等をはじめ一切の金具にこれをなす、所々にあり。【銀師】諸の金物これをつくる。此中近世紙入の金物師別に名乘簡板をいたしてこれをつくる。

【幾世留張】今二條通富小路に櫻やといふ者あり。其先祖これをはじむとかや。むかしは葭をそぎてそれにてのみしと也。京間町通二條の下三條大橋の東大佛におほく住す。近比水口、坂本、圓子やこれ名物なり。【無節竹師】品々塗色、化彫、籐巻、靑貝等あり。諸商人



にこれをうる。中京所々にあり。又若莨入紙をもつてさま〲につくる、所々にあり。革は滑革師これをつくる。寺町通の下にあり。此家刀脇指の寸袋、鏡の覆袋等これをつくる。

【鈴張】鈴、鷹鈴、神子鈴、神前にかくる鈴あり。内侍所の御鈴の音はゆふにやさしきもの也と古人もほめし也。神道に五十鈴とて鈴の造様種々の傳あり。天竺にては時をつくる番の者、鈴をふりて廻る事あり。唐土にては非常をいましむる者、腰に鈴をつけてこれをしめす。其外高官の東帶にも鈴をつくる事也。

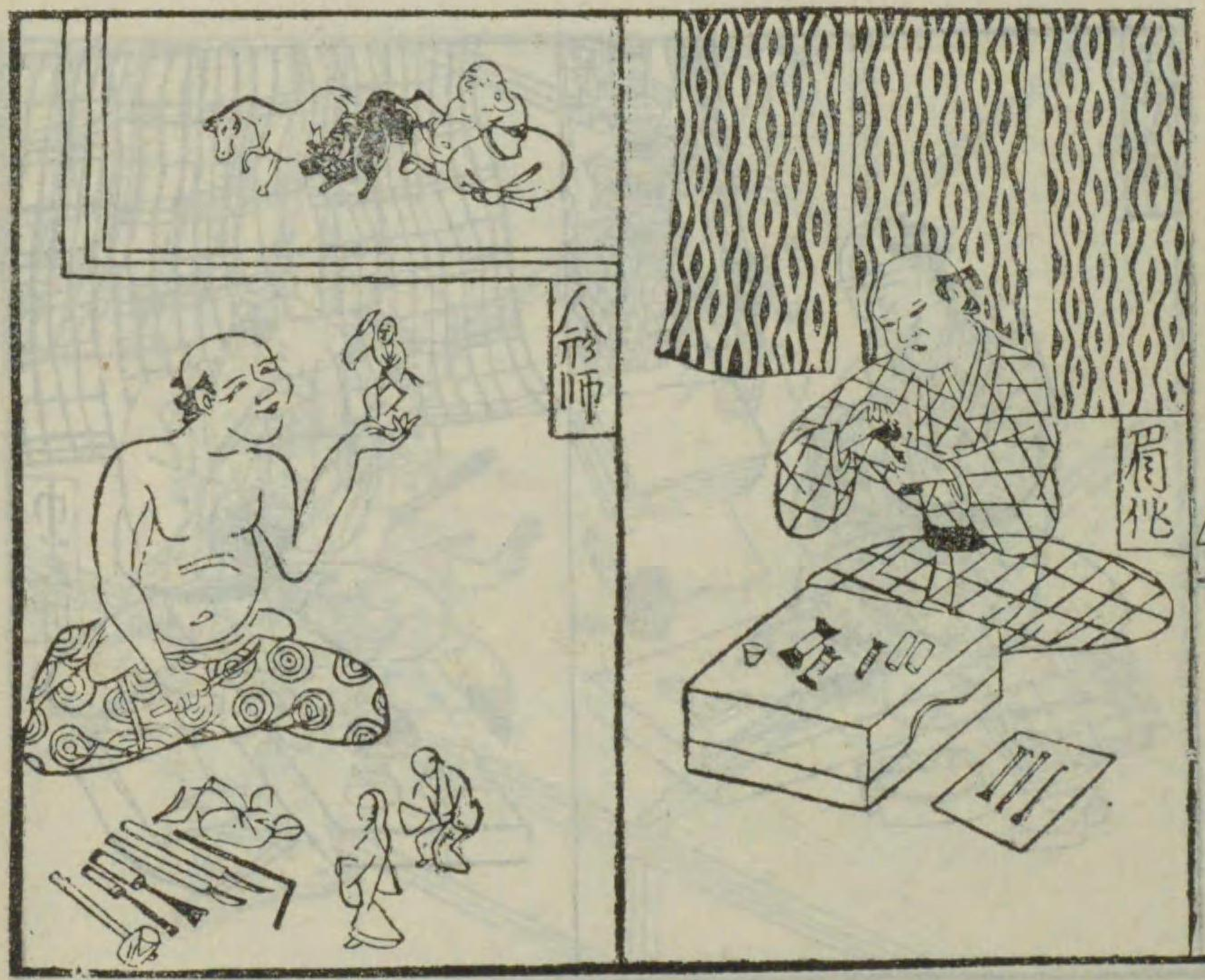


鷹の鈴師、三條橋東明珍宗長、丸太町通新町の西に一家あり。守の鈴は三條橋東淺田市右衛門、其外所々に是をつくる。

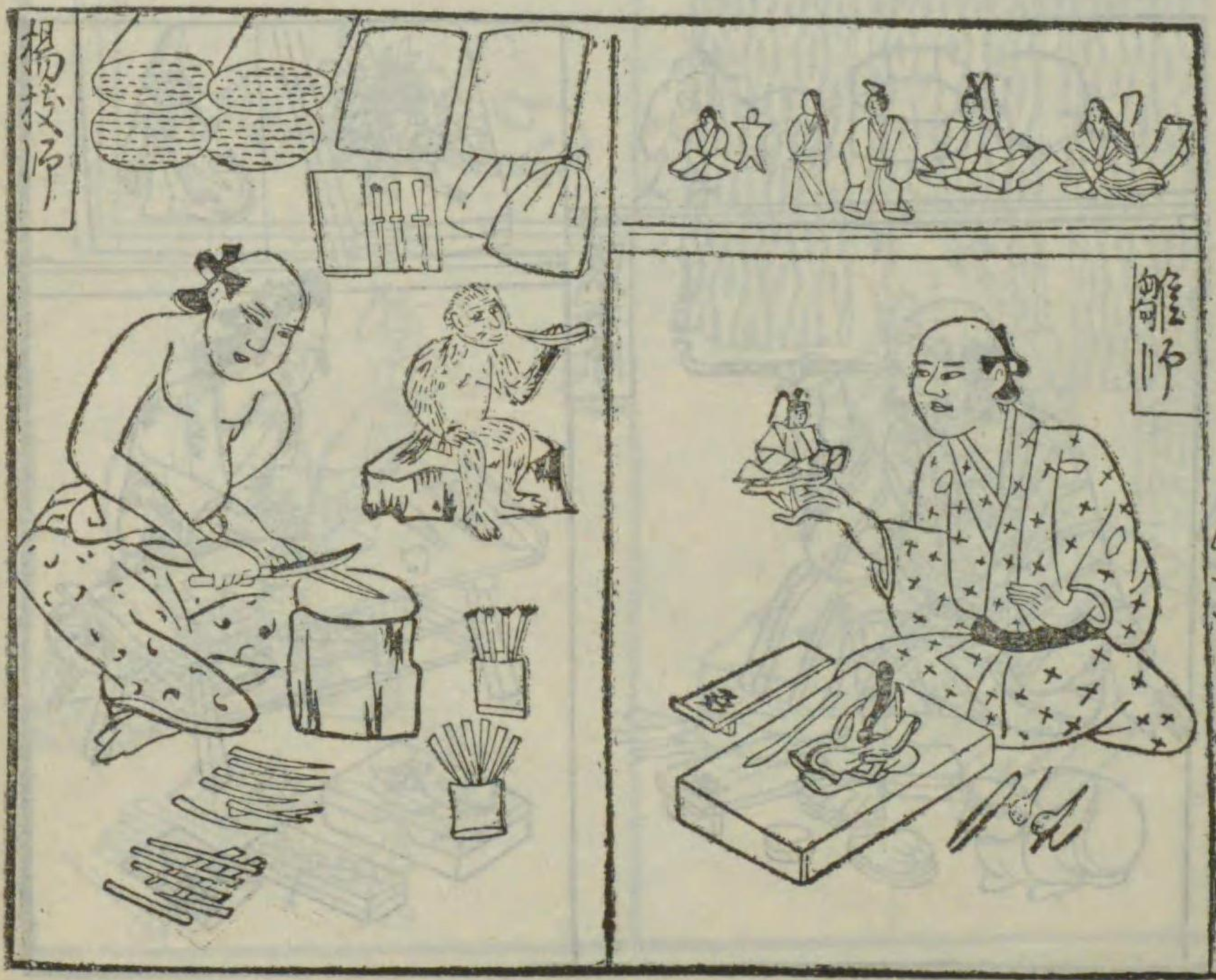
【茶入袋師】幷壺の網師。色々の糸をもて網をすく也。所々に住す。大坂ふしみ町藤重。江戸西紺屋町・南槇町中通、本江五町目、日本橋南二丁目。【巾着師】諸の唐革これをもちゆ。銅印同じく造り所々に住す。

【紙入師】諸の絹、毛織革等をもてこれをつくる。幷巾着、手帕同所にもあり。所々に住す。【眉作】むかし仁和寺の邊に住す、依て其名乘となす。【人形師】諸の人形これをつくる、小を芥子人形といふ。又繰人形、指人形等あり。寺町通をはじめ所々に住す。富島和泉是細工人也。今鋏や町押小路下に住す。張拔人形所々に造る。【衣裝人形】諸の織物をもてゑを切拔・これをつくる。寺町四條の上、同四條川原町のひがしにあり。

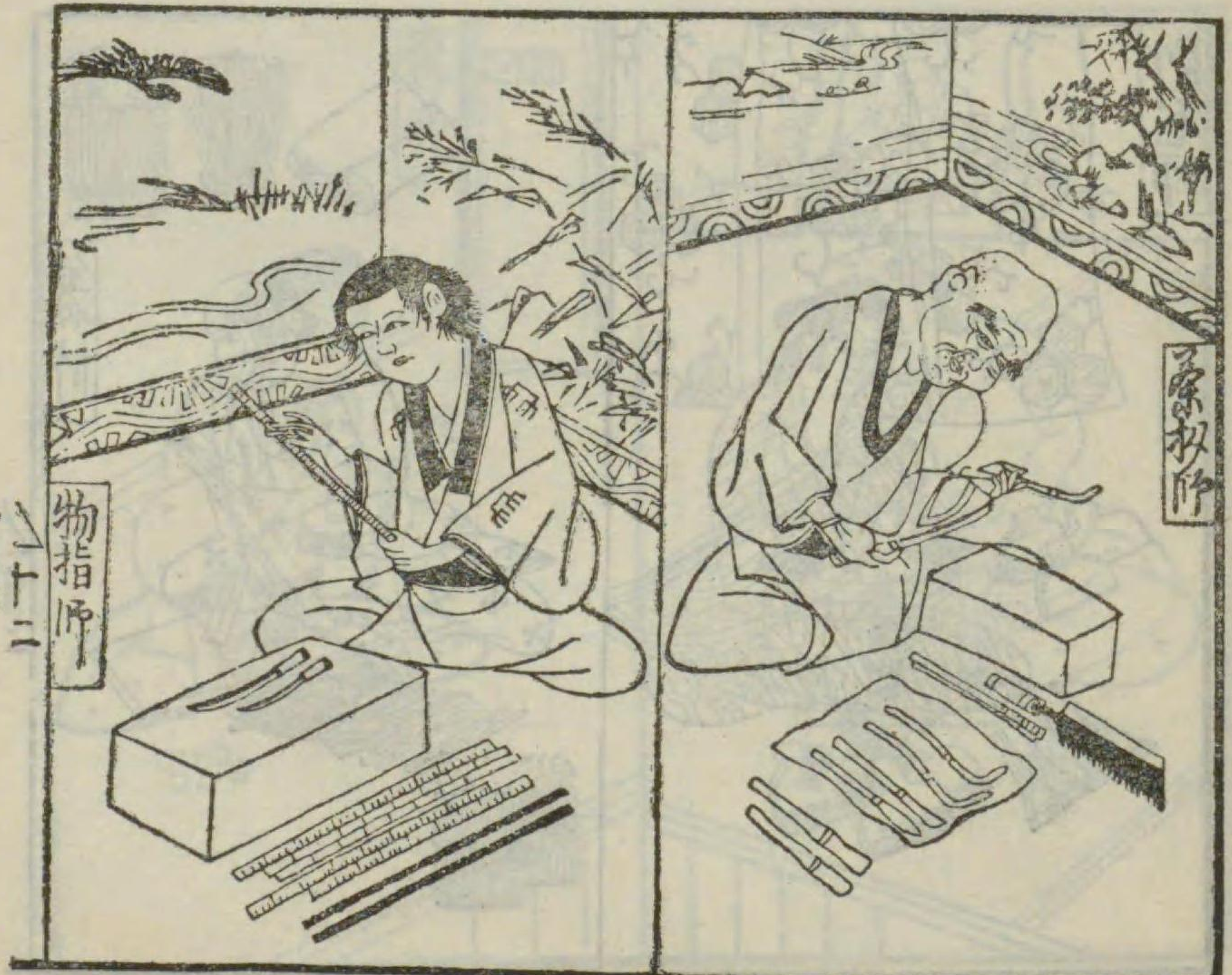
【張子師】犬はり子をはじめ、一切のかたちをあらはし、香合等をつくる。繪師これにゑかくなり。所々に住す。【雛師】紙ひいな、裝束ひいなあり。紙ひいなは紙をもて頭を造る。又ほうこのかしらこれをつくりてひいなやにうる也。雛屋これをもて品々仕立あきな



ふ也。



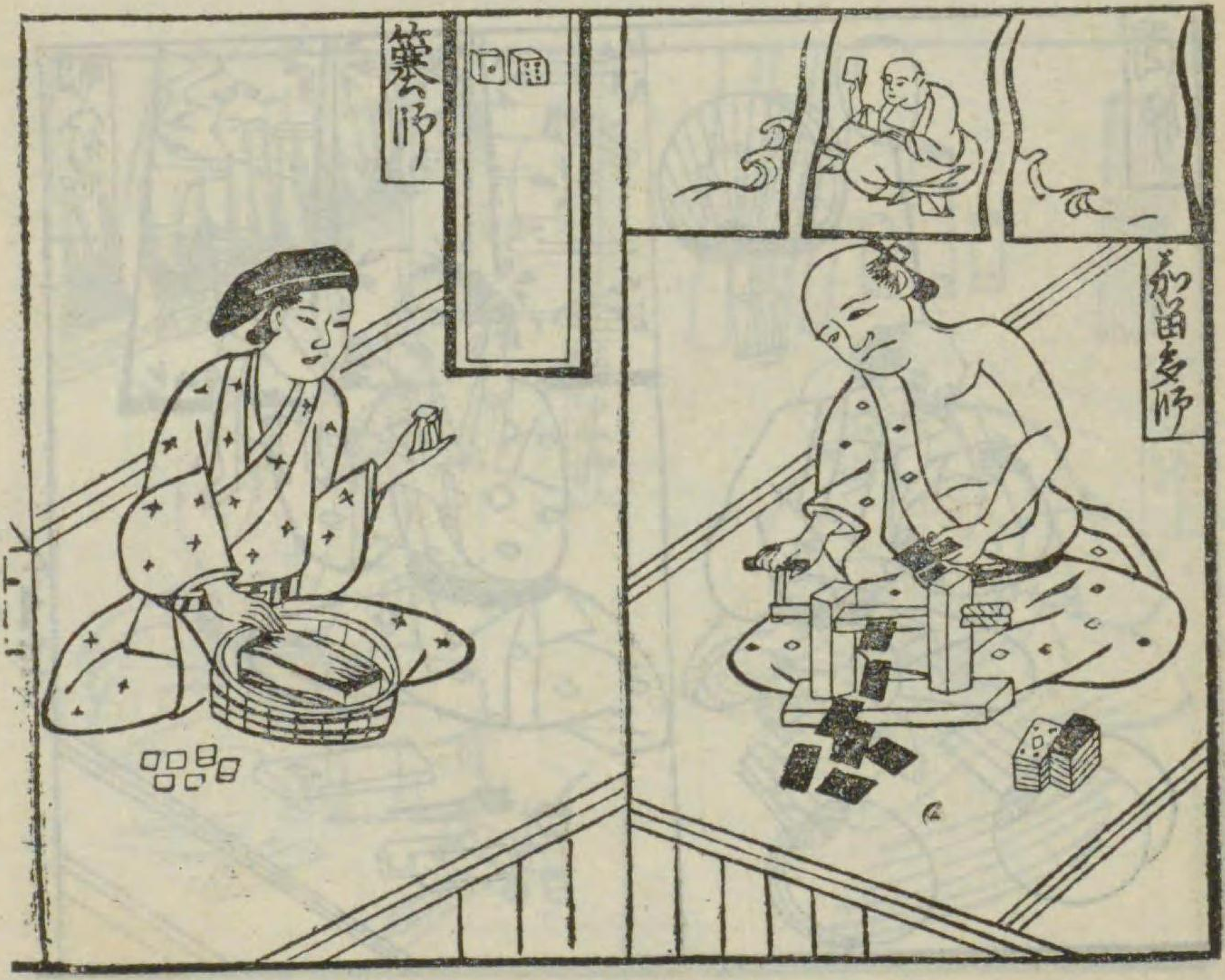
【楊枝師】打楊枝、平楊枝、品々あり。木は豐前國立石、又河内國玉串村名物なり。粟田口の猿やは玉串村の者なるによつて其名高し。加賀國越前よりいづるはこぶある木なり。猿屋楊枝といふ、いわれからの猿は歯あかくかほ白し、日本の猿は歯しろきゆへに楊枝の簡板たり。【茶杓師】所々に住す。是をあきなふ家、茶ひさく、竹輪自在等これあり。堺の甫竹名人也。利久のながれといふ、寺町一齊。【物指師】鯨指は伊勢大坂より出す、竹指京にてこれをつくる所々にあり。周尺とて代々唐



の尺を考て出すなり。【箸師】八條坊門にこれをつくる。上を數寄屋箸といふ。白木、杉、丸箸、八角箸、品々あり。又塗箸所々にあり。【刷毛師】はけの根本は東洞院松原上ル丁竹村治右衞門とかや。今御幸町四條上ル丁左を名人とす。繪ばけ壹寸につゐて三分或は五分、ほく刷毛等品々あり。繪師、經師、表具師、表紙師等これをもちゆ。

一八八

【嘉留多師】かるたは阿蘭陀人の翫也。一種各十二枚あつてこつふ・わうるはういすの四種あつて合四十八枚なり。又哥かるた、詩かるたあり。哥かるた寺町通二條の上ひいなや



一八九

にあり。四十八枚は五條通におほし。大坂久太良町にあり。彩色外に出してもこれをつくる也。

【簺師】双六の簺、これをつくる、所々に住す。

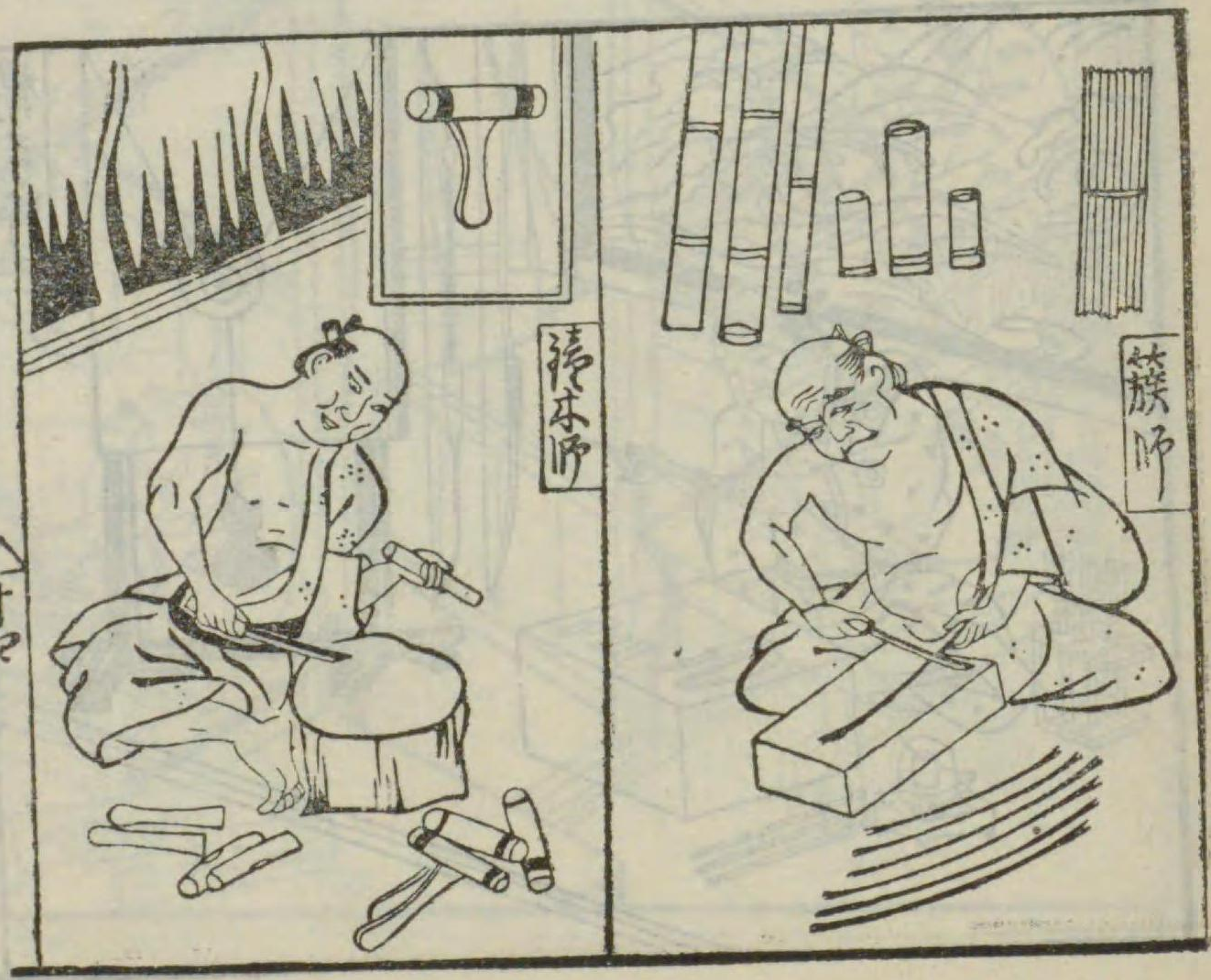
【胴人形師】十四經類經をもつて經絡を考つくる。諸の醫師これをもとむ。所々に住す。大坂あはぢ町八丁目、江戸京橋北へ一丁目大藏。

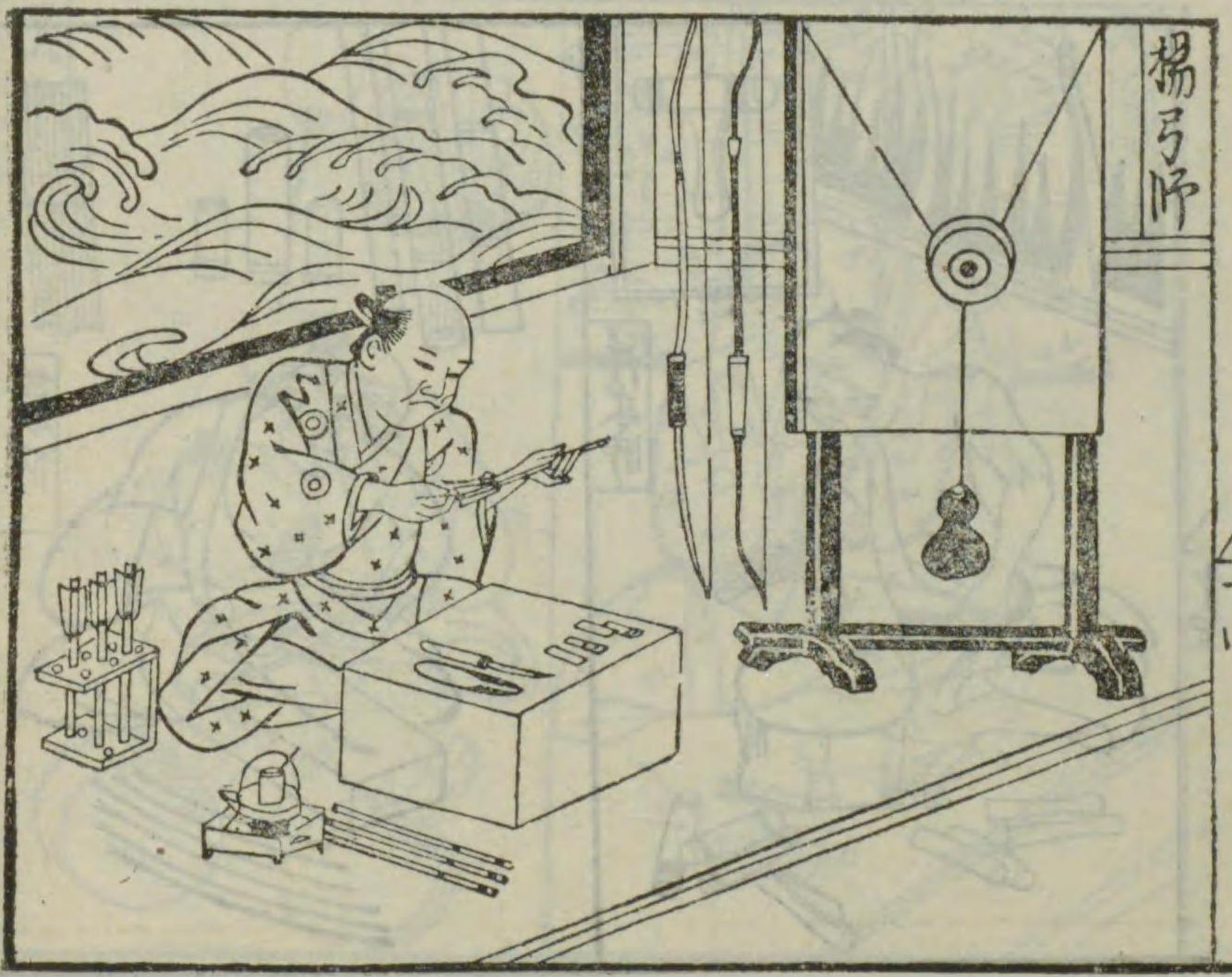
【團師】天竺の白月といふ者月を表してこれをつくると也。日本におゐて軍配團あり、奈

良團は春日の社人の中にこれをつくる。京は油小路中立賣上ル丁にあり。當世大坂長町につくる。野人童子の持領として判物さまぐのゑをかく、代物三錢にして涼風をもとむ。まことに輕行の調法なり。

【簇削】都の詞に、簇を「しんし」といへり。田舍はづかしき片言なり。張物師これをもちゆ。卷物、絹品ぐのわかちあり。大佛近邊所々に住す。此見世に竹のひき粉、田樂串、編竹等これをうるなり。

【鐘木師】鐘を敲宗旨これをもちゆ。東洞院三條上ル町、因果源兵衞其名多し。



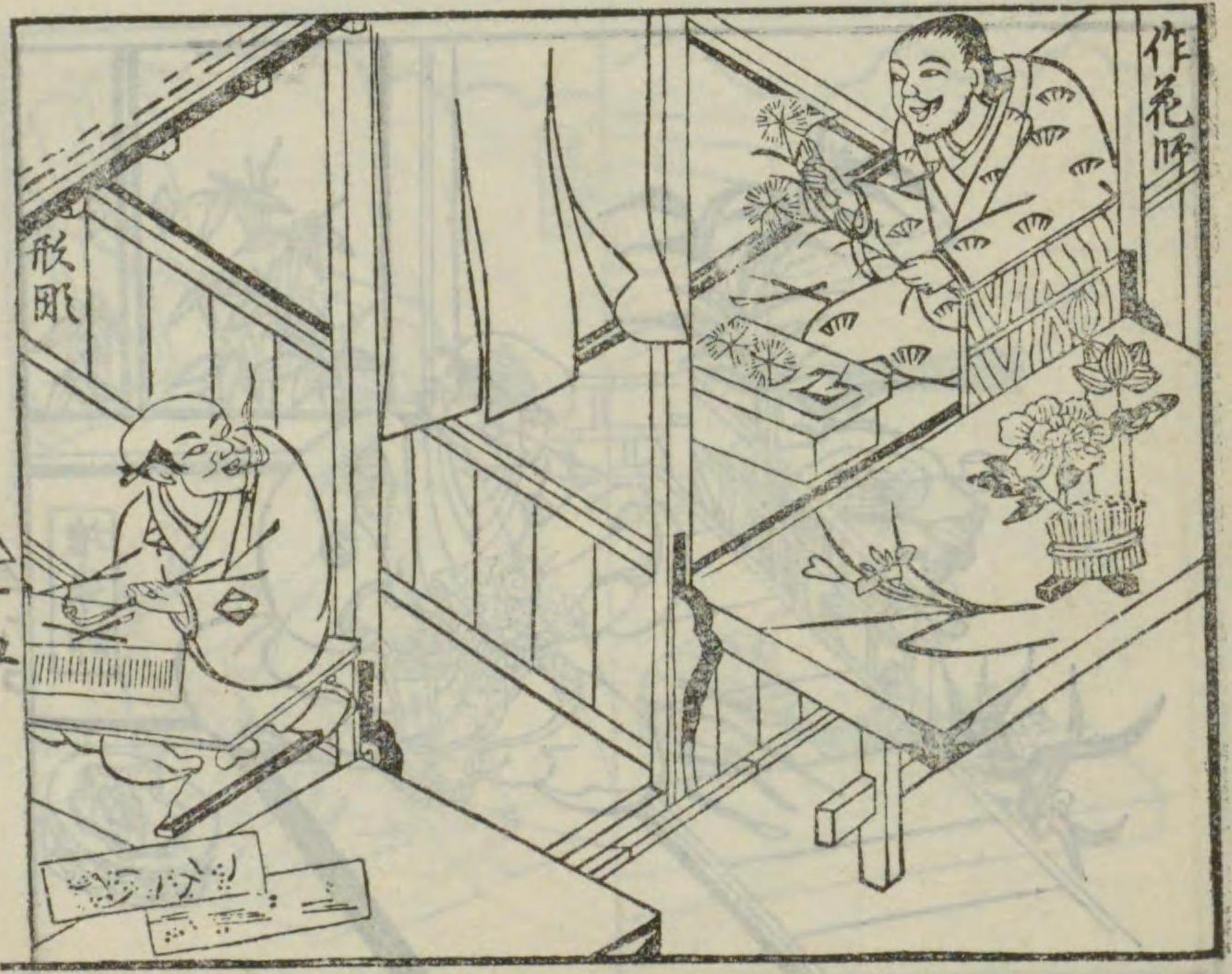


【楊弓師】楊弓は玄宗帝の御代にこれをはじめて、楊貴妃これをあひすとかや。書一卷あり。所々につくる。楊弓矢師外にあり。近世雀小弓又所々につくる。中にも下御靈の前小倉田羽拯其名聞ゆなり。江戸は神田天神の前。

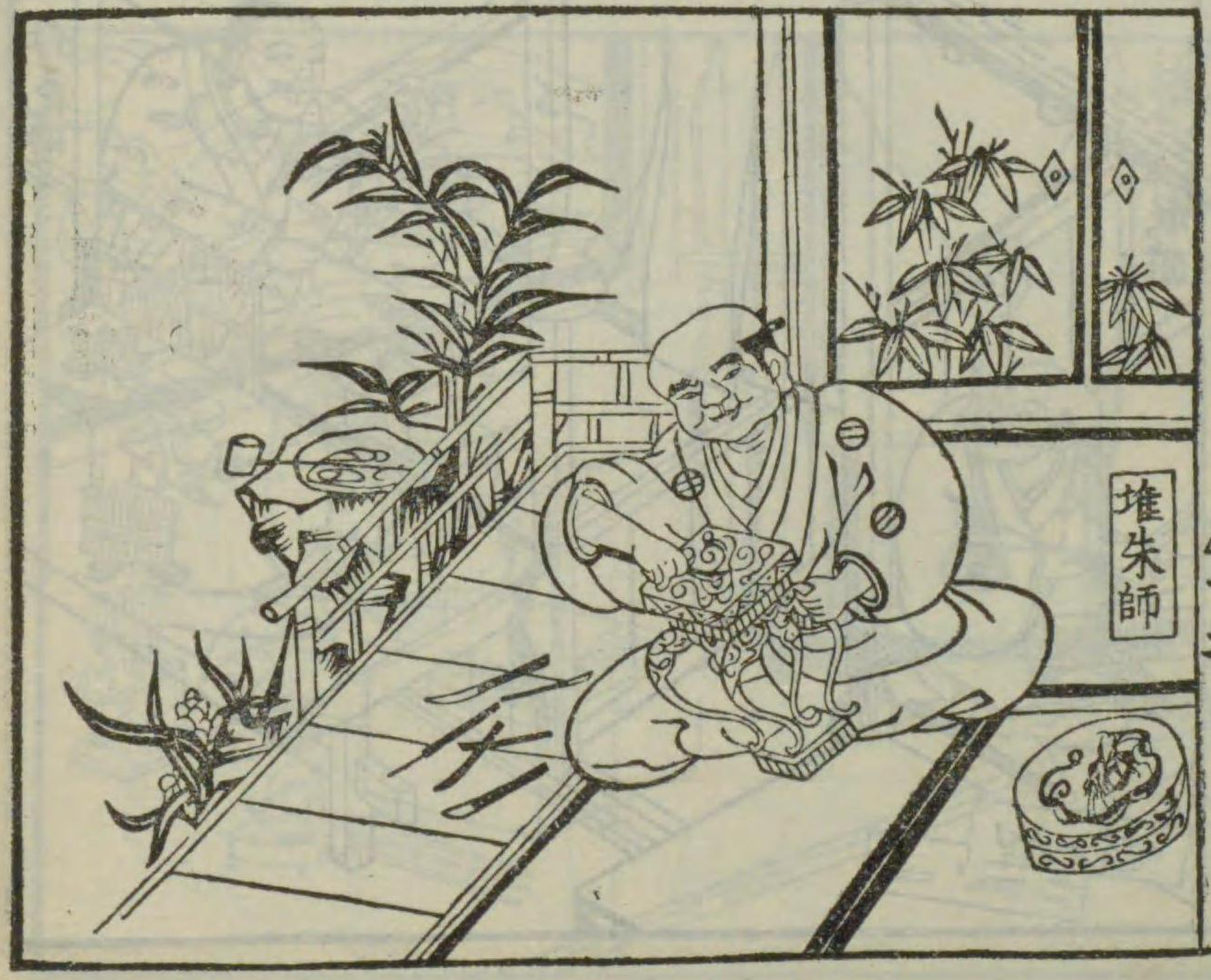
【造花師】諸の糸をもてつくる。むすびはなともいふなり。又は紙をもつてこれをつくる。所々に住す。

【形彫】一切の染物の小紋、紋所これをほる。染物や、紺搔等これをもとむ。所々に住す。伊勢しろこより國〳〵ゑうりにおはるなり。

【堆朱彫】唐土にては珍重、張成其外數多の



名人あり。日本にて彫はじめしは下京邊に門入とて其名四方に聞えたる名人ありし、その子孫佛光寺通東洞院西へ入ところに推朱や二郎左衛門とて名人今もあり。彫の手きはむかしの門入にはまさりなんとみな人申あへり。江戸南大工町にあり。

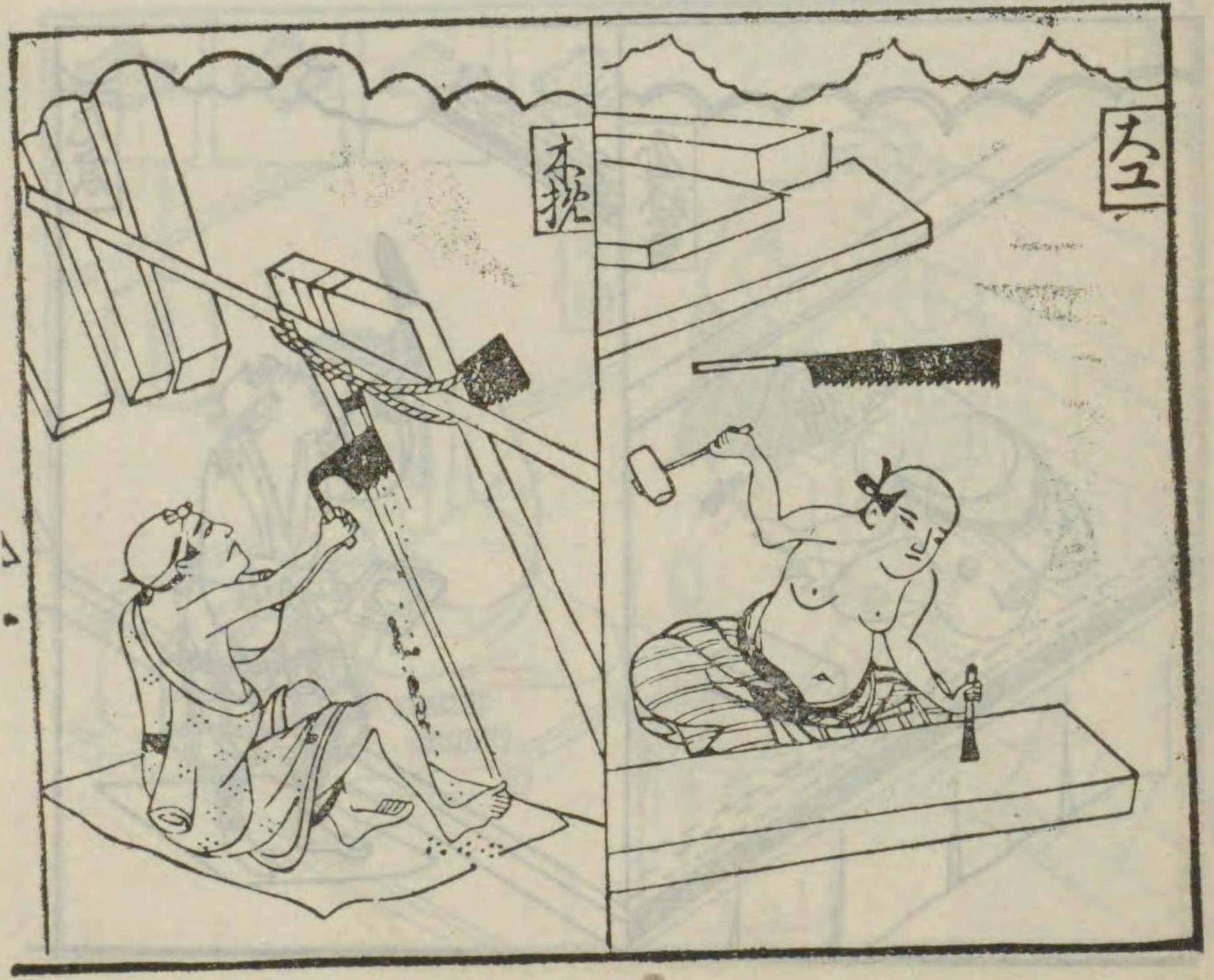


人倫訓蒙圖彙　六

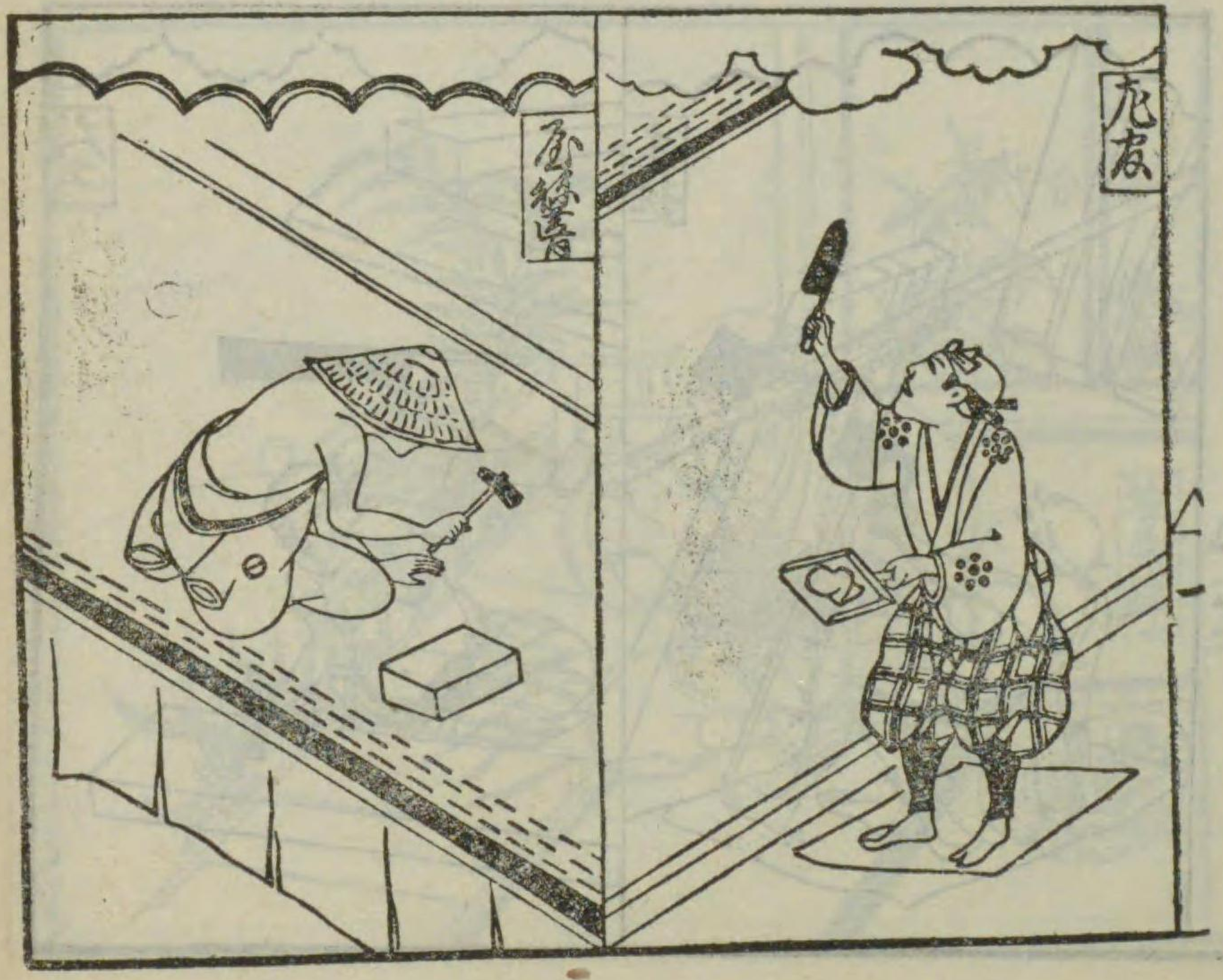
所作入 由來入

職之部　次第不同

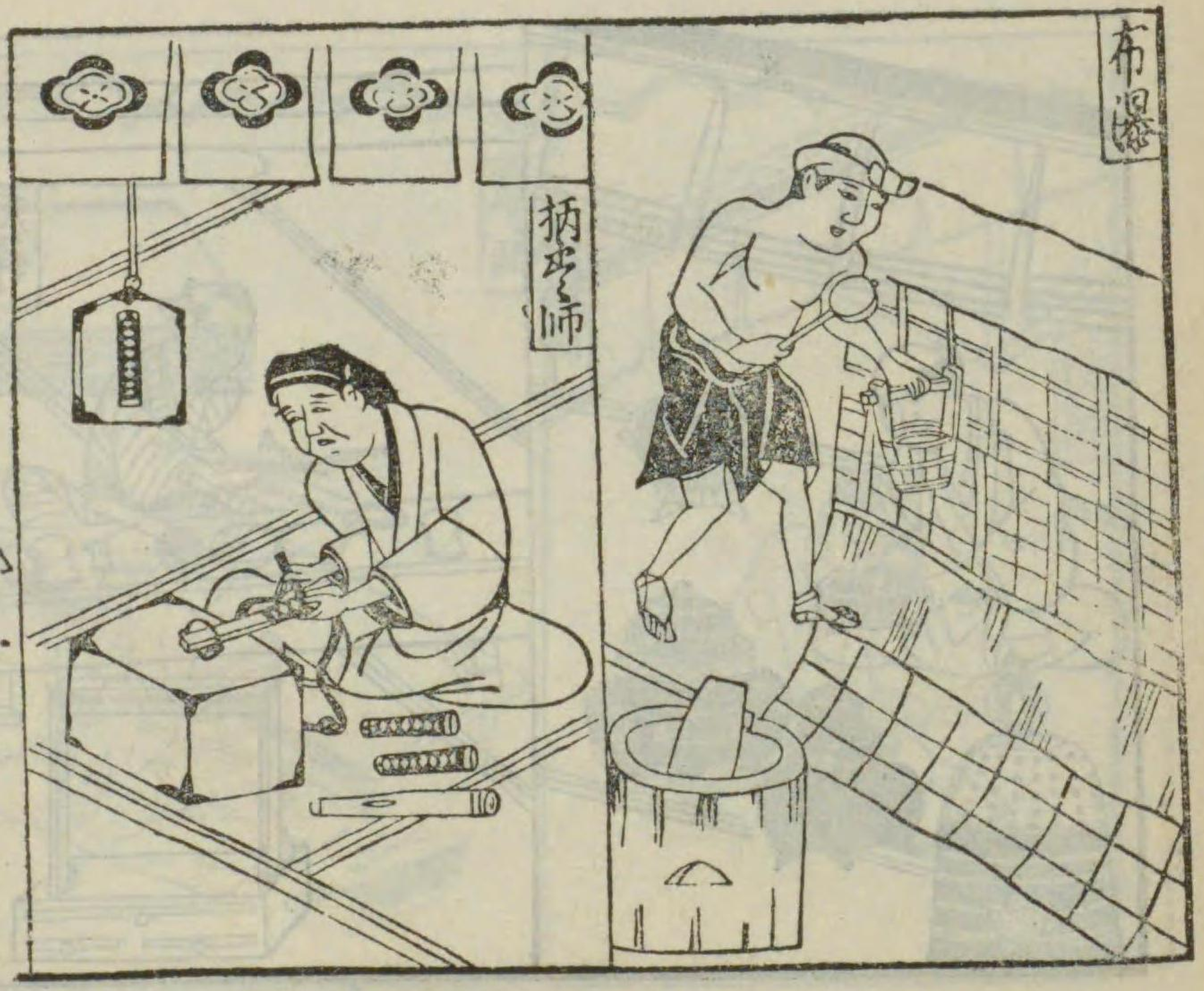
【大工】天竺より始れり。日本にては人皇のはじめ筑紫日向の橘の京に宮造し給ふ時はしまれり。其後聖徳太子伽藍御建立の時、飛彈の内匠是大工中興の祖なり。



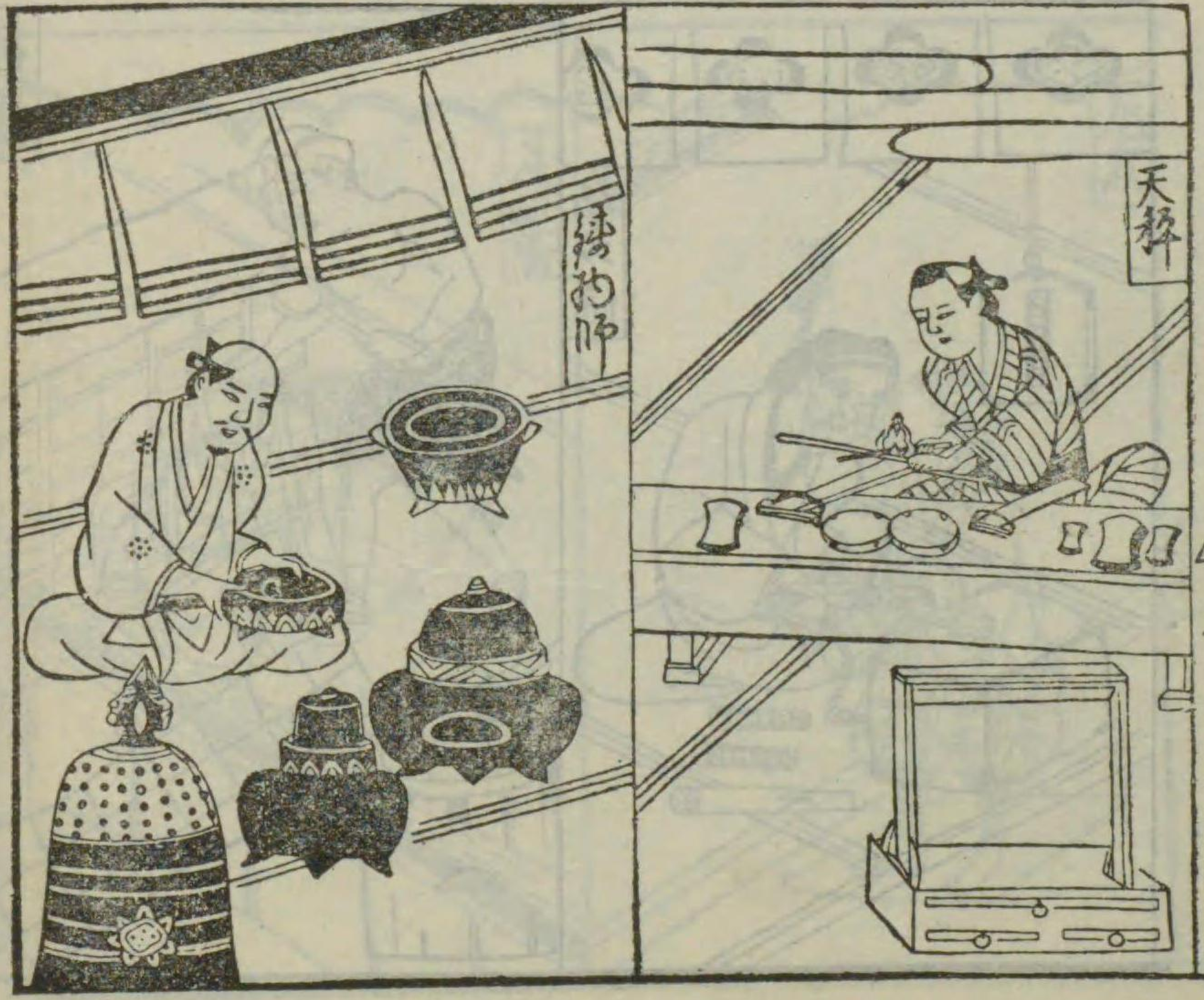
【木挽】聖徳太子難波の浦に四天王寺を御建立の時大木を剖べき思慮をめくらし給ふに、鳫一羽青木葉をくはへて来りぬ。太子御覧あつて彼葉の姿に鐵をもつてつくらせたまふによくきれしよりはじまれり。是鋸のはじめと



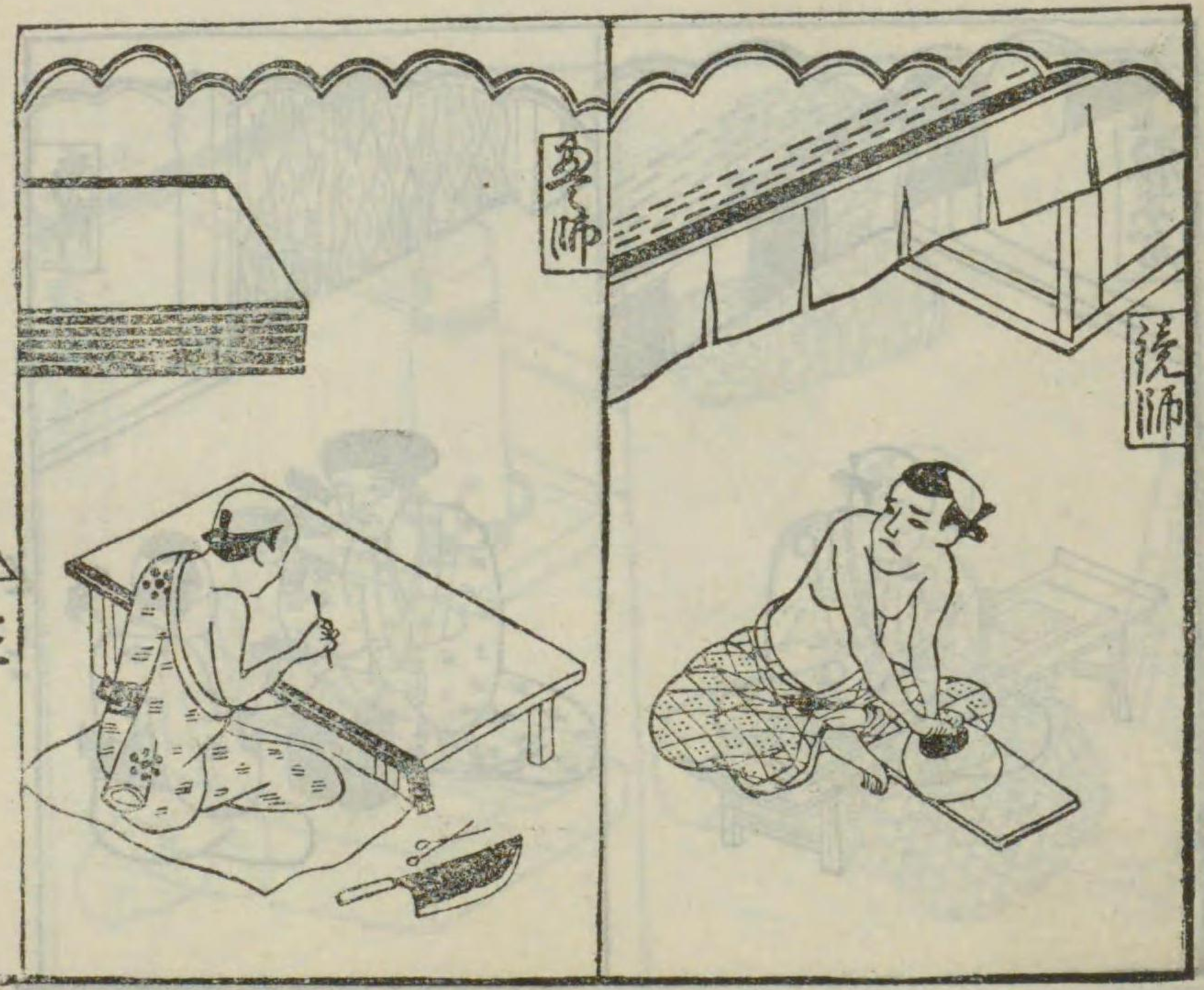
かや。鋸師は所々に住す。中屋といふは伏見に住す。大坂に上手あり。【左官】壁ぬりなり。燕のすをつくるを見てぬりはじめしとなり。かんばんにす火つを出す。左官といふは出所考ず。【屋禰葺】こゑ高くわめく者也。檜皮、木けら、執葺有。民家には草葺、數寄屋、萱葺師伏見に住す。【布瀑】さらしのはじめは宇治槇嶋なり。京にては五條川原にあり。今は奈良をもつて第一とす。瀑の地壹疋に四尺の餘慶あり。これをとりてもさらし、又代壹疋に壹匁八分、さらしちんとかや。【拵卷師】小脇指の拵に菱卷はもとよりの事、片手胡籙拵



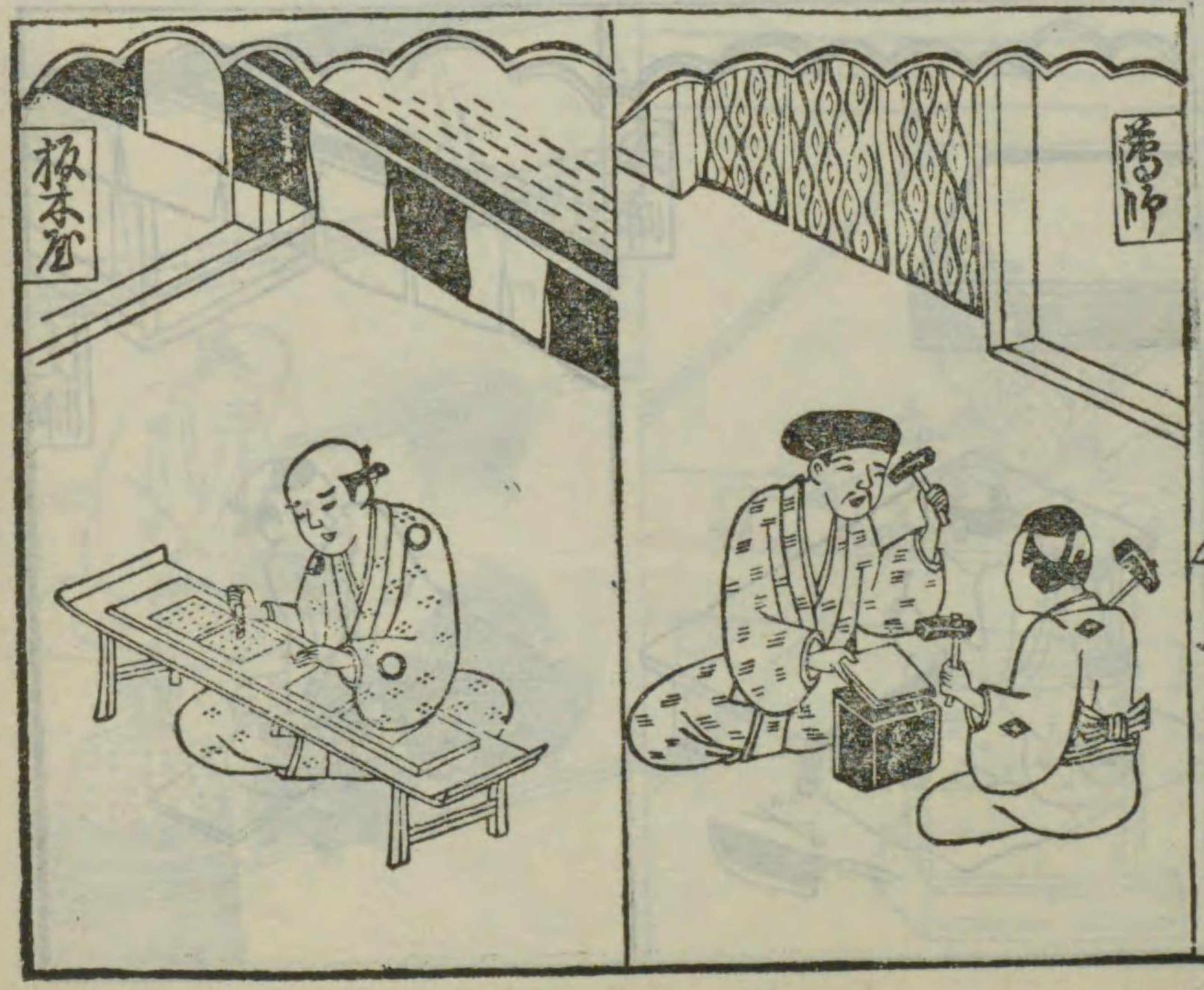
等、其外巻やう品々あり。【天秤】堺よりいづるを上とす。代十一匁又は十二匁なり。針口京兩替町堺與三兵衞、御池通與十郎、松原室町與三左衞門、大坂今橋筋にあり。代九匁又は十匁、分銅法馬と號す。小川通舟橋後藤四郎兵衞、江戸白銀町三町目にあり。大坂本町一丁め新左衞門、一組代廿五匁也。五百目分銅壹つにて代十五匁なり。



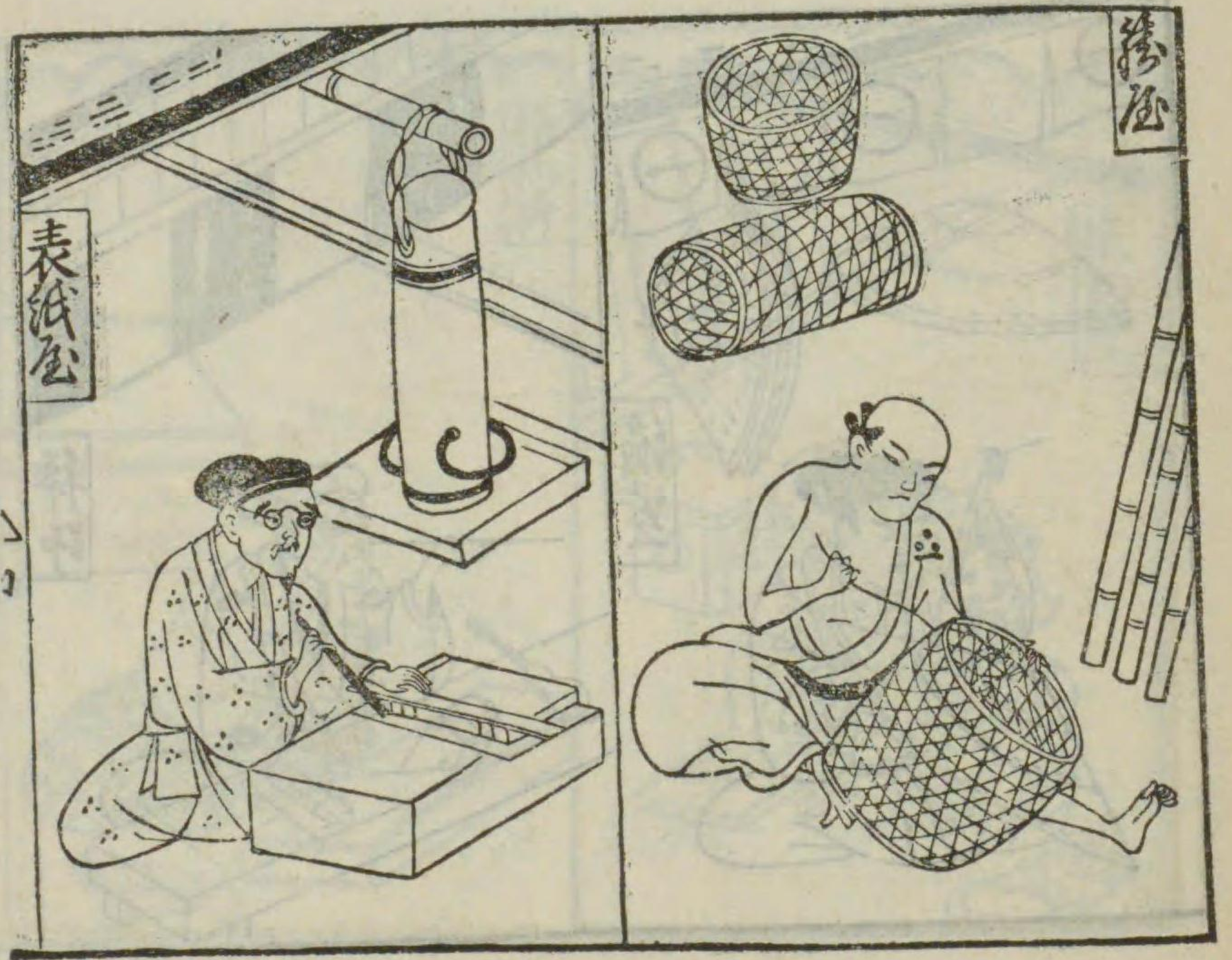
【鑄物師】鑛を以て一切の物を鑄る。又は鐘、磬等是を鑄る也。三條釜座に多住す。【鏡師】傳聞、天照太神の御影を末代にのこさしめ給



ふとて、天香久山の金をもつてつくらしめ給ふ。八咫鏡と申これ也とかや。よつて佛神の御正躰、鏡を以て是を崇む。鏡師一條松下町青盛重、畠山辻子上網新町御池上ル丁中嶋和泉、室町二條上ル丁人見佐渡、五條橋之西松村因幡、其外所々にあり。鏡磨にはすゝかねのしやりといふに水銀を合て砥の粉をまじへ梅酢にてとぐなり。【疊師】疊といふは今の薄緣といふもの也。疊置て是を敬ゆへ也。今時禁裏御疊屋烏丸通八幡町の下大針加賀、同通四條上ル丁伊阿彌筑後、油小路六角下ル丁同長門、大坂道修町道頓堀、京堀川中立賣の下、



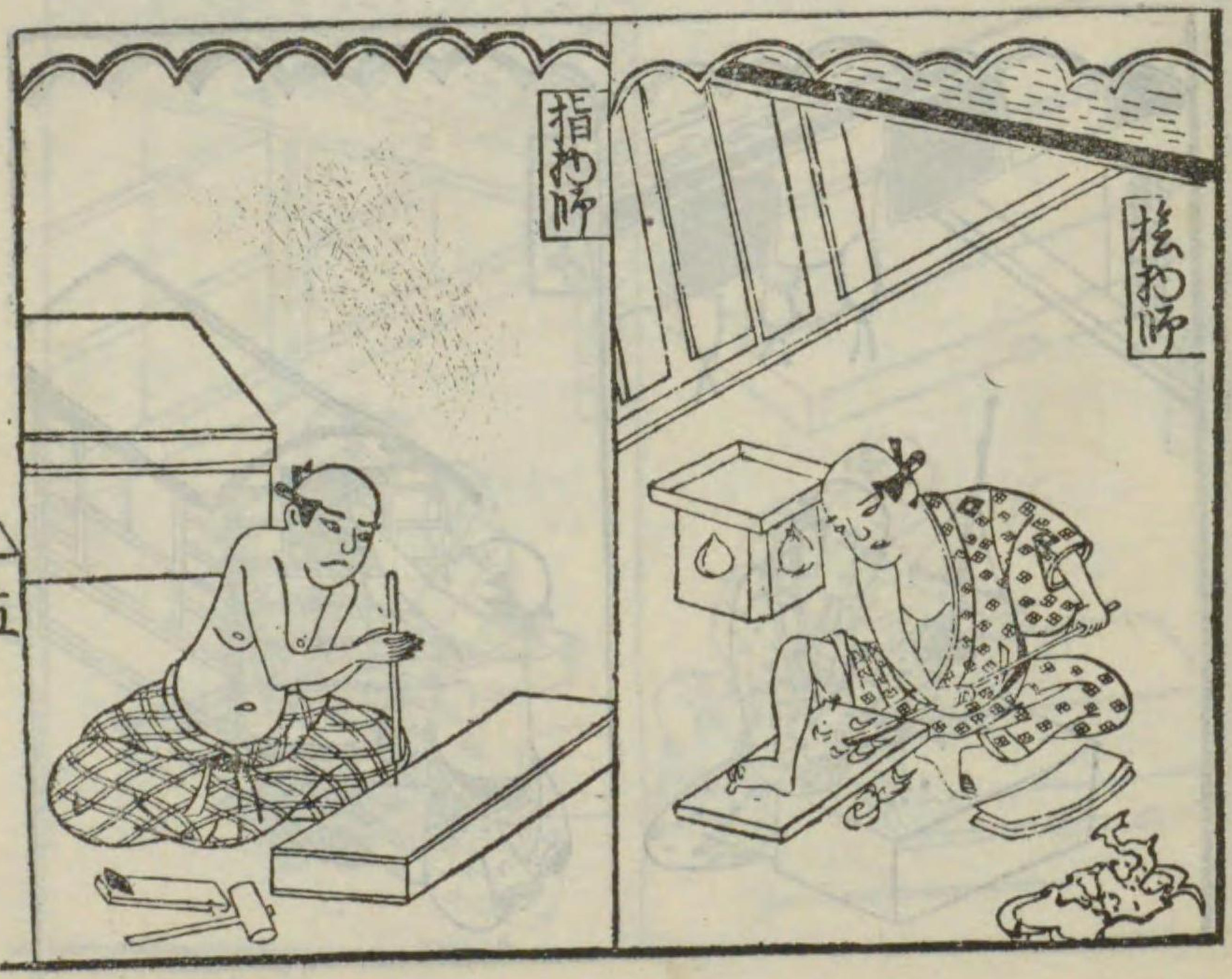
其外所々にあり。

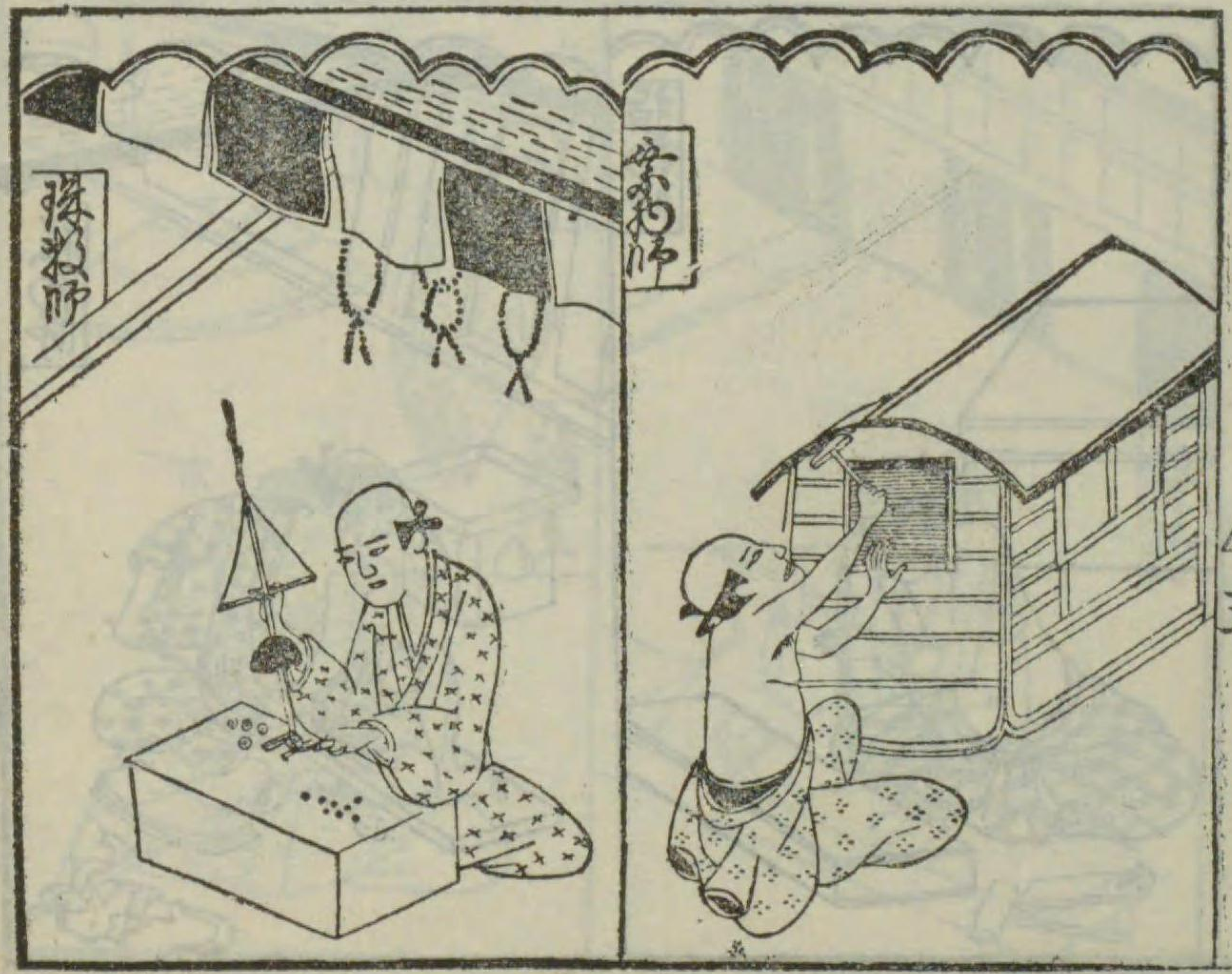


【薄師】壹歩の金を四寸薄五百枚に打也。【板木彫】弘法太師石摺をほり、惠心見たれはんほり給ふ。今の櫻木の板は盖福といふものほりはじめしとかや。當地板木屋川水通九兵衛、姉小路あふみや六左衛門・柳馬場たこやくし勘兵衛等なり。【篭師】唐土の靈照女父の組たる篭を市にうりけるよしいひつたへたり。日本にては竹取の翁是を造るとかや。當時有馬駿河の細工名物也。

【表紙屋】書本、板本、白紙品〱を本屋よりうけとりかけるなり。むかしは一枚紙にて有。

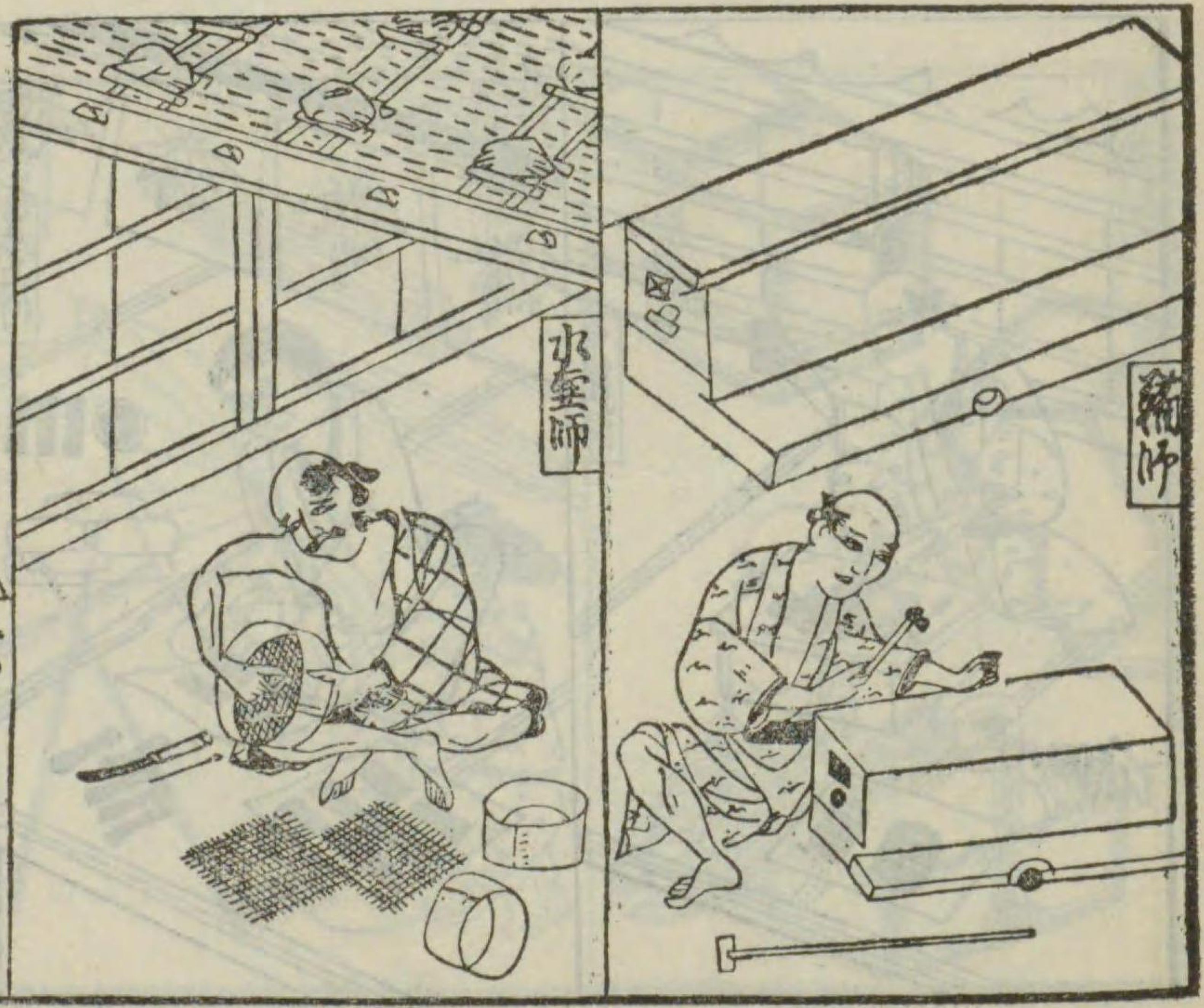
中比うらうちいたし表紙といふなり。【秤師】聖徳太子さだめ給へり。末世にいたつて僞の秤是を作るゆへに秤師を定給へり。京秤師善四郎二條通玉や町に住す。江戸朱隨彦太郎代三匁五分、唐人秤を厘々等具といふ。日本にてれいてんぐといふは是を誤にや。【編笠】藺を以て是をつくるなり。當世忍笠、熊谷笠あり。【檜物師】一切の木具曲物造物嶋臺等、杉、檜、槇等を以て造類、所々に住す。【指物師】桐、檜、杉等をもつて万の箱をつくる也。長持、櫃等にけ杉、槇を以て造る。此指物師新町通五條松原より北に住す。



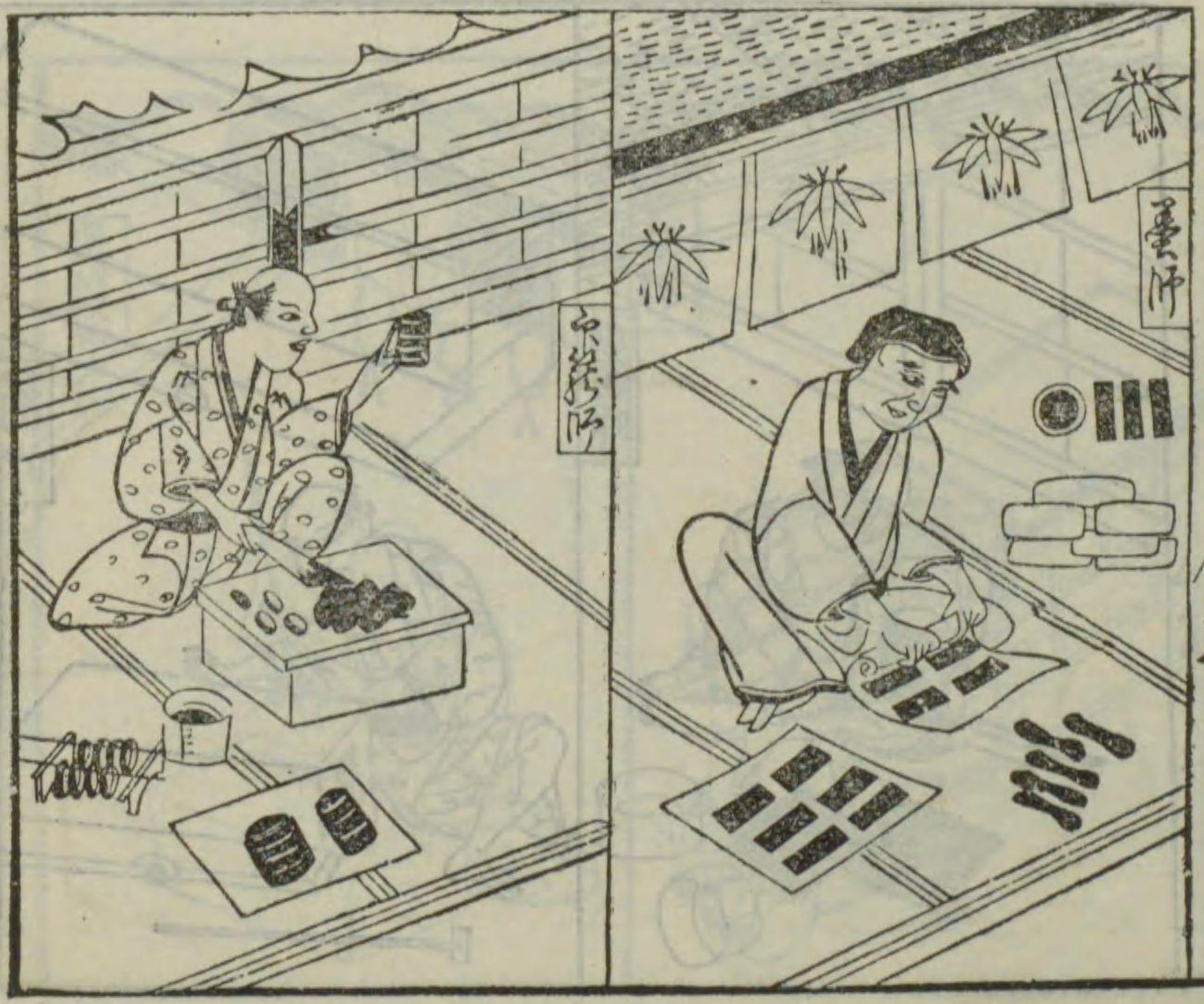


【乘物師】男女の乘物幷ニ公家もちゆる處の板輿、網代輿等是を作る。新町通下立賣上ル丁、東洞院六角の下、大坂は堺筋に是を造る。又駕籠擔用る駕籠は、大佛伏見海道に是を造る。

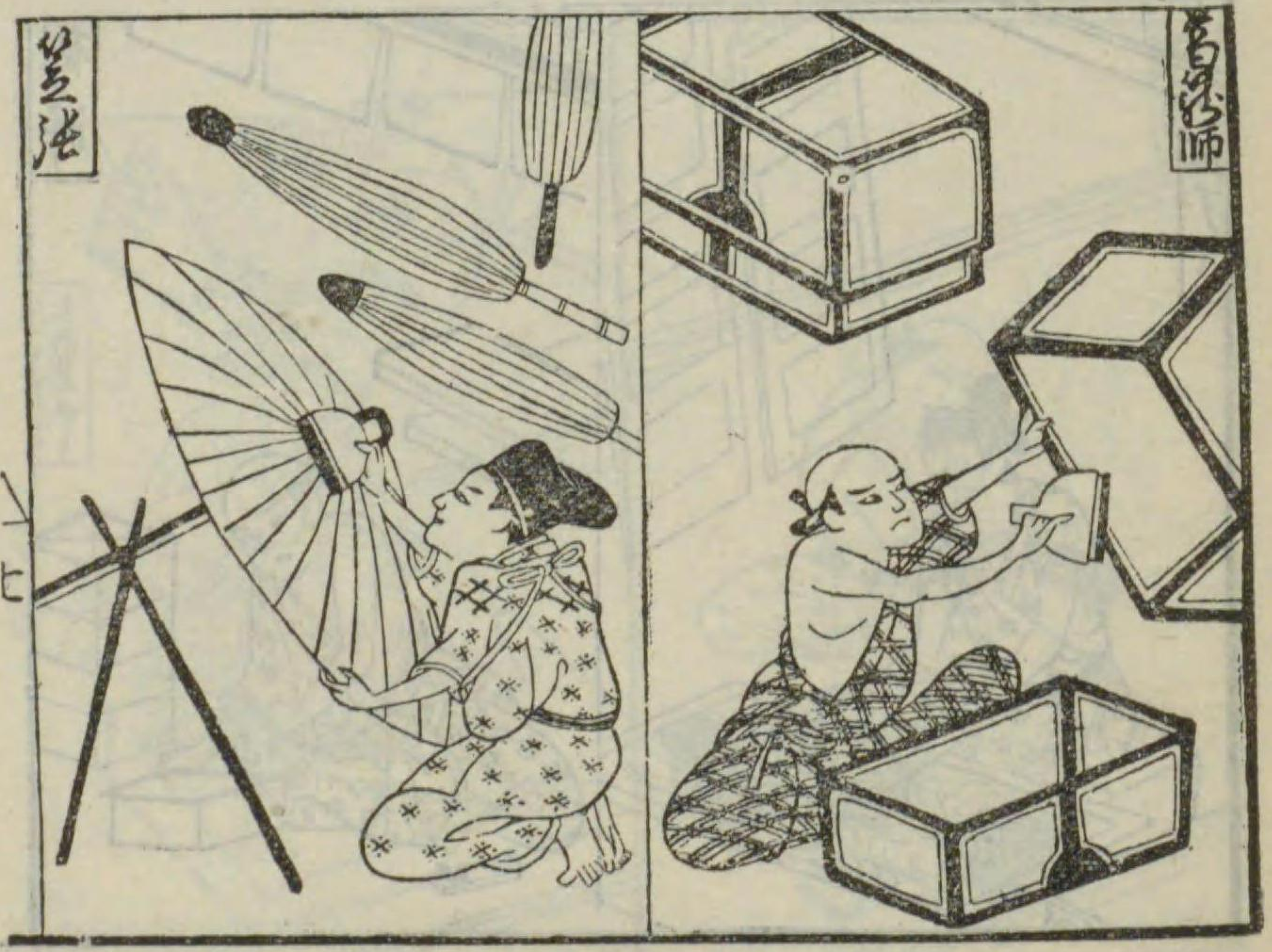
【珠數師】佛在世に出來す。珠數功德經あり。數の百八なるは煩惱の數を表するとかや。



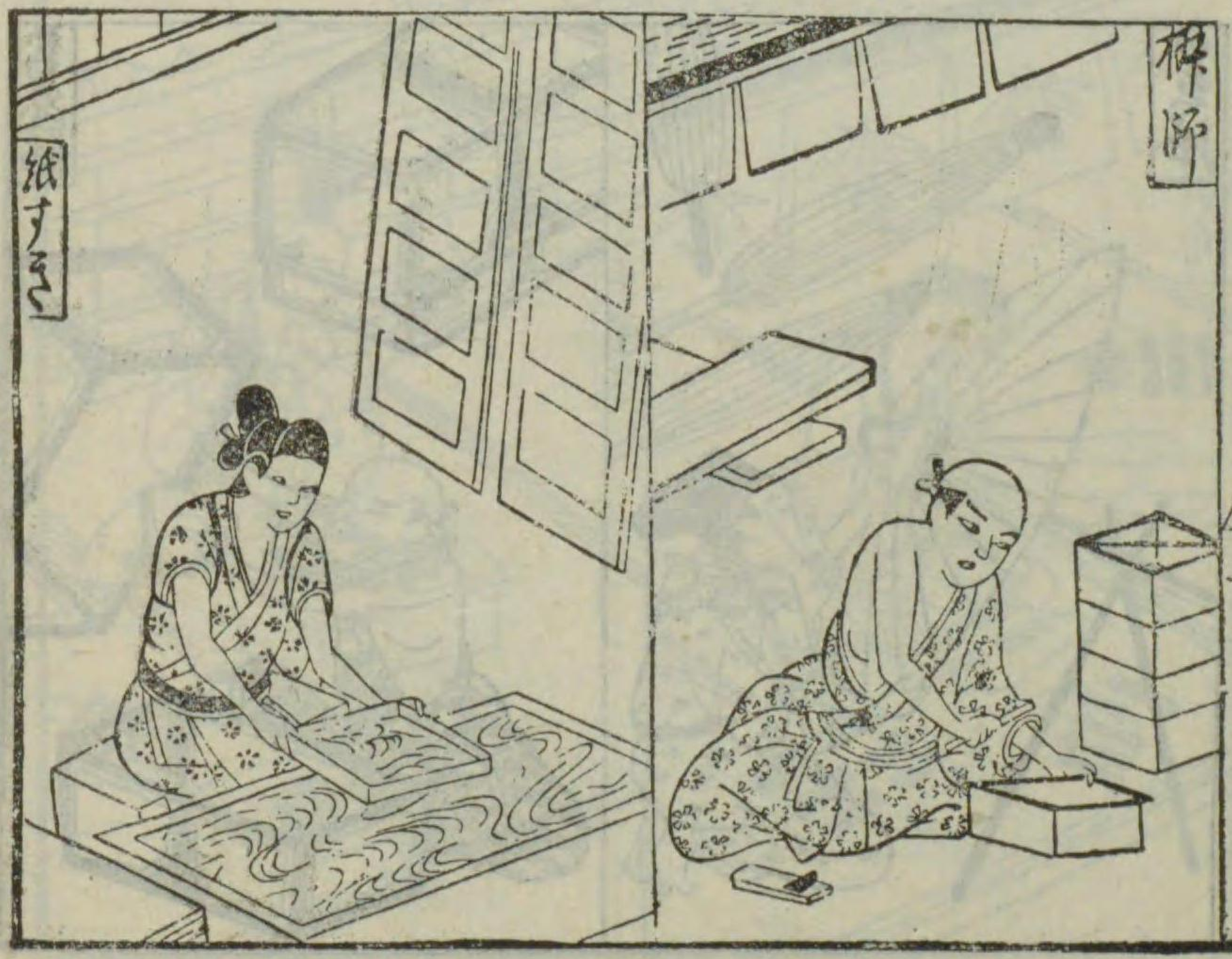
【鞴師】ふいごは京童の説に、稲荷の御神天上より持來し給ふとかや。鍛冶を初一切の鉄物師是を用ゆ。大坂天満ふいご町より諸國え出す也。【水嚢師】水嚢は佛在世よりあり。比



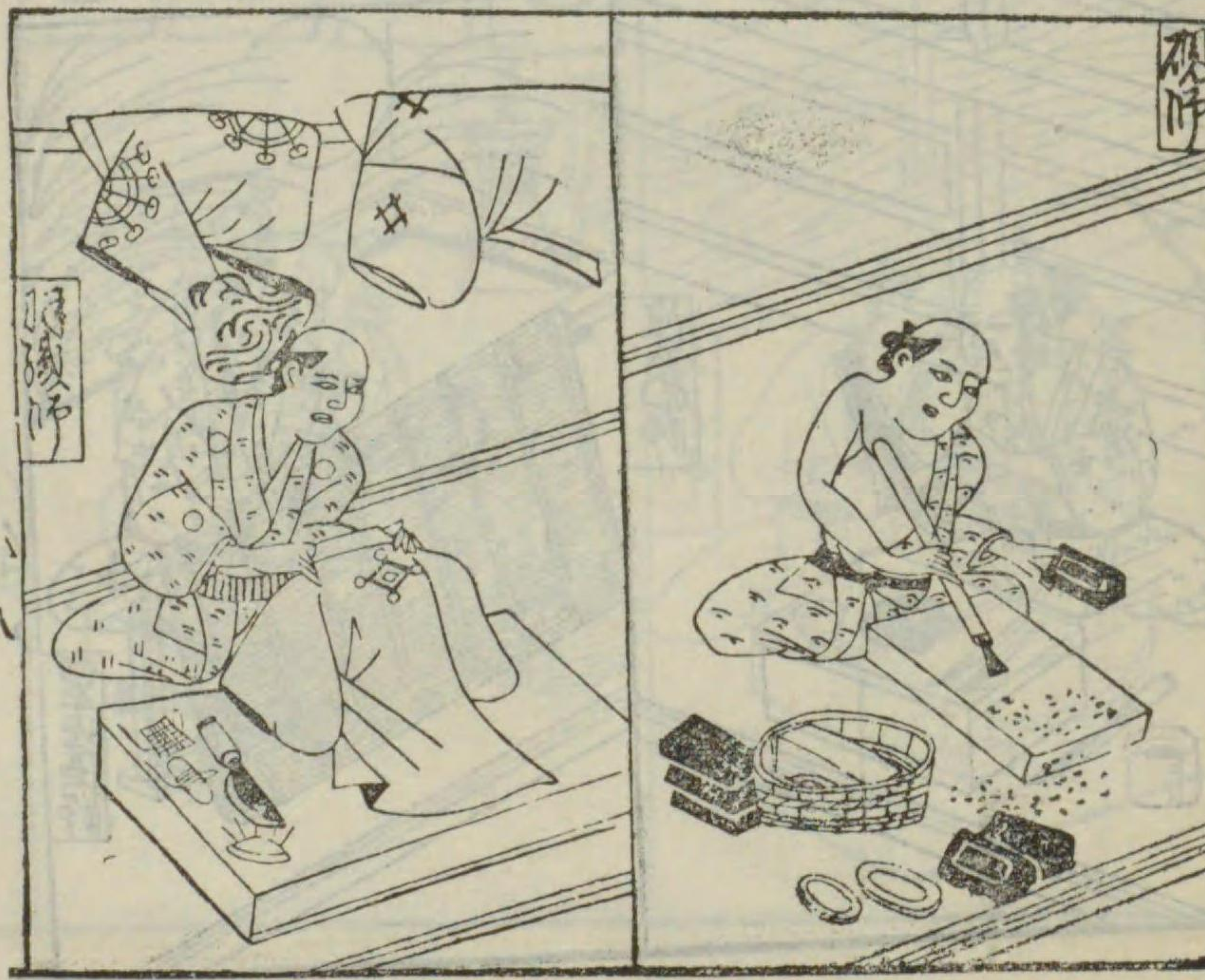
丘の六物の中に水嚢あり。生水にはむし有ゆへこさずしては飲べからずと、佛の御誡なり。但是は布袋也。今馬　尾を以て作る事に秀吉公高麗國より水嚢作を具して來給へり。其子孫今に大坂に住す。【墨師】奈良興福寺の二躰坊といふ者、佛前の燈明の油烟をもつてつくりしより、それをならひて奈良油煙と號す。其外京都所々に多し。主領して國名をつくなり。【印籠師】印籠並薬入等是を造る。堅地、弱地の目利入事なり。所々に住す。【葛籠師】下地は近江若狭隣广より造出す。室町通一條の上にて是を造る。【笠張】唐土よりつたはれ



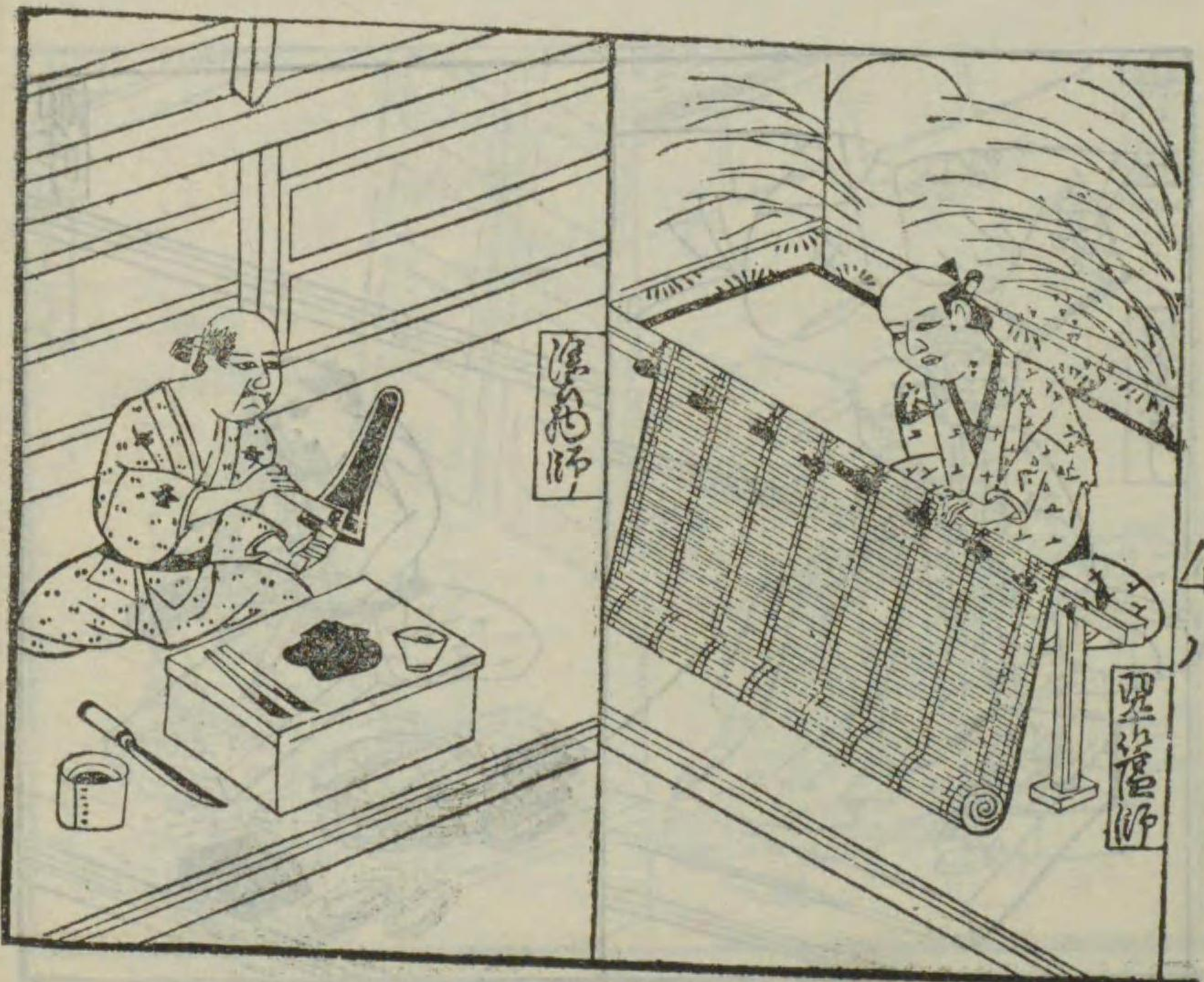
りと、或說に日本にては田村丸のうちに高重と云者是をつくるとあれ共たしかならず。今傘紙は森下、國栖、海田等にてはる也。又日隱のために繪をかきたる笠、小兒のもてあそびとなす、所々に是をつくる。【塗笠】檜の薄板をもつて造る。張塗也。網代笠竹を以て組造る。菅笠菅を以て縫造る。近江伊勢を名物とす。葛籠笠つゝら藤をもつて造る、水口名物也。



【桝師】天竺にあり。日本にては推古天皇の御代にはしむとかや。京桝師油小路竹や町下ル丁作左衞門、金物清水是をつくる。桝の口

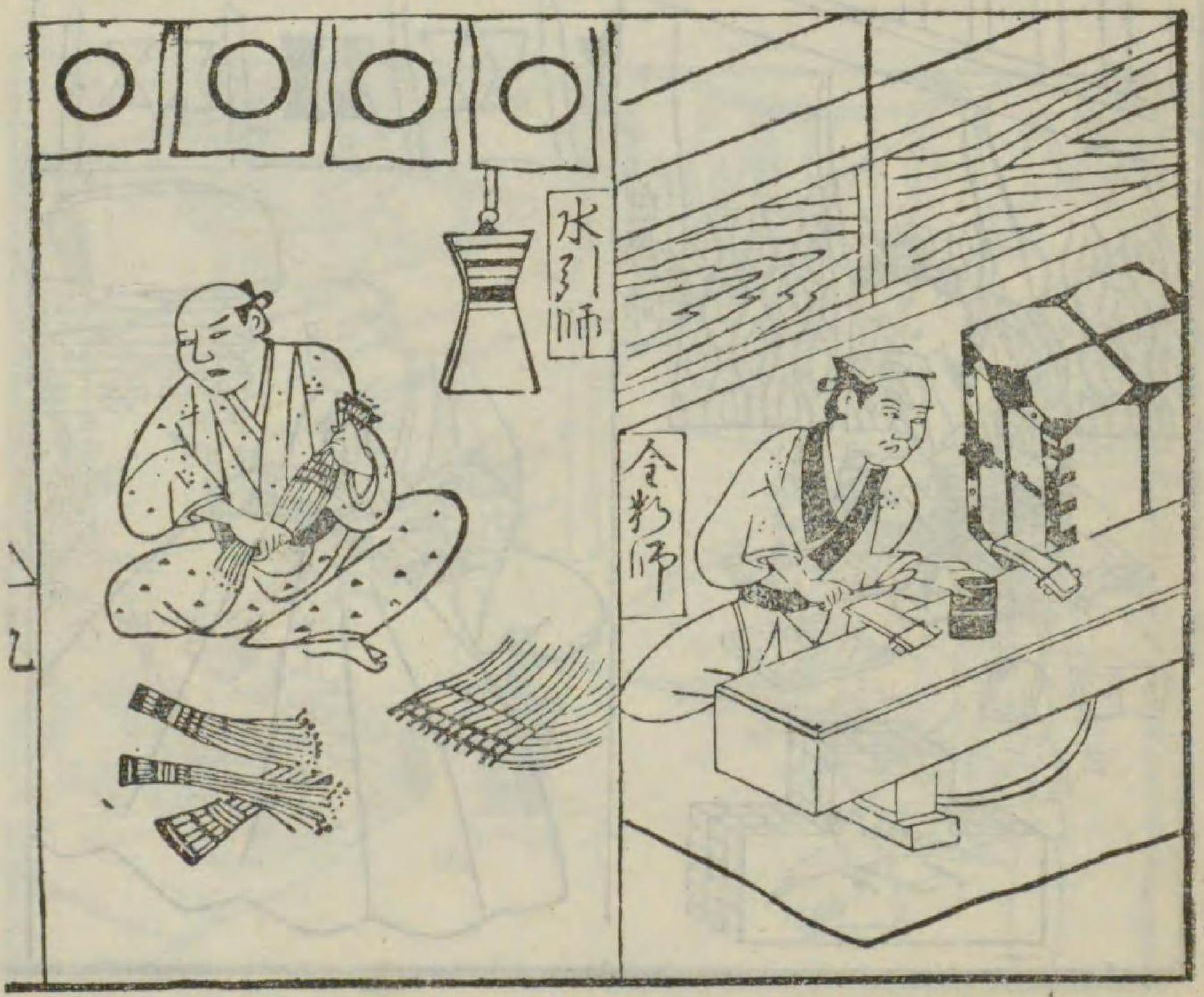


廣さ四寸九分、深さ貳寸七分、代四匁三分也。江戸樽や藤左衞門。【紙子師】紙衣幷澁紙これを造る。五條松原通に住す。【硯師】硯は文珠の眼を表す。海は智惠を表すとかや。諸國より名石あつて京に上る。近江土佐長門美作等にあり。京硯師所々に住す。嵯峨石、高雄石あり。石は漢の武帝の時石にてこしらへしとかや。それより前は鉄にていものにてありと也。【羽織師】はをりの仕立、袴、足袋是仕立るを羽織やと號す。傳聞、袴は天竺太羅國に波期匿王と申御門あり、何所ともなく美女來れり、王是をとゝめて后となす、程なく一人の

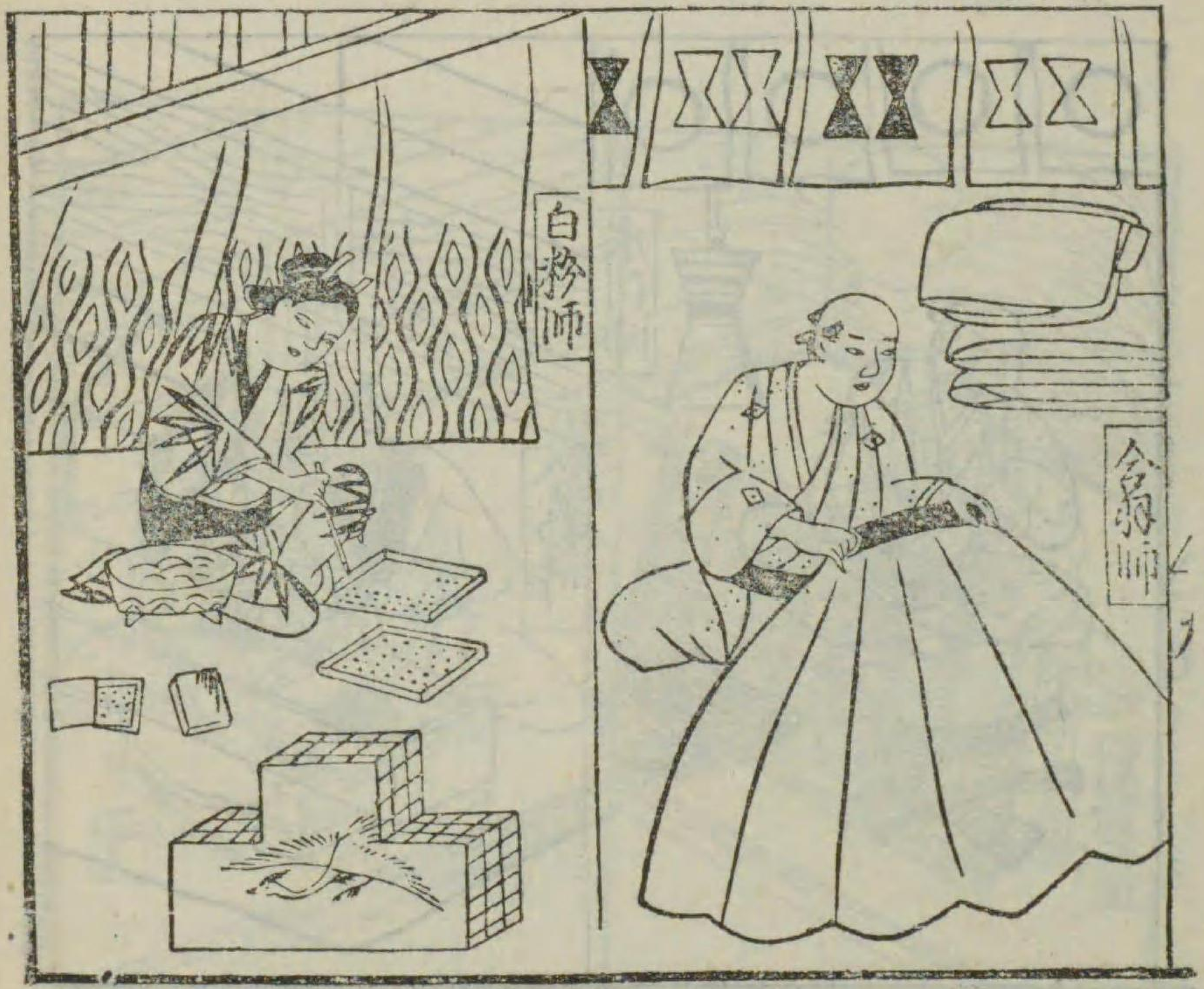


王子を出生す、后の云我は是黒鹿山の鹿王なりとて失ぬ。王子の足斑にて鹿毛のごとし、是をかくさんために今の袴を作ると也。日本の肩衣はむかしは上下の男子大紋の裝束をきたりしを、中世にいたりて其袖を略して肩衣と名付し也。

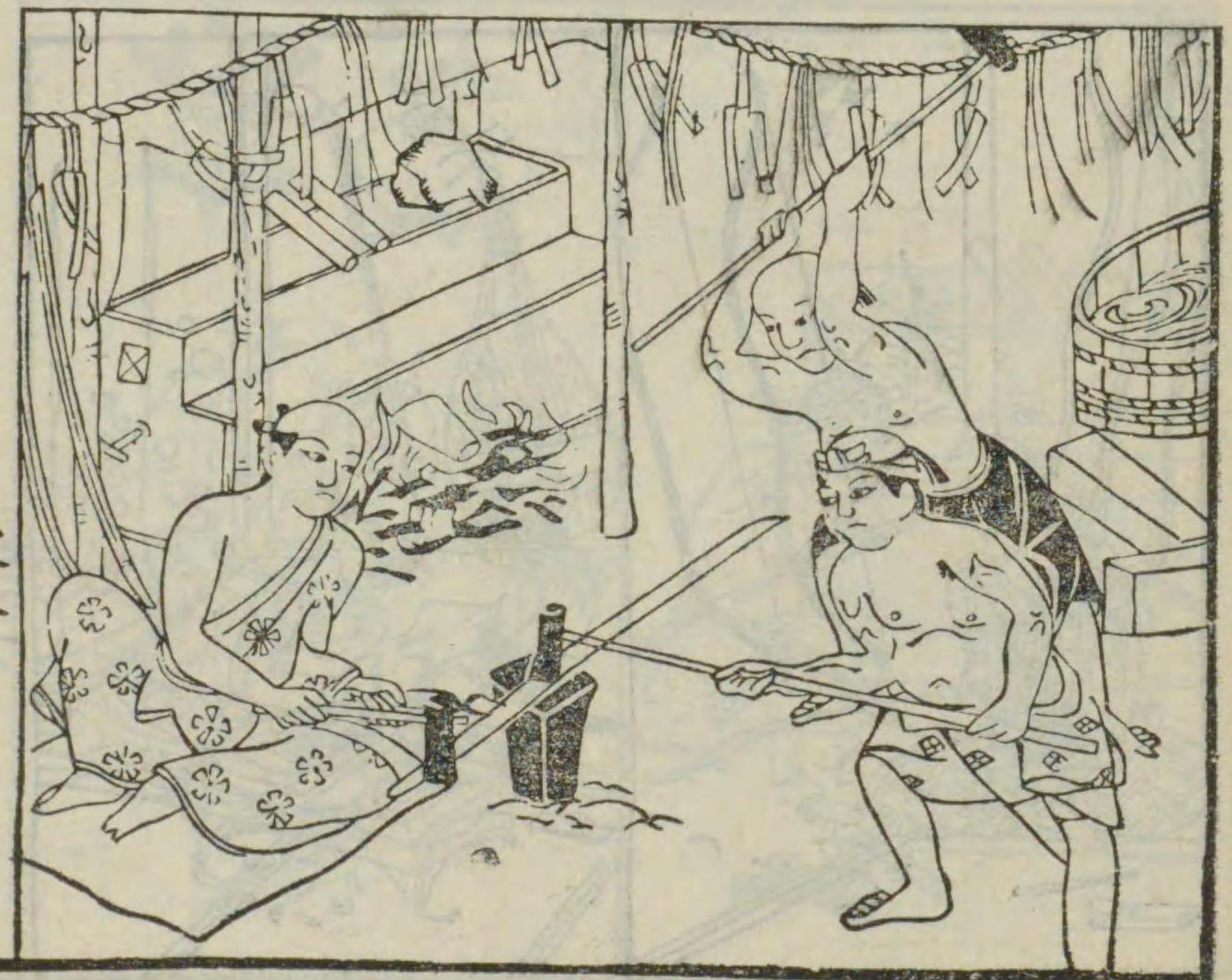
【翠簾師】唐土の楊竹氏といふ者車の物見にかけんために作れりと、日本にては崇神天皇の御代にあり。禁裏みす師富小路竹屋町下ル丁和泉、烏丸竹屋町德助、同三右衞門、民間に用る雜品の簾は伏見にこれを造る。又伊與簾京に上す也。江戸本吉原德方、京橋一丁目市



左衞門。【塗物師】一切塗色品々これをつくす。但佛塗師、鞘塗師別にあり。【金粉師】金銀をもつて粉をなす。蒔繪師これを用ゆ。【珠泥師】しんちうをもつてこれをなす。童の持遊物、其外あふぎ地、一切麁相の物にこれをつかふ。【水引師】諸方え捻に出してこれを染造る、並平水引あり。【合羽師】合羽並雨覆、油紙これ桐油と號す。柳馬場通六角より下に住す、所々にあり。【白粉師】京伊勢堺等にあり、主領して國名を付なり。おしろいは鉛をむして水飛するなり。やうきひ病にていろ青黒になりしに、仙人來りてをしへしとかや。【臘燭



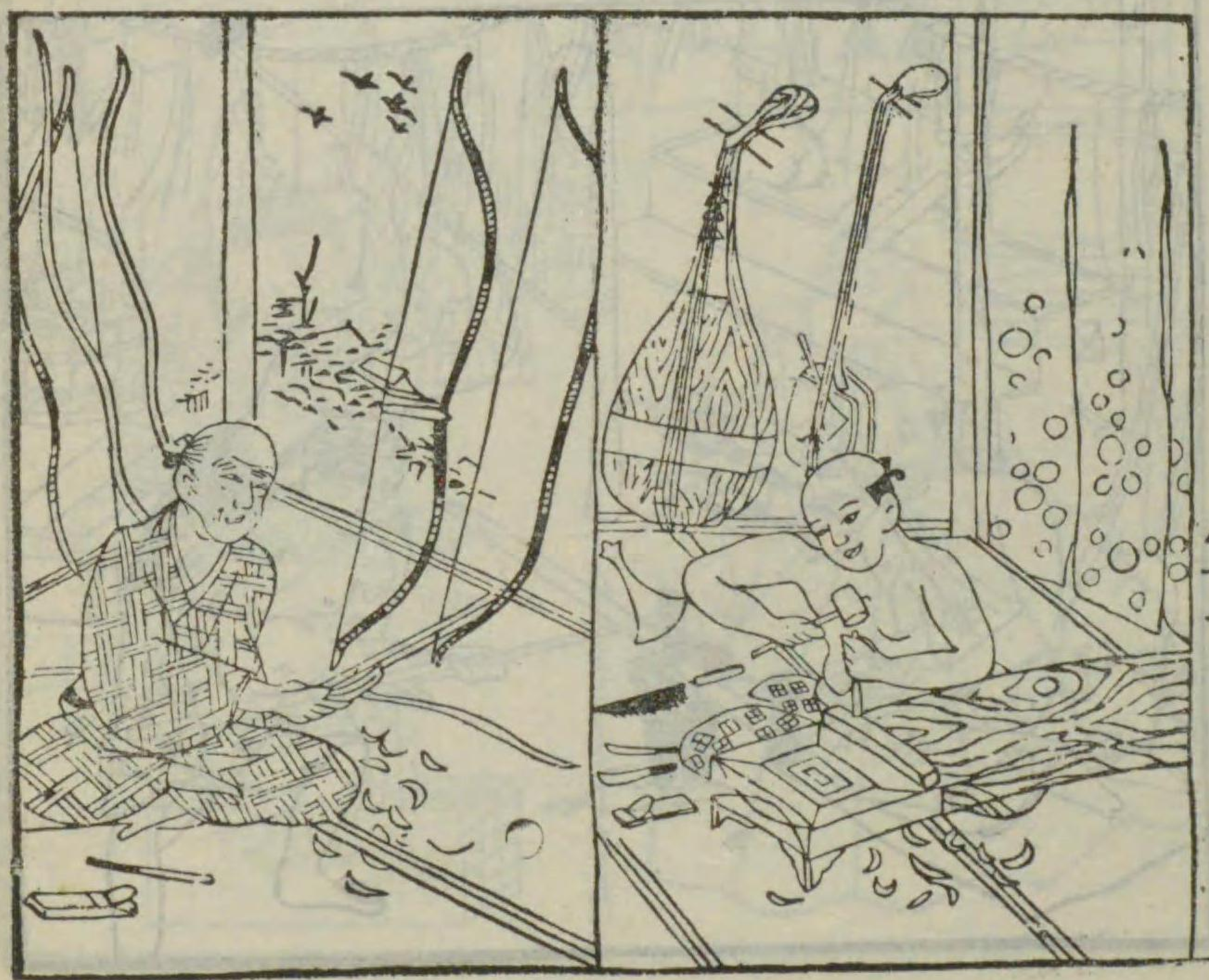
掛】らうそくをつくるをかくるといふ。臘は會津を第一とす。其外所々より出る。かけてをやとひてこれを造る。下に牛らうをかけ、うへに本らうをかけてするなり。【薬鑵師】薄鍋、火鉢・火播等銅をもつて造る類一切これを造る。東洞院松原上ル丁大佛、大坂は天滿に住す。【鞠装束師】葛布諸國よりこれをいだす。袴に正平革をもちゆる所あり。此革染師外にあり。沓師外にあり。水干は衣冠の裝束師これを仕立るなり。【宮殿師】寺搭佛相に置厨子に棟をつけ柱をたてゝ造るを宮殿といふ也。此外小祉、持佛堂これをつくる、所々に



住す。【小刀磨】うすの目切、鋸の目たて、此三品は金輪ことし。

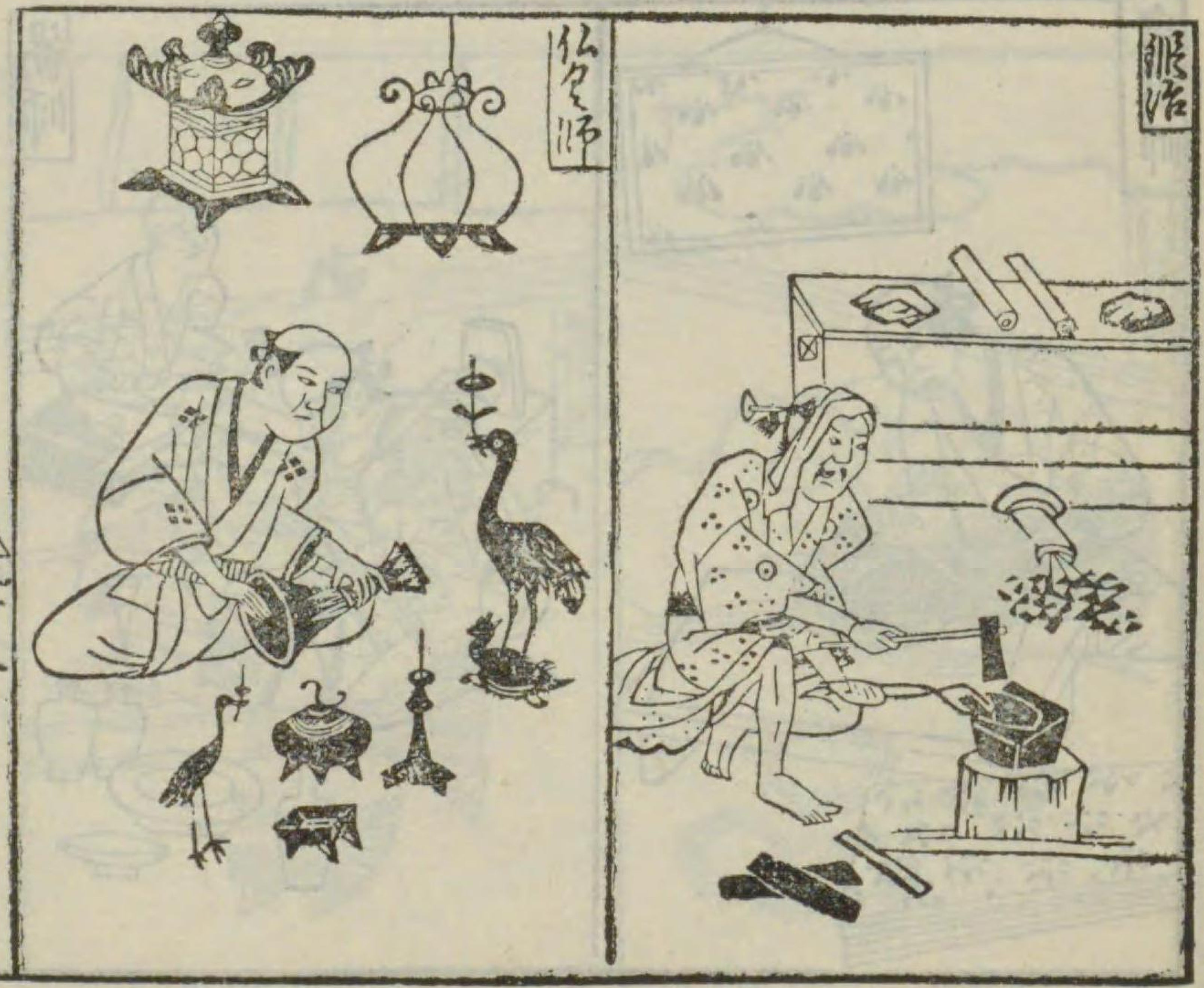
【鍛治】鍛治也。和俗誤てかぢとよむ也。天國神息始りしのよし。【刀鍛治】刀鍛治、諸國に名家多し。京にては日本鍛治惣匠伊賀守藤原金道、和泉守金道、近江守源久道、丹波守吉道、越中守正俊、信濃守信吉、何れも菊の御紋を銘に切ル也。

【鑓鍛治】文珠四郎包重包丁鍛治　伊賀守吉貞、攝津守吉廣。【挟毛貫】小刀鍛治伯耆守金義、土橋住金義。【小刀挟剃刀】東山住埋忠美平、埋忠大和吉信、山城國美平此外所々にあ

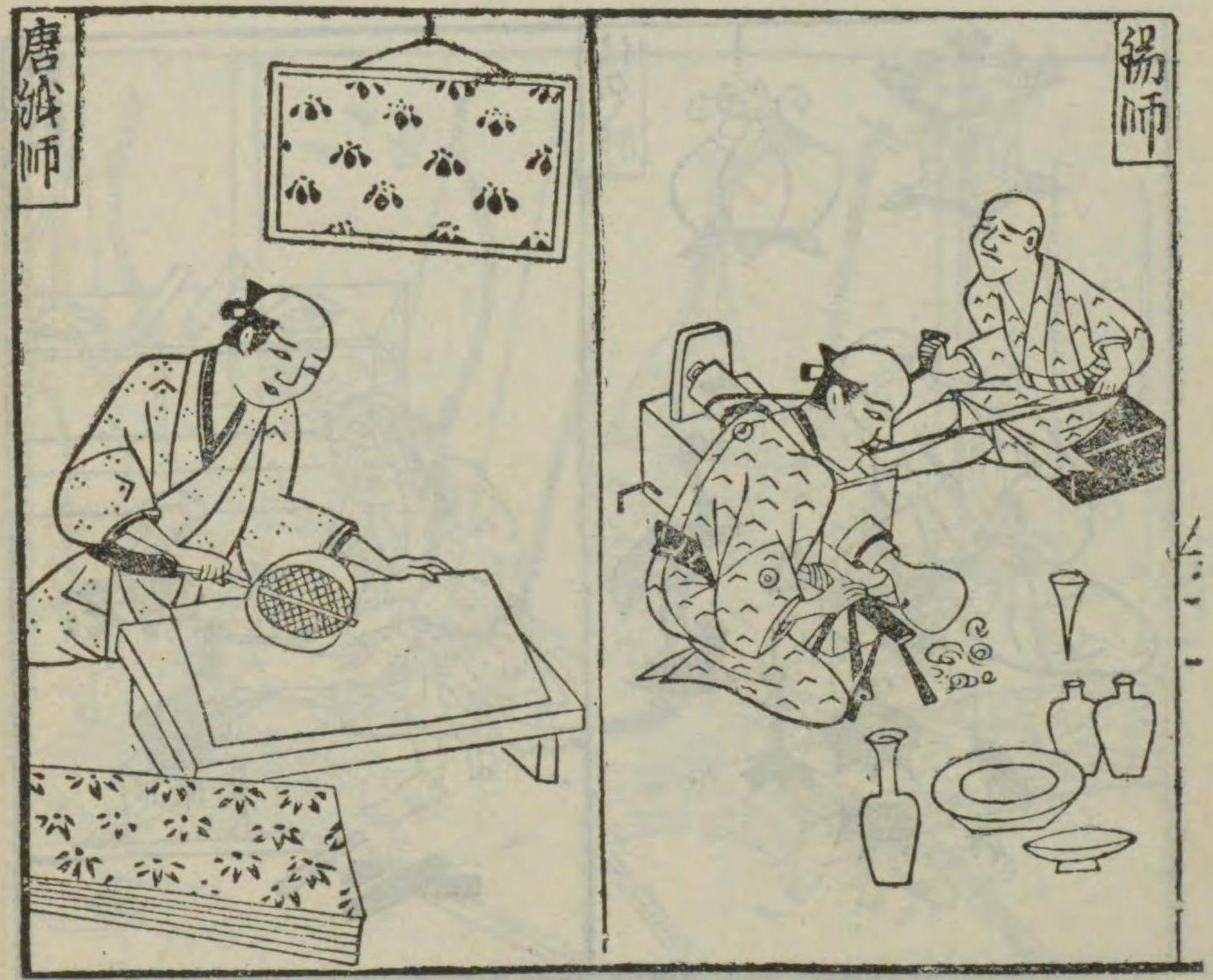


り。刀脇指小刀留にまかす。【琴師】琴のおこりは爰にしるすにおよばす。琵琶琴三味線同職也。室町一條上ル長門釜座二條上ル近江、此外寺町所々に有。琵琶は東洞院佛光寺上ル町長田内記。【弓師】弓、我朝にては神功后宮異國退治の御時、八百萬の御神を勸請仕給ひて、桑の弓よもぎの矢にて敵をほろほし給ふと也。寺町松原より下にあり。ゆかけ同所也。

【佛具師】からかねを以て佛前の三具足、金佛、薄端、花瓶、藥鍋等品々これを造る。五條南佛具や町に住す。たゝらを立る事は、釜

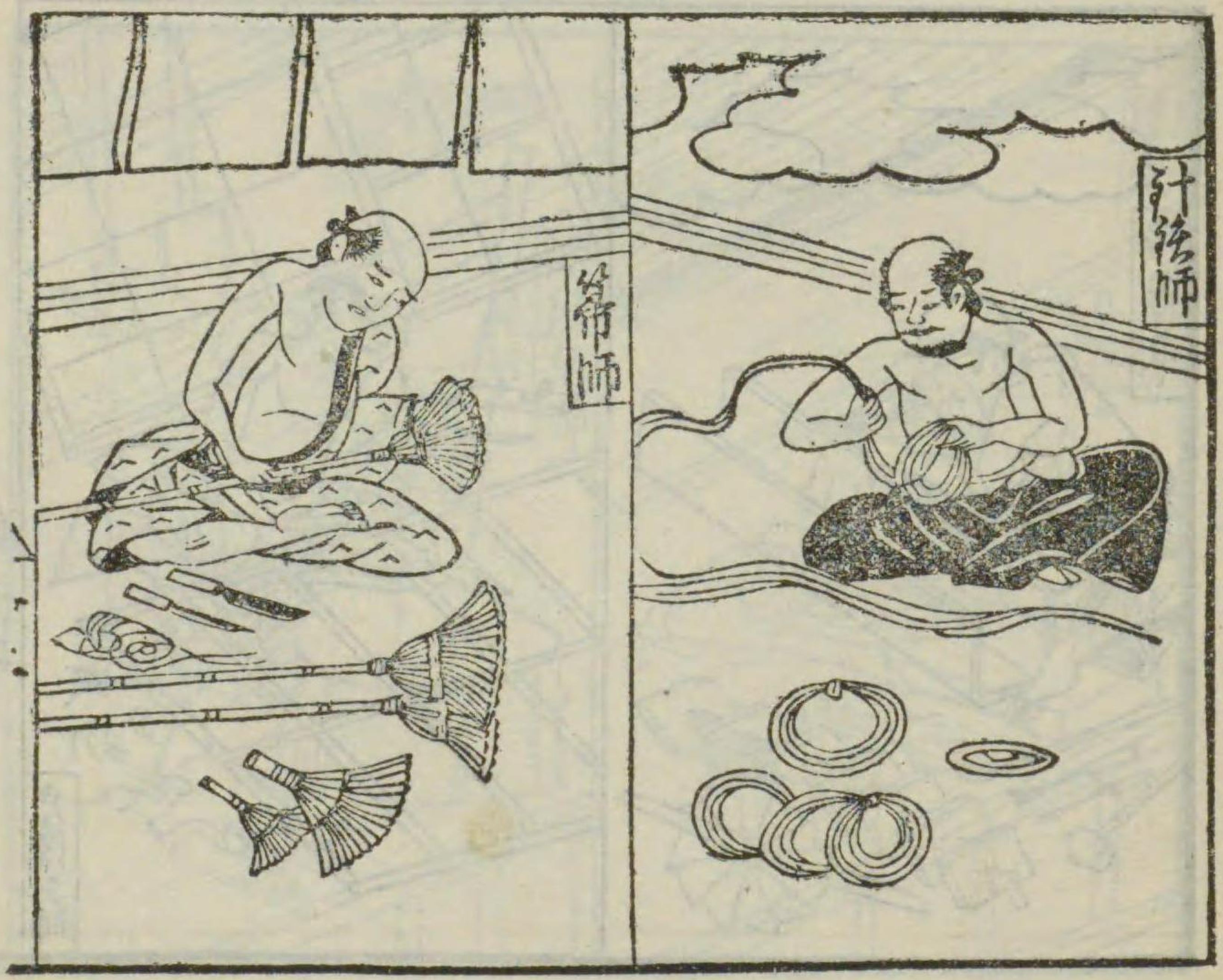


の座の外はならす。【錫師】錫鉛を以て德利、鉢、茶壺等を造る。新町通二條の北、五條通所々ニ住す。茶壺には悪し。茶にとたんの香ひうつりて悪し。



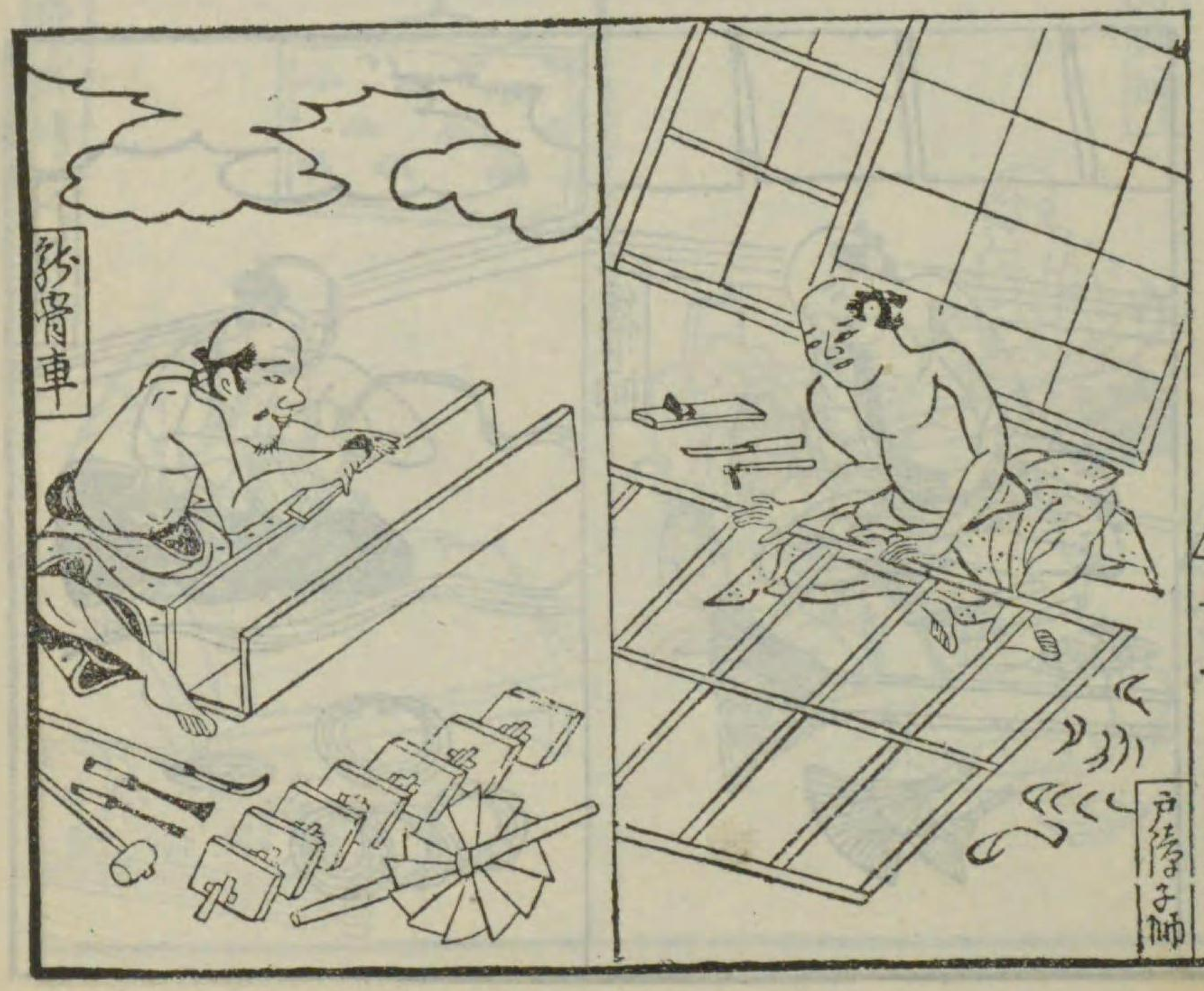
【唐紙師】諸の紋をつけて色繪をなす。襖障子張付をなす。【針鉄師】鉄しんちう銅をもつて是を作る。針やこれをもとめ、或は物を卷、銅等は籠を編で窓に用。又は虫籠に用ゆ。

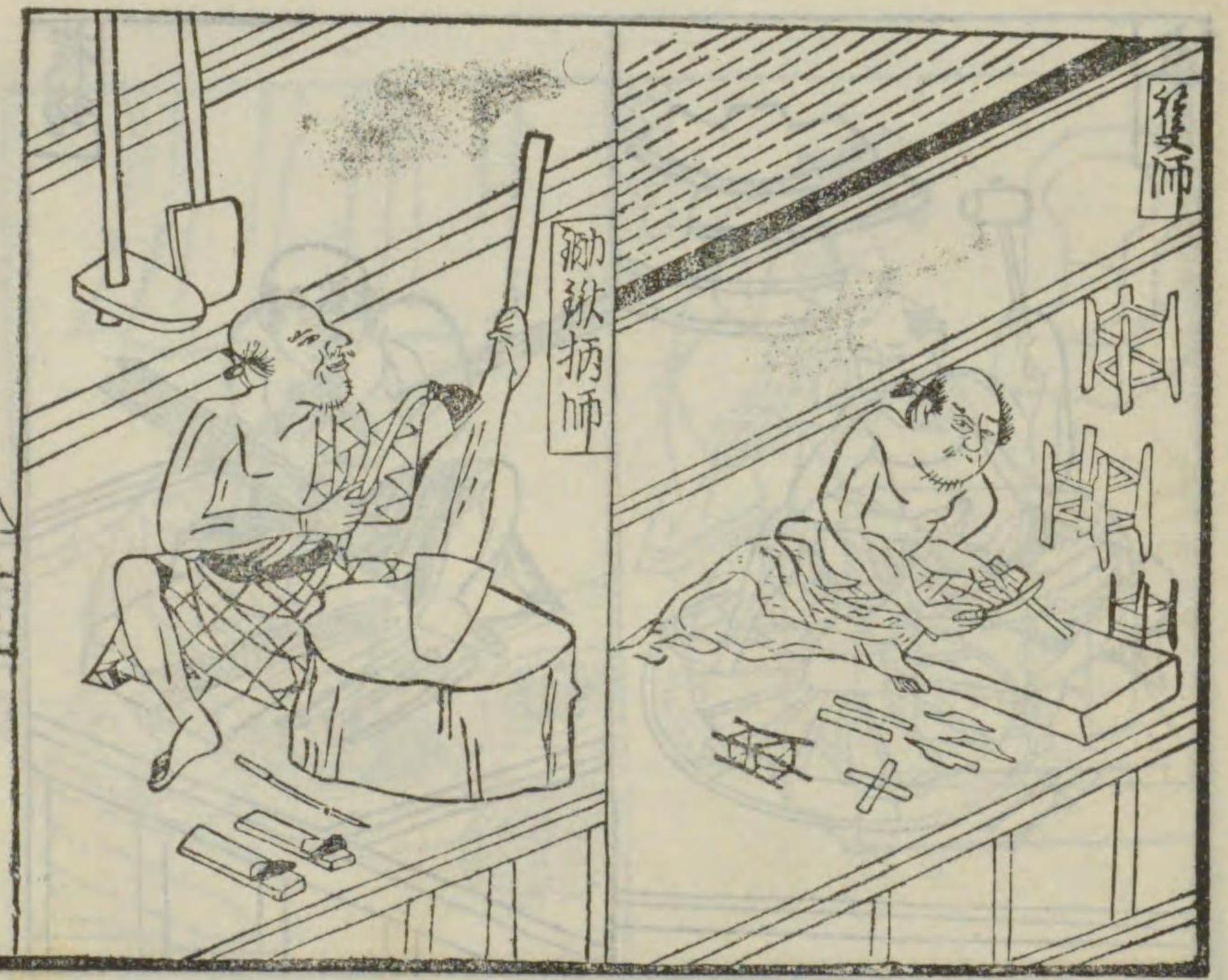
【箒師】棕櫚の皮葉並に藁蘂等の箒あり。手箒、鍬箒等あり。羽はゝきは諸の鳥羽屋にこれを造る。箒は草より名付しなり。箒木といふ草あり。寒山拾得以レ箒落葉をあつめて有無



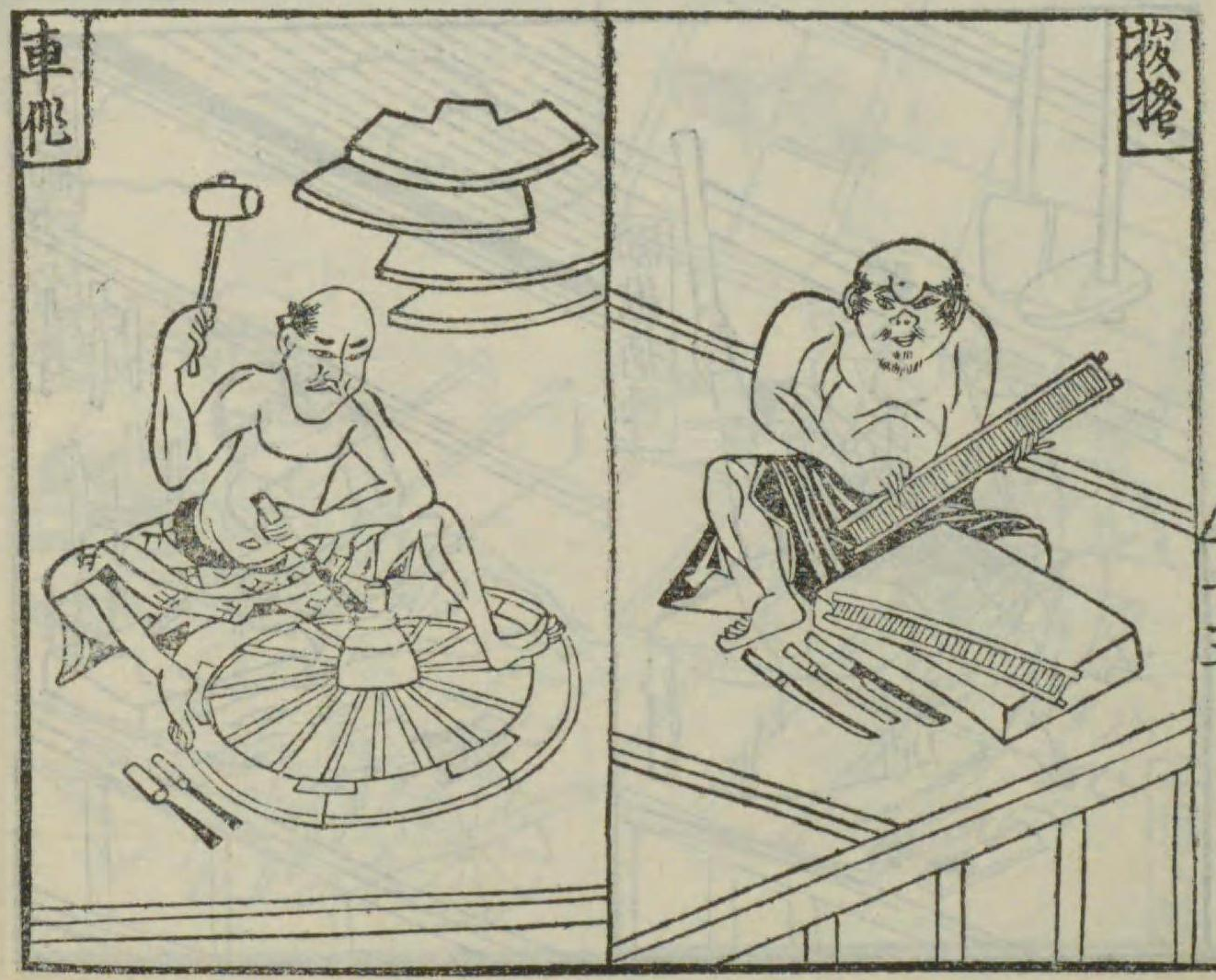
をさとり給ふ。禪家のはつすもはゝきのごとくにまよいを拂さとりをあつむの心とかや。

【戸障子師】堀川二條より三條の間に多く住す。屛風下地、眞那板戸棚等これをつくる。

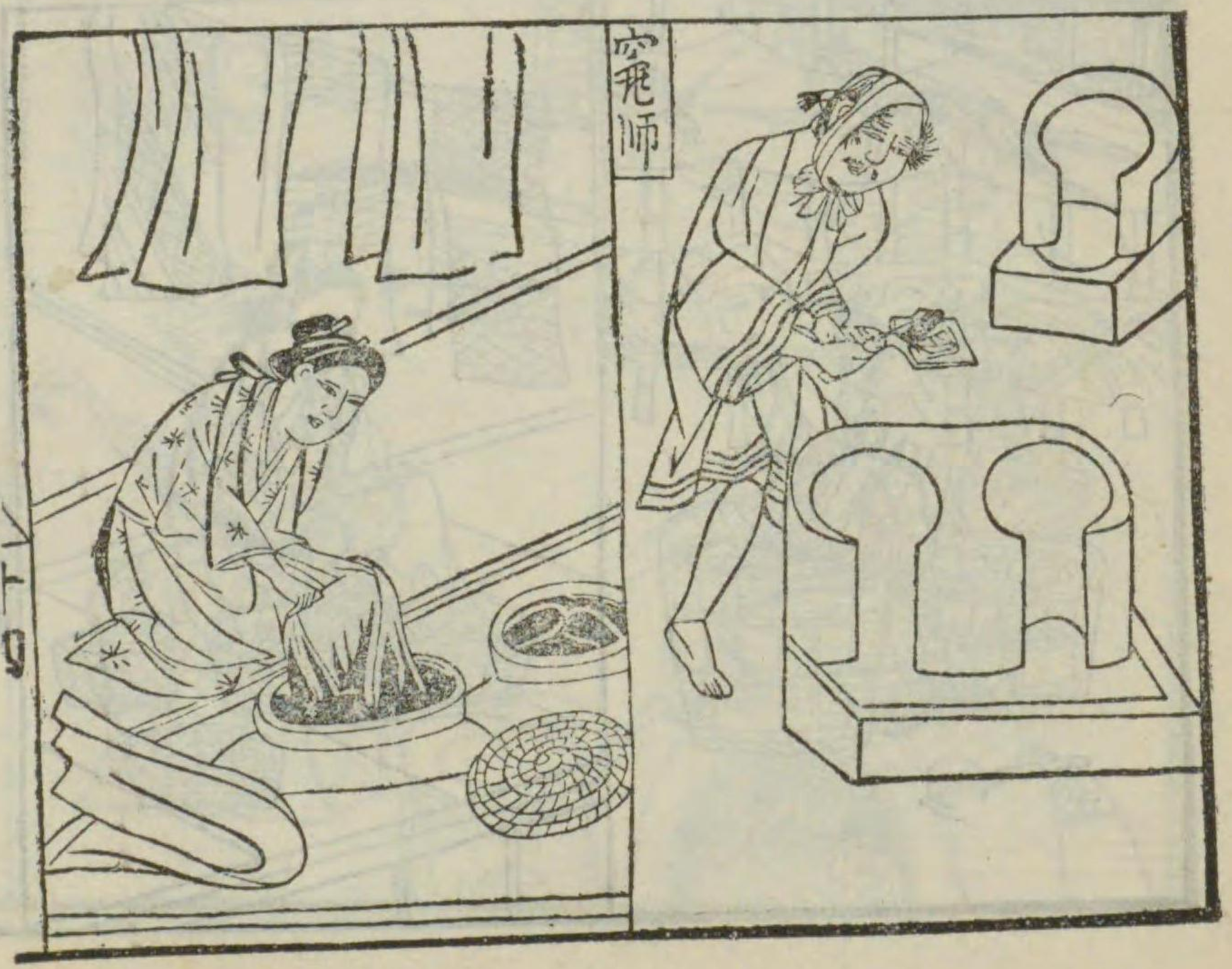




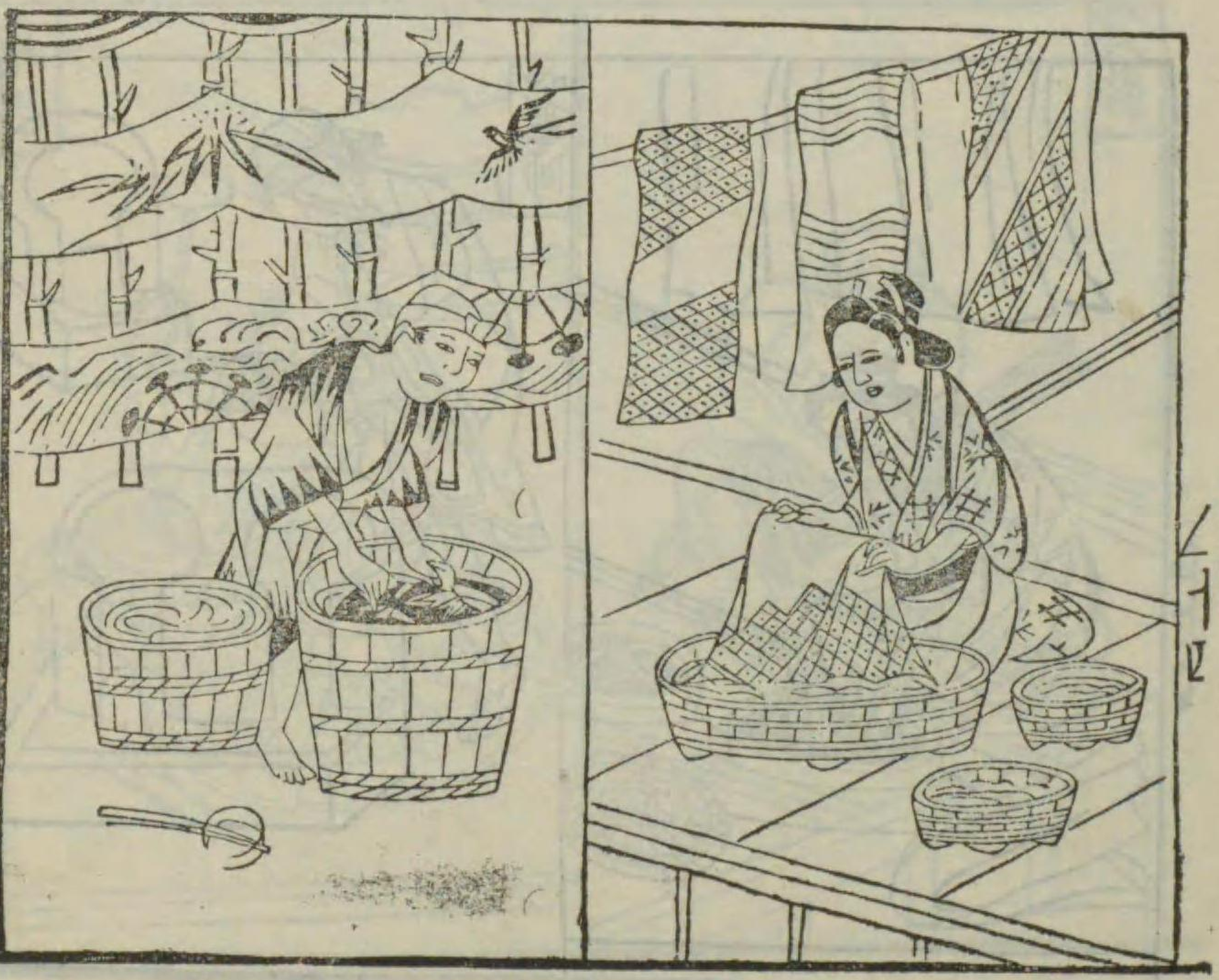
【釜蓋師】諸の鍋釜のふた並瓶、井戸車、貢那板、井筒、水走等是をつくる。万壽寺通東洞院より西にあり。【龍骨車師】民間にこれを求て田の流れを仕懸る也。大坂天神橋の西又四郎これをつくる。【篗師】絹糸・木綿布等品によつてちがひあり。【鋤鍬柄師】樫をもつてこれを作る。並棒枴これをつくる。【筬掻】竹をもつて品々に組なり。すべて機の具、長緣、打



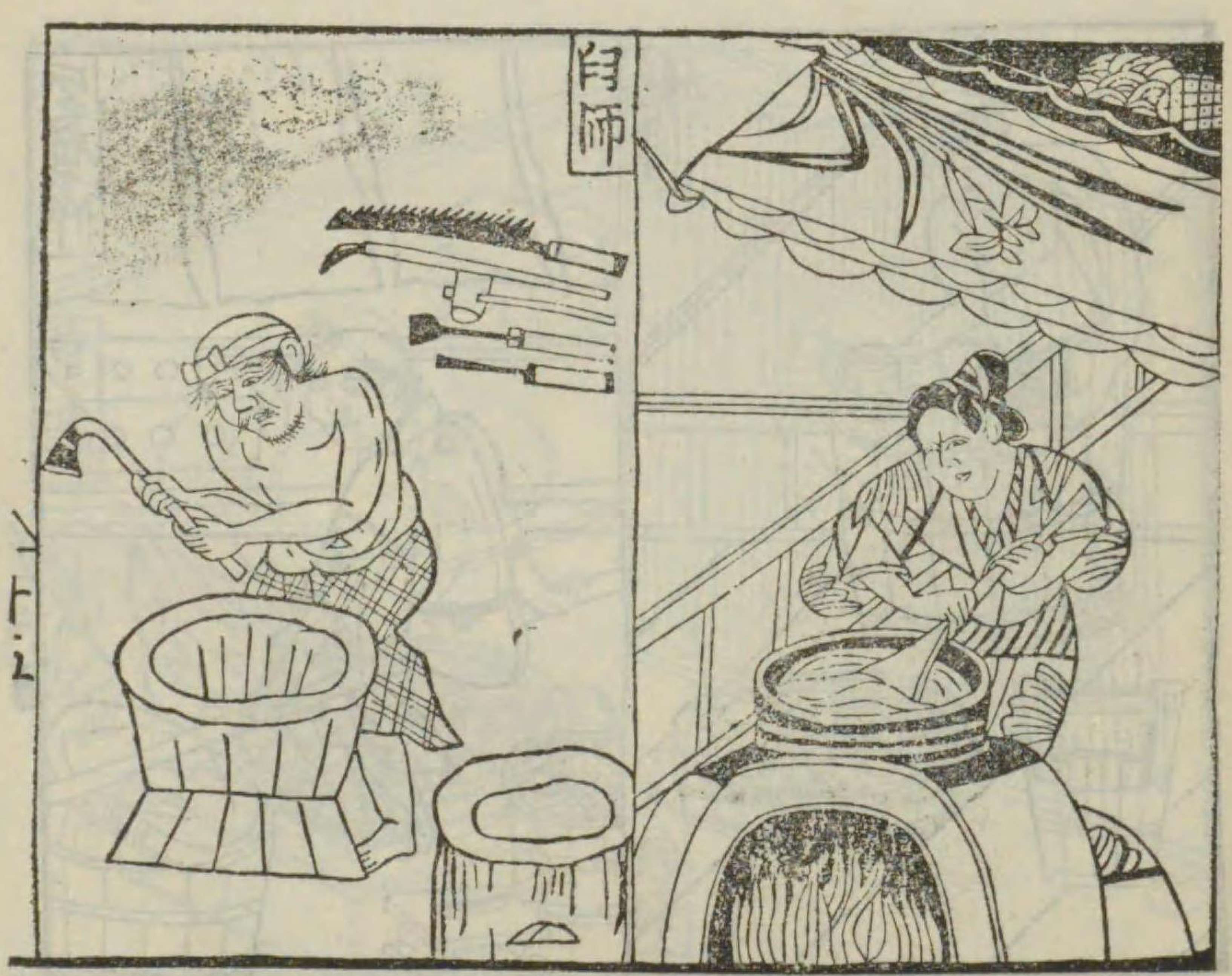
樋、褥等品々の職人かはれり。【車作】むかし齊桓公車作申せし古語につたへて書にあり。作に秘事あるとかや。車作は輪木八枚、輻は廿四枚、雑車は輪木七枚、輻廿一枚なり。作手は京濤藏ロ久右衞門。【竈師】并炭櫃・火鉢等これをつくる京所々にあり。世に釜戸を荒神と號す。家内安全、福貴の守護神、本地普賢菩薩なり。しんくありて廿八日をまつれば七難即滅明なり。【紺屋】紋付品々色摸様を染る。當世茶屋染有。大夫染、吉長染等は別家にあり。これを染物やといふ。又菅原染、うこんぞめ是をなす。【沙室師】沙羅沙、沙室、



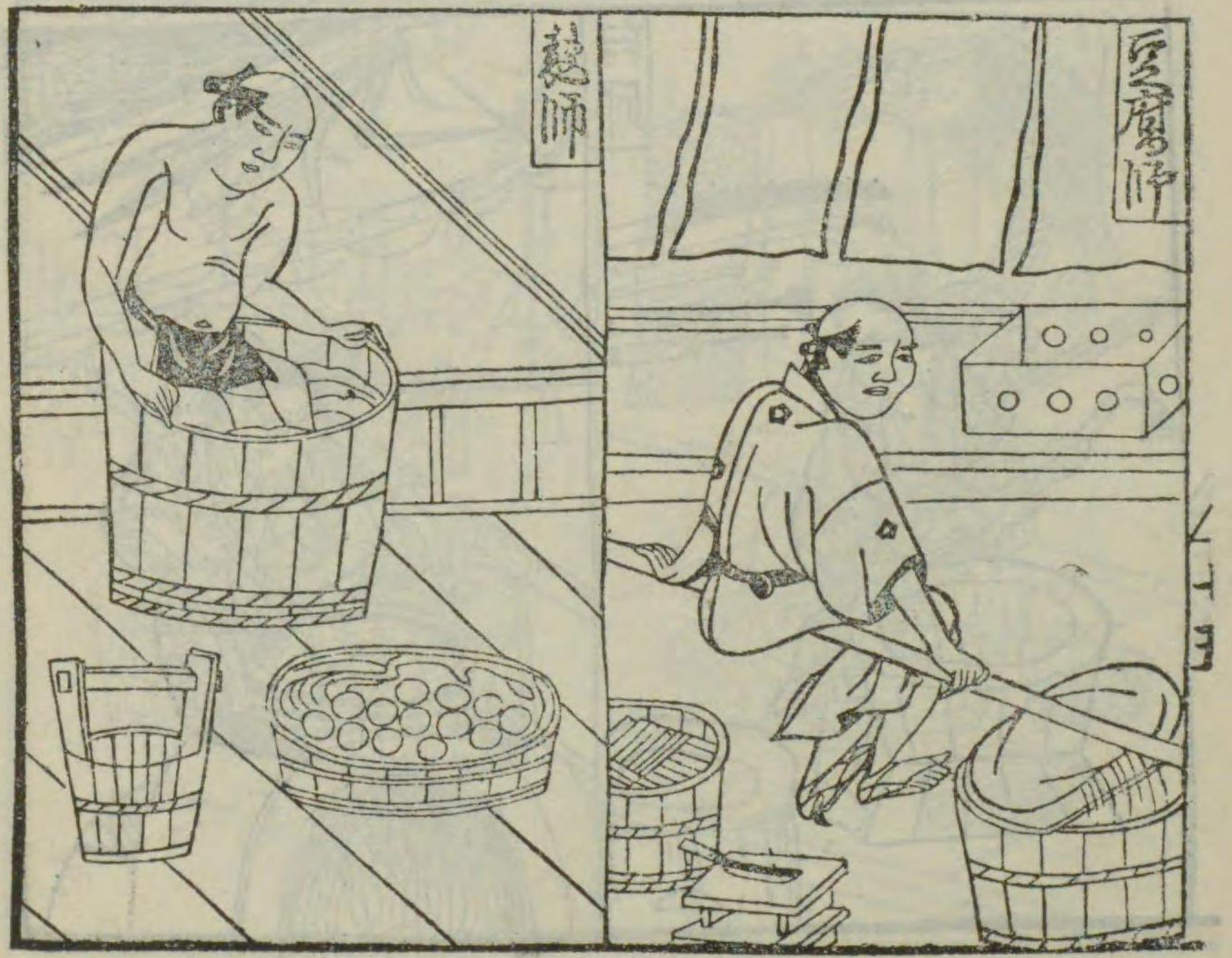
霜降等これ別家也、【紅師】紅粉屋にこれをそむる。【茶染師】一切色々の茶、吉岡、檳榔子染等これをなす。室町一條の北に茶染師の名家あり。其外西洞院四條坊門より南にあり。【紫師】此紫染一種これをなす中にも上京石川屋其名高し。茜は山科名物也。又江戸紫の家、油小路四條の下にあり。【練物張物師】絹を練る家、張物をなす、一切の染物、又は洗澤物これをはるなり。【臼師】天竺の鉄輪王の代に遊夫これを造る。此家にから臼の男柱、棹、打盤、横槌、柊揆等これを造る。一條通の西にあり。【糸車師】



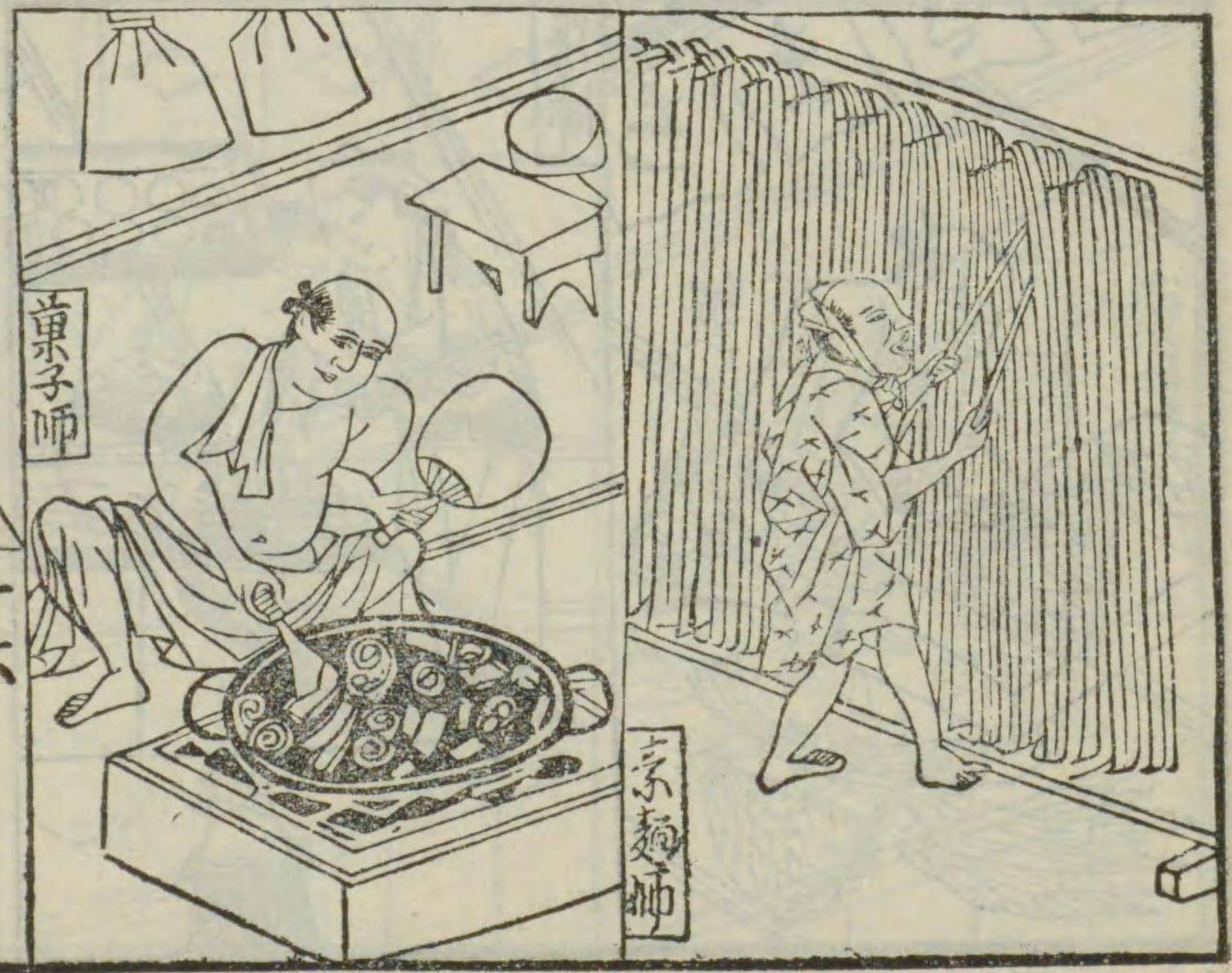
賤か糸引車、綿繰同これを作る。【豆腐師】職人の内朝起の隨一也。油舉うる家もあり。【麩師】昆若ともにつくる家もあり。むかしは麩屋町に多住すとかや。【昆若師】昆若の根所々より五條の青物問屋に來るなり。【素麪師】伊與大和の三輪其名高し。京にするを地そうめんといふ。【菓子師】諸の乾菓子、羊羹、饅頭の類、餛飩、喬麥切これをなす。主領して國名をつくあり。二口能登虎や近江其外多し。【餅師】大佛の前に住して大佛餅と號して其名高し。壹分の餅目三十九匁又は四十匁あり。佐々餅、



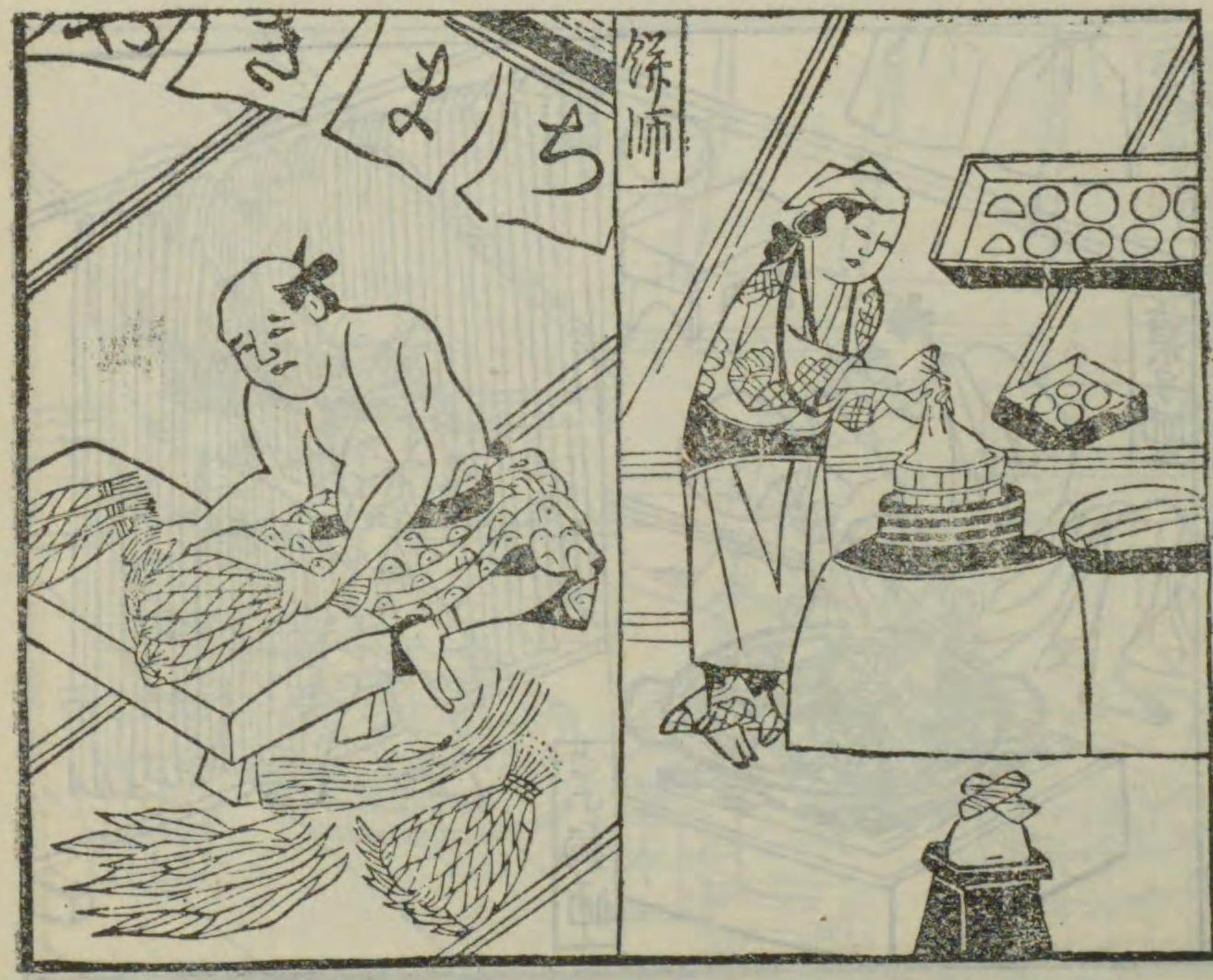
鶉餅・野郎餅等品々、道中の五文のもち卅五ヶ所あり。大坂難波橋筋大佛、江戸芝鶴屋。【粽師】篠粽、藁ちまき、飴粽等これをつくる。烏丸通上長者町下ル町道喜、烏丸通四條津田近江、此外所々にあり。粽五月五日に用はなつは毒虫多くて人家にまぢわるゆへに茅にて蛇形をまき家に菖蒲よもぎをさすも此ゆへなり。此せつあまたあれども略す。

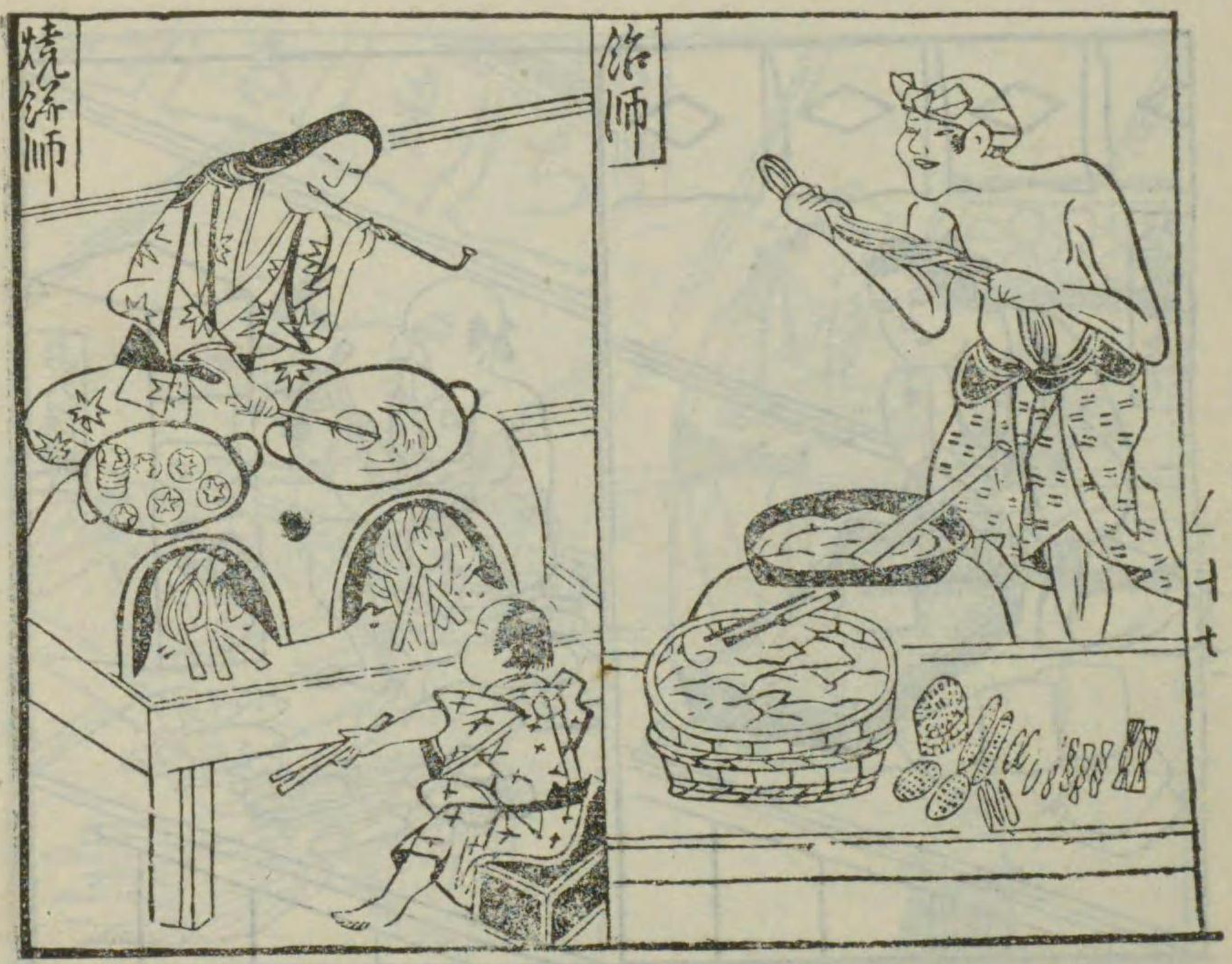


【煎餅師】六條にあつて名物なり。【道明寺師】餅飯の干たるを河内の國道明寺よりいだす、此ゆへに此名あり。今京菓子の家にもこれをつくる、所々にあり。又氷餅、津の國勝尾寺

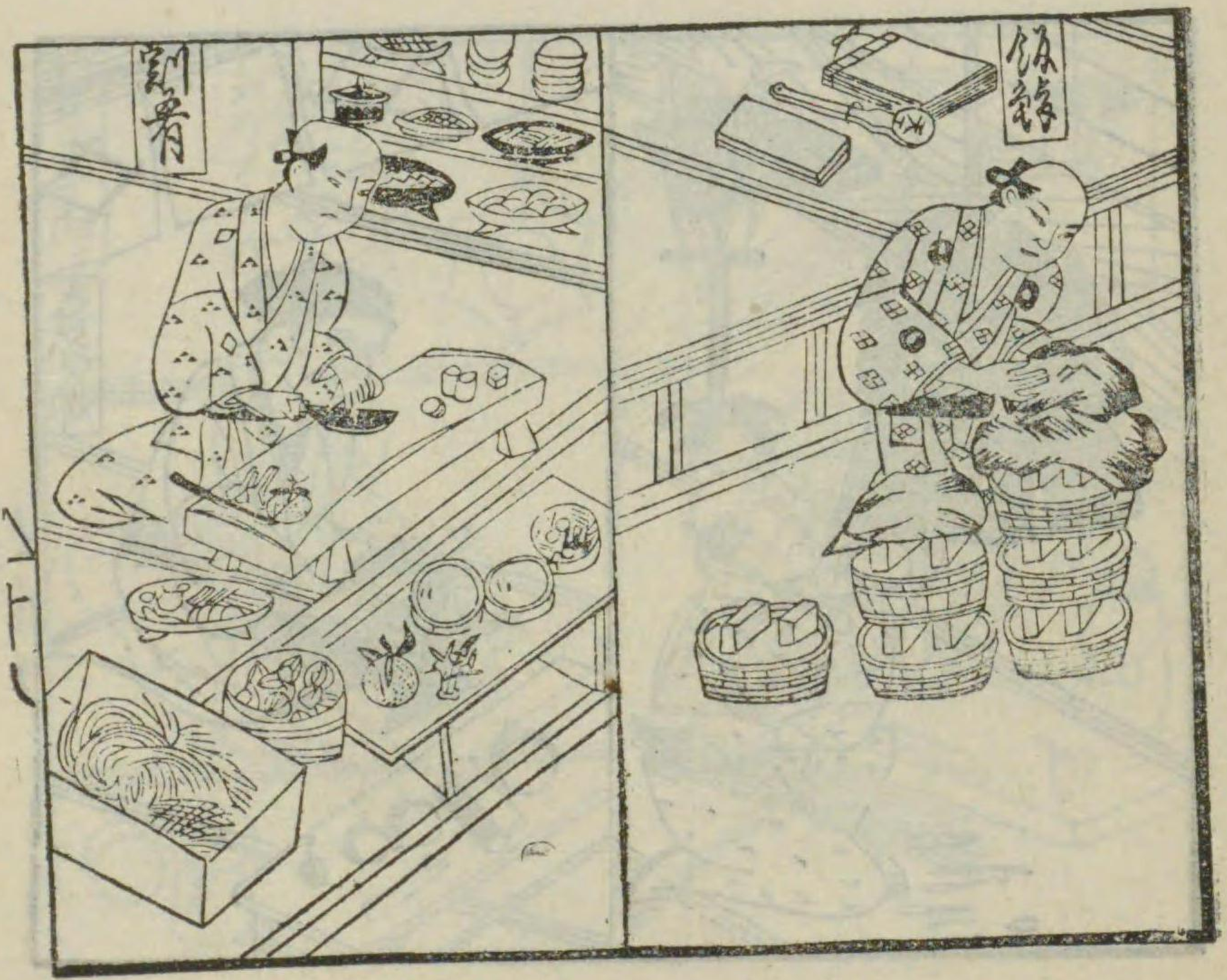


よりいづるを名物となす。くはしやにあり。【興米師】所々にあり。【麩焼師】女の童これを朝良と稱す。江戸糀町助惣。【飴師】菅飴桂里名物也。其外七條東洞院の西にこれをつくる。江戸櫻あめ芝田町。ぶせん小倉。【地黄煎】東福寺前菊一文字や其名高し。【燒餅師】大和大路五條の角にあつてこれをあひす、其外所々にあり。【飯鮨師】【割肴師】諸の精進物并割昆布。【香煎師】祇園香煎其名高し。江戸淺草すは町柳屋、糸櫻と名付。





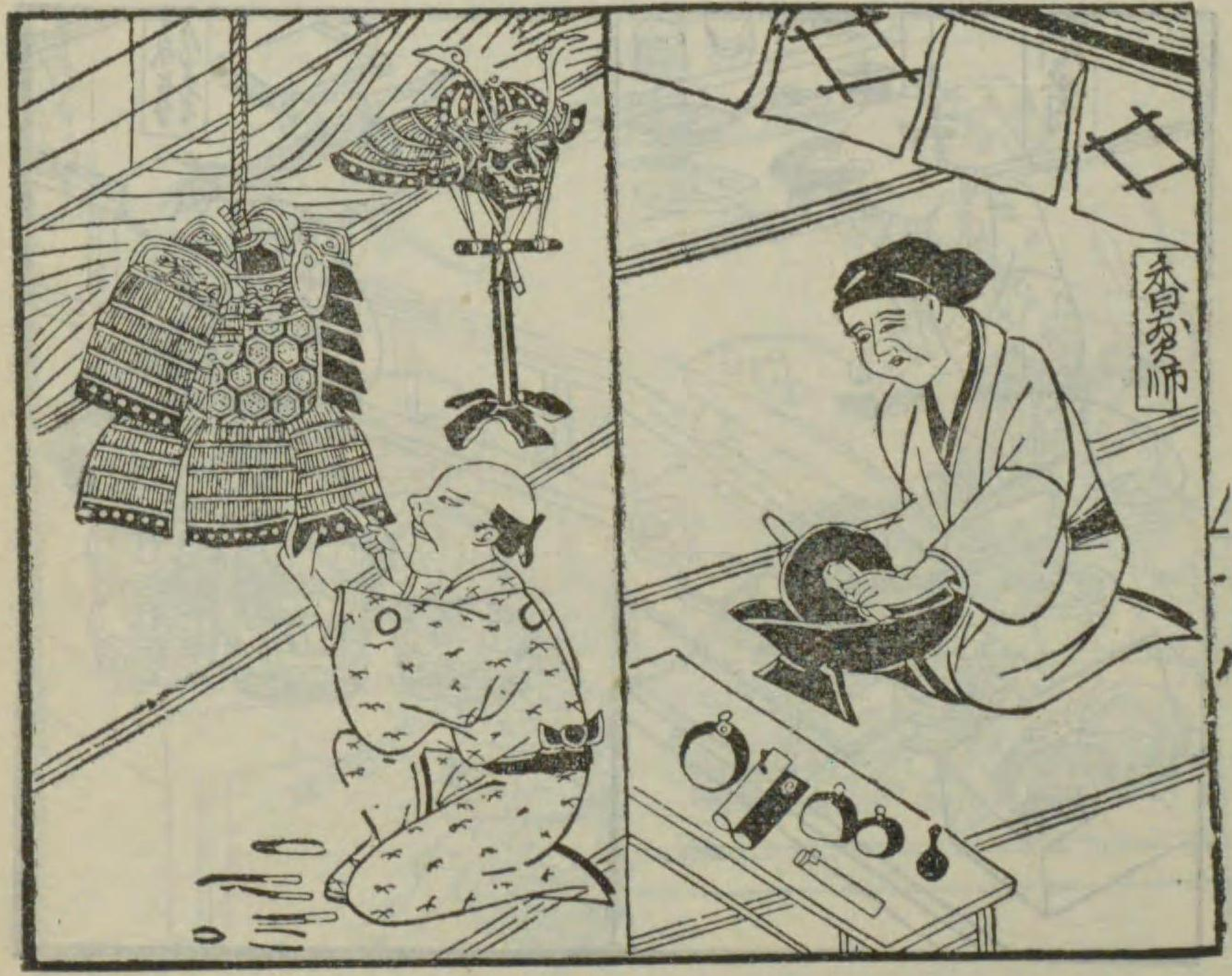
【鎧】甲、冑、鎧冑惣名、甲冑今甲といふ字



は甲なり、胄と用る字はかふと也。久しくあやまり來り、通してもちゆる也。具足といふ惣名也。胄脇立等の品々揃たるを具足といふなり。下地鉄にて作る。下地師外にあり。具足師さまぐ〵にぬり、糸をもつて威なり。糸は組や是を作る。別に組手あり。是を足打といふ。柄糸の打やうに同じ。女の所作なり。

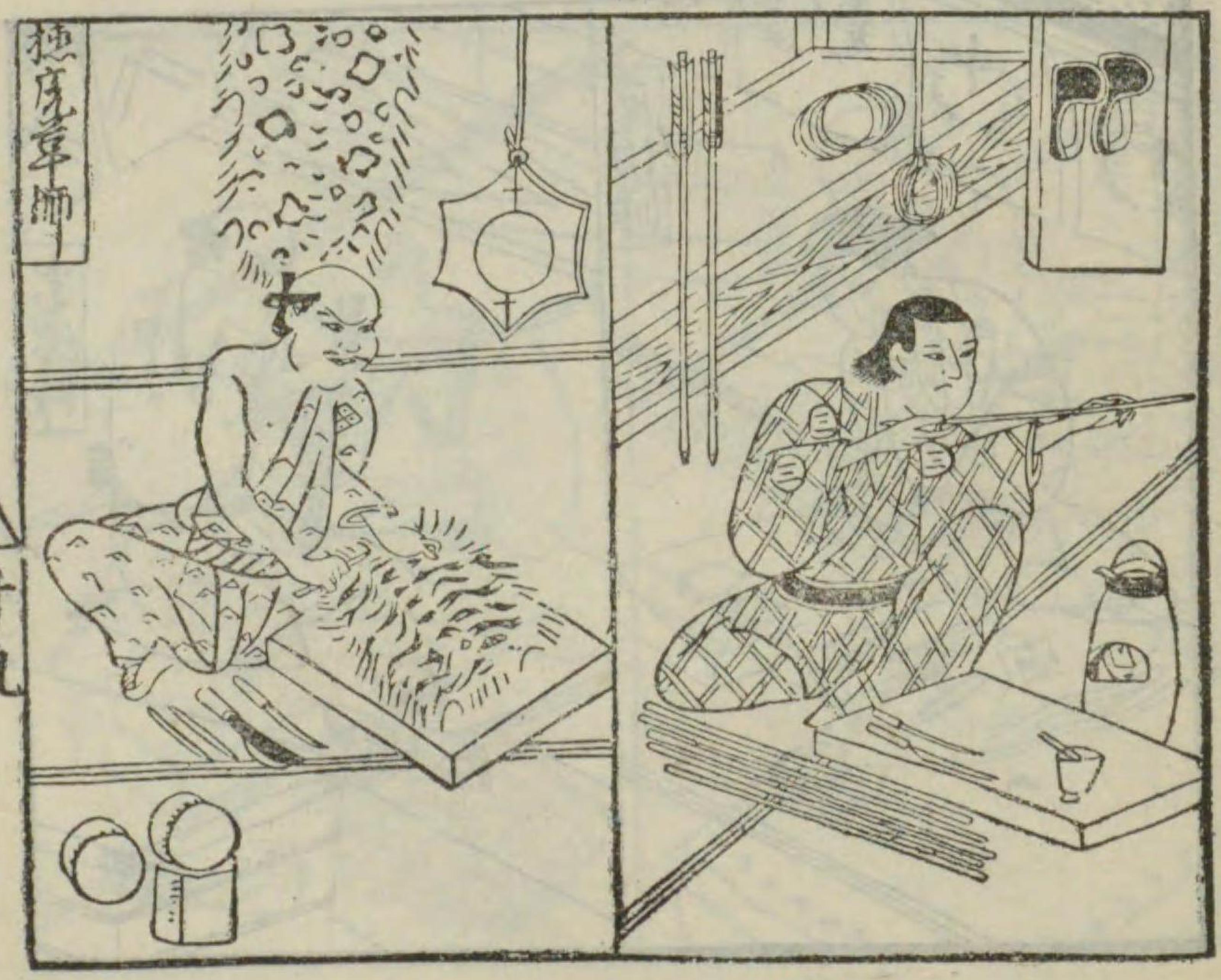
【著込】鎌帷共、鉄の針金をもつて造る。其外色々あり、さめのきれにてもつくる。大將分の人ニ用。

【絃】絃師をつるさしといふ。むかしは洛中

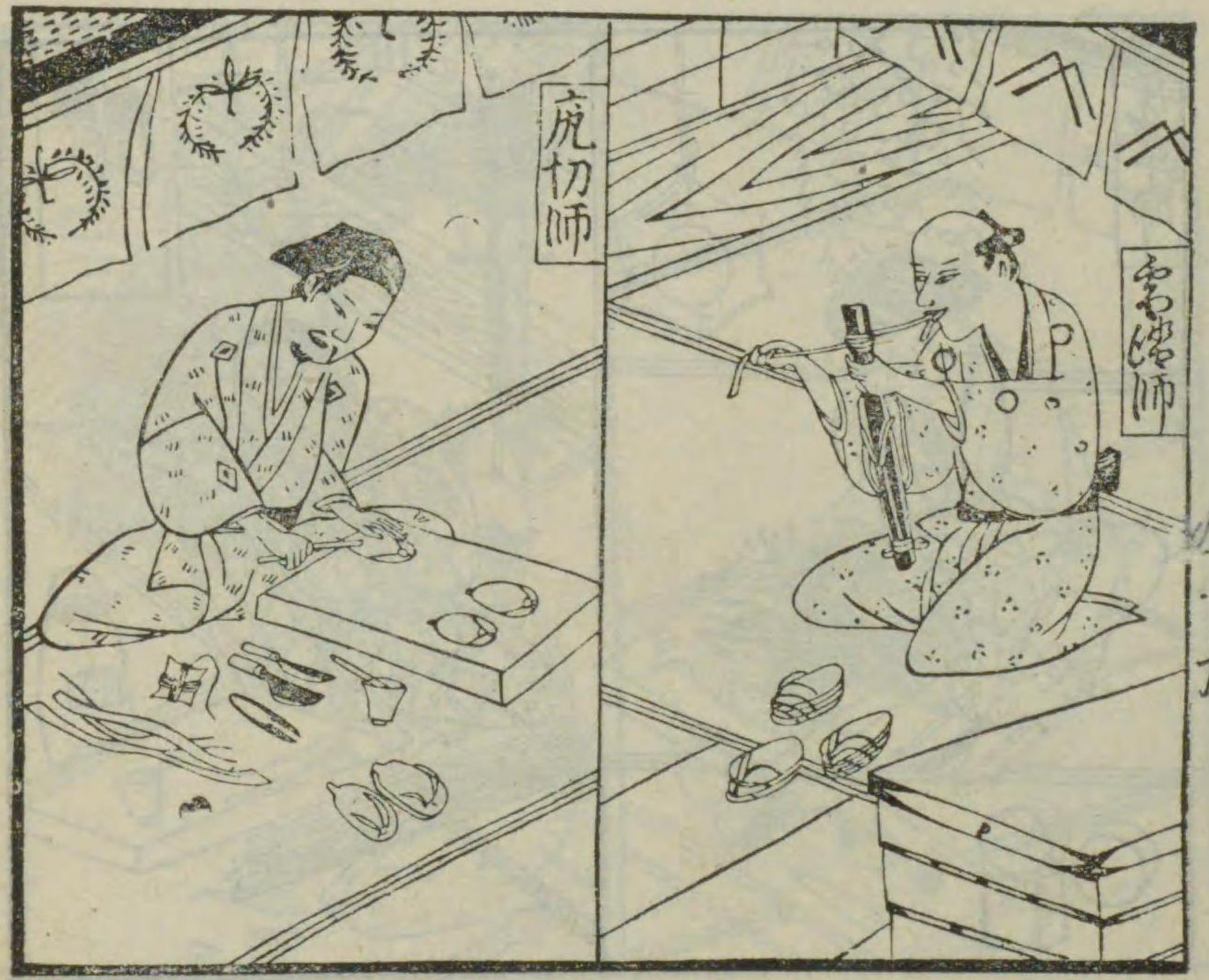


にて弓はやりけるゆへ、絃師絃をうるとて絃めせといひけるより、絃めさうともいふ也。此屬淸水坂の西に住するゆへに、坂の者ともいふ也。

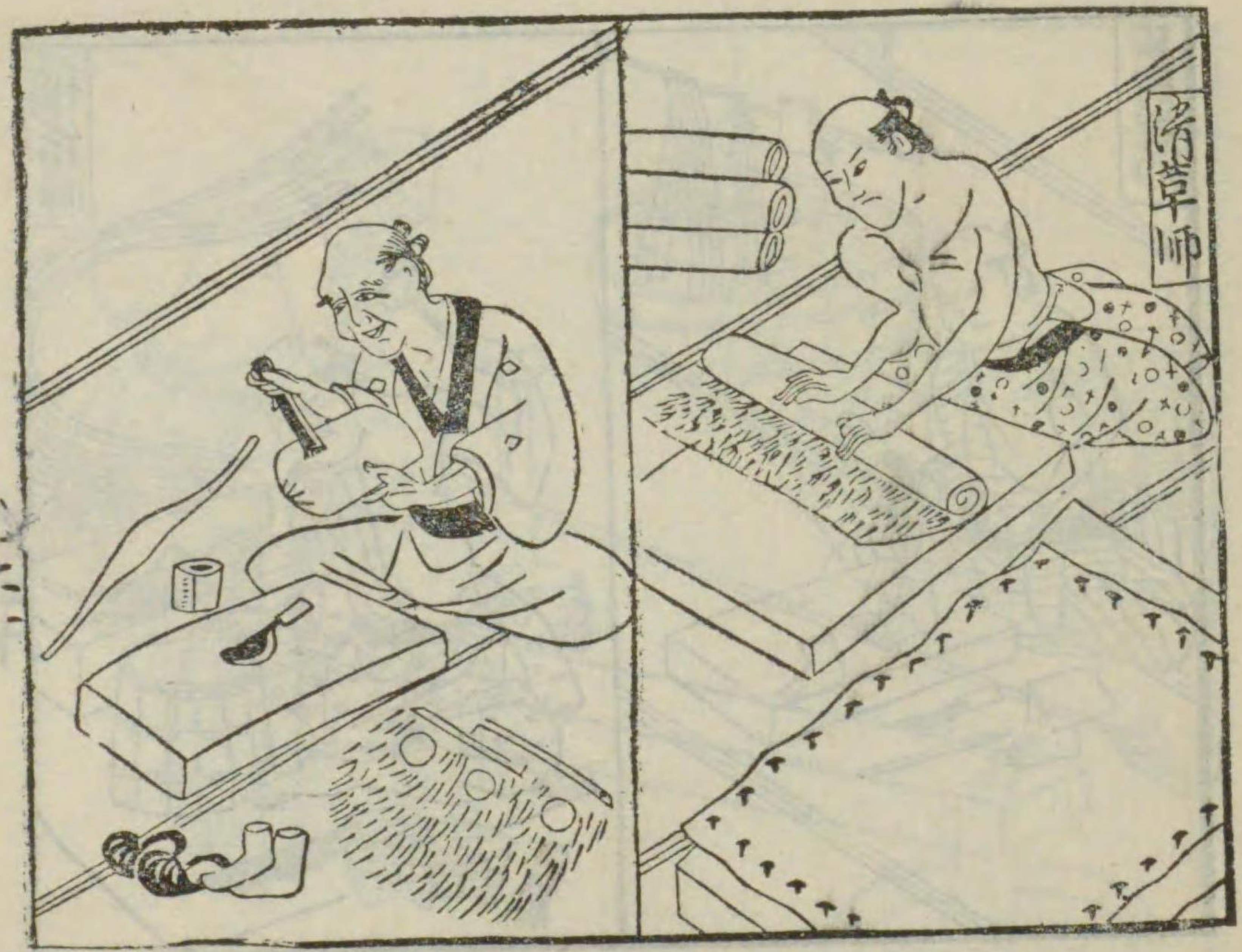
【植虎革師】虎の革を似造るなり。烏丸通二條の北にあり。【雪踏師】西洞院二條の下に住す。其外所々にあり。【尻切師】裏付といふ藁蘂をもつてつくり革の縁をつけ、又は絹のおもてをもつくる也。女の具なり。【革師】鹿革を滑、足袋、羽織等につくるもの、白革やと名乘るなり。菖蒲革幷黒染の革、八幡に造る者あり。白革や。【滑革師】革は所々の穢多こ



れを遣る。革師これを求て馬具、銀袋、蒲團、枕等是をつくる。毛革をもつて作る、毛革師といふ。各春日(かすが)通東洞院の西にあり。



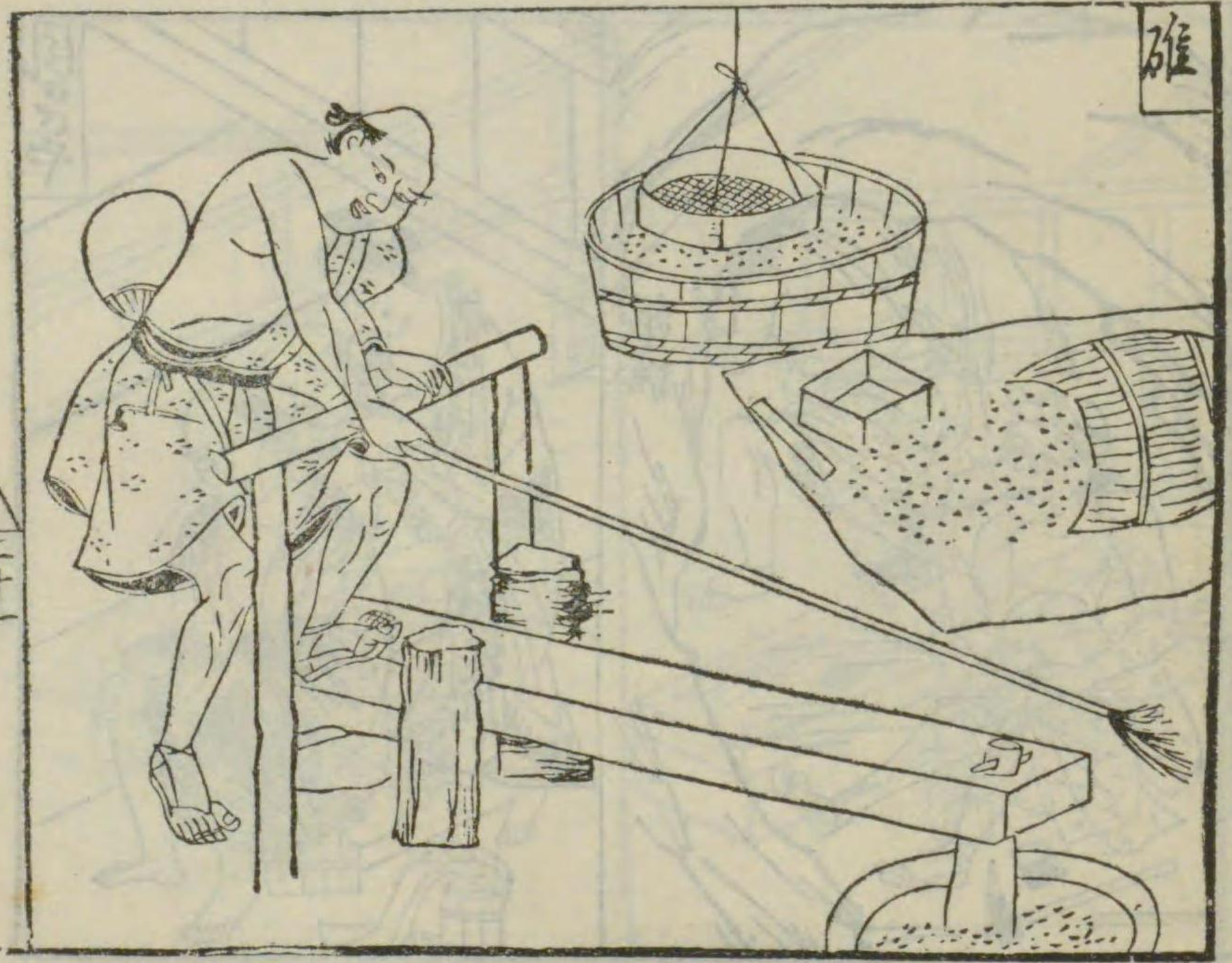
【桶結(おけゆい)】輪がへにふれめぐる言葉、所々にてかわりあり。京にて「かづら」といふはむかしは籐かつらにて結しゆへなり。江戸の「たが」といふは、輪を多くくわゆるの心也。國にてかわりある也。【足袋師(たびし)】木綿足袋の地別にこれを織て河内津國等より出す。これをかいとりてそれ〴〵にさしに出す。女の業としてこれをさす也。幷とろめんたび、これを綾小路通御幸(ごかう)町より西の方にあり。又室町通



四條の南にもあり。革足袋は鹿の滑革をかいとりてこれを造る。此家羽織袴等革にてこれをつくる。薫革此所に造る。紫革、黒革、菖蒲革は外に染てあり。三條通御幸町より西の方に多く住す。【碓】もろこしよりわたし、豊後國にてひろめしとかや。京へふみのほる多くは近江越前の者なり。腹中のひろきにや、きやう山に大食の名とりはかくれなき也。

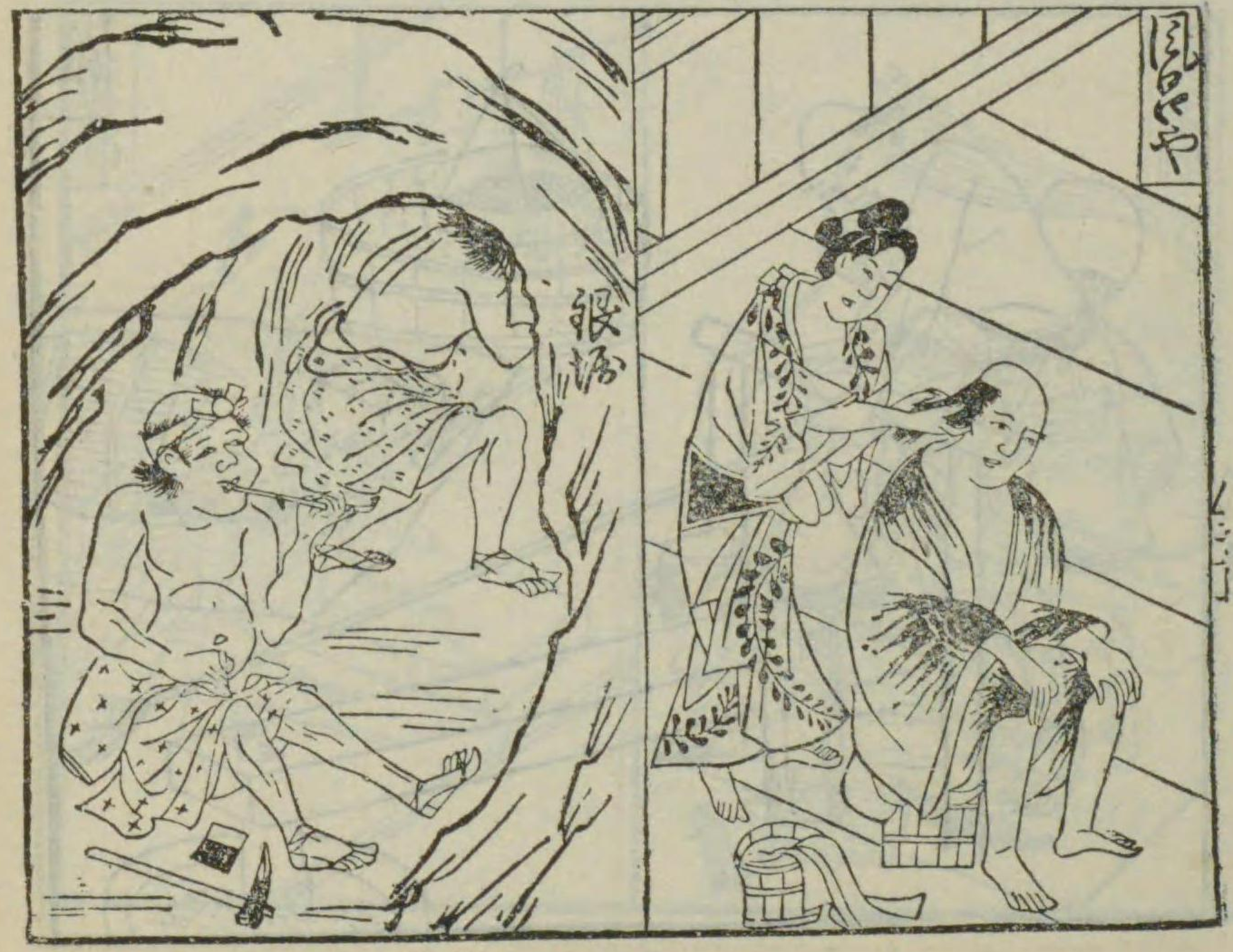
二十

【風呂屋】風呂に七種の徳あり。垢をさり、みめをよくし、はをつよくなし、目を明になし、口中にうるおいあり、氣をはらし、風をのぞく也。そのほか古人の詩にも徳有事書々

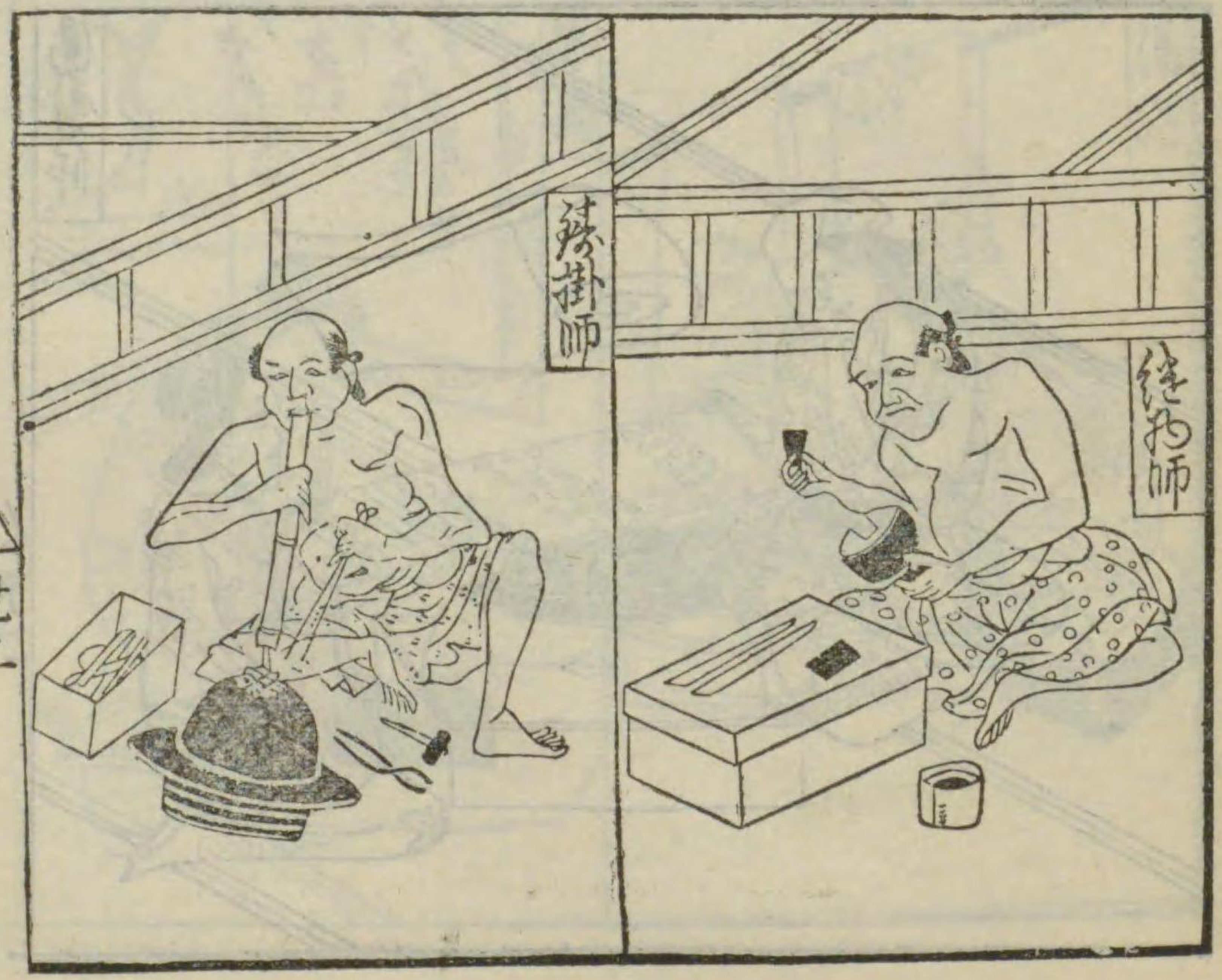


二十一

多し。又光明皇后溫室構て諸人のあかを清めさせ給ふ事あり。くはしくはあいのふ抄に見えたり。【銀堀】金銀銅等石中より出る、此穴を眞吹と號す。堀手を下在といふ。あなのうちにてはさゞいのからにて火をとぼす。金山所々多し。金ははしめて奥州より出るなり。黒金は備中より出すとかや。【繼物師】万の器物の破損をうるしを以てぬりつぎて全ふするなり。ふろしき包をかたにかけ、繼物〳〵とふれあるくも、くるしきわざなり。

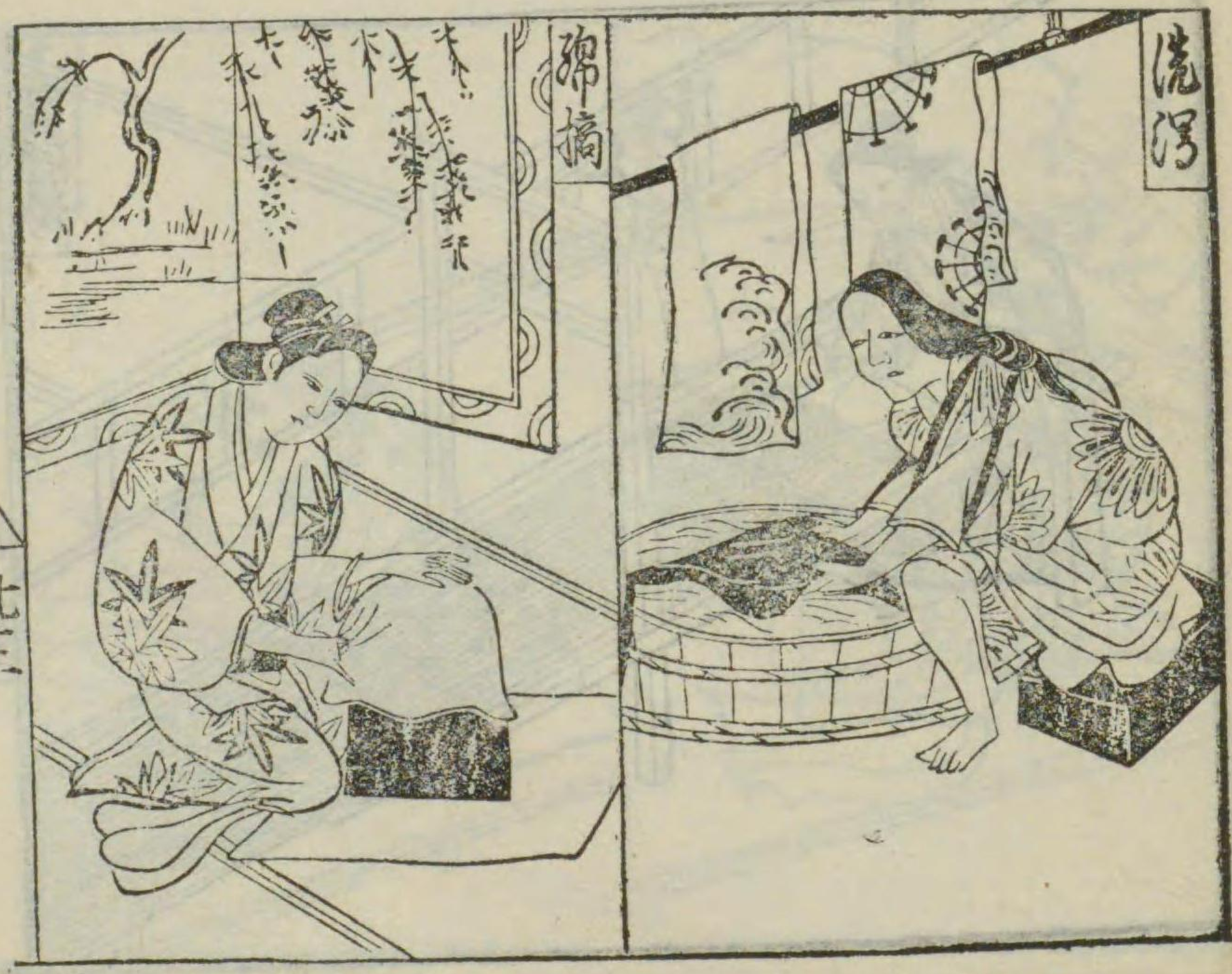


【鑄掛師】佛前の三具足をはじめ、金の器物破損をつくろい井かけ、鍋釜のも同じ類なり。

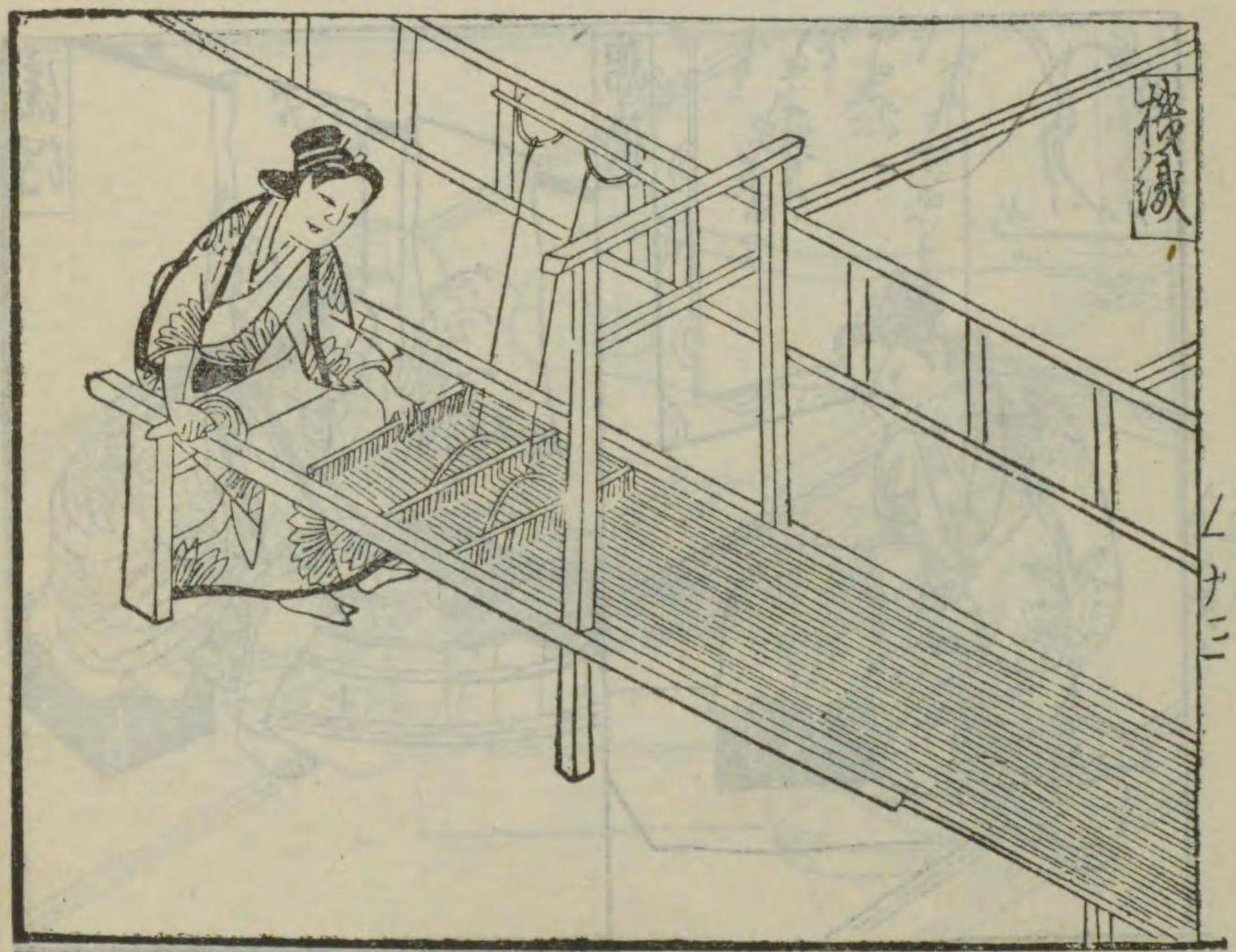


【湯熨】や一切の染物地にちゞみのあるをのべちゝめするなり。又つや付木目つけあり、同じ類なり。【洗濯】万洗物一切のよごれ、しみものおとすに滑石、石炭、さま〴〵の藥力をもつてあらいをとす。【綿摘】帽子綿、小袖、中入これをつむ、女の業なから老女又は小むすめの所作にて、住所閑にしてなさけありけに、しほらしく見ゆるは此わさ也。

【機織】巻物凡唐土よりわたす處の沙綾純子其他毛織のたぐひにいたるまでおるなり。此職人西陣に住す。男女の所作なり。又奥嶋とろめんのたぐひ、木綿國々よりいづる。【鹿子

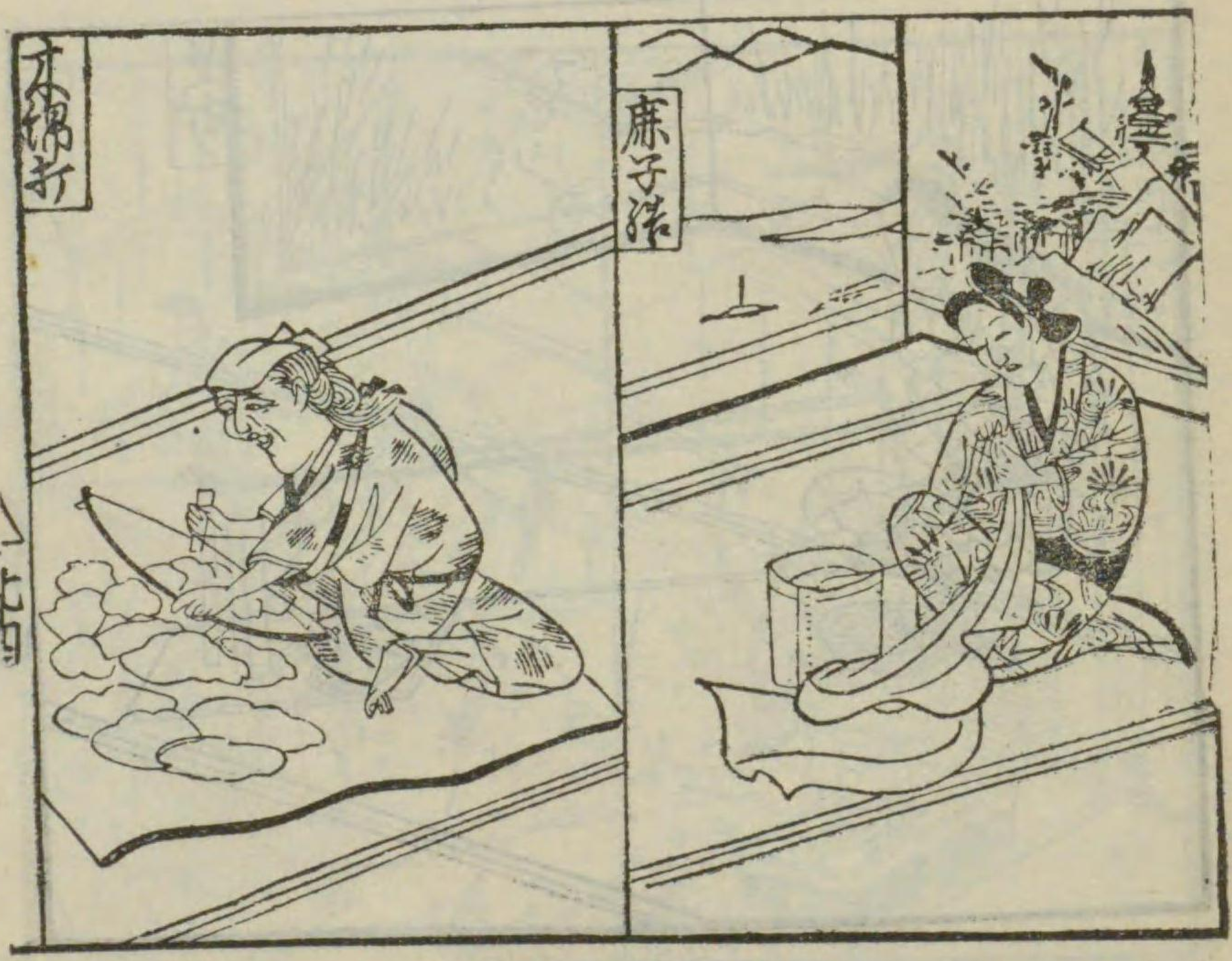


結】女の所作なり。ゐんきの帝、小鹿のまだらなるを御覽ありて結せ給ふゆへに鹿子といふとかや。【木綿打】男女ともにこれ打、近世唐弓と號してくじらの筋をつるにかけこれを打なり。唐弓打はわたよはきなり。



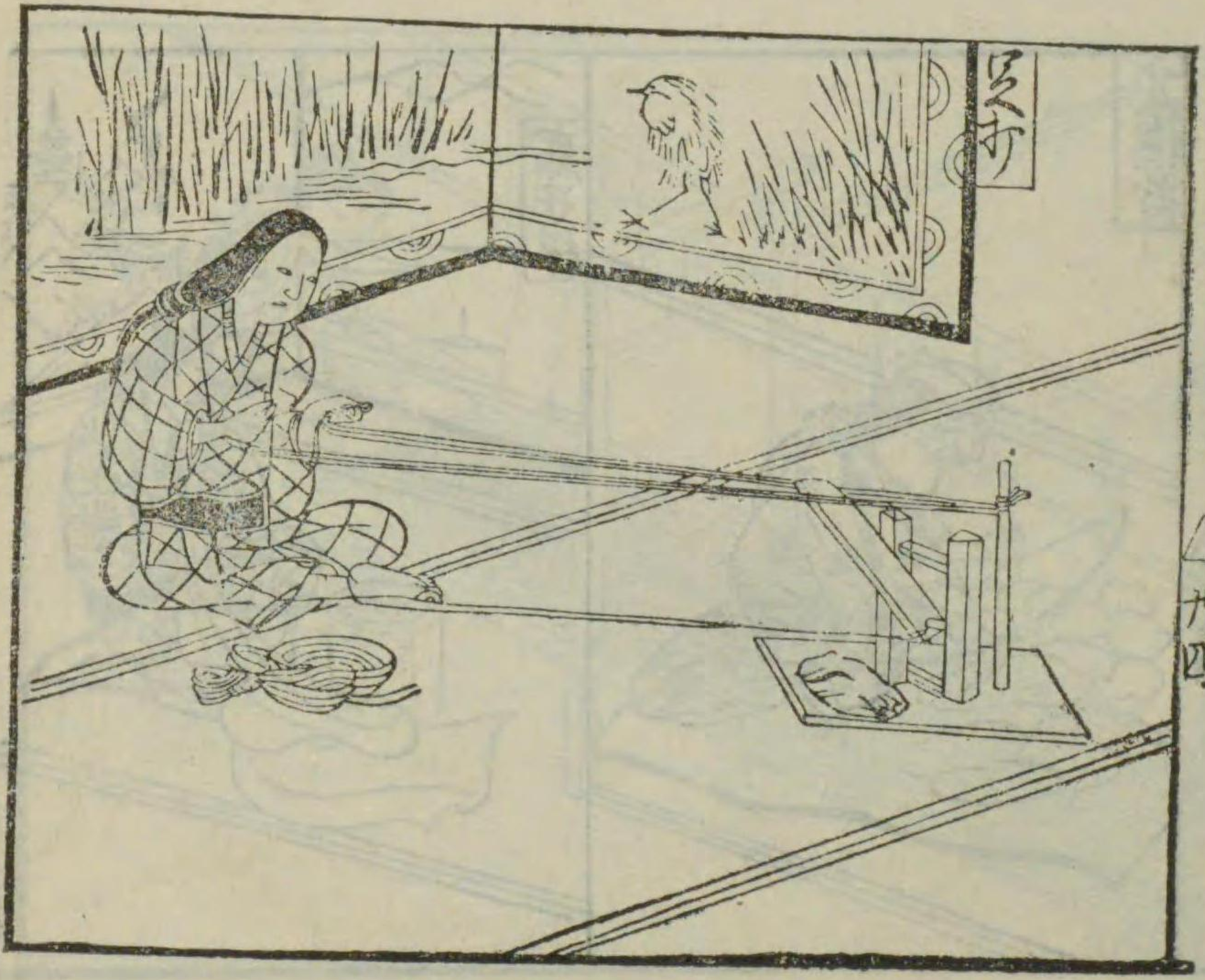
【足打】大小の柄糸、具足のおどし糸、是を組也。手にて糸をさばきくむ、目を足にてちいさき木刀にて打ゆへに、足打といふ。女のわざなり。又下緒打あり。是は打ばんもちがいおふ方男が打なり。

【ゐほし師】室町一條上ル美作、室町三條下ル町、此外所々にあり。箇板にしるし置。【は



ごいたや】童男、童女のもてあそび玉、ふりふりきつちやう、たいこ、はごいた、つくりばな、しやうぶがたな、かいらぎ此所にてこしらゆる。かぶとどうろひつほつかい此品々新町こひの棚に五せつくのいわゐ物をあきなふ。【ゑむま師】寺社へ繪馬をかくるは諸願成就のため也。いにしへは繪に馬をかきしゆへにゑむまといふとかや。今世は物數奇に色々こしらへ商なり。寺町二條より三條の間にあり。

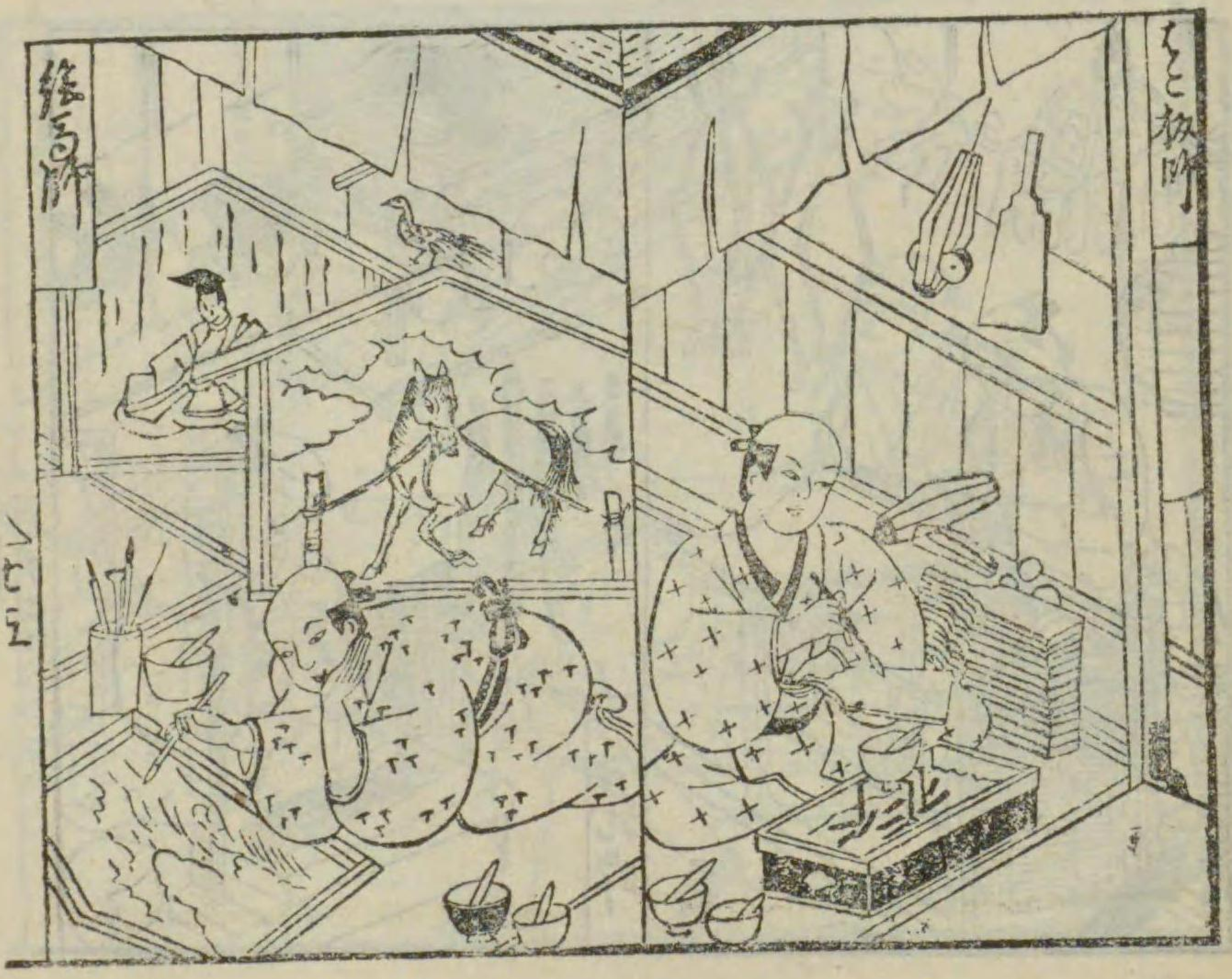
【かづら師】銅にて下地をこしらへ、上に髪毛をうへる也。若衆方、女方、角前髪、たて



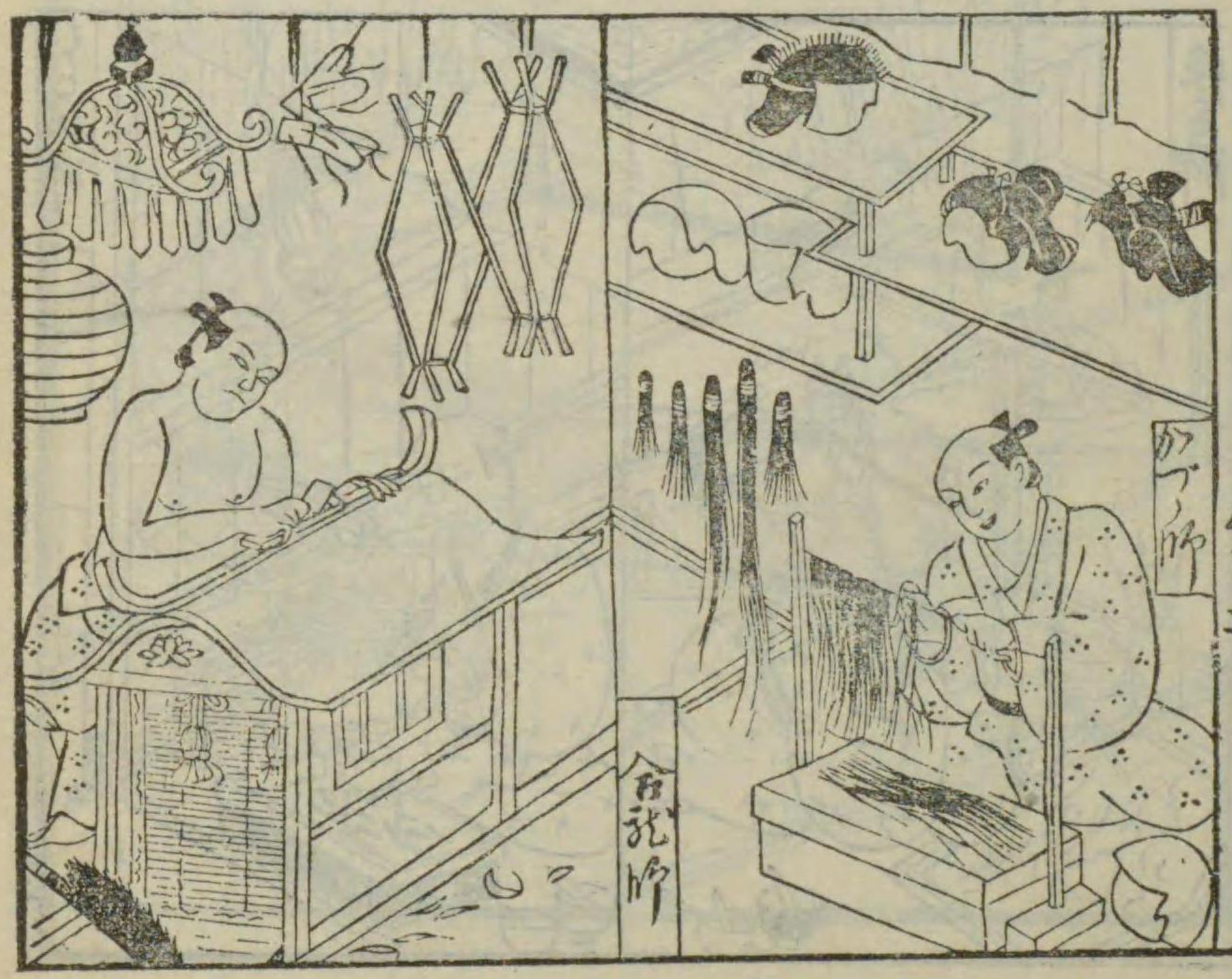
髪、なでつけ、四方髪、親仁方、それ〲にこしらへある也。四條縄手にあり。

【位牌師】いにしへよりありしにや、西明寺殿難波の浦にて老尼の所におとまりありしに、そのときいはいのうらに一首の哥を御かきおきありしと、太平記綱目にみえたり。寺町にあり。

【龕師】死人の死骸をいるゝ器物也。誓願寺通富小路西へ入ル町にあり。人間の一生は夢まぼろし、老少たのみがたきは浮世ぞかし。死て身にそふものは經かたびら、六道錢、其身をおさむるいれものは龕桶、されば此職を



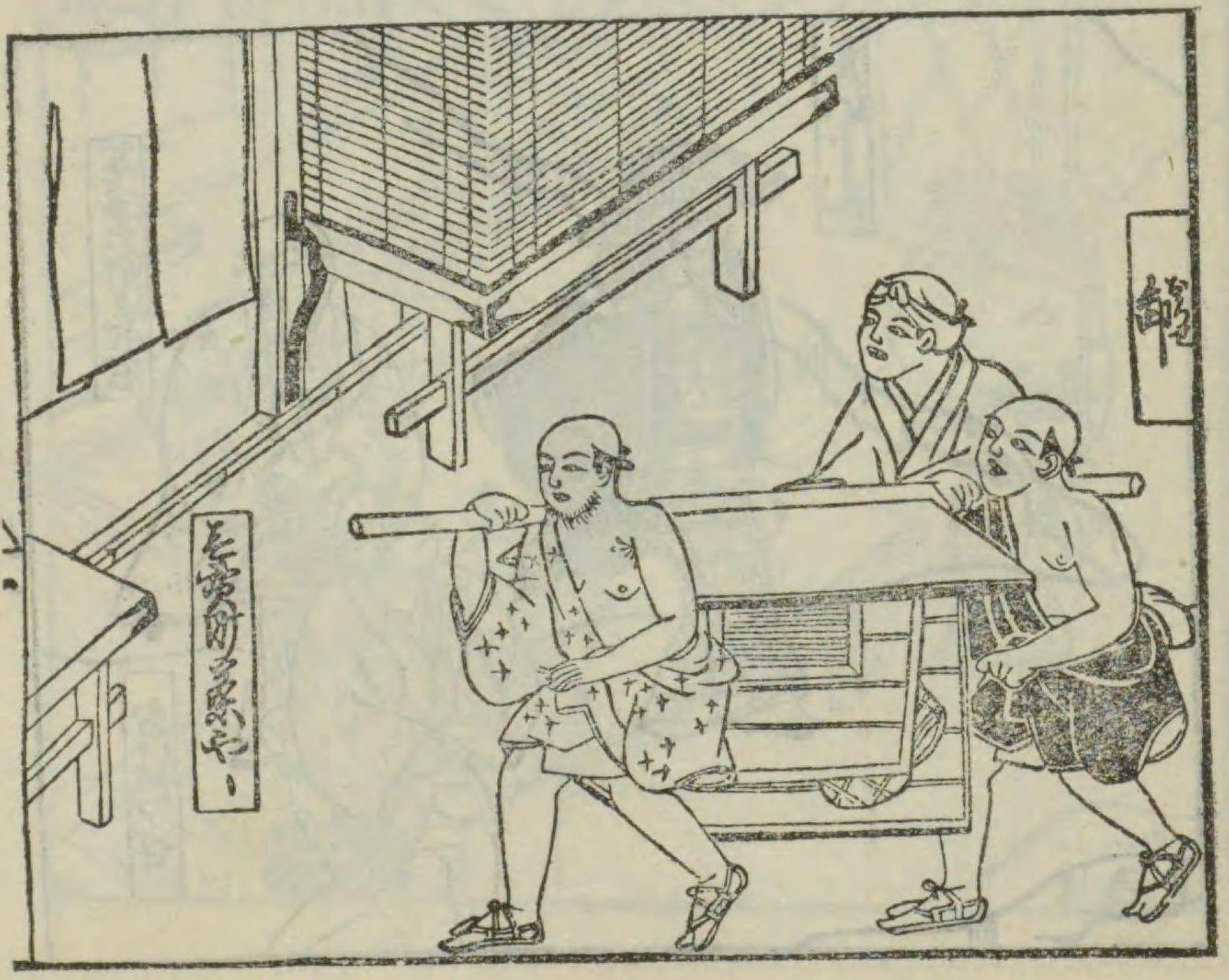
いとなむともがらは、慈悲のまなこをつけつくりたき物也。人間の落着の入れ物ぞかし。



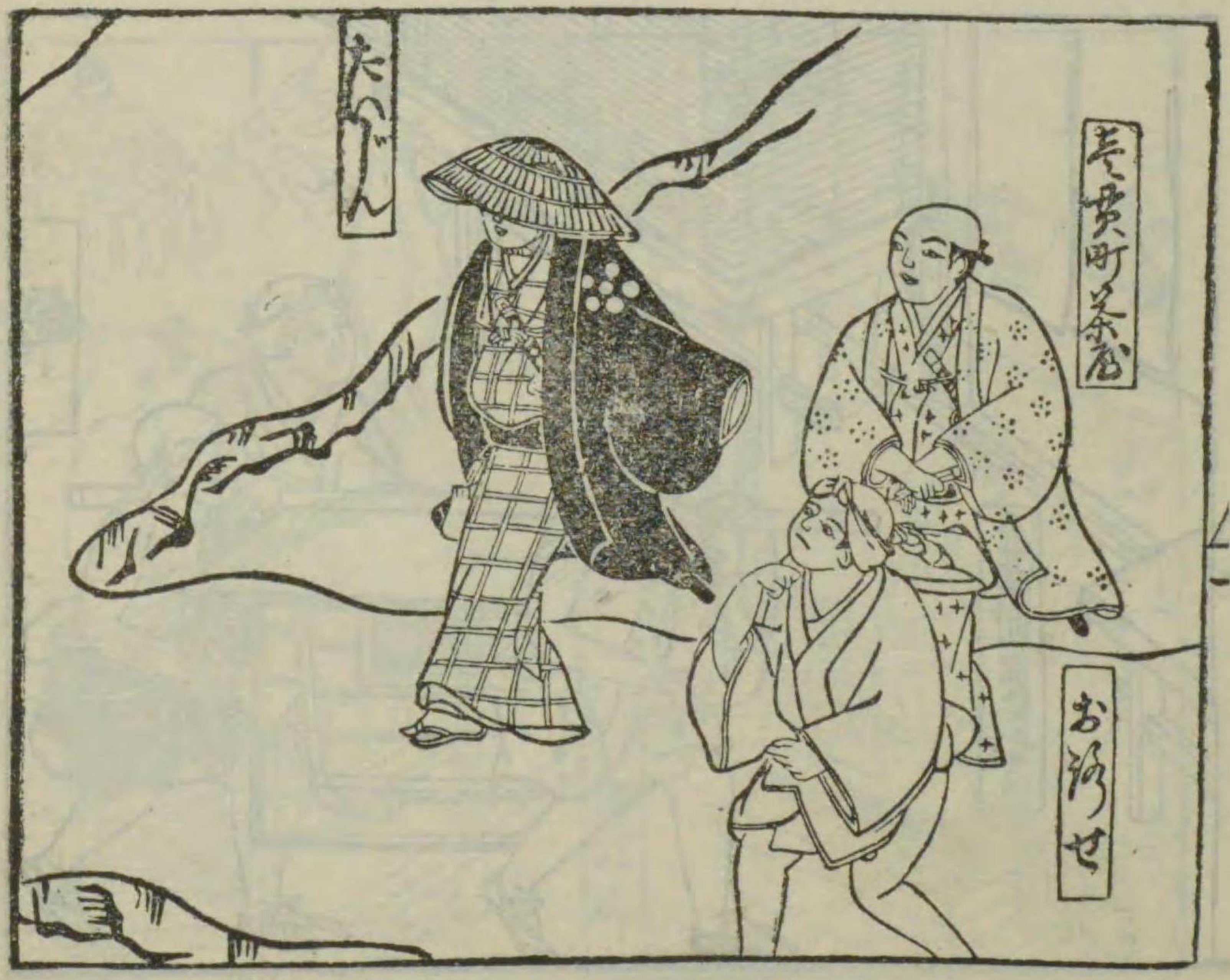
所作入
由來入

人倫訓蒙圖彙　七

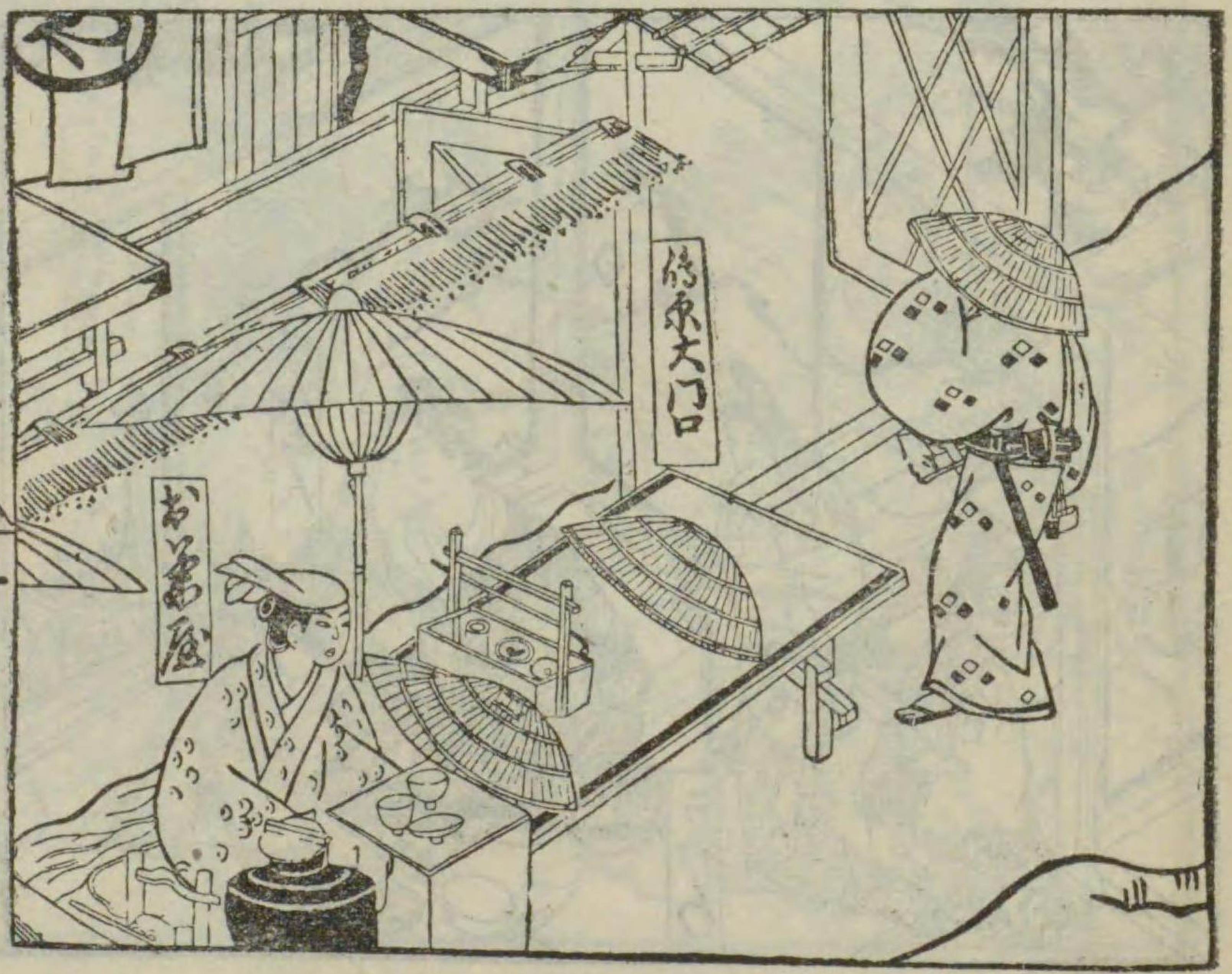
【嶋原の茶屋】丹波口のちや屋、此所は色里にかよふおのこ、三まいがた、四まいがたのおろせにあしをはやめそらをとぶがごとくにかけり、茶や近くなりぬれば、六尺ひとり先へはしり、茶屋のおもてとをりさまに、たれさま御出とつたふれば、内よりよう御出と、いふよりはやく燒飩のあみがさもち來りぬ。大臣は衣紋の馬場にて駕よりおり、しのびあがさふかくかむり、朱雀かの野邊のほそみちあゆみ、大門に入りぬ。入口のちや屋にて、又



それ樣のおこしといへば、はやうござりましたとこたゑつゝ、大しんのしりに付てあけやへおくり、門口より歸る。たんは口のちや屋はあげやへいりて其座をしめやかにつとめ、酒などたべおくりむかいする事をつとめとす。內の茶やにては、はし女郎を一尺一寸にてもてなす。はしげいせいのあげやなり。夜るのきやくはせぬとかや。はしつぼねにかよふなる者は、大門口のぼゝが茶やにて三錢五錢の價にて笠をかり、火おけやりたやすみそゑて、とはな哥うたうも又おかし。【嶋原】都の遊女町をしまはらといへるは、西國の島原の城く

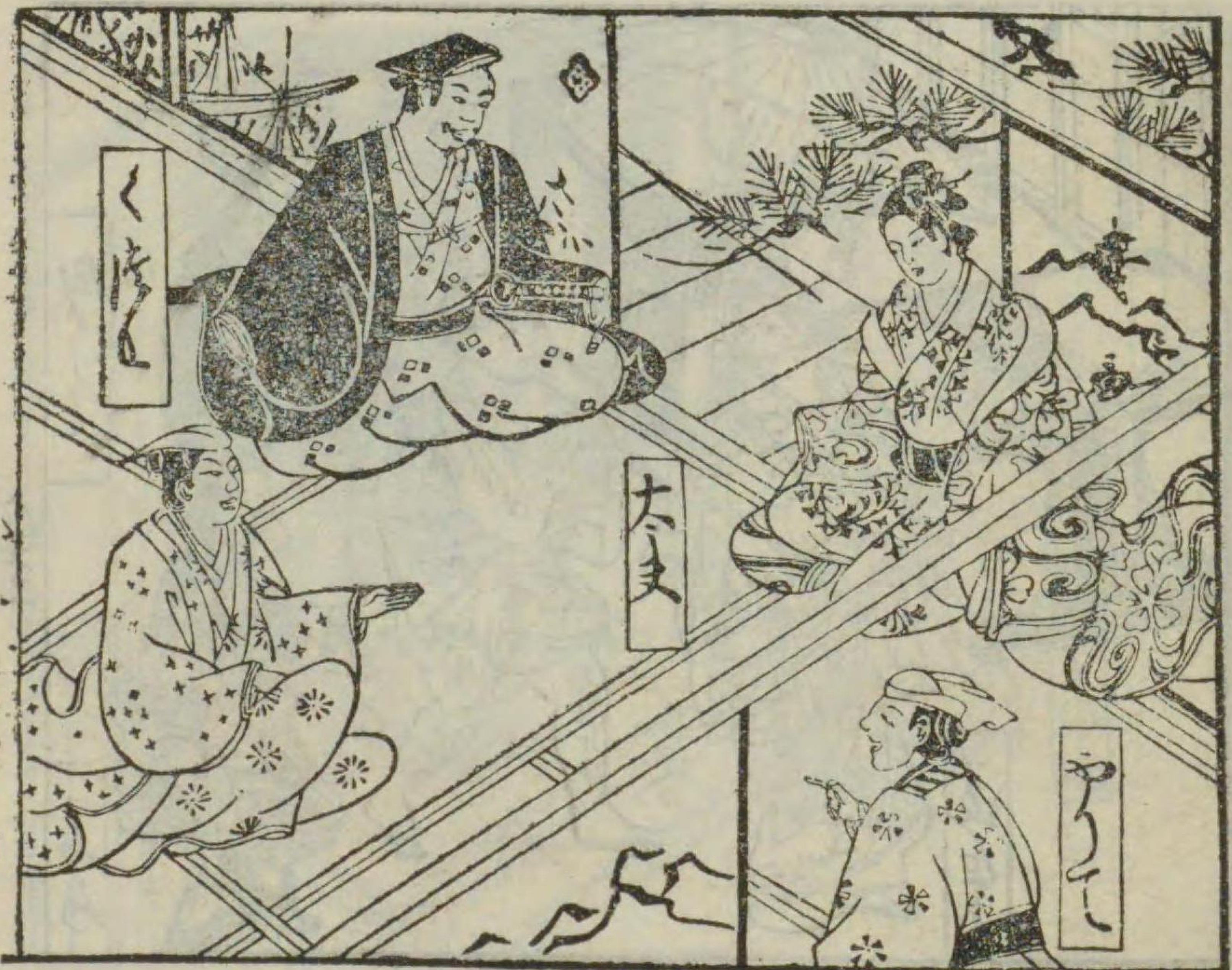


わく一方口なるになぞらへて、爰もかく名付しにや。傾城、けい國のおこりを今改いふはくたなり。いにしへは二條柳の馬場のほとりに、四町四方ニ家作りせしを其後六條へ移りて三筋町といゝて時めきけれ共、猶都の町ちかければとて、今の朱雀にうつる。むかしはあげ錢も五三天神とて五十三匁貳十五匁なりしを、いつの比よりか五十八匁三十匁十一匁ニなりぬ。大夫には引舟とてかこい女房一人めしつれらるは、きやうこつな事におもへども、色ごのみの若人は、おにのせんべいくふよりいとやすくおもひてかよふとなり。色こ

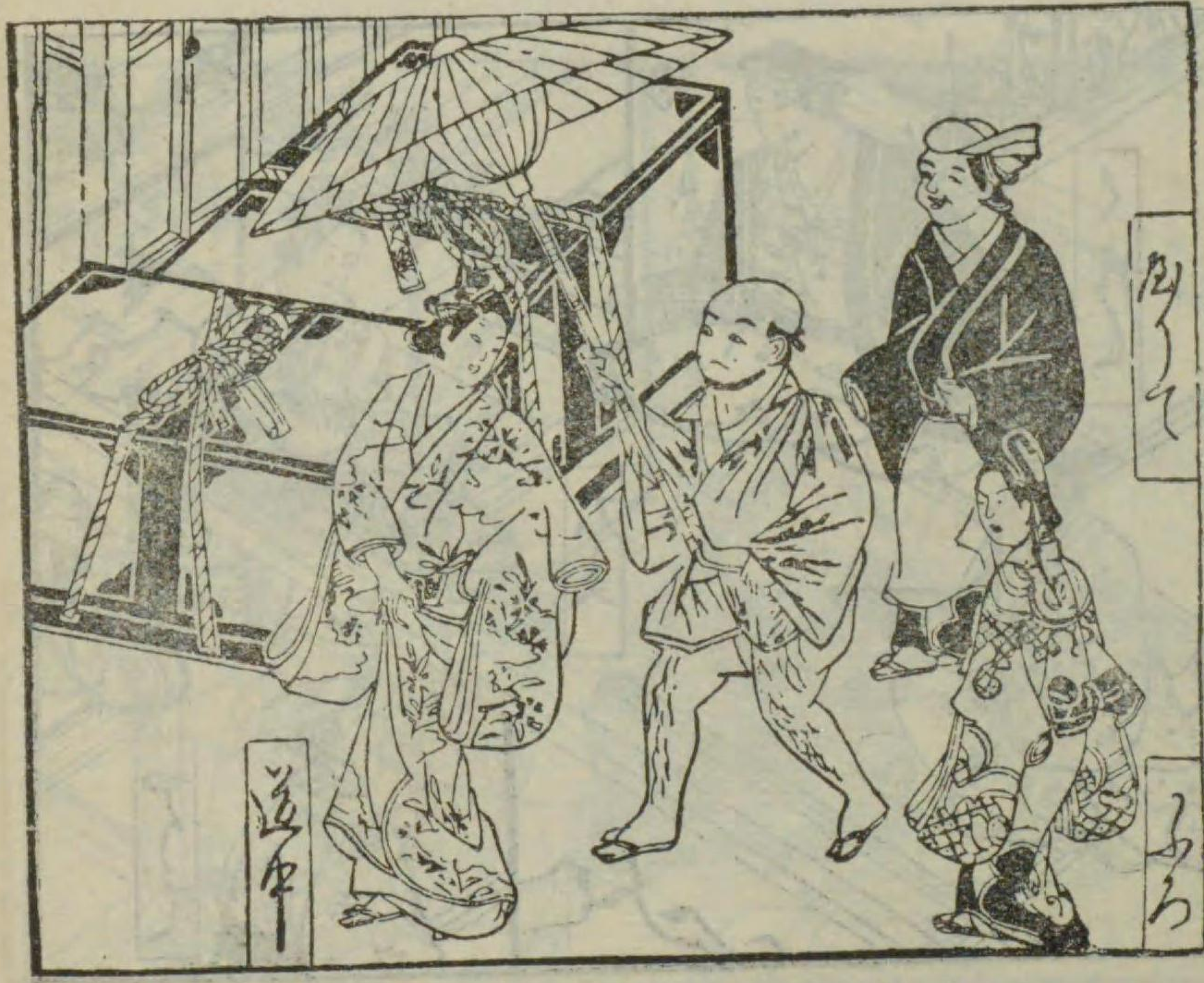


のまざらん男はよけれと、水法師のいゝしもさる事ぞかしとはおもへ共、辻風とけいせいにはあわぬがひみつとかや。

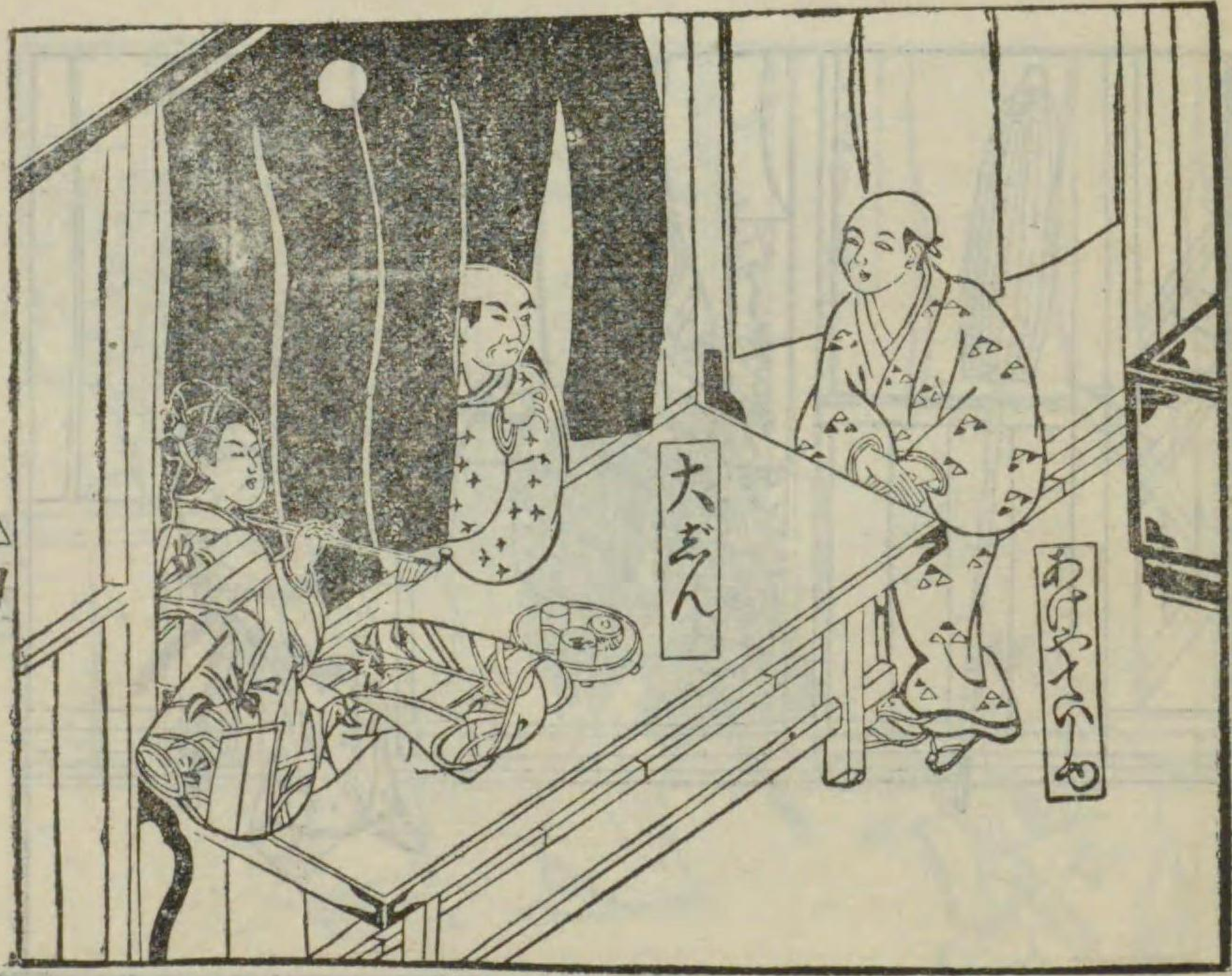
〔久津輪〕傾城屋の亭主をくつわといふは、出所いまだ不レ考、ある人のいふは駒を乘入るをば、まづくつわをはますを最初とす。これのり馬をしたつる第一なり。此ごとくあまたの女子をかゝへおき、それ〴〵にしたつるは、けいせいやのわざなり、されば東西もしらぬ女子、おやの手をはなれ、此うきふしのわざは、牧おろしの駒のごとくなるによりいふとかや。〔揚屋〕女郎諸分の會所なり。亭主客へ



のあいさつ愛敬あれば、かいてもそれ〲に露をうつなり。さればむよくなるをよしとす。

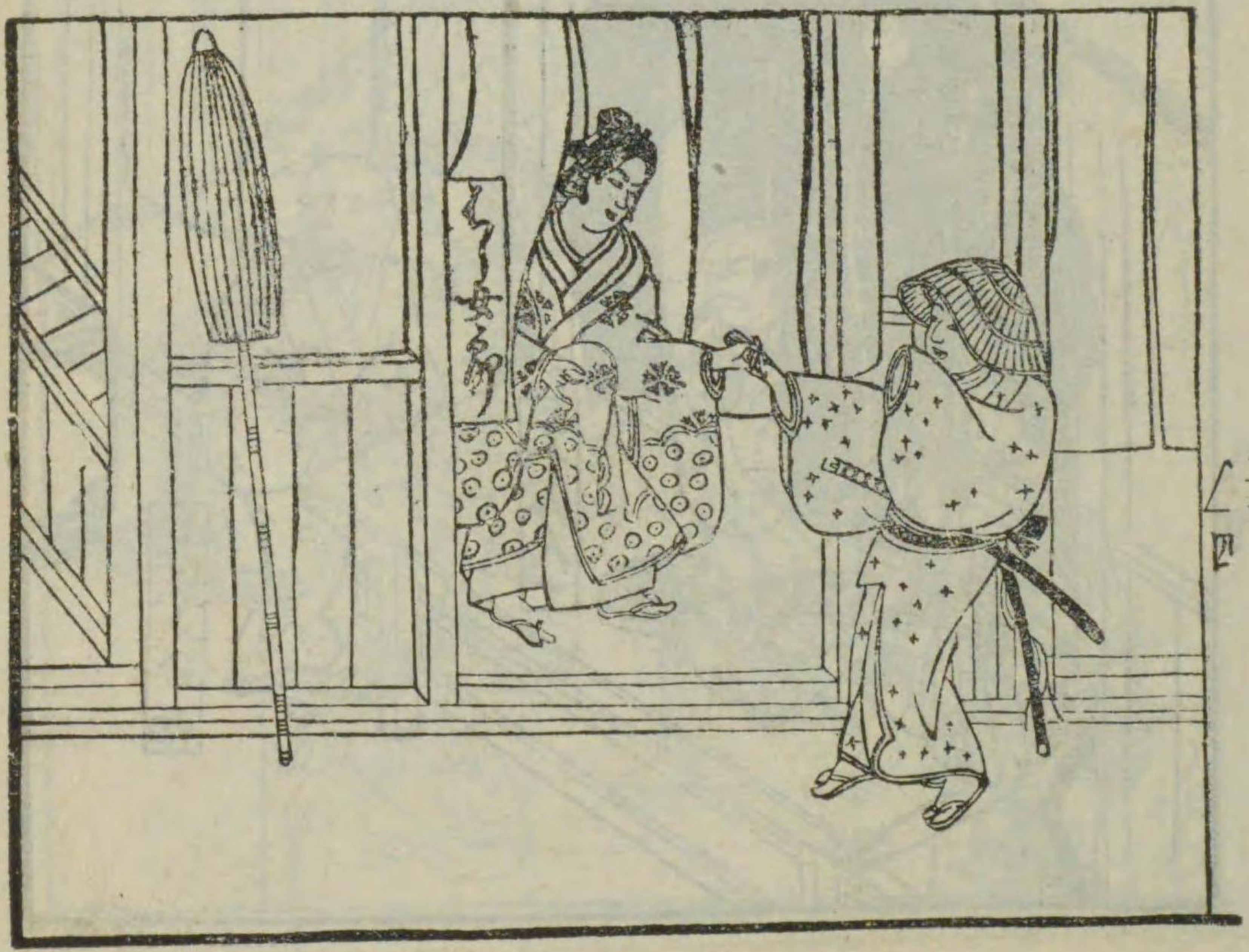


【傾城】大夫、天神、鹿戀、半爾、横町都鄙のもの此所へ奉公に出すなり。年のさだめは出入の年はのけて、つとめ十年ときわめて、傾城のならいにて、つとめのうちに身あがりすれば、そのあげ錢親方への借金とつもり、年季あきて此かねをたてねばいださぬなり。つとめのうち、衣裝と朝夕の食物こそはおやかたよりいだせ、そのほかは皆自分まかなひなり。世にくるしきわざはまたとたぐいなかるべし。あはれむべし〲。



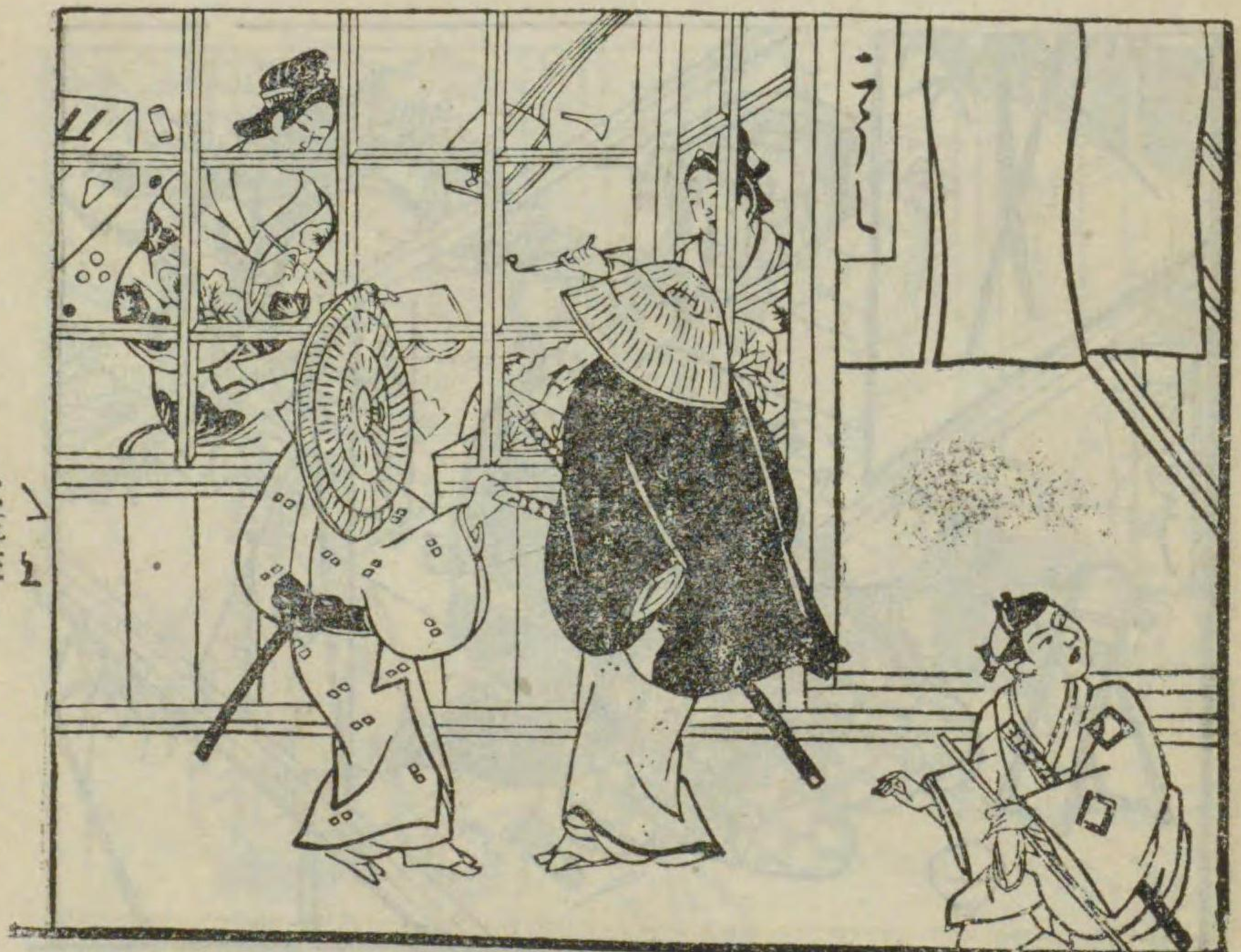
【野郎(やらう)】狂言役者男子を、遊女屋の女をかかゆるごとくにかゝへ置て、げいをしいれるなり。十四五になればそれ〲に色つくり、芝居へいだし、げいよく名をとれば、我門口(かどぐち)に大筆にて誰かやどゝ名字をしるし、夜るは戸口に掛燈臺(けとうだい)に名を書付おくなり。いまだ舞臺へいでぬはかげまといふ。他國をめぐるを飛子といふなり。

【繩手(なはて)水茶屋(みづちやや)】是は芝居のそれ〲の名をいいたて、のぞみの札(ふだ)をうるなり。なじみのかたがたは茶屋にこしをかけ、茶たばこなどのみ、狂言をみる也。茶やあんないして木戸(きど)を



二五一
四

いれ、よきところを見立置(おき)、さてたばこぼん、ゆとうにちやを入、ちやわんそへてもてくる、こゝにてはたごもするなり。

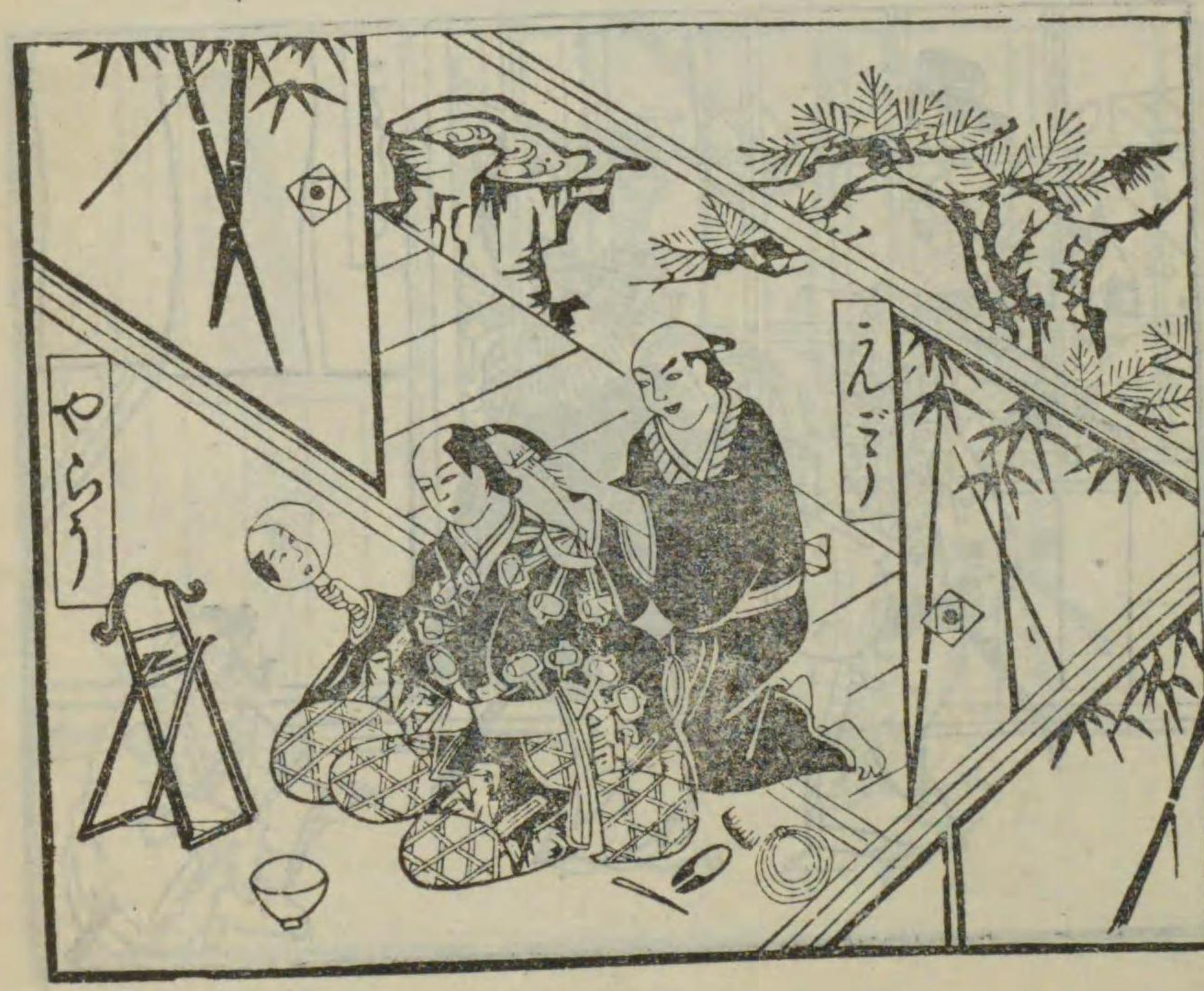


二五三
ニ

【木戸番】こゑたかくわめくを第一とす。あるが中にも小芝居の木戸番はさまぐの口をたゝく。

【狂言大夫】女がたの中にて、器量よく、げいよくて名をとるを、其座の最上大夫とするなり。三十より四十におよひては、くわしやがたといふ。

【立役】一切男の役をなすを立役といふなり。

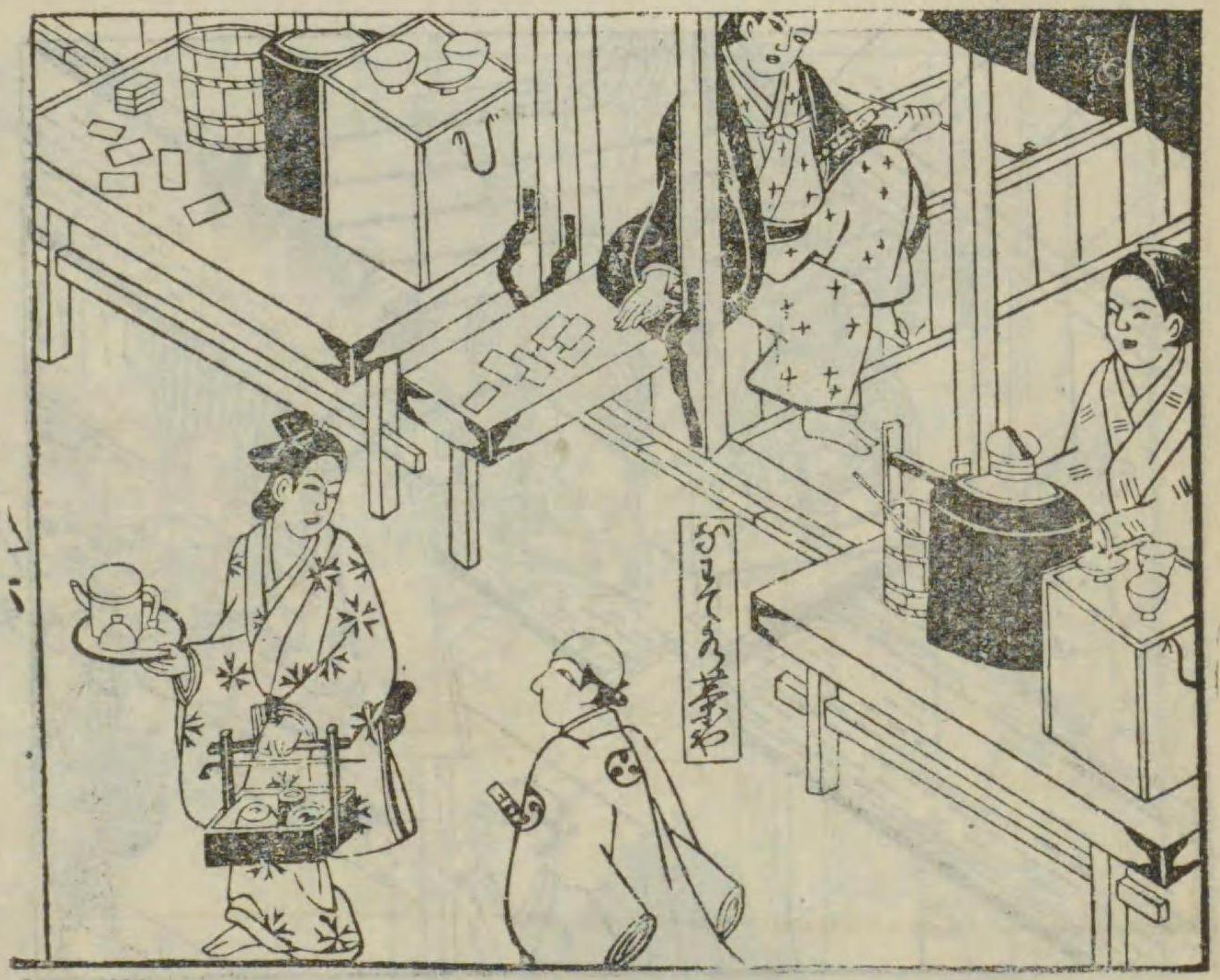


【親仁方】老人にさもらしくにせ、おちつきたるをいふなり。家老職をまなぶをば實方といふなり。【敵役】みるとそのまゝにくらしく、無理な事のみいゝ、いかつがましき顔つきする。悪人方ともいふ。

【道化】うつけを第一とし、うそかましき事のみいゝ、なりふりまでおかしげに見へ、見物のかたぐわらいを催さす。

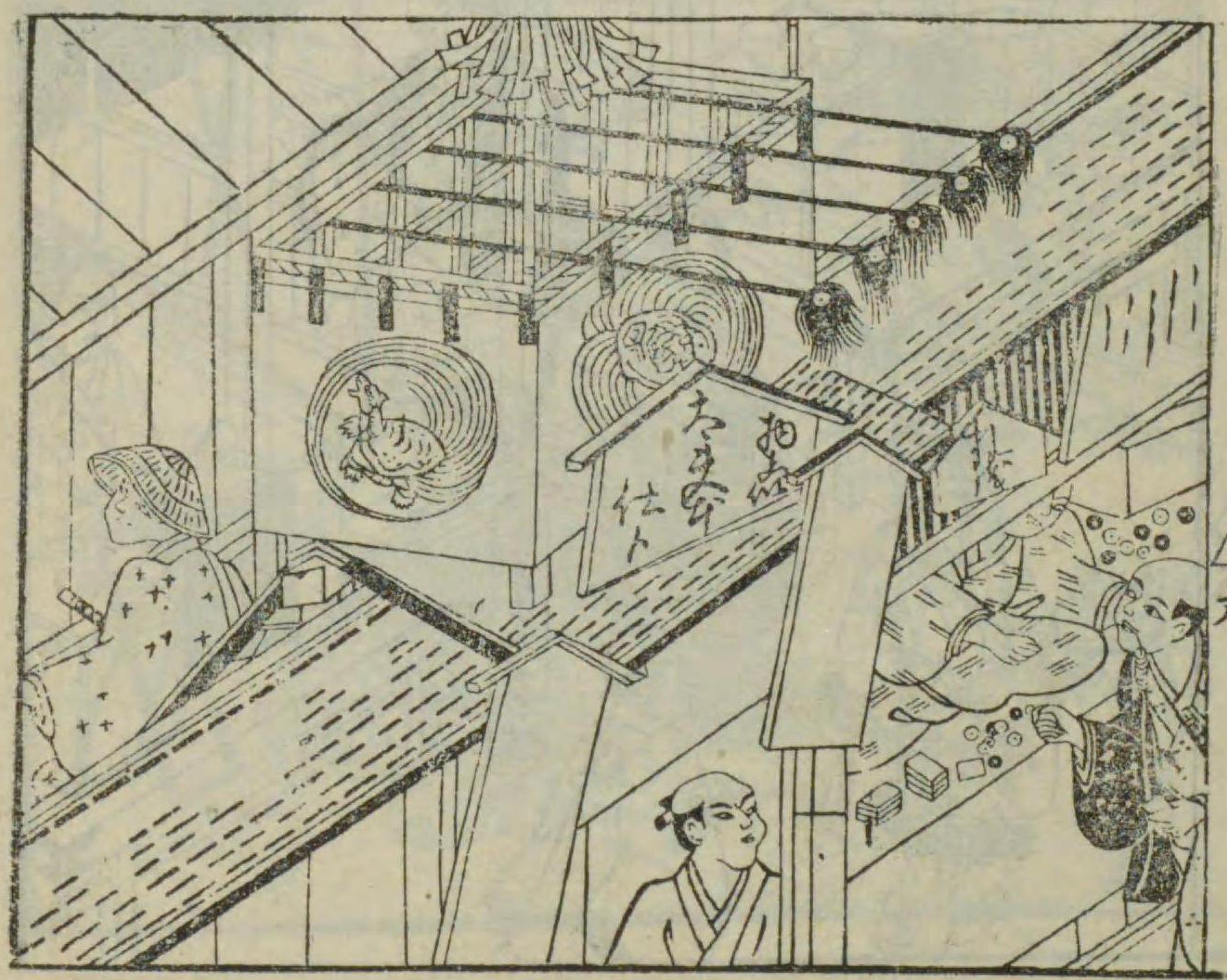
【小詰】歩者、若黨をはじめ一切人につきて自身役をせさるをいふ。

【淨瑠離大夫】淨瑠離御前のことをつくり、ふしをつけかたりはじめしとかや。中比みや



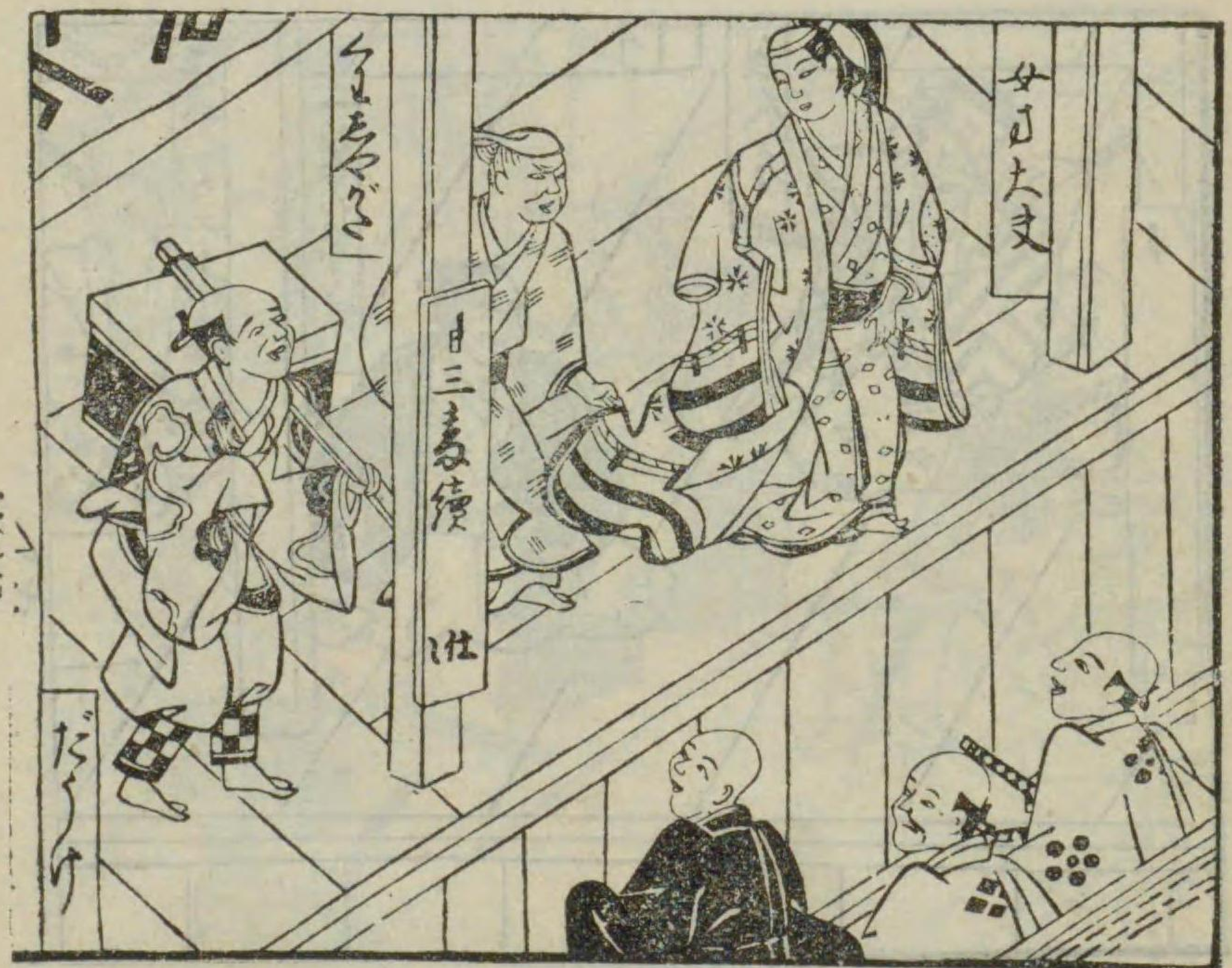
この宮内左内とて上手のあり、御代御長久なればいやまし上手もいできて、今みやこにては嘉大夫、角大夫とて其名四方にきこゑたる名人ありて、雨流を田舎までもてはやせり。

【人形遣】さま〴〵の人形あり。くびを左右にはたらかすは宮内左内よりはしまるとかや。道行舞女がたかるわざをつくすを上手とす。

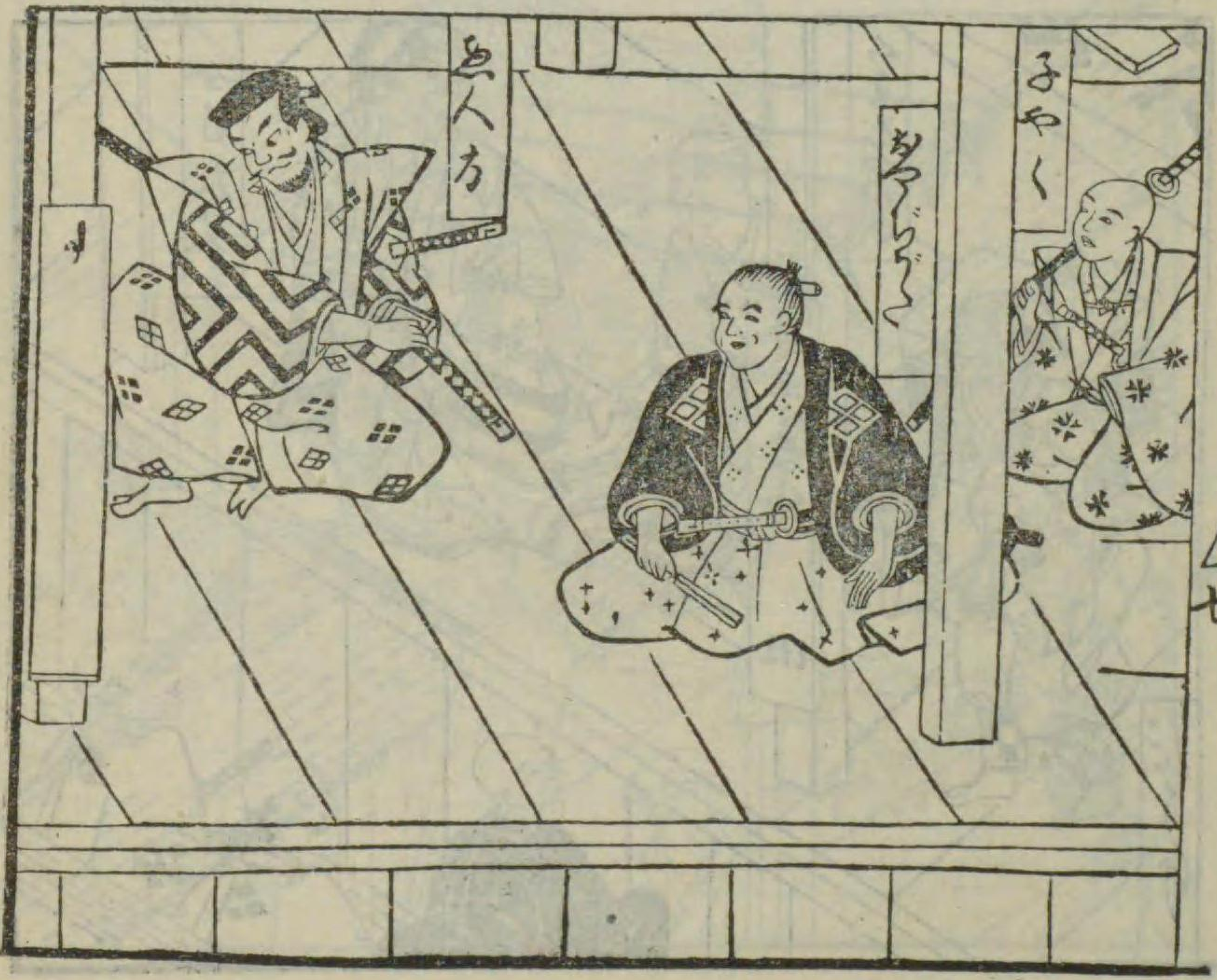


勸進餬部　次第不同

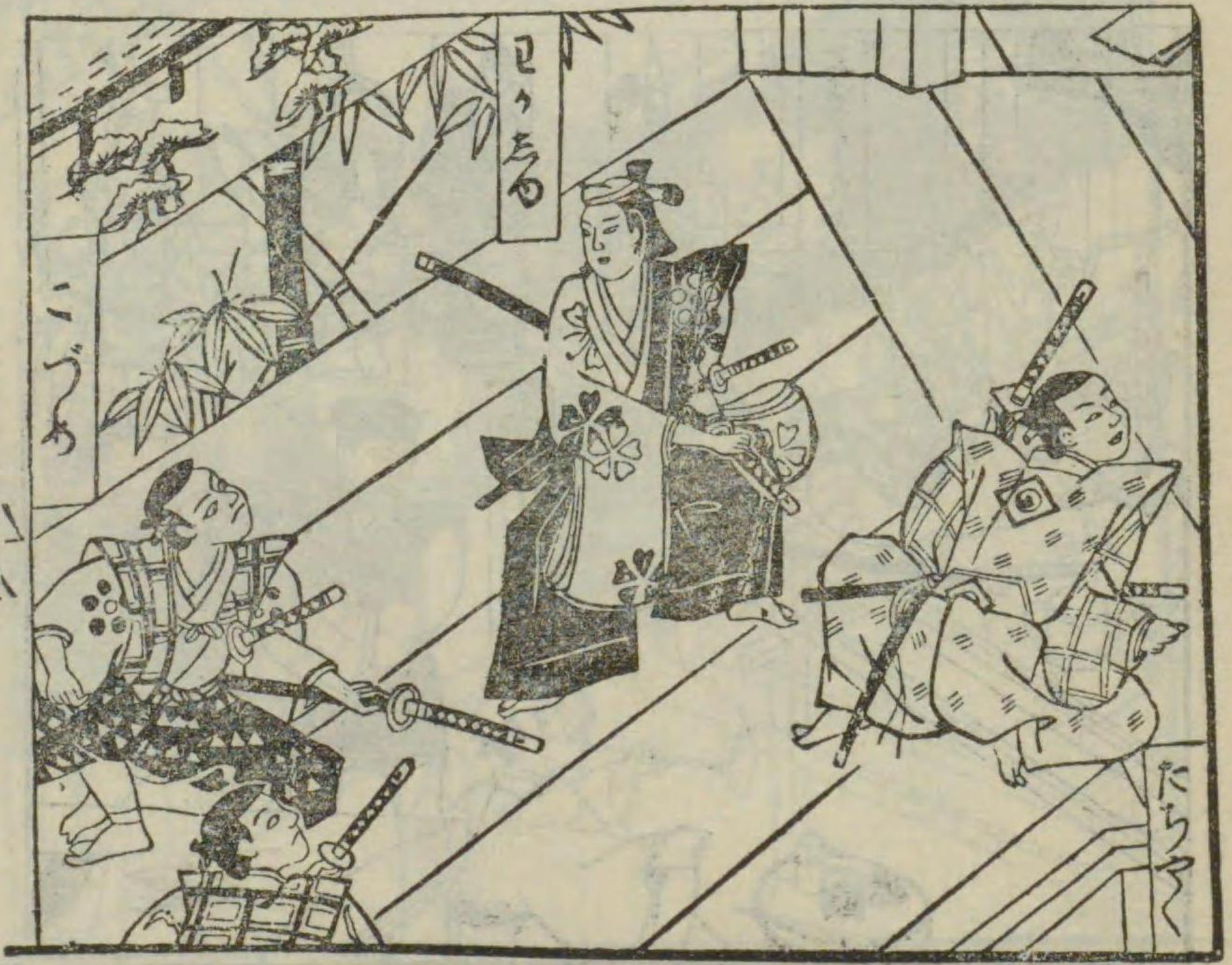
夫勸進とは在家の男女に上なき佛法を說きかせ、又は無常迅速のことはりをしめし、無明の夢をさまするすゝめをなし、これによつて



法施をうくるを勸進といふなり。然は施すもの大ゐに功德をえ、僧は法施をなすの役者なれば、衆生に功德の種をうへさするゆへに、僧を福田とはいふ也。然るをいま時の勸進は己が身すぎ一種にして、人をたぶらかし、僞をいひて施をとる。是全盜にひとしき也。號て唱門師といふ也。

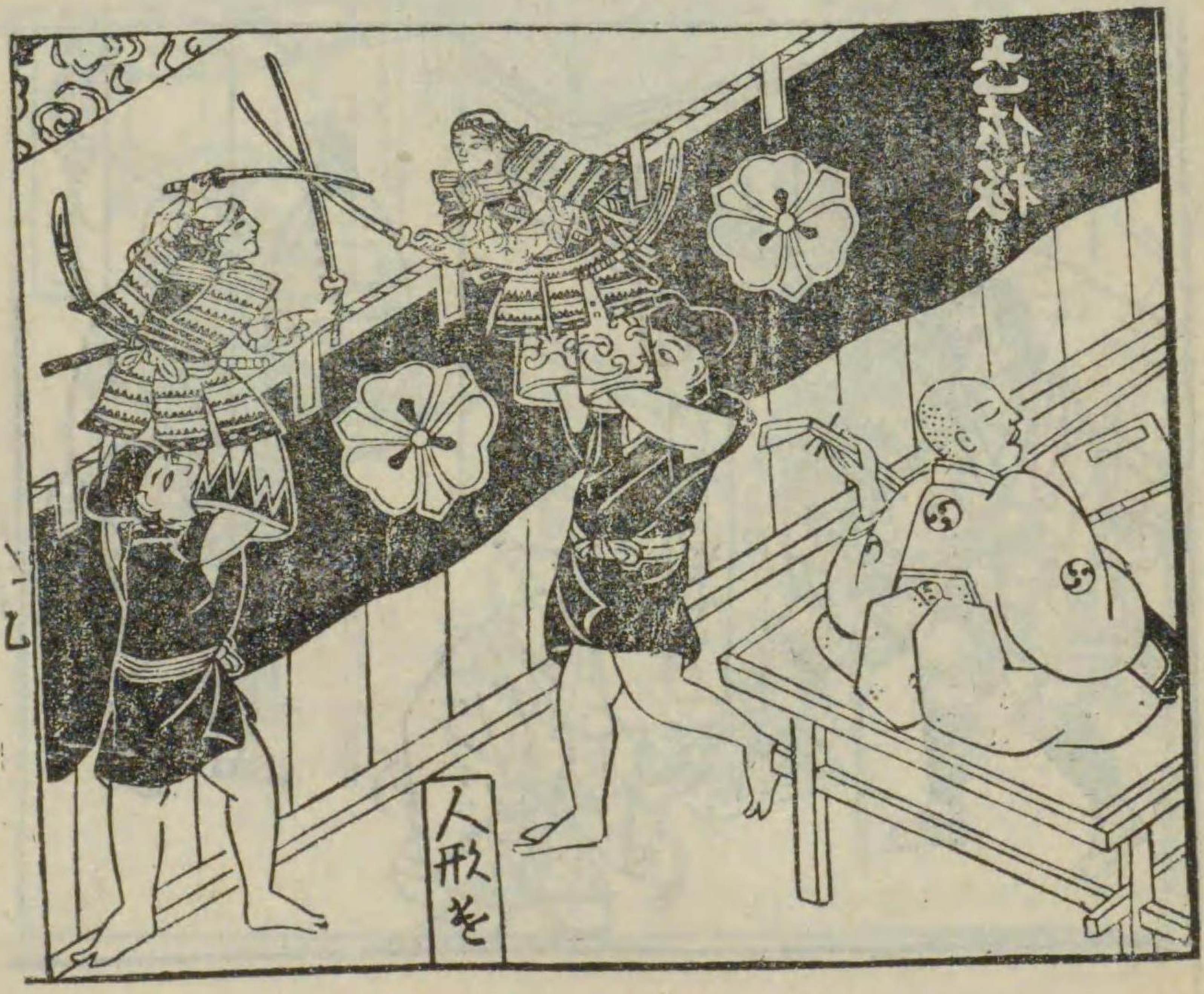


【鐘鑄勸進】我過去劫を思ふに、大法をもとめんがためのゆへに、世の國王となる。五欲の樂に着せず、鐘をならして四方につぐると法花經にみえたり。天竺にをゐて祇園精舍にはじめて鐘をかくるとかや。此かねの功德ふ



かき事諸傳にくはし。當世賣僧のてだてとして遠郷他國の寺號を名のりて、鑄させざる鐘鑄のすゝめ文匣のふたに古釘、古金をいれて持もあり。紙につりがねをゑがきて竹にはりて、たからかにいひめぐる也。此罪幾のむくひならまし。地獄の猛火は鐘鑄の鞴にはをとるまじ。

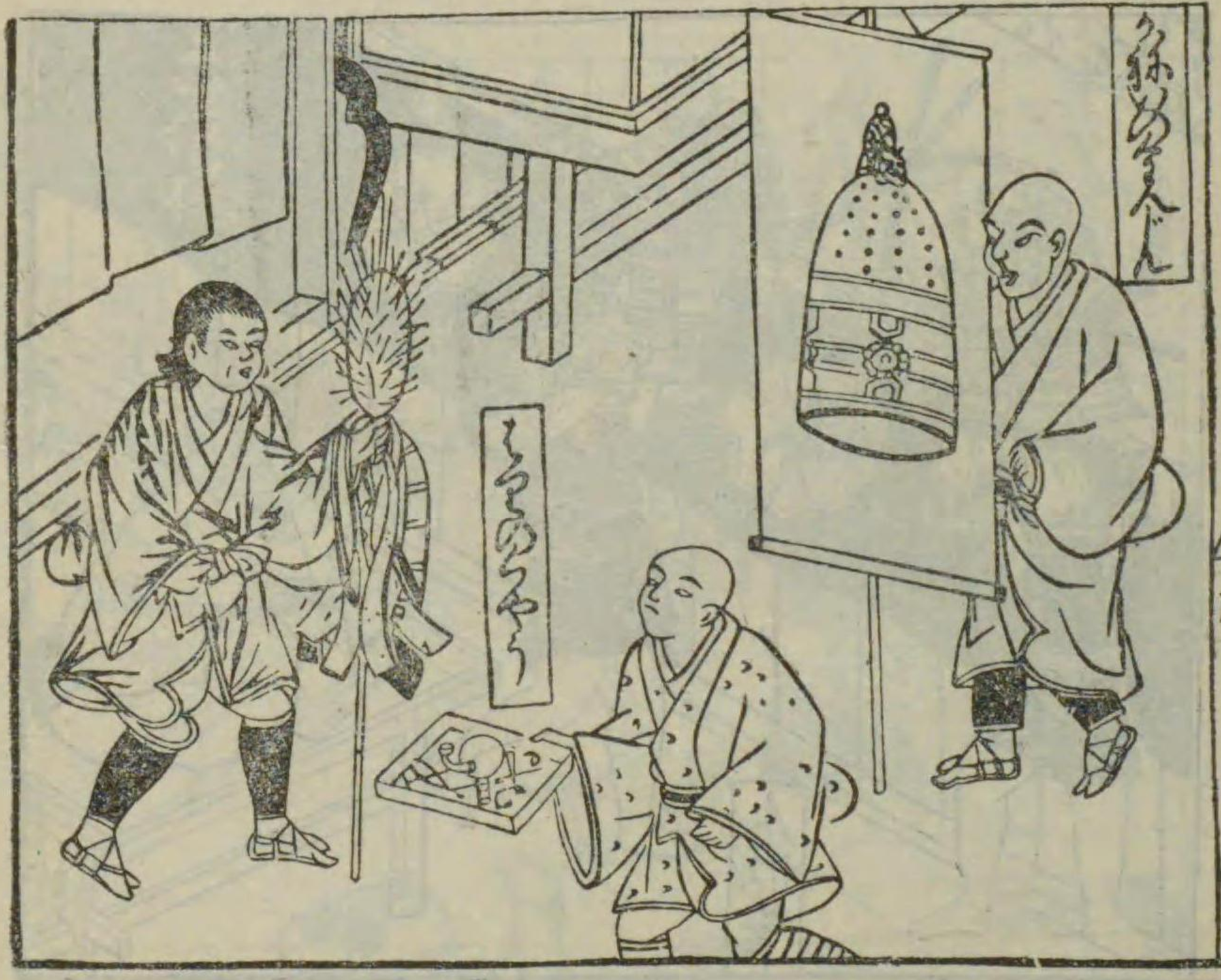
【針供養】むかし傳教大師此京開基のとき、王城の寅卯の間に針をおさめて鎭護の地祭をし給ふ。これ針の供養の出所也。といふ說あれども、其心大にかはるべし。かれがいふを聞ば、女中万年中つかい、又は折たる針の恩



徳ふかき也。それに供養をせざれば地獄に落る、此故にはかなき女童是におどろき錢をとらるゝなり。益なき事なれば國土の費ともいひつべし。智はすくなく、愚はおほきうきの世中ぞはかなし。

【庚申代待】庚申は日讀の名によつて名づく。實は靑面金剛と申奉る。むかし攝州天王寺にはじめて天降給ふ。其緣起今にあり。此ゆへに他所に庚申の尊躰を安置する事ならず。

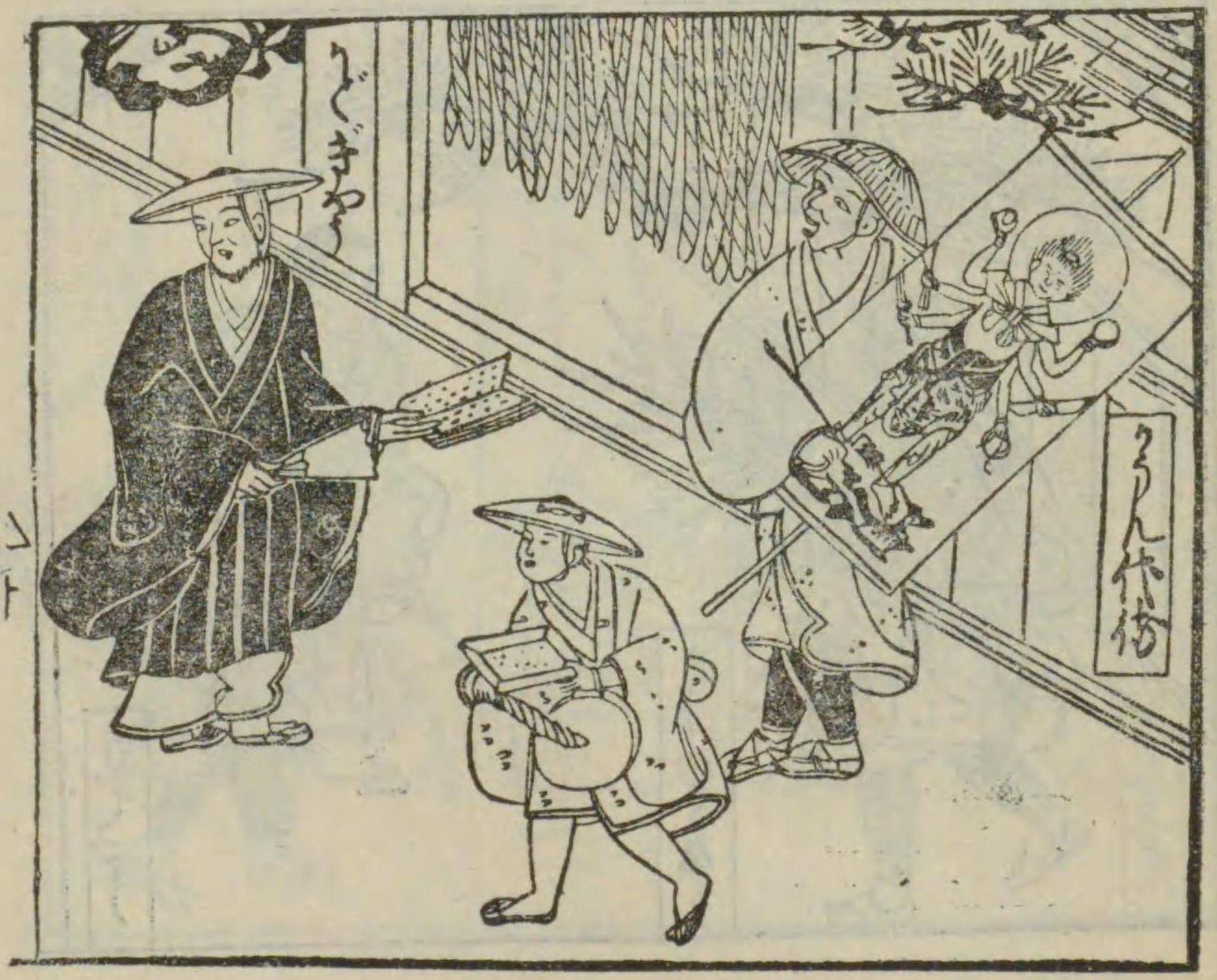
【門經讀】當世觀音經の訓讀つれぶし時行ものなり。または日蓮宗の物もらひ坊主は經を



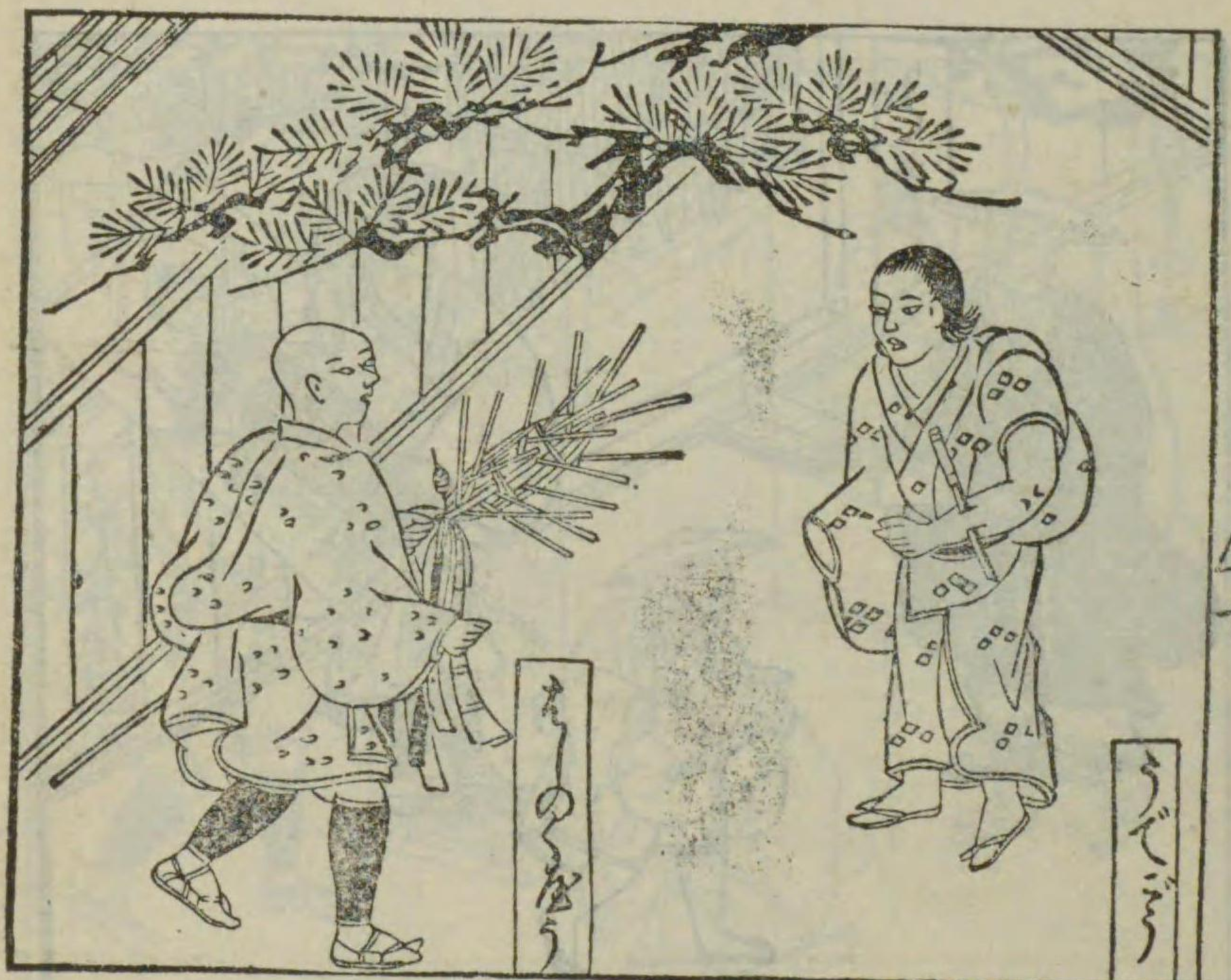
讀事掟にて、鈴打ならして白聲の息づみたる風あつてかくれなし。

【腕香】佛法をもとむるには身命をおしまぬ事古今の通法にして諸祖師其行跡あまたなり。然ども今行人はこれをふれありきて人にみせ、食をもとむる手だてなれば、名は行にして澆山かはれり、とかくつらきは命かな。

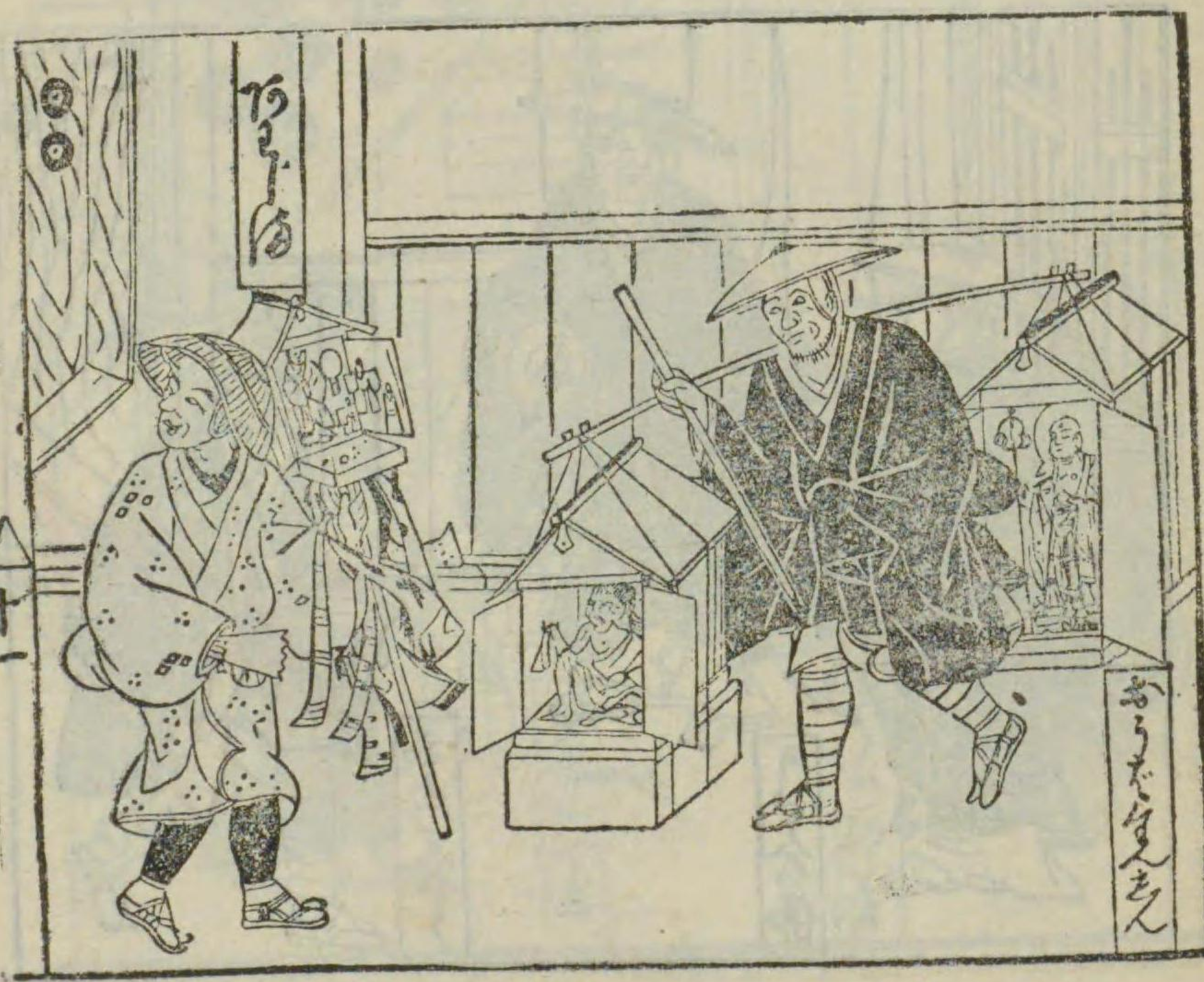
【箸供養】かれがしかけ針のくやうにひとしく、年中の箸の恩德を報ぜされば地獄に落る也、とつと古風のときは信仰したる者多かるべし。今されたる憂世にさへ片邊土にはだまさるればこそ根からたゆる事はなし。【御優



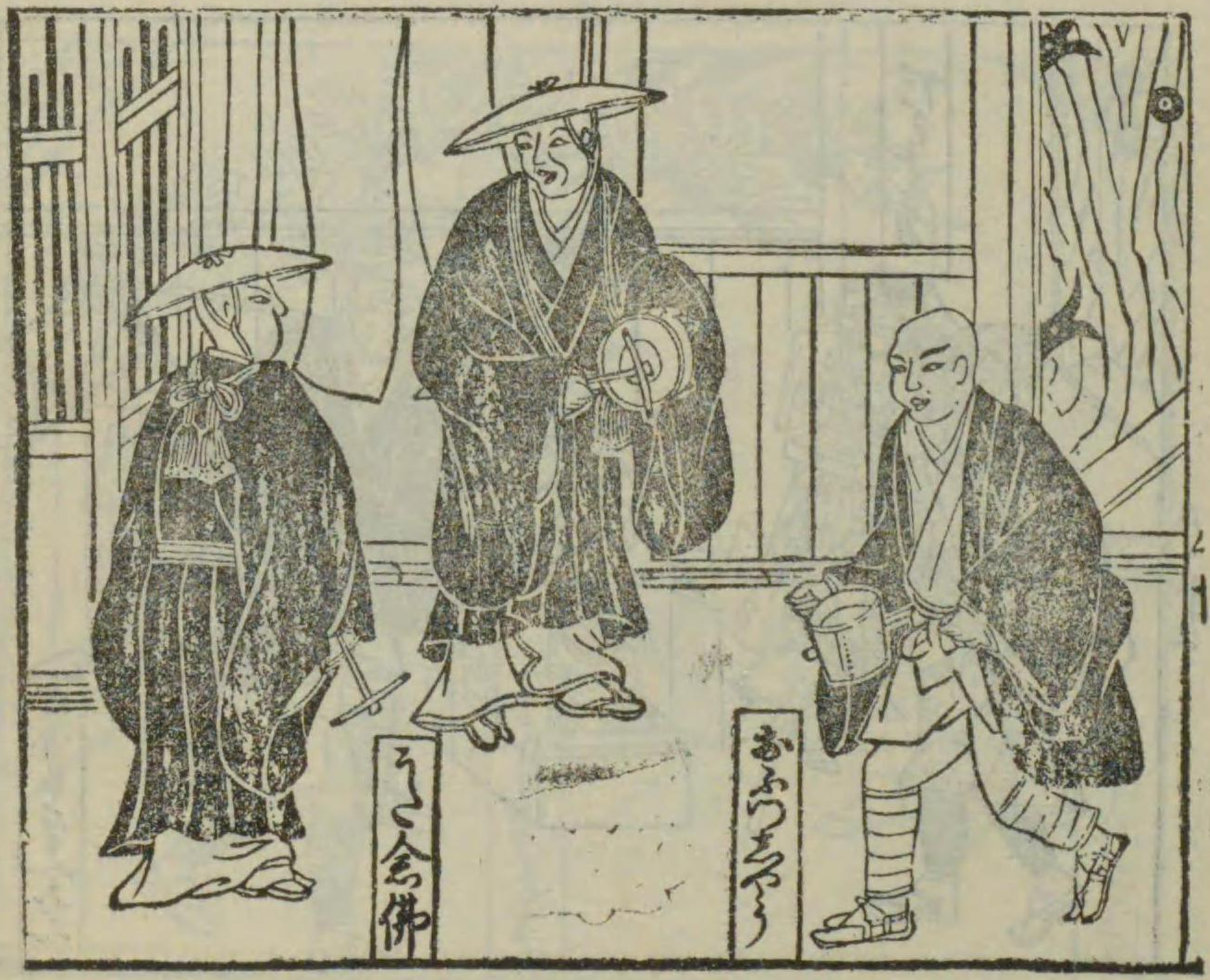
婆勧進】傳聞、彼三途川原にはすさまじき老女の有て、迷土に趣く男女の一衣をはぎとり給ふとかや。今生より此人に馬をつなげば、餘所見をして通さるゝと、みてきたやうにまさまさといふほどに女性の信仰するは聞えたる事也。



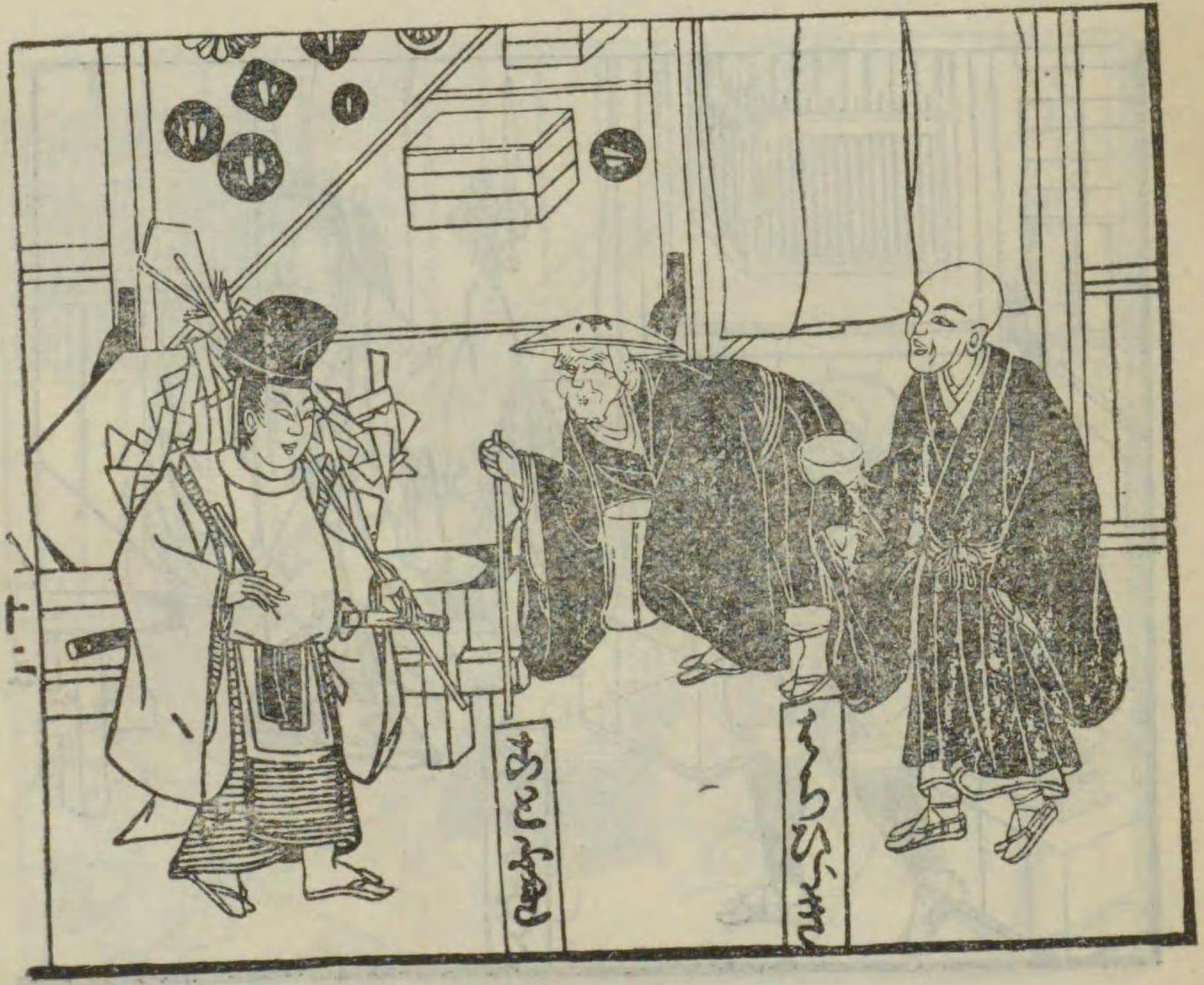
【粟嶋殿】かれが口上一から十皆誤なれども、それをたゞす者もなし。女の身にとつて第一氣の毒の病をまもり給ふといへば、愚なる心からおしげなくとらする也。夫粟嶋は紀伊國名草郡蛟田にあり。其神は陽躰にして女躰にはあらず。然をはり才天女の宮といふ也。



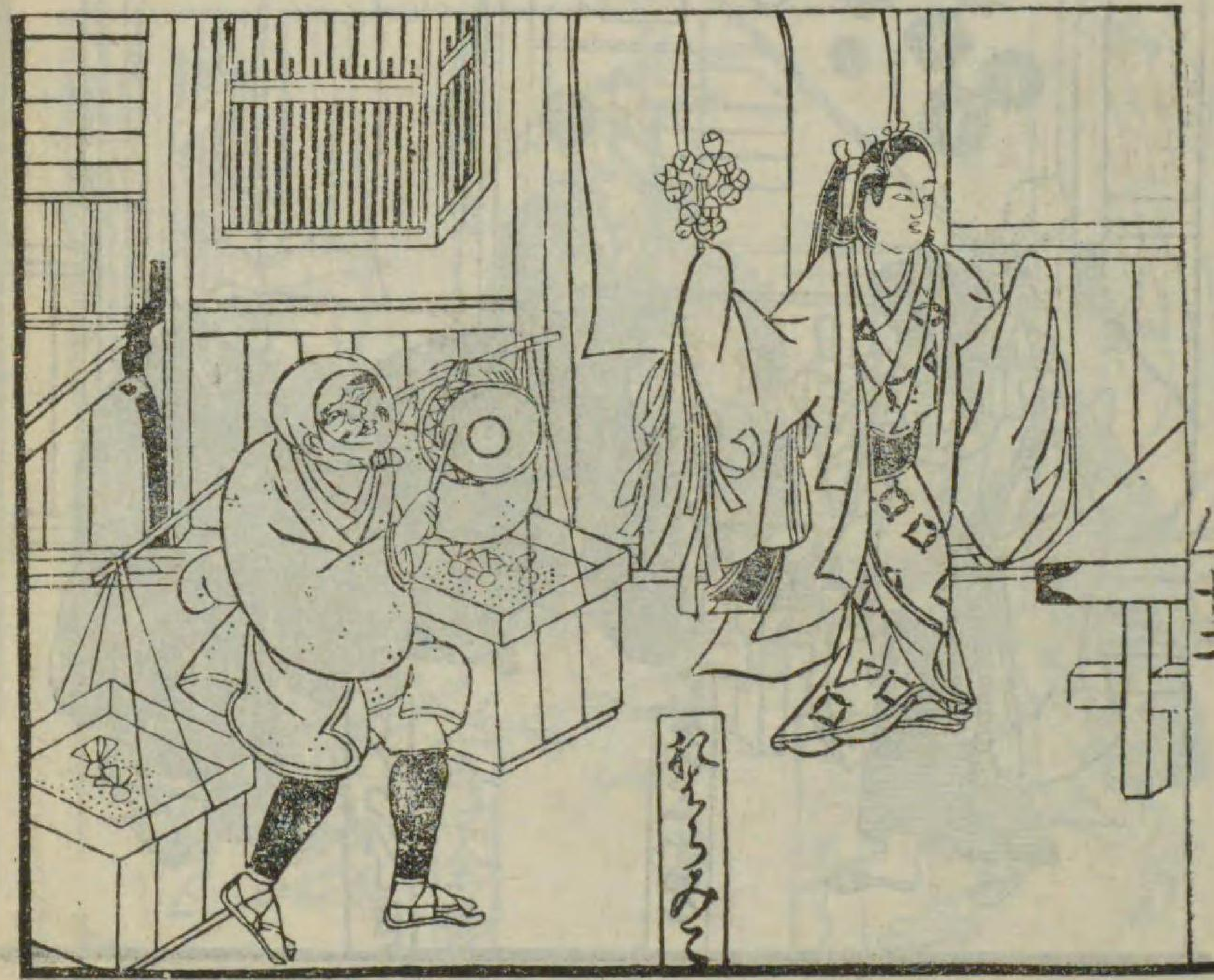
わろふべし〳〵。



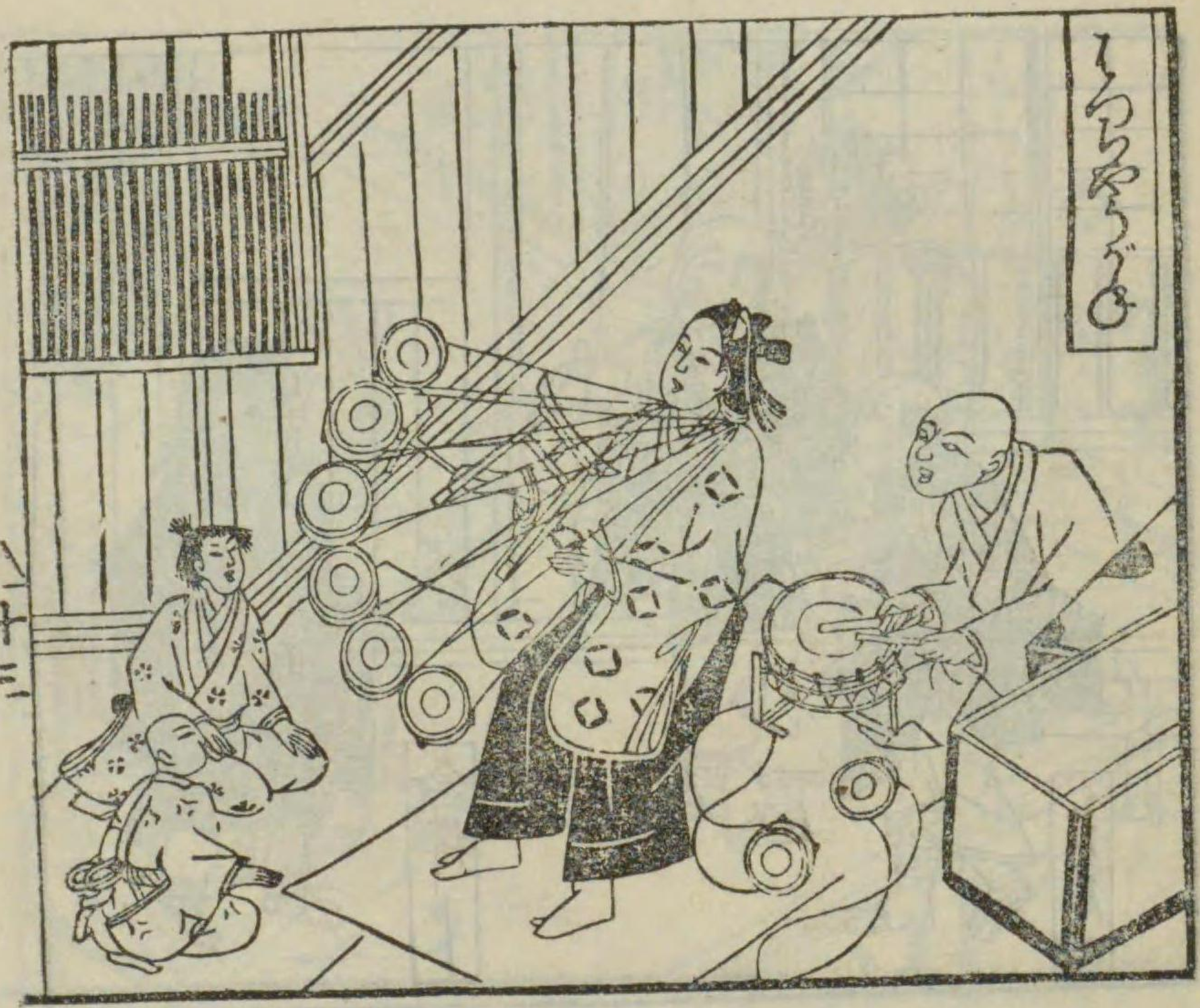
【佛餉取（ぶつしやうとり）】都の風俗とし尋常（よのつね）念ずる所の本尊佛丼に居ながら毎朝の飯米の初尾（はつを）を捧る、それを竹筒（たけのつゝ）に入置也。今は寺々の佛餉（ぶつしやう）とり筒を持てすゝめにめぐる也。合點したる所には庭の隅に釣をきて毎日如在（ぢよさい）なく取にまはるなり。其様達者一種の坊主老若にかぎらず、編綴（へんとつ）に管笠、わらぢ、脚半して杓（ひさく）こしにさし、さもいそがしく口のうちにて何やらいふかと思へば、筒引かたぶけて何のえしやくなしにとつていぬるなり。



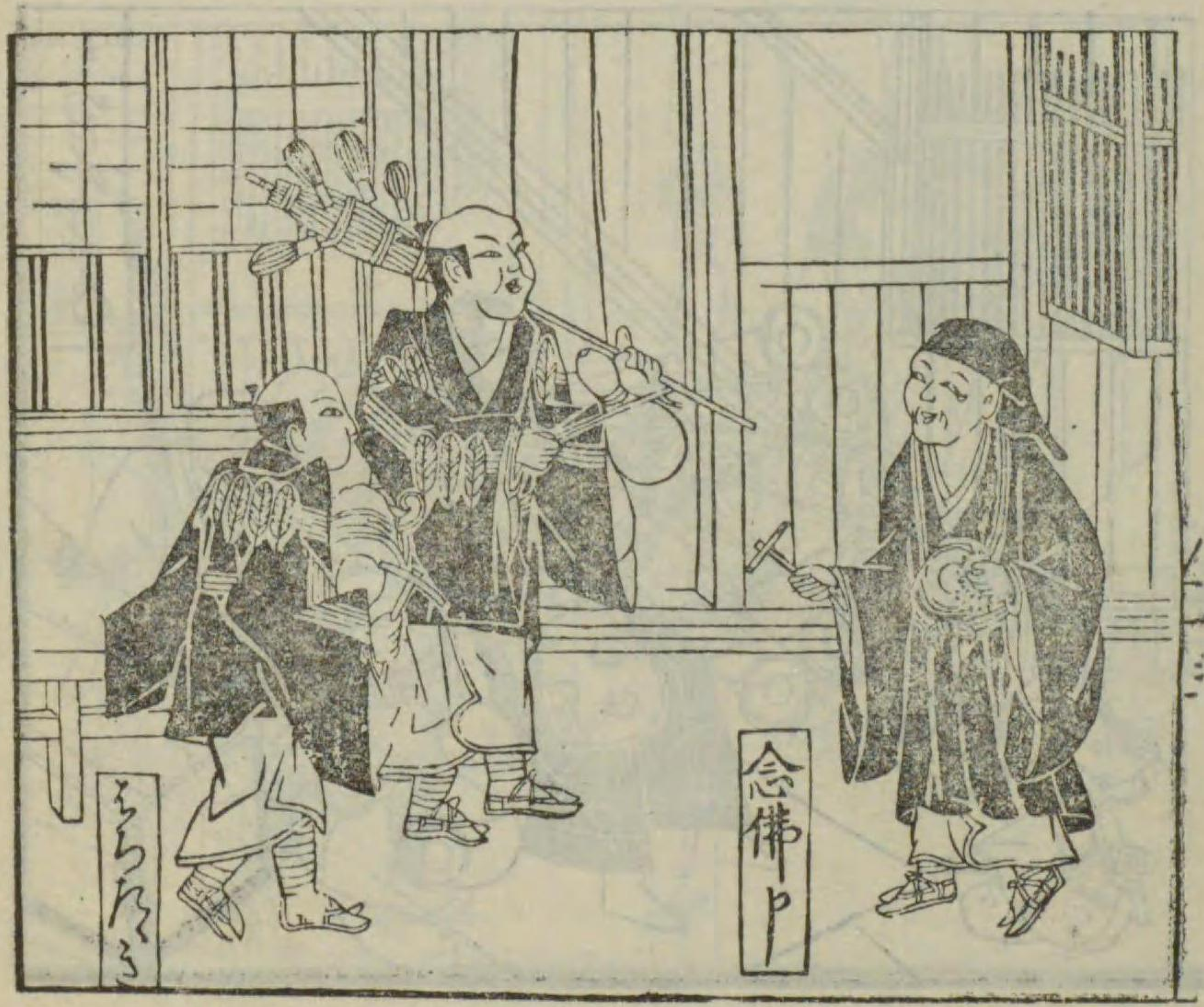
【哥念佛】夫念佛といふは、万德圓滿の佛號



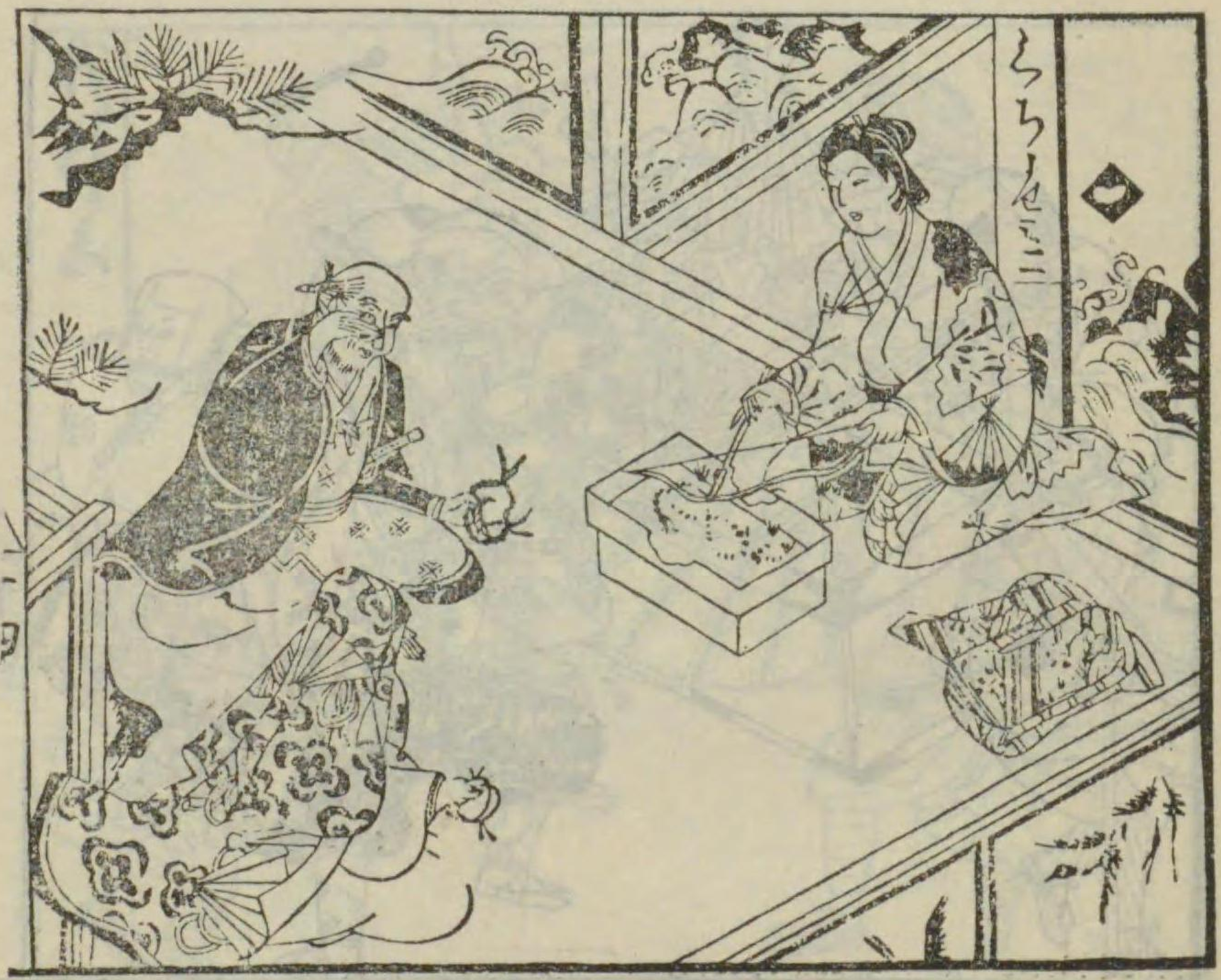
也。然るをそれに節をつけうたふべきやうはなけれども、末世愚鈍の者をみち引、せめて耳になりとふれさすべきとの權者の方便ならん。それを猶謬ていろ〳〵の唱哥を作、是をかねに合てはやし、淨瑠璃說教のせずといふ事なし。末世法滅の表じなり。かなしむべし、なげくべし。【鉢ひらき】俗語也。是則佛在世にあつて頭陀の行なり。沙門は是持齋の法にして不過晝食とて晝過ては食せぬ法也。然ば齋料は朝五つ前に乞事也。末世渡世の靑道心此分には及なし。脚半、草鞋をめしはきて、日入るまでもらひありく。さても益なき衣か



な。後の世こそは哀なり。【事觸】毎年鹿嶋の神前にして行の事あり。神必人に詫し給ひて天下の吉凶をしめし給ふと、それを日本にあまねく告しらせける事、此神官の役也。然ば末世には是をもつて宮雀のすぎはひとなして、よいかげんにあらぬ事までたくみなして、愚夫愚婦をたぶらかすとかや。了間して聞べし。

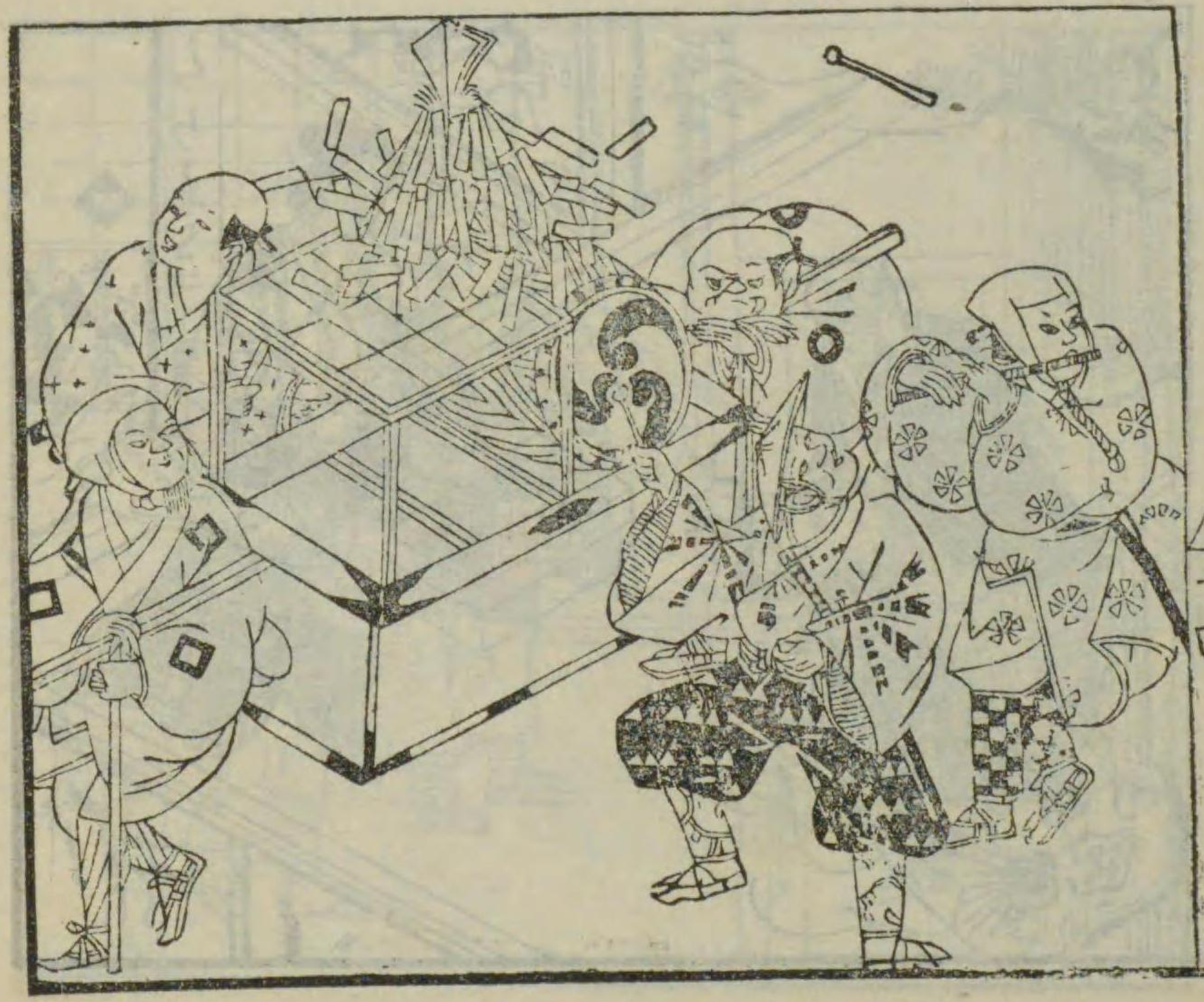


【大原神子】大原は丹波の國にあり。こゝに崇奉る神を天一位大原大明神と申て、神德高く利生あらたなり。これにつかへ奉る神子、むかしは勸進にありきけるにや、今の大原神子といふは、京のかたほとりに住て、人の忘



れじぶんにはありくなり。女は鈴を振ば、一荷のかますをかたげたる男、鈴をあばする太鞁の調子そなはつて一風有也。

【八打鐘】是も哥念佛のたぐひなり。上古には念佛申て一心不亂に踊けるを、いつの比にか只一すぢに廻はじめしより、口に唱る念佛をも畧し、無二無三に巡るを手柄にする也。みるにくるしき世わたりなり。【念佛申】敲鐘といふ事上古はなき也。空や上人如法眞實の行者なれば、松尾の神かたちを現じて上人にあひ給ひ、則門前にかゝりし鰐口を引破て上人にあたへ給ふより、是をならし給へり。今

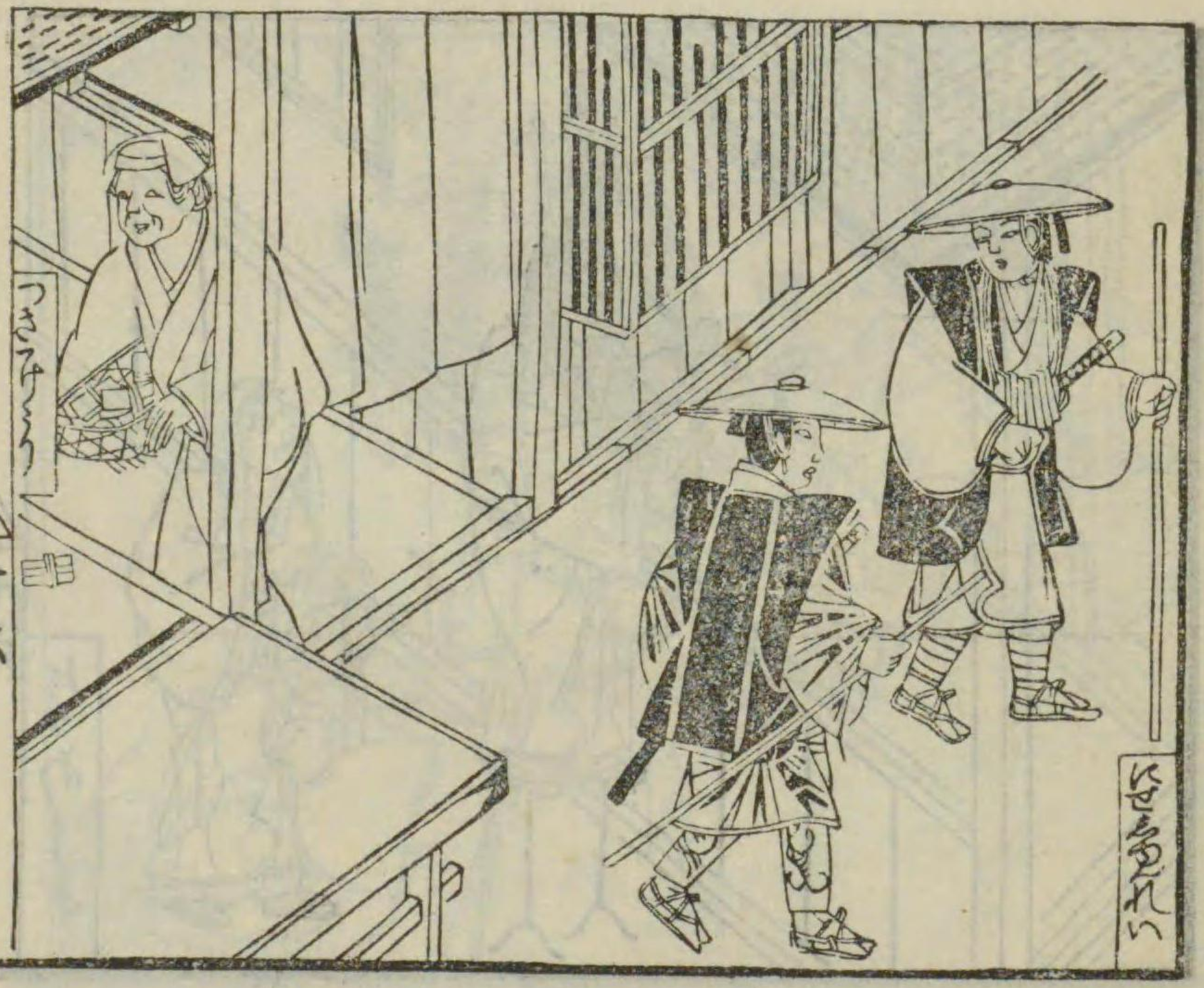


敲がね是也。夫發心は無上菩提のため也。然るを末世には世に有詫る男女渡世のために、形を僧になり、衣を着して鐘をならし、愚昧の在家をたらして米をとる思案文盲不知のやからにて佛號をさへすぐにはえいはず、まして發願と廻向文は皆片言なり。笑ふべしく。

【鉢敲】此元祖はむかし空や上人の時代の獵師なり。上人の庵室に馴來る鹿ありしに、或時かきたえて來らず、上人ふしぎにおもひ給ひて獵師にとひ給へば、其鹿は我殺せしと申す。是によつて殺生の咎をいましめさまぐ

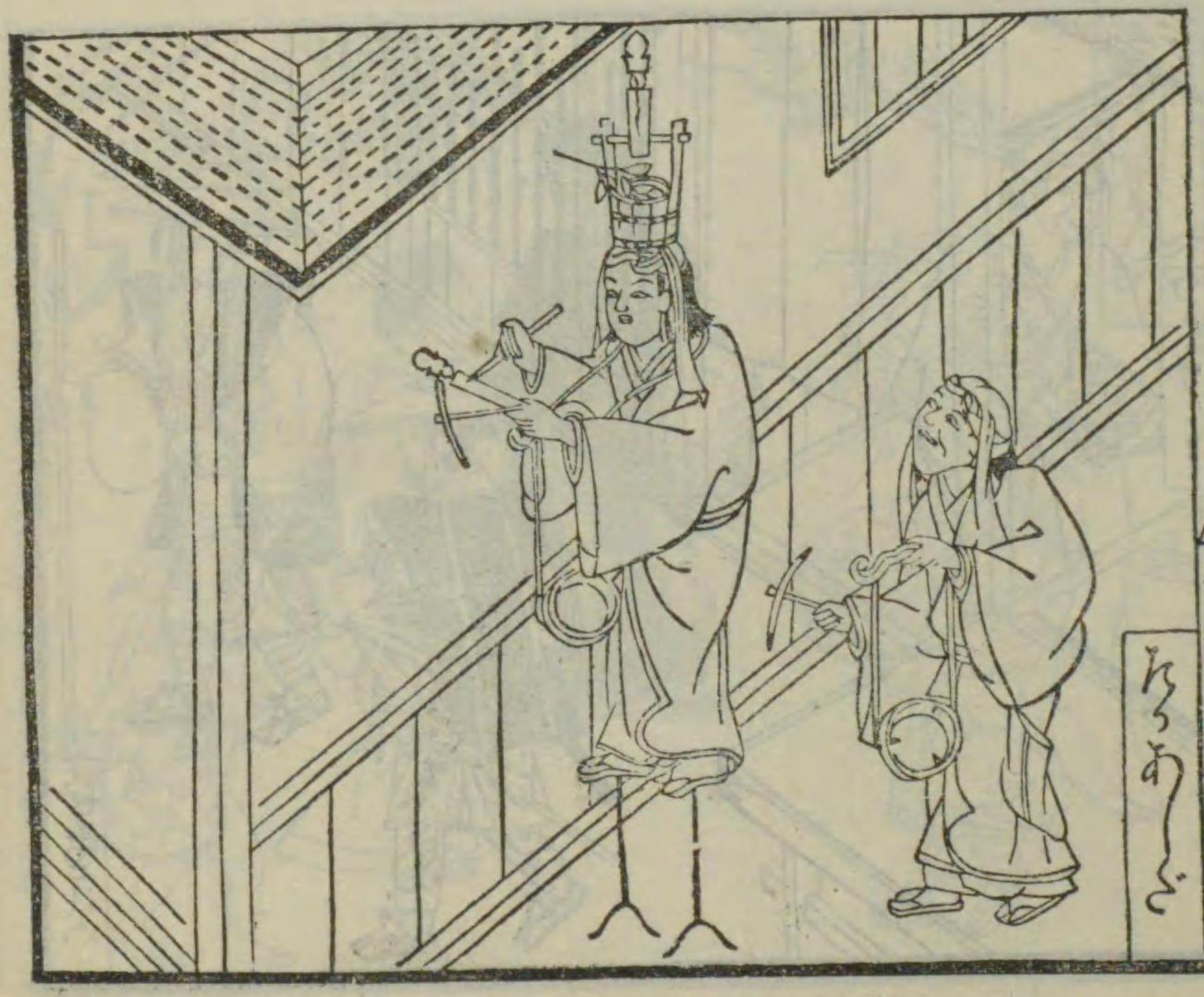
の御法を説給へば、獵師則一念發起して菩提にいたれり。然共渡世の作業外になきをもつて、茶筅といふ事を教給へり。又無常のありさまを一巻の書につくりてあたへ給へり。是にふしを付て瓢簞をたゝき勸進をなす時は、二季の彼岸霜月十三日より極月廿四日まで、晝は洛中をうたいめぐり、夜は洛邊の無常所をめぐる。是かれらが行なり。

【代神樂】伊勢より出るといへども伊勢にもかぎらず。此類は所々に有とみえたり。夫神樂といふは神をすゝしめの舞樂、乙女が鈴にあはせて陰陽の調子、神道の大事にて、別に



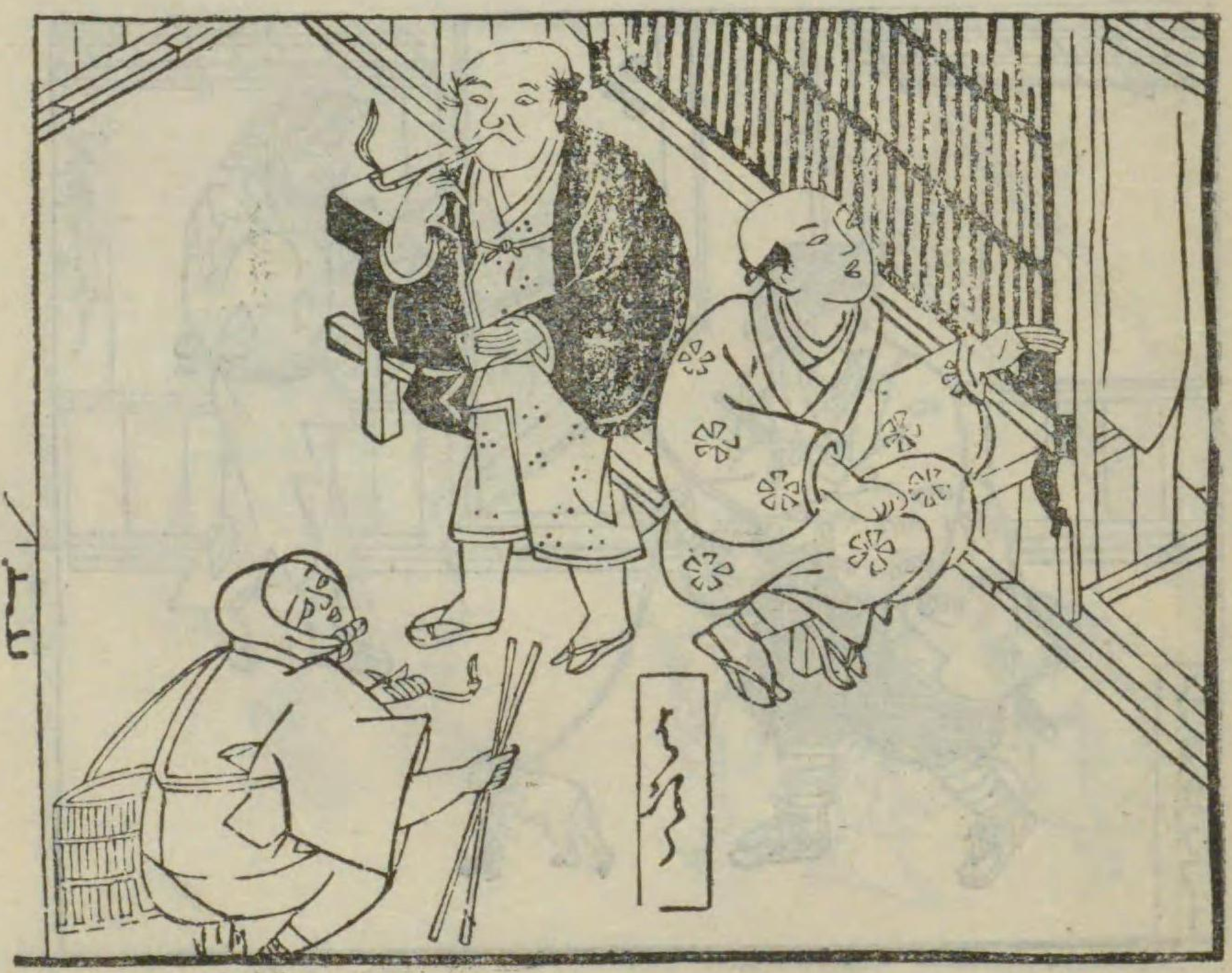
子細有事とかや。然るを今勸進の代神樂は、鉦手の乙女もなく、只な太皷ことやうにたゝきたてゝ、太皷打のつらつき狂人のやうなるをみてうれしがる。しかのみならず獅子が立て扇の手をつかひ、一谷節で舞最珍敷事共なり。岡崎女郎といふ鹿おどりなれば神慮はいかゞ。

【獅子舞】惡魔を拂といふなり。出所たしかならず。獅子は天竺の獸なり。神前に犬をおくはふぜうのものをしるゆへにおくよしあればなり。日吉の神事に田樂坊師といふもの獅子の頭をかつぎてねりわたる也。今の獅子舞は

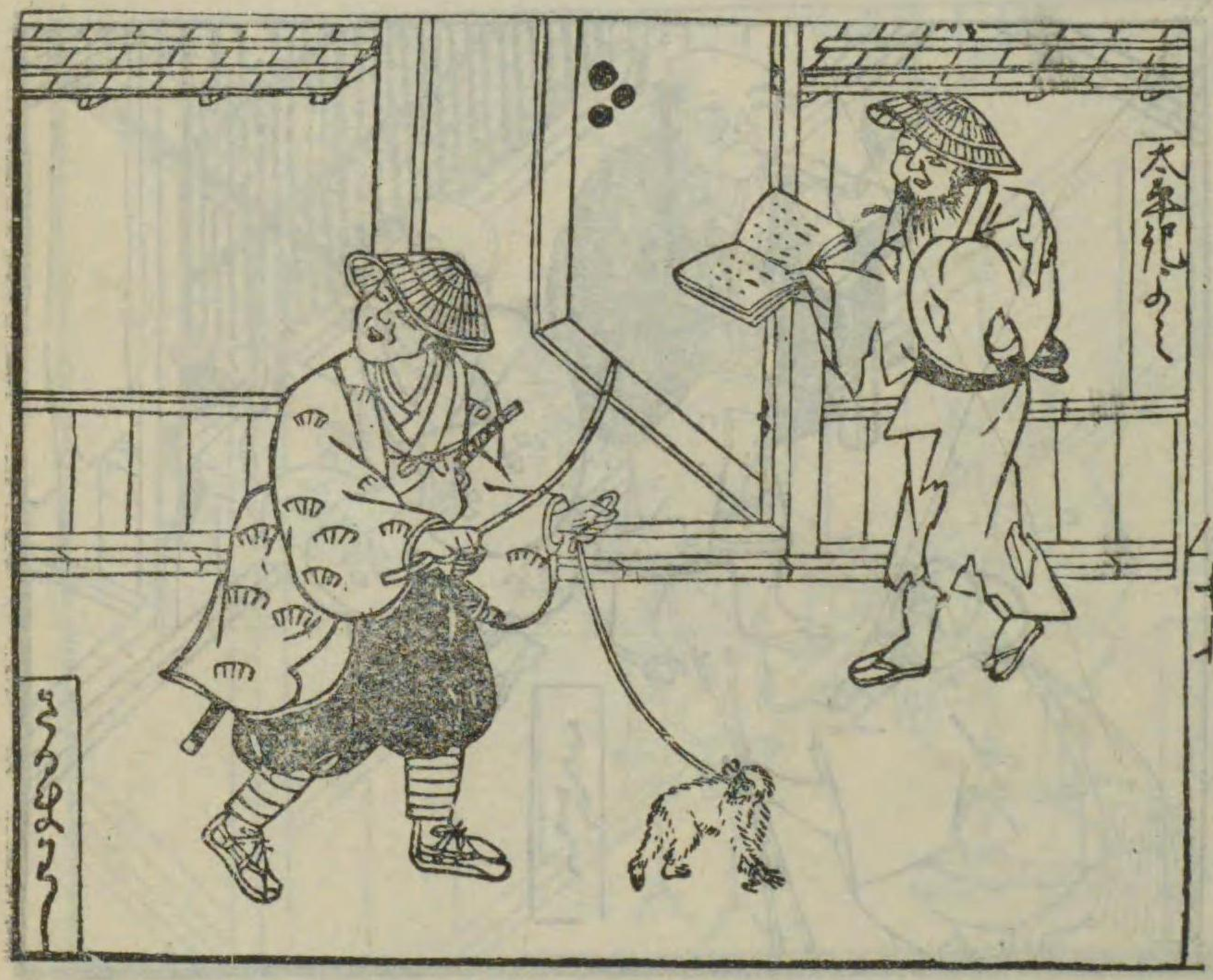


是をうつしたる也。田樂法師むかしはさまざまの藝をつくして舞かなでけるが今はなし。相撲入道新座本座の田樂に泥たるよし、太平記にみえたり。【哥比丘尼】もとは淸淨の立流にて熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣をりやくし、歯をみがき、頭をしさいにつゝみて小哥を便に色をうるなり。功齢歷たるをば御寮と號し、夫に山伏を持、女童の弟子あまたとりてしたつる也。都鄙に有。都は建仁寺町薬師の圖子に侍る。皆是末世の誤なり。

【似瀨順禮】にせじゆんれい、うしろに三十



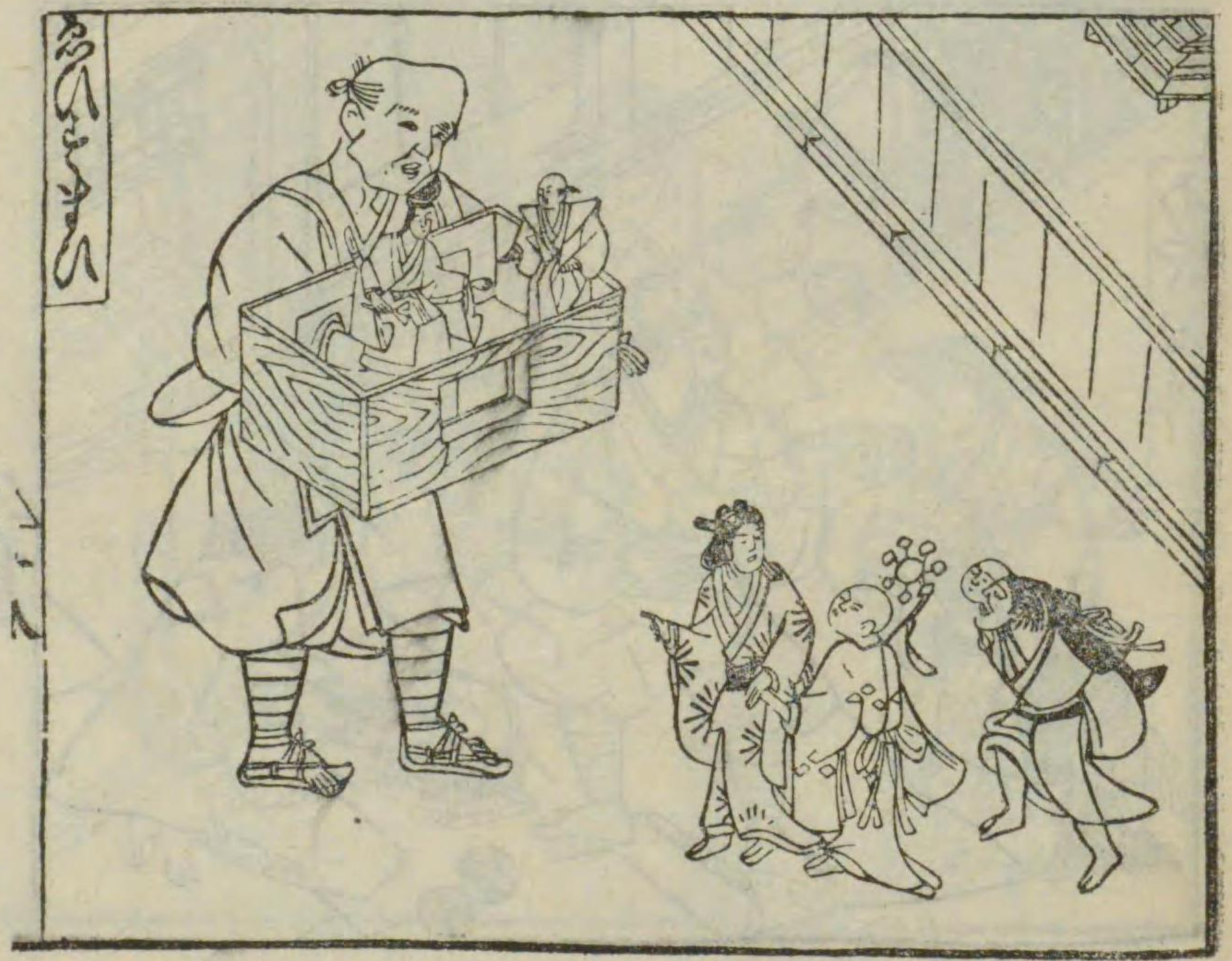
三所と書付、じゆんれいうたうたい、勧進をするなり。およそにせじゆんれいは、國所または月日をかゝぬとかや、世はさまぐ〜のすぎわひあり、さこそぼさつもおかしくおわすらめ。のちの世おそろし。【高履】一つばの高木履、頭上に手桶を頂、水を入、首にはかねをかけて聞わけかたき節をうたひて是をたゝく、鐘のひゞき一風かはり物、是行人がねとて別に有。錢をやれば薄板に改名をかく。桶の水を樒の枝にてそゝぐ。首といひ、足といひ、少もよそみのならぬ節らしい事なれども、しかゝつた職はやめられぬか。但なんぞ見つ



けた事もありや、心のとはゞいかゞこたへん。

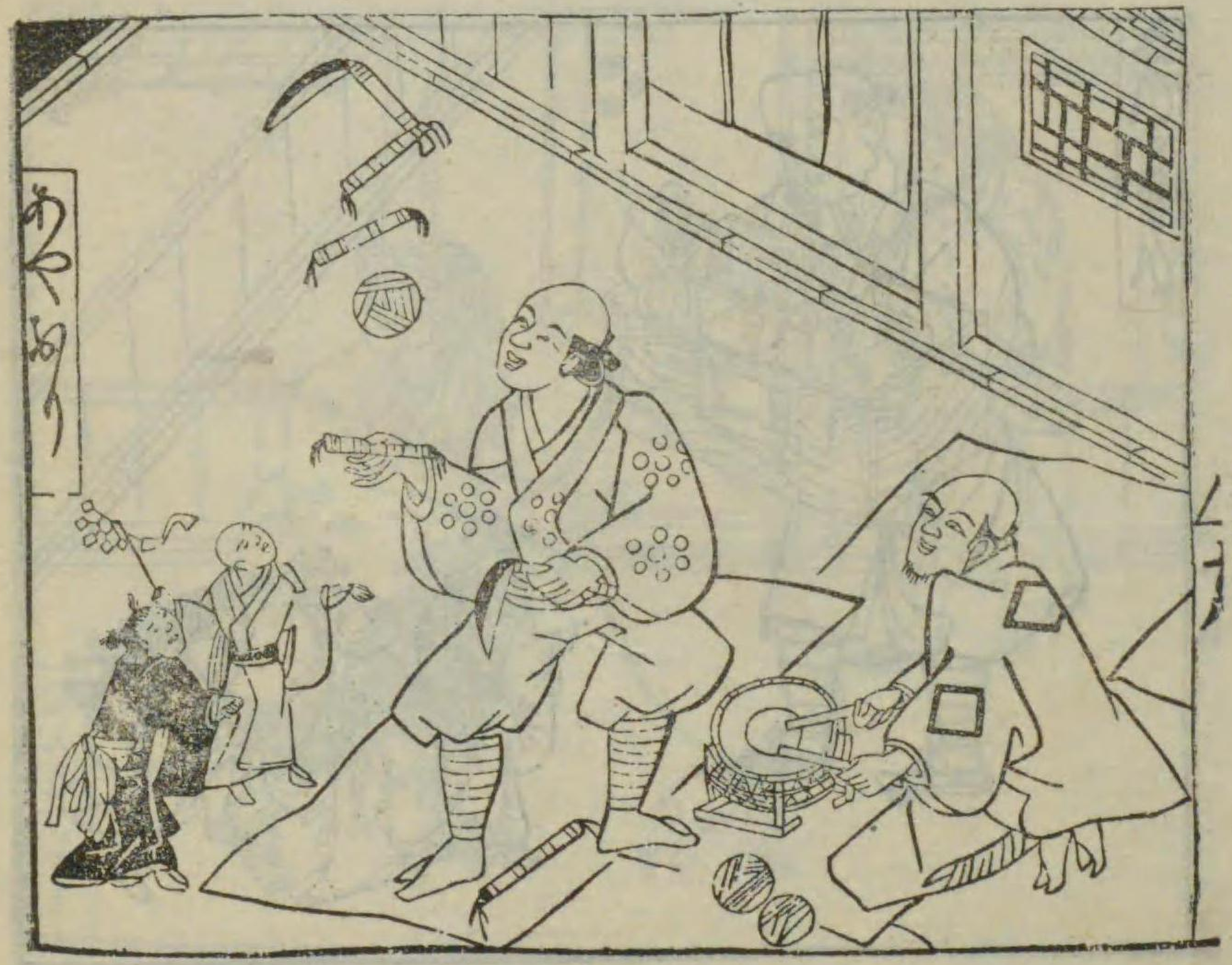
【與二郎】かれが居所を悲田寺といふは、むかし淸代の御時世に、便なき者、病氣の輩をやしなひをかせ給ふ所をいふ也。今は與二郎が住家となして非人乞食の大將をし、二季の彼岸所々祭禮の比はたゝきといひて、口はやなる事をいひて物をもらう。此ゆへにたゝきの與二郎といふ也。

【太平記讀】近世よりはじまれり。太平記よみての物もらひ、あはれむかしは疊の上にもくらしたればこそつゝりよみにもすれ、たまなかかくてあれよかし、祇園の凉、糺の森の



下などにては、むしろしきて座をしめ、講尺こそおこりならめ。それを又こくびかたふけて聞ゐる者もあり。とかく生類ほど品々あるはなかるべし。

【猿舞】むかしよりありと聞えたり。京に來るは伏見の邊其外所々に住す。羽織に編笠腰に衞不籠をつけて米を入るゝ、中國の猿にはさまぐ〜藝をさするゆへ猿牽が腰に道具おゝく付る也。此ゆへにこしに物おゝくつけたるをば猿牽といふ也。京は世智成所なれば藝には及ずじぎをするがおくの手也。猿牽こゑうたのふし分て備りたり。猿を馬の守りとする



事は、猿は山の父と稱じ、馬は山の子といふゆへなりとあいのふ抄に見えたり。

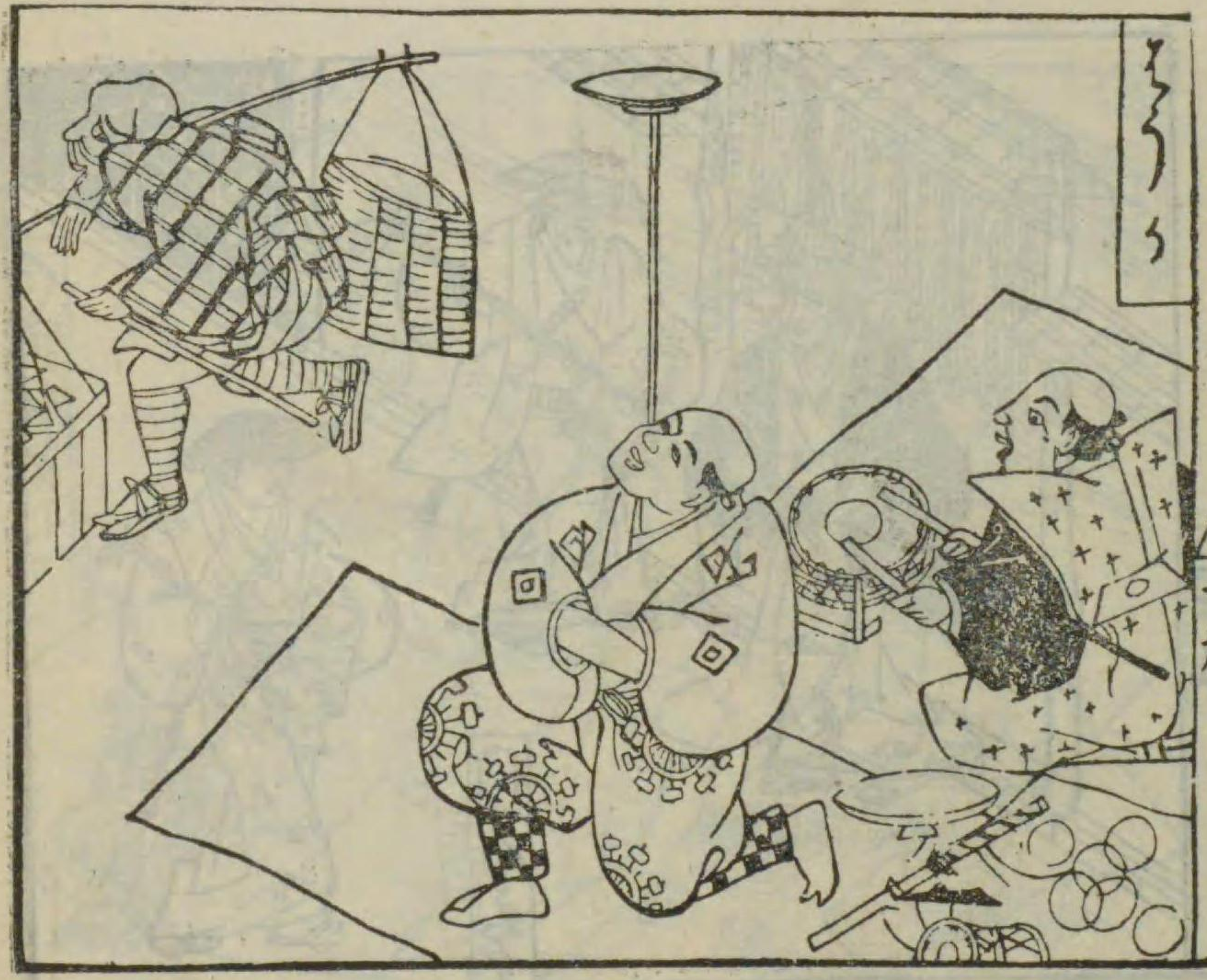
【夷舞】津國西宮より出るゆへに夷舞しと號す。西宮のさしむかひ、海をへだてゝ淡路嶋にも此流有。むかしはゑひすの鯛を納給ひし所を仕形にして春の始に出けるとなり。今は能のまね、踊のまね、色々をつくす。浮沉ある音聲、一風ありてかくれなし。世に傀儡子といふは是なり。

【文織】かれが名をいふにはあらず。二ツ三ツ四ツの竹をもつて、上下へあげおろす手品をいふ也。其意は機を織には横の糸をとをす

時、堅の糸上下をなす也。是織手のあしのつかひやう也。今此業よく似たるをもつて文織といふなり。

【門説經】小弓引、伊勢會山より出る。此所のふし一風あり。小弓はもとは流球國よりわたすとかや。小弓に馬の尾をはりて糸をならすゆへかくいふ也。物もらひに種なきとはいへ共、小弓引、編木摺はわきて下品の一屬也。

【放下】放下は字訓の意はなちくだす也。禪家にをゐて諸緣を打捨るを放下するといふ其心也。縦は鼻の上に立物をし、枕をかさねて自由につかい、山のいもを鰌にするたぐひ、

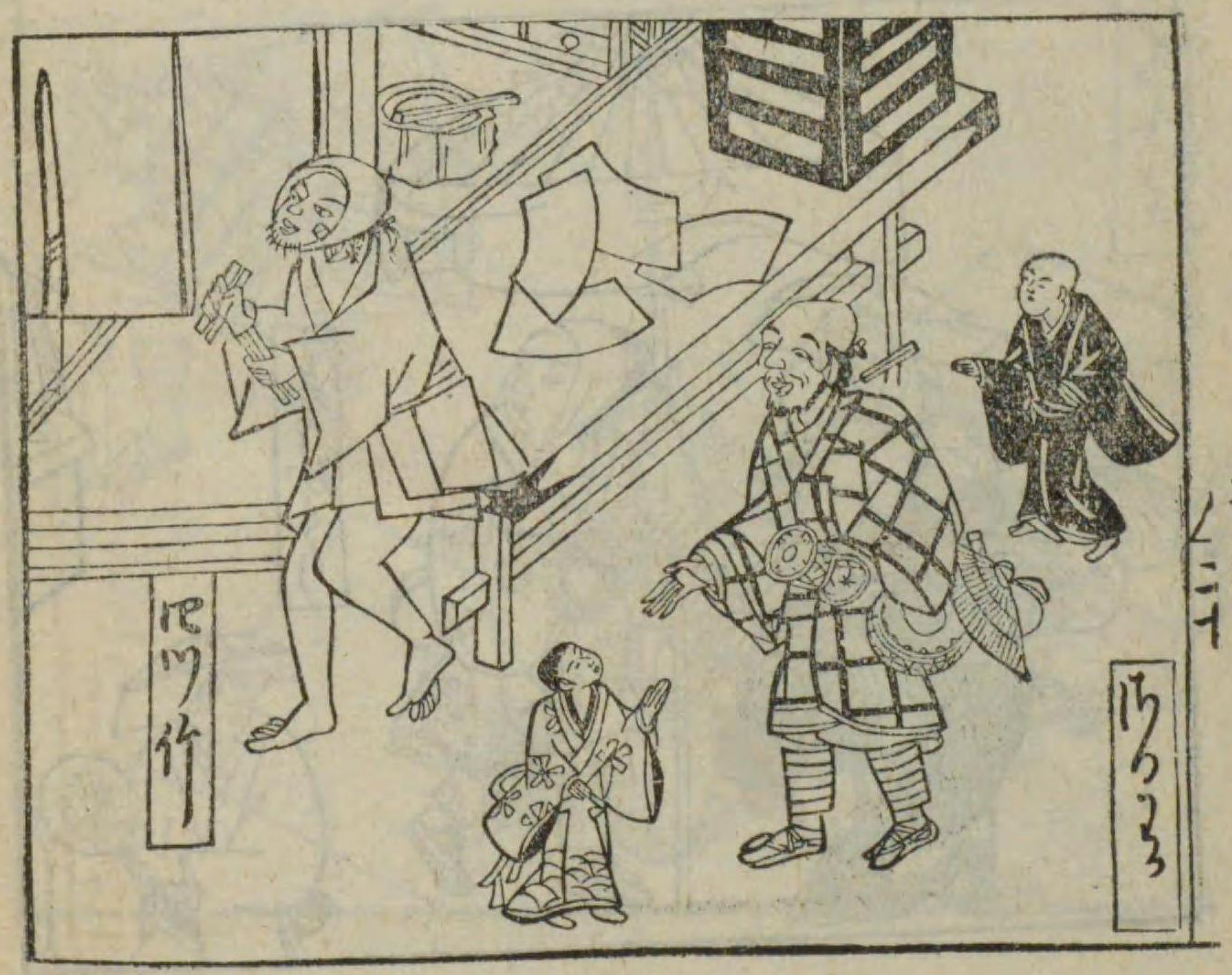


皆是變化ふしぎのていをなす事、万事の當躰を放下して、物にとゝこほりなき躰にしるすゆへに放下といふ也。あや折金輪つかい皆放下なり。

【住吉踊】住吉のほとりより出る下品の者也。管笠にあかき絹のへりをたれて顔をかくし、白き着物に赤まへだれ、團をもち中に笠鉾をたてゝおどる、あとのとめに住吉樣の岸の姫松めでたさよ千歳樂万歳樂といふ、ゆへに住吉おどりと云也。

【猿若】一人狂言なり。或書に云、滑稽優人と注す。こつけいは人を笑する事をいふ。今

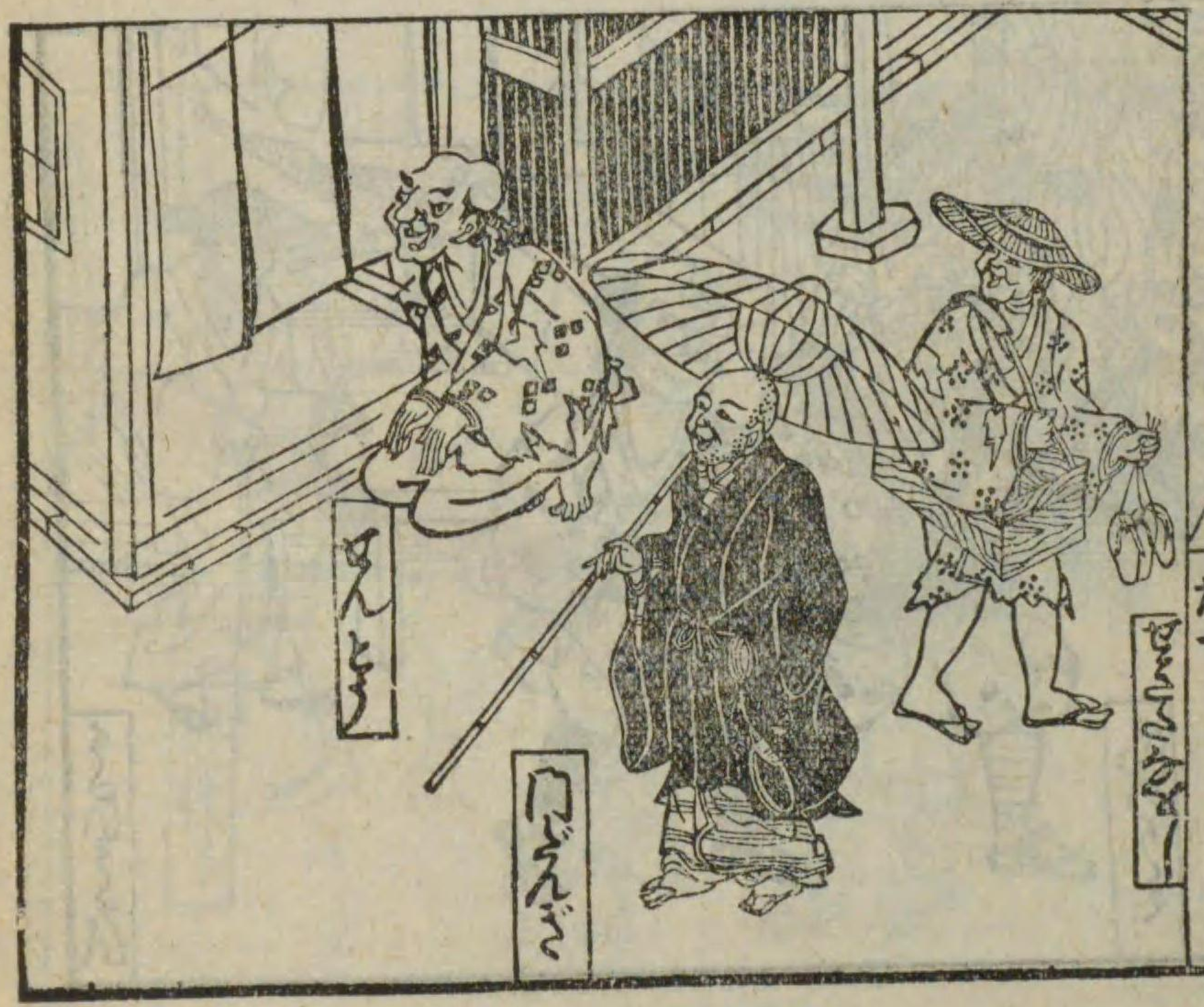
の猿若是なり。優人は狂言師也。と或説には猿若といふは、永錄の比名古屋三左が僕の鈍者あり、三左是をあひし芝居にて狂言しけるを、諸人もてけうじけるより、此名はじまりと。未是非をしらず。【四ッ竹】長崎の一平次といふ者しはじめ、有得なるものにてありしが、藝は身をたすけぬ籠のうづらとやらんにて、四ッ竹ゆへに大阪にのぼり、芝居はられたり。【謠】ふかあみがさにつれ謠、いかさましだしは、しさいらしく、耳をかたぶけて聞ば、其まゝかたはらのいたひもあり。一向こぐちからさいく成もあり。中にも顔のかは



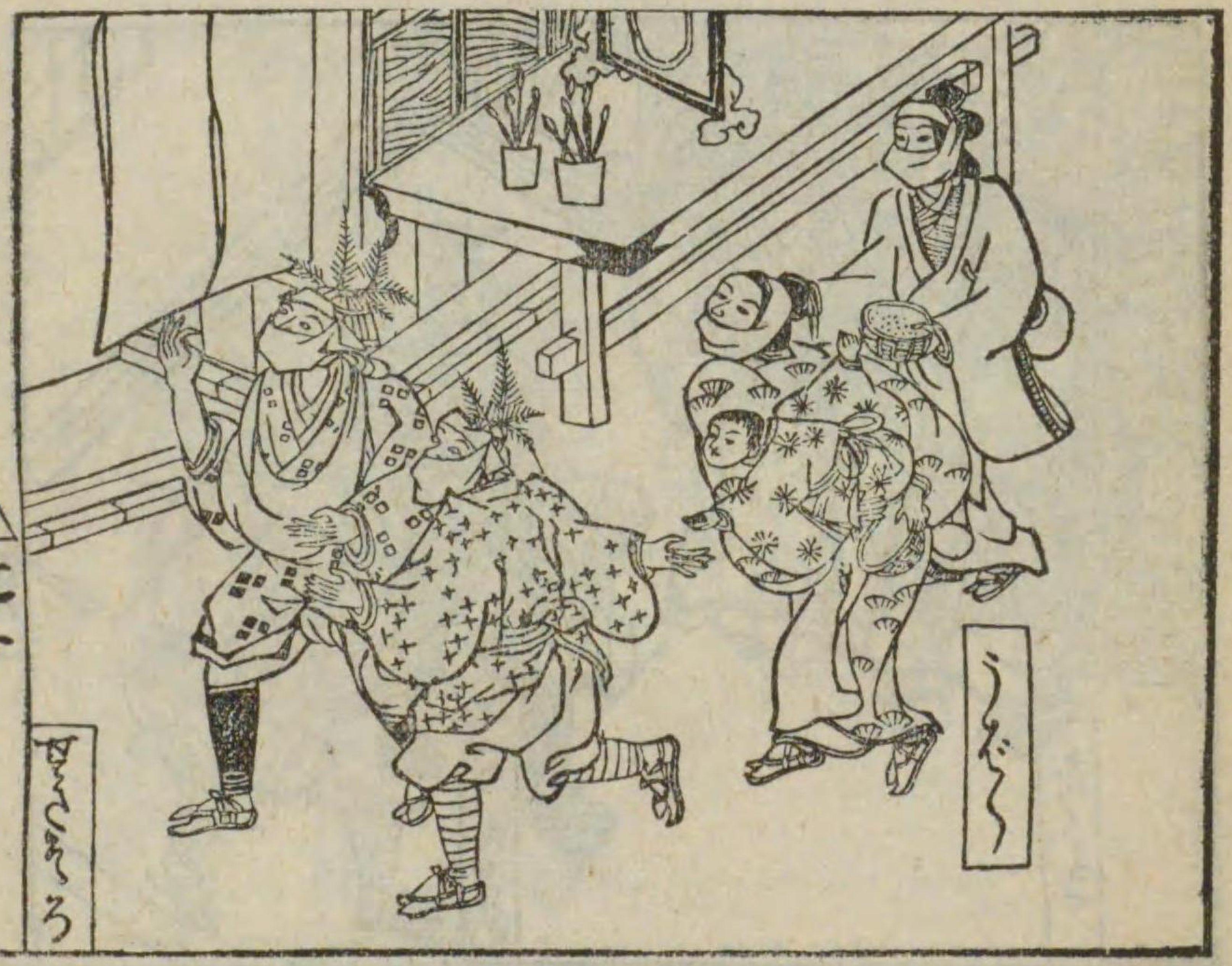
念の入たるは、大道にてあいてなしに能をする也。泰平の御代とてたれとがむる者もなく、すきぐ〜のむしがあつて、足を留てみてゐる衆生もあり。

【風神拂】世間に風氣時行ぬれば、風の神をおひはらふとて、面をかつぎ太皷を打て物をもらう。とをれ、といふても、しこりかゝつて猶たゝく、やかましきに退屈して、一握の米をぼとらする也。諸人の煩を己が身にうけとり、世間無病なれば、かれがもうけなし。何にても時行やまひといへば、聞耳をたつるあさましき業にて、後世こそは不便なれ。

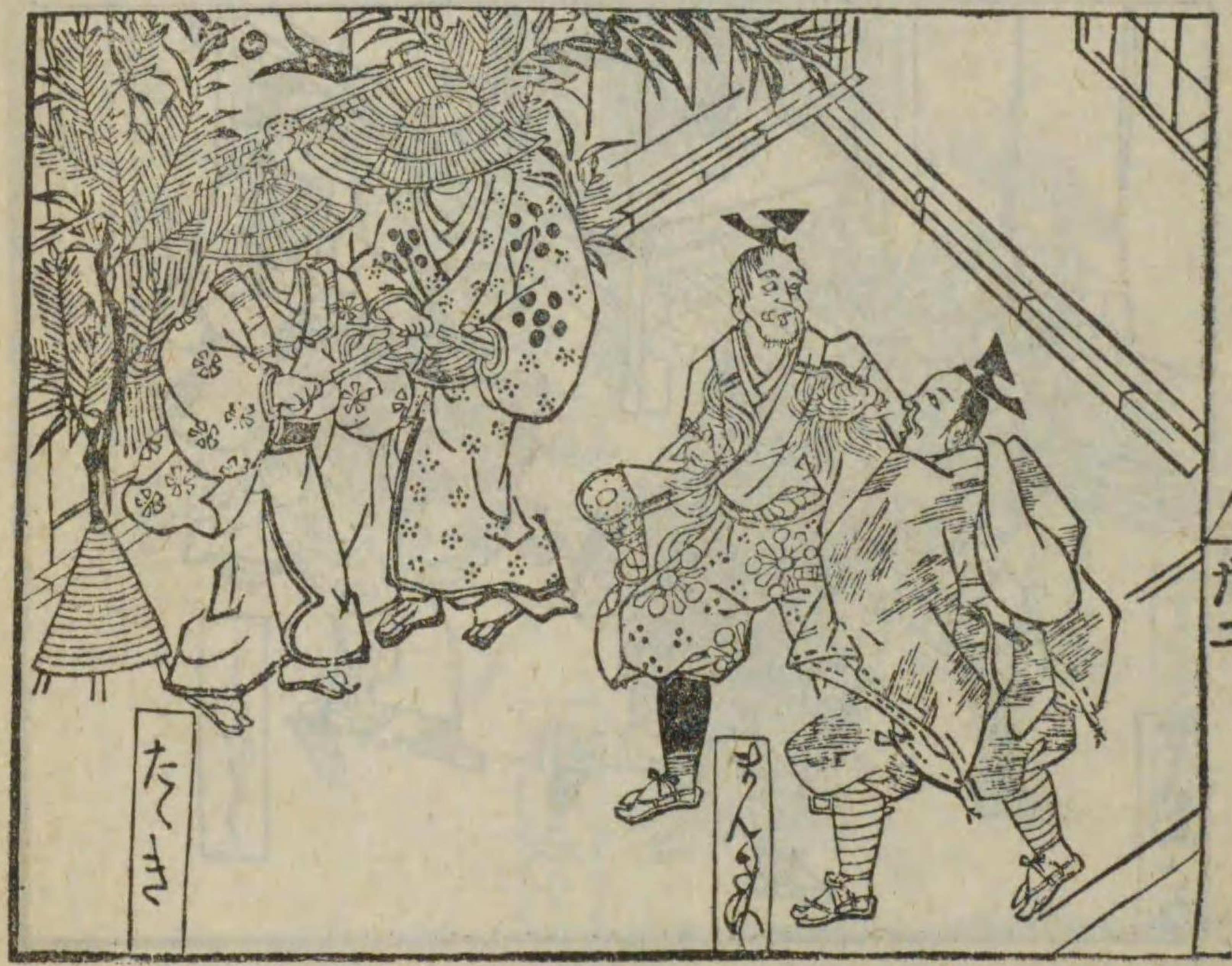
【門談儀】片言まじりの聞て法文、一から十不淨の說法也。うけかたき法師の身となりて、法によつて地獄に落るはさてもあさましき境界かな。【雪駄直】あみがさきて箱一ッわきにかけたり。なをしかゝり尻すゆるとひとしく、火をもらいませふとたばこをのむ、これさだまりの風俗なり。【船頭非人】やぶれがさにやつれすがた、西國の船頭でござるが、播摩灘で船をわりました、と大かたは闇物也。順禮、伊勢參、高野におさむる經書、此類實はすくなし。【姥等】女の物もらい也。としは若けれどもみづから婆等といふ。十二月廿日より出



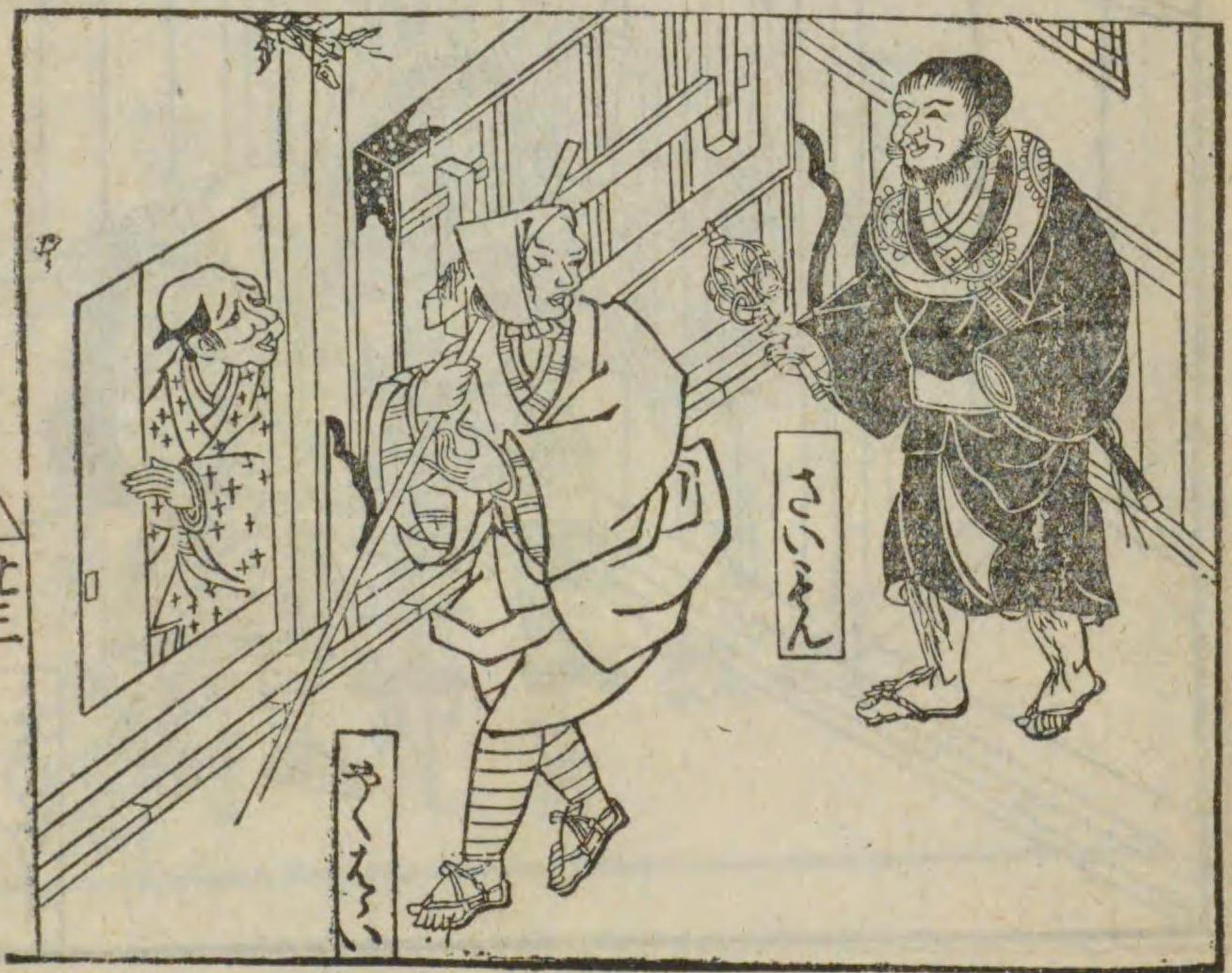
る、下京は五日六日の比も出る也、赤前垂に手拭かつぎ、いかきを手に持て、婆等いわひませうと、幾人も一連に口々にわめきて、門〲をめぐる也。【節季候】都鄙にあり。都は十二月廿日より出る。節季にて候へば、くるとしの福と、又年の終まで何事なくをくりかされしをいはふ心なるべし。【万歲樂】年の初、めでたきためしをいはへば、万歲樂とは聞た事也。此流諸國にあり。京に出るは、大和より出る。中國は美濃より出る。東へは三河より出るなり。聖德太子の時よりあるよし、太子よりゑぼししやうぞくをくだし給ふと



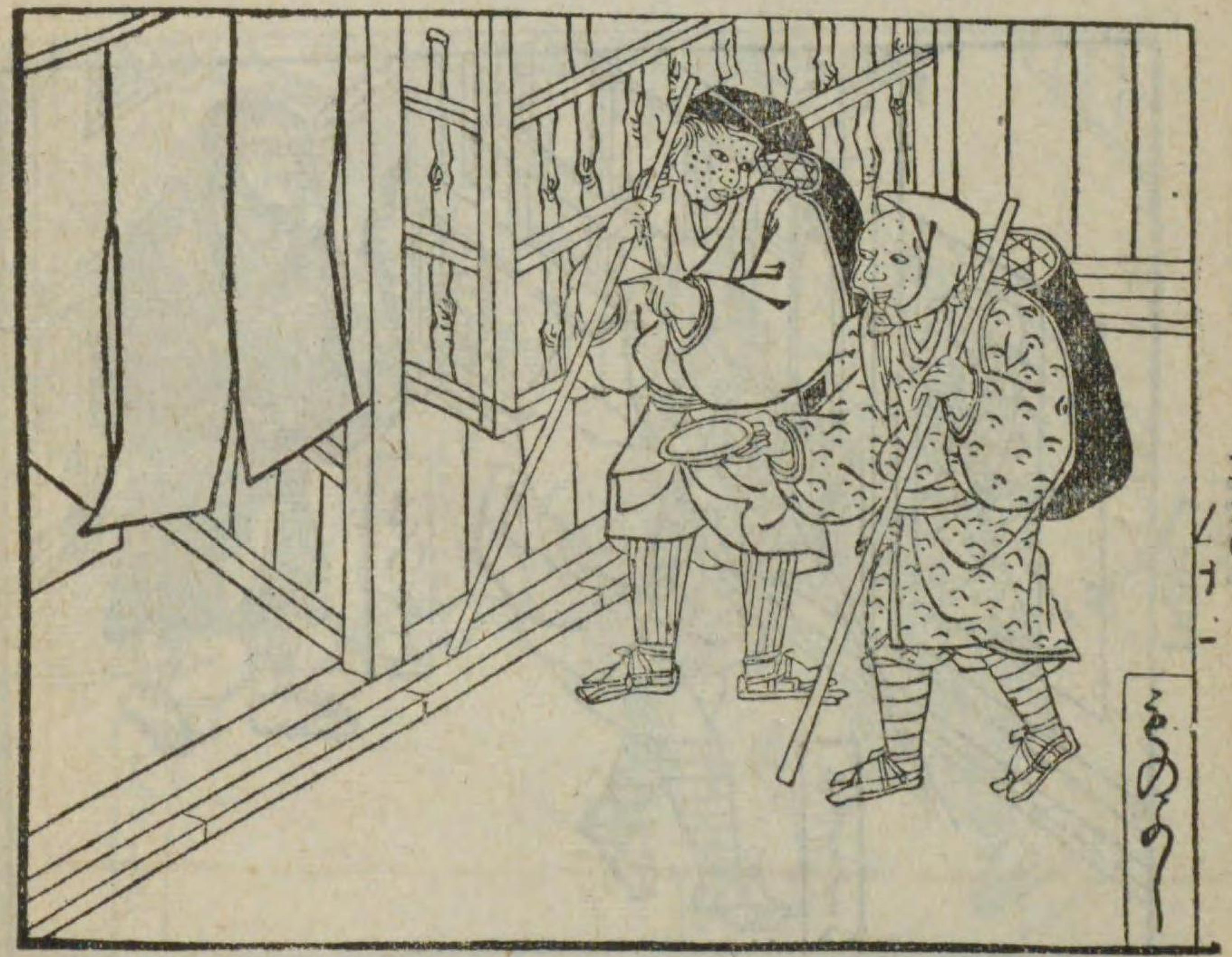
也。中比とりうしないしに、又白河院の御代にことぶき仕候てより万歳。【鳥追】千町万丁の鳥追、とみづから名乘るなり。【祭文】此山伏の所作祭文とていふを聞ば、神道かと思へば佛道、とかく其本據さだかならず。伊勢兩宮の末社に四十末社、百二十末社などゝいふ事更になき事にて、此事神道問答抄といふものに記せり。多く誤有どもしらぬが浮世也。それさへ有を江戸祭文といふは白こゑにして、力身を第一として、哥淨璃璃のせずといふ事なし。かゝる事を錫杖にのせるは、さてもかなしゝ、勿躰なし。かけいでの山伏とて、



檜杖に頭巾篠懸を着したり。山伏の峯入に順逆の二流有、春入るを順と號し、秋入を逆の峯といふなり。【ごほうらい】御拂といふ事にや。山伏の危拂也。錫杖をふりて、ごほうらいく、とわめき通る。かれにも同じやうにとうすれば祭文を讀なり。【厄拂】節分夜にありく、ばらいを望者、煎大豆に錢つゝみてとらすれば壽命長久のすいた事をたからかにわめく、只二時斗世上の大豆を打間にめくる所作なれば、いそがしき事かぎりなし。【物吉】竹の皮籠のすみぬりにはりたるを負て、洛中を勸進にいづる。物吉といひそめしより、儀



縁よしとて名付しものなり。



元祿三庚午載

七月吉旦

書林

平樂寺　開板

大坂高麗橋一丁目

村上清三郎

江戸日本橋南平松町

村上五郎兵衛

一一

東海道分間繪圖
人倫訓蒙圖彙

日本古典全集基本版第廿四冊

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
代表社員 長嶋東一

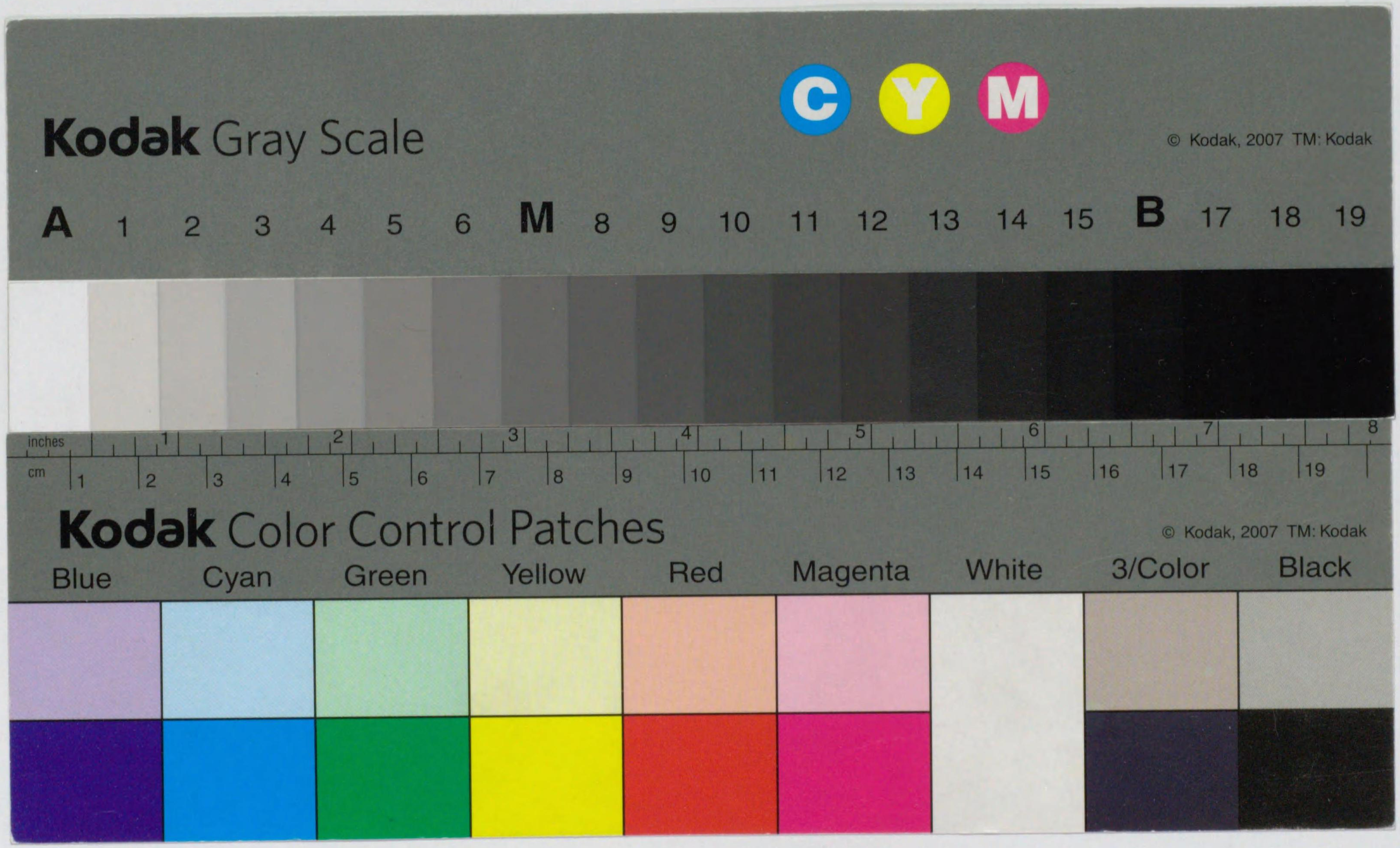
印刷者　東京市豐島區長崎東町三丁目一五八
不二製版印刷所 高瀬清吉

發行所　東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
合資會社 日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

昭和九年十月十五日印刷
昭和九年十月廿二日發行

【非賣品】

3Q-61


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black